長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 117

松本市 出川南遺跡（いでがわみなみ）

防災・安全交付金（街路）事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2018.3

長野県松本建設事務所
長野県埋蔵文化財センター

松本市 出川南遺跡（いでがわみなみ）

防災・安全交付金（街路）事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2018.3

長野県松本建設事務所
長野県埋蔵文化財センター

主な古墳時代の土器

弘法山古墳より出川南遺跡遠望（矢印が調査区の位置）

調査区全景（24 次 2 区調査時 上空から　上が北）

古墳時代前期　台付甕

竪穴建物跡 612 号住居跡出土土器

はじめに

高ボッチ山に源を発する田川は、塩尻市から松本市へ向かって北流していきます。その田川が、中山丘陵から下ってきた牛伏川と合流する地点に出川南遺跡があります。これまでに松本市教育委員会は、22 次にわたる調査を行い、弥生時代から中世に至る遺跡の様相をあきらかにしてきました。

この度、長野県は防災・安全交付金（街路）事業として、開かずの踏切として知られる宮田前踏切の立体交差化をはかる出川双葉線の拡張工事を計画しました。それに先立って松本市教育委員会と長野県埋蔵文化財センターでは平成 25 年度から 28 年度まで 23 次、24 次、27 次､28 次の 4 次にわたる発掘調査を実施しました。その後､長野県埋蔵文化財センターは、松本市教育委員会の御協力のもと整理作業を行い、発掘調査成果を報告書として刊行する運びとなりました。

今回の発掘調査では、竪穴建物跡 9 軒をはじめとし、掘立柱建物跡、溝跡等が発見されました。なかでも古墳時代前期の竪穴建物跡は、東日本最古級と考えられている弘法山古墳と同時期とみられ、また東海地方との関わりを指摘できる土器が多く出土しました。これらの調査成果は、長野県における古墳時代のはじまりを考える上で大変重要な資料の一つとなります。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業、本報告書の刊行に至るまで深い御理解と御協力をいただいた地元地権者、区長や町会の方々、松本市教育委員会、長野県教育委員会文化財・生涯学習課、そのほか関係各位に、心から敬意と感謝を表す次第です。

例　言

1　本書は、長野県松本市に所在する出川南（いでがわみなみ）遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、防災・安全交付金（街路）事業出川双葉線に伴う記録保存調査として、長野県松本建設事務所の委託を受けた松本市教育委員会および一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。

3　遺跡の概要は『長野県埋蔵文化財センター年報』、遺跡現地説明会、速報展資料等で紹介してきたが、本書をもって最終報告とする。

4　本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図1：25,000『松本』・『塩尻』、1：50,000『高山』・『松本』・『和田』、および県松本建設事務所・松本市教育委員会をもとに作成した。

5　発掘・整理作業において、以下の機関に業務委託した。

平成26年度　測量：新日本航業（株）、放射性炭素年代測定：（株）加速器分析研究所、
珪藻・花粉・プラントオパール分析：パリノ・サーヴェイ（株）

平成27年度　測量：（有）測地、放射性炭素年代測定：（株）パレオ・ラボ

平成28年度　測量：（株）写真測図研究所

平成29年度　遺物トレース：（株）シン技術コンサル、遺物写真撮影：信毎書籍印刷（株）、
報告書印刷製本：第一企画（株）

6　発掘調査および報告書刊行にあたり、以下の方々、機関に御指導、御協力をいただいた（敬称略）。
市澤英利、川崎みどり、小林正春、小林義廣、小林芳郎、小山奈津実、竹内靖長、直井雅尚、
西島庸介、三村竜一、安城市埋蔵文化財センター、松本市教育委員会、松本市立考古博物館

7　発掘・整理等作業の担当者、発掘・整理作業員は表7に記載した。

8　本書の執筆分担は次のとおりである。
第1章　川崎　保、第2章　平林　彰、第3章第1・2節　川崎　保、
第3～6節　石丸敦史・片山祐介、第7節　片山祐介、第4章第1節　石丸敦史、
第2・3節　片山祐介
校閲：調査部長　平林　彰、調査第2課長　川崎　保

9　註は頁下に、引用参考文献は末尾に記載した。

10　調査資料（実測図面、写真等の記録類）および遺物は、松本市教育委員会へ移管予定である。

凡　例

1　本書で示した国家座標は、本事業の委託者（県松本建設事務所）が基準とした日本測地系に基づく。なお、抄録等で現在用いられている世界測地系との関係は、以下のとおりである。

（例）センターグリッドIA01

日本測地系				世界測地系	
国家座標（Ⅷ系）		北緯	東経	北緯	東経
X：22,800	Y：-47,460	36° 12′ 15″	137° 58′ 59″	36° 12′ 26″	137° 58′ 08″

2　遺物番号は、本文、図、挿表、写真のすべてに共通する。そのうち、実測図は選別されたもののみ掲載している。

3　土色は『新版　標準土色帖 2005 年版』による。

4　本書掲載図面の縮尺は、原則として以下のとおりである。

（遺構実測図）

全体図　1：700　　遺構配置図　1：150

竪穴建物跡　1：60　　掘立柱建物跡　1：80　　溝跡　1：60

ピット列　1：80　　土坑・ピット　1：60

（遺物実測図）

土器　1：4　　土器拓本　1：3　　鉄製品　1：2、1：3　　石器　1：3

5　遺構の用語については、以下のように定義した。

埋土　発掘作業段階では、遺構内に堆積している土については、すべて「覆土」（ふくど）と記述し、注記記号も「フ」（フクドの略）となっている。しかし、本文中では『発掘調査のてびき』（文化庁 2016）に従って「埋土」とした。

床面　本遺跡の調査では、貼床をはじめとした堅い平坦な面は検出できず、おおむね地山と埋土の境が確認できるにとどまった。この境は、本来の床として機能した生活面よりやや下位であると思われるが、本文中「床面」と表記している。

6　遺物の器種は、過去の長野県埋蔵文化財センター報告書を参考にして、一般的と思われる名称を用いた。また、一部器種の使用漢字は以下のとおりとした。

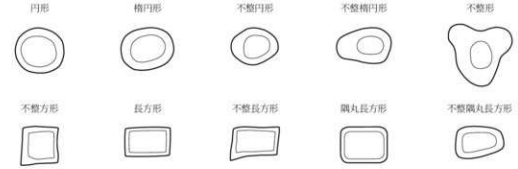
壺、坩、坏、高坏、埦（土師器・須恵器）、**碗**（山茶碗）

7　本書で用いたスクリーントーン等の凡例は、以下のとおりである。

遺物図版

8　遺構の平面・断面形状は下記の基準で分類した。

平面図



断面図

目　次

巻頭写真
はじめに
例言
凡例
目次
図版目次
表目次
写真図版目次
添付 DVD 収録内容
第１章　調査の経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　　1　事業計画の概要 …… 1
　　2　保護措置の経過 …… 2
　　3　行政手続の経過 …… 2
　　4　過去の調査履歴 …… 3
　　5　調査体制一覧 …… 4
　第２節　発掘調査の経過 …… 5
　　1　調査の工程 …… 5
　　2　整理作業の工程 …… 8
　　3　普及公開活動 …… 9
第２章　遺跡の位置と環境 …… 11
　第１節　地理的環境 …… 11
　　1　遺跡の位置と範囲 …… 11
　　2　遺跡周辺の地形環境 …… 11
　第２節　歴史的環境 …… 14
　　1　周辺の遺跡 …… 14
　　2　歴史的変遷 …… 17
第３章　調査の方法と成果 …… 18
　第１節　発掘調査の方法 …… 18
　　1　市教委の調査（23 次調査） …… 18
　　2　埋文センターの調査（24・27・28 次調査） …… 21
　　3　整理等作業の方法 …… 24
　第２節　基本層序と検出面 …… 26
　　1　基本層序 …… 26
　　2　検出面 …… 31
　第３節　縄文時代の遺物 …… 33
　第４節　弥生・古墳時代の遺構と遺物 …… 33
　　1　概要 …… 33
　　2　遺構 …… 38

3　遺物 …… 51
第５節　古代の遺構と遺物 …… 59
1　概要 …… 59
2　遺構 …… 61
3　遺物 …… 63
第６節　中世以降の遺構と遺物 …… 65
1　概要 …… 65
2　遺構 …… 71
3　遺物 …… 87
第７節　自然科学分析 …… 88
1　放射性炭素年代測定 …… 88
2　珪藻・花粉・プラントオパール分析 …… 91
第４章　総括 …… 93
第１節　出川南遺跡を巡る古墳出現期の土器 …… 93
第２節　出川南遺跡の居住域の位置の変遷 …… 102
第３節　おわりに …… 106
主要参考文献 …… 107
付表 …… 109
遺構一覧表 …… 109
遺物観察表 …… 119
写真図版
報告書抄録

図版目次

第 1 図 工事計画図 …… 1
第 2 図 南松本遺跡群（出川南・出川西遺跡）の過去の調査地点 …… 3
第 3 図 遺跡位置図 …… 12
第 4 図 周辺遺跡位置図 …… 13
第 5 図 市教委によるグリッド設定図 …… 19
第 6 図 市教委の単点位置呼称法 …… 20
第 7 図 埋文センターによるグリッド設定図 …… 23
第 8 図 基本土層と遺構の関係概念図 …… 26
第 9 図 基本層序位置図 …… 27
第 10 図 基本土層 …… 28
第 11 図 遺構全体図 …… 32
第 12 図 古墳時代遺構全体図 …… 34
第 13 図 古墳時代遺構配置図(1)…… 35
第 14 図 古墳時代遺構配置図(2)…… 36
第 15 図 古墳時代遺構配置図(3)…… 37
第 16 図 612 号住居跡遺構図 …… 39
第 17 図 613a 号住居跡遺構図 …… 40
第 18 図 614 号住居跡遺構図 …… 41
第 19 図 616 号住居跡、617 号住居跡遺構図…… 42
第 20 図 618 号住居跡遺構図 …… 43
第 21 図 619 号住居跡遺構図 …… 44
第 22 図 619 号住居跡遺物出土状態 …… 45
第 23 図 4 号竪穴状遺構 遺構図 …… 46
第 24 図 3 号掘立柱建物跡、11・12・13 号ピット列遺構図 …… 47
第 25 図 12 号溝跡、13 号溝跡遺構図…… 49
第 26 図 29 号溝跡遺構図 …… 50
第 27 図 31 号土坑遺構図 …… 51
第 28 図 古墳時代土器実測図(1)…… 54
第 29 図 古墳時代土器実測図(2)…… 55
第 30 図 古墳時代土器実測図(3)…… 56
第 31 図 古墳時代土器実測図(4)…… 57
第 32 図 古墳時代土器実測図(5)…… 58
第 33 図 古代遺構全体図 …… 59
第 34 図 古代遺構配置図 …… 60
第 35 図 613b 号住居跡遺構図 …… 61
第 36 図 615 号住居跡遺構図 …… 62
第 37 図 古代土器・鉄製品実測図 …… 64
第 38 図 中世以降遺構全体図 …… 65
第 39 図 中世以降遺構配置図(1)…… 66
第 40 図 中世以降遺構配置図(2)…… 67
第 41 図 中世以降遺構配置図(3)…… 68
第 42 図 中世以降遺構配置図(4)…… 69
第 43 図 中世以降遺構配置図(5)…… 70
第 44 図 1 号竪穴付掘立柱建物跡遺構図(1) …… 71
第 45 図 1 号竪穴付掘立柱建物跡遺構図(2) …… 72
第 46 図 2 号竪穴状遺構、3 号竪穴状遺構 遺構図 …… 73
第 47 図 2 号溝跡、3 号溝跡、5 号溝跡遺構図 … 75
第 48 図 6 号溝跡、10・11 号溝跡遺構図 …… 77
第 49 図 16 号溝跡、17 号溝跡遺構図…… 78
第 50 図 18・19・20・21・22・23・24・25 号溝跡、26 号溝跡、27 号溝跡遺構図…… 80
第 51 図 1・2 号ピット列、3 号ピット列遺構図 …… 82
第 52 図 4・5 号ピット列、6 号ピット列、7 号ピット列遺構図 …… 83
第 53 図 8・9・10 号ピット列遺構図 …… 85
第 54 図 10 号土坑、25 号土坑、33 号土坑、P513、P533 遺構図…… 87
第 55 図 中世土器実測図 …… 87
第 56 図 炭化物・土壌サンプル採取地点 …… 88
第 57 図 放射性炭素年代測定　暦年較正グラフ …… 90
第 58 図 プラントオパール含量 …… 91
第 59 図 プラントオパール、珪藻化石、花粉分析プレパラート内の状況 …… 92
第 60 図 出川南遺跡周辺における出土土器の様相 …… 95
第 61 図 出川南遺跡出土の受口状口縁甕分類図 …… 97
第 62 図 西三河地域の単口縁台付甕との比較 … 98
第 63 図 台付甕の台部製作技法 …… 99
第 64 図 3 号流路跡土層断面図 …… 102
第 65 図 出川南遺跡の時期別遺構分布図 …… 103
第 66 図 田川下流域を中心とした集落分布 …… 105

表目次

表1　南松本駅周辺の立体交差化事業の流れ …… 1
表2　保護措置の流れ …… 2
表3　調査次と発掘届、通知、発見届、文化財認定 …… 2
表4　調査次と契約関係 …… 2
表5　出川南遺跡の調査年次と内容 …… 4
表6　出川西遺跡の調査年次と内容 …… 4
表7　調査年度と体制 …… 4
表8　2013(H25)年度(23次)調査工程 …… 5
表9　2014(H26)年度(24次)調査工程 …… 6
表10 2015(H27)年度(27次)調査工程 …… 6
表11 2016(H28)年度(28次)調査工程 …… 6
表12 現地公開一覧 …… 9
表13 展示会一覧 …… 9
表14 埋文センターHP・発掘だより一覧 …… 10
表15 周辺遺跡一覧 …… 15
表16 市教委土層説明表 …… 21
表17 デジタル写真ナンバー …… 25
表18 基本層序対比表 …… 26
表19 流路一覧 …… 31
表20 放射性炭素年代測定結果 …… 89
表21 竪穴建物跡一覧 …… 109
表22 竪穴状遺構一覧 …… 109
表23 掘立柱建物跡一覧 …… 109
表24 溝跡一覧 …… 109
表25 ピット列一覧 …… 110
表26 土坑一覧 …… 110
表27 小溝一覧 …… 111
表28 ピット一覧 …… 113
表29 土器観察表 …… 119
表30 石器・鉄製品観察表 …… 127

写真図版目次

巻頭1　主な古墳時代の土器
巻頭2　弘法山古墳より出川南遺跡遠望
　　調査区全景
巻頭3　古墳時代前期　台付甕
　　竪穴建物跡612号住居跡　出土土器
PL 1　遺構1
PL 2　遺構2
PL 3　遺構3
PL 4　遺構4
PL 5　土器1
PL 6　土器2
PL 7　土器3
PL 8　土器4
PL 9　土器5
PL 10　土器6
PL 11　土器7・石器
PL 12　土器8・鉄製品

添付DVD収録内容

報告書PDF、自然科学分析報告書、周辺遺跡データ

第１章　調査の経緯

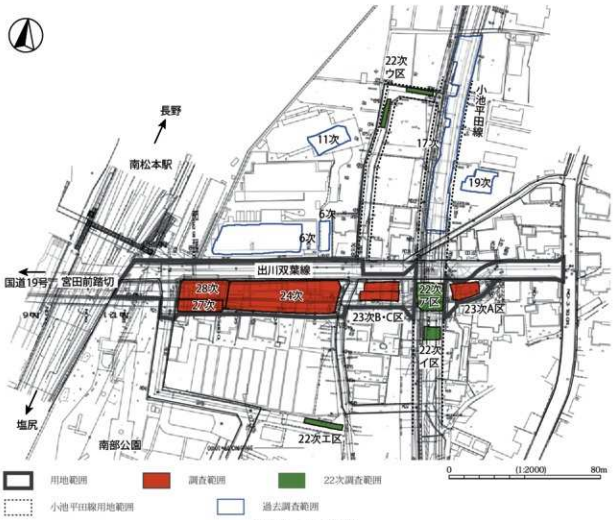
第１節　調査に至る経緯

１　事業計画の概要（第１図）

東日本旅客鉄道株式会社（以下 JR）南松本駅の南に位置する宮田前踏切は、「開かずの踏切」と呼ばれ、交差する出川双葉線の交通渋滞の原因ともなっている。その解消のため、1991（平成３）年、松本市はアンダーパス化を計画した。

表１　南松本駅周辺の立体交差化事業の流れ

年月日	内　容	事業者
1991（H3）	アンダーパス化計画の策定	松本市
2002（H14）. 2. 5	都市計画道路（出川双葉線他）の決定	県
2007（H19）	アンダーパス方式での事業許可	県
2009（H21）	計画協議、用地買収	県、松本市



第１図　工事計画図

2　保護措置の経過

本事業地は出川南遺跡に該当するため、2009（平成 21）年より長野県松本建設事務所（以下、松建）と松本市教育委員会（以下、市教委）による保護協議が進められた。また、市教委はすでに多くの業務を抱えており、当該事業に対する調査が困難であることから、2013（平成 25）年に長野県教育委員会（以下、県教委）を通じて長野県埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）に調査が要請された。

表 2　保護措置の流れ

年月日	内容	当事者
2009（H21）	都市計画道路（出川双葉線他）にかかる保護協議 ・出川双葉線道路工事部分が出川南遺跡の範囲内であること を確認	松建、市教委
2012（H24）.10	出川双葉線（出川南遺跡）の記録保存にかかる協議 ・調査可能範囲から記録保存に着手 ・出川双葉線の現道部分は、調査対象より除外（埋設管敷設による破壊） ・狭小な拡張部分は、工事立会で対応	松建、市教委
2012（H24）.11 ～	H25 年度出川南遺跡発掘調査計画策定 ・近隣地区で調査履歴（6・11・17・19 次等）があるため、試掘は実施しない ・市教委が調査を受託、実施（23 次）	市教委
2013（H25）.12 ～ 2014（H26）.1	H26 年度出川南遺跡発掘調査にかかる協議 ・23 次調査西側部分の発掘調査（24 次）は、市教委による調査が困難なため、埋文センターが受託、実施	松建、市教委、県教委、埋文センター（以下、四者協議）
2014（H26）.11.12	H27 年度出川南遺跡発掘調査にかかる協議 ・24 次調査西側の水道管敷設部分の発掘調査（27 次）も埋文センターが受託、実施	四者協議
2014（H26）.12.1	出川南遺跡発掘調査報告書にかかる協議（1） ・都市計画道路のうち出川双葉線にかかる 23・24・27・28 次の発掘調査報告書の刊行は埋文センターが受託	四者協議
2016（H28）.12	出川南遺跡発掘調査報告書にかかる協議（2） ・出川双葉線範囲内の荻田踏切・南部公園部分は、調査可能となった時点で埋文センターが発掘、報告を実施する ・28 次調査までの報告書を H29 年度に刊行する	四者協議

3　行政手続の経過

(1)　文化財行政関連

土木工事通知（法 94 条）2013（平成 25）年 3 月 10 日　25 松建 285 号

県教委勧告（法 94 条）　2013（平成 25）年 3 月 25 日　25 教文 8-379 号

表 3　調査次と発掘届、通知、発見届、文化財認定

調査次	発掘届 （法 92 条）	発掘通知 （法 92 条）	終了届	埋蔵物発見届	文化財認定
23 次	—	—	J631 ～ 0205-0008	J631 ～ 0131-0002	25 教文 20-107 号
24 次	25 長理 1-11 号	25 教文 6-19 号	26 長理 17-8 号	26 長理 15-7 号	26 教文 20-58 号
27 次	26 長理 14-11 号	26 教文 6-15 号	27 長理 4-2 号	27 長理 2-1 号	27 教文 20-27 号
28 次	27 長理 1-8 号	27 教文 6-13 号	28 長理 12-2 号	28 長理 10-2 号	28 教文 20-40 号

(2)　受託事業関連

原因事業：防災・安全交付金（街路）事業

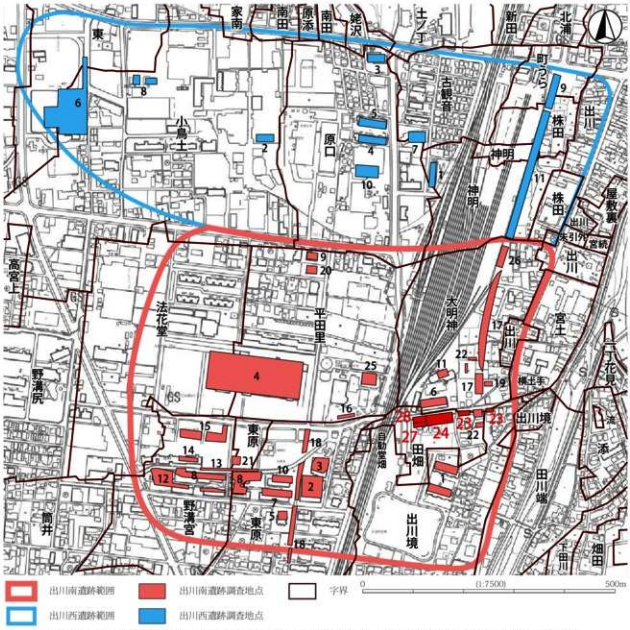
表 4　調査次と契約関係

調査次	契約期間	契約額（円）	作業内容	業務名
23 次	2013（H25）.6.3 ～ 2014（H26）.3.14	9,800,000	発掘作業	H24 年度社会資本整備総合交付金（住宅市街地基盤整備）・ H25 年度防災・安全交付金（街路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託

調査次	契約期間	契約額（円）	作業内容	業務名
24 次	2014 (H26) .4.1 ～ 2015 (H27) .3.20	32,136,000 (7/22 変更)	発掘作業	H25 年度防災・安全（街路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託
27 次	2015 (H27) .4.1 ～ 2016 (H28) .3.18	1,689,171	発掘作業	H26 年度防災・安全（街路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託
28 次	2016 (H28) .3.24～2017 (H29) .3.22	17,000,000	発掘作業	H27 年度防災・安全（街路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託
―	2017 (H29) .4.1 ～ 2018 (H30) .3.22	22,470,000	整理等作業・報告書刊行	H29 年度防災・安全（街路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託

4　過去の調査履歴（第２図）

出川南遺跡は、本報告書分を含めて 28 次に及ぶ調査が実施されている。また隣接する出川西遺跡は、出川南遺跡同様、田川の西岸にあり、古墳時代の集落群を主とする点などで共通する。市教委では、出川南遺跡とともに「南松本遺跡群」と総称し、その成果が『出川西遺跡−第 10 次発掘調査報告書−』（市教委 2015）でまとめられているので、ここで併せて調査成果を概観する。



第２図　南松本遺跡群（出川南・出川西遺跡）の過去の調査地点（市教委 2015, P10 第３図を一部改変）

(1)　出川南遺跡　調査履歴一覧

表５　出川南遺跡の調査年次と内容

次	年度	調査面積（㎡）	原因事業	主な遺構の時代と数	報告書
1	1986（S61）	1,325	市営出川団地	弥生後期住１、古墳前期住１、平安住２、（建１）	No.53、1987 年
2	1988（S63）	1,715	南部図書館	古墳後期住１、（溝１）	No.75、1989 年
3	1989（H 元）	900	南部体育館	古墳後期～平安前期住６	未報告
4	1991（H3）	14,688	大型店舗	古墳後期住 113、古墳３、平安後期住３、（溝７、建 21）平安後期住３、（溝７、建 21）	No.115、1994 年
5	1998（H10）	281	民間マンション	古墳後期住１、奈良住１、平安前期住５	No.139、1999 年
6	1998（H10）	1,486	民間マンション	弥生後期住３、古墳後期住１、（建３、溝６）	No.147、2000 年
7	1998（H10）	867	市営出川団地	古墳後期～奈良住 11、平安前期住 39、（建１）	未報告
8	1999（H11）	3,293	市営出川団地	古墳後期住７、奈良～平安住 23、（建１）	No.157、2000 年
9	1999（H11）	240	民間店舗	古墳後期住２、古墳前期遺物集中２	No.148、2000 年
10	1999（H11）	560	市営出川団地	平安前期住４	未報告
11	2001（H13）	188	民間マンション	弥生後期住１、平安後期住２、（溝１）	No.161、2002 年
12	2001（H13）	2,197	市営出川団地	古墳後期住１、奈良住 10、平安住２	No.158、2002 年
13	2002（H14）	25	市道 5600 号線	時期不明住２	未報告
14	2007（H19）	383	市営出川団地	古墳後期住２、（建２）	No.198、2009 年
15	2009（H21）	1,839	市営出川団地	古墳後期住２、奈良住４、平安前期住９、石積遺構１	No.207、2011 年
16	2011（H23）	89	出川双葉線	（溝２、流路）	未報告
17	2011（H23）～2012（H24）	4,624	小池平田線	弥生中期住 32、古墳住 54、奈良～平安住 16、中世住４、弥生～中世墓 38、（建７）	未報告
18	2012（H24）	2,362	芳野双葉線	古墳後～平安前期住 70、（建 12）	未報告
19	2012（H24）	158	小池平田線	弥生住１、（火葬墓１）	未報告
20	2012（H24）	502	民間店舗	古墳中期住３、古墳後期住６、（建１）	未報告
21	2013（H25）	341	出川町会集会所	古墳後期～奈良住 12	No.212、2014 年
22	2013（H25）	616	小池平田線	弥生～平安住 20	未報告
25	2014（H26）	647	松本市総合社会福祉センター	古墳前期・後期住９、古墳前期墓１基	未報告
26	2014（H26）	395	小池平田線	弥生中期後半住 23、弥生土坑墓	未報告

凡例　主な遺構の時代と数、名称は報告書の記載に従った。カッコでくくられたものは、時期不明のもの、住：住居跡、建：建物跡、No.：市教委報告書通番、S・H 年：調査年度、西暦年：報告書発刊年を示す。

(2)　出川西遺跡　調査履歴一覧

表６　出川西遺跡の調査年次と内容

次	年度	調査面積（㎡）	原因事業	主な遺構と数	報告書
1	1985（S60）	1,500	市営住宅	弥生中期～平安前期住５	未報告
2	1993（H5）	60	工場	弥生中期住１	No.135（遺物のみ）1999 年
3	1995（H7）	465	市営住宅	近世溝	未報告
4	1995（H7）	1,200	市営住宅	古墳住１、（建１、溝）	未報告
5	1996（H8）	1,008	市営住宅	平安後期住１、（溝）	未報告
6	1996（H8）	8,100	大型店舗	古墳中期配石遺構７、土器集中 19、（火葬墓１、溝 15）	No.135、1999 年
7	2001（H13）	450	南松本保育園	平安住９、（溝）	未報告
8	2004（H16）	458	工場	弥生後期住１、土器集中７	No.181、2006 年
9	2013（H25）	444	小池平田線	弥生中期住２、（溝 10）	未報告
10	2013（H25）	1,450	大型店舗	古墳前期・後期 18、（火葬墓１、建１、溝３）	No.216、2015 年
11	2014（H26）	1,116	小池平田線	弥生中期住 23、中世方形区画溝１、（溝２）	未報告

凡例　主な遺構の時代と数、名称は報告書の記載に従った。カッコでくくられたものは、時期不明のもの、住：住居跡、建：建物跡、No.：市教委報告書通番、S・H 年：調査年度、西暦年：報告書発刊年を示す。

5　調査体制一覧

表７　調査年度と体制

年度	次	調査組織	調査担当	教育部長	文化財課長	埋蔵文化財担当係長	事務局
2013（H25）	23 次	市教委	三村竜一、小山奈津実	川上一憲	伊佐治裕子	直井雅尚、竹原　学	櫻井　了、百瀬耕司、柳澤希歩

年度	次	調査組織	調査担当	所長	副所長	管理課長	調査部長	調査課長
2014（H26）	24 次	埋文センター	綿田弘実、前田一也、福井優希	会津敏男	多城　哲	村山清治	大竹憲昭	町田勝則
2015（H27）	27 次	埋文センター	綿田弘実、片山祐介	会津敏男	多城　哲	山本希一	平林　彰	岡村秀雄
2016（H28）	28 次	埋文センター	廣田和穂、片山祐介	会津敏男	竹内　誠	山本希一	平林　彰	町田勝則
2017（H29）	報告書作成	埋文センター	片山祐介、石丸敦史	会津敏男	関﨑修二	山本希一	平林　彰	川崎　保

発掘作業員

2013（H25）	岩井健一郎、大滝清次、金井秀雄、小林伸一、鈴木あかね、鈴木高、田中重正、田中勇一郎、鳥井和幸、西村一敏、三谷久美子、山﨑素行
2014 ～ 16（H26 ～ 28）	有賀由佳、上兼　薫、加藤　旻、小山繁樹、鈴木将之、蓮澤さゆり、武田善徳、中嶋　健、中村　誠、西原達雄、三村悌二、山田英行、渡辺啓之助、渡辺すみ子

整理作業員

2014（H26）	上原美代子、岡村美喜子
2015（H27）	上原美代子、宮下正治
2016（H28）	小椋山貞子
2017（H29）	島田由美、中村智恵子、山下千幸

第２節　発掘調査の経過

１　調査の工程（第１図）

⑴　2013（平成 25）年度の発掘調査（23 次）

市教委では、本事業にともなう調査を 23 次として平成 25 年度に調査を実施した。この時市教委は、小池平田線部分の調査（22 次）を同時に行ったため、表８にはないが、６月にア区、８月から 10 月にイ・ウ・エ区の発掘を実施している（第１図）。

23 次の調査範囲は、小池平田線との交差点（22 次ア区）を挟んで東西約 45m の範囲である。当初工区は、交差点の東（Ａ区）と西（Ｂ・Ｃ区）とで大別し、西側はさらに東西に二分割する予定であったが、用地南側の地下埋設管工事に対応するため、西側については、南北に分割して南をＢ区、北をＣ区とし、Ｂ区を先行して調査することとなった。道路および隣地への影響を考慮して、敷地境から３m ほど離して調査区を設定した。調査の結果、Ａ区では遺物包含層は存在せず、Ｂ・Ｃ区では遺物包含層が２層とも存在したが、安全確保のため、２面目は一部の調査とせざるをえなかった。調査面積はＡ・Ｂ・Ｃ区合わせて表面積 297㎡、延面積は 428㎡となった。

表８　2013（H25）年度（23 次）調査工程

工区	表面積	延面積	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
Ａ区	112㎡	112㎡				■								
Ｂ区	99㎡	161㎡								■	■			
Ｃ区	86㎡	155㎡									■	■		
計	297㎡	428㎡												

⑵　2014（平成 26）年度の発掘調査（24 次）

埋文センターが 23 次調査地点の西側、東西約 60m の範囲を調査した。民家の進入路を確保するため、東西それぞれ１区および２区の工区を設定した。調査は 23 次調査の調査成果と照合するため東側の１区西半から始めることとし、１区西半を埋め戻した後、西側の２区の調査を進め、１区東半は民家進入路との都合を調整しながら２区と同時に進めた。調査表面積は 1,460㎡、延面積は 2,920㎡となった。

表 9　2014（H26）年度（24 次）調査工程

工区	表面積	延面積	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1 区	730㎡	1,460㎡												
2 区	730㎡	1,460㎡												
計	1,460㎡	2,920㎡												
基礎整理	—	—												

(3)　2015（平成 27）年度の発掘調査（27 次）

27 次調査地点は、24 次の西隣区画の南側にあたる。道路計画に伴う水道管切り回し箇所のみの発掘で、調査範囲は東西約 24m、南北約 7m、調査面積は 165㎡、2 面目の包含層は東半分しか存在していなかったので、延調査面積 198㎡となった。

当初予定では南部公園の進入路にあたる西側市道部分も調査対象であったが、埋設管が多く調査可能範囲が極めて限られる上、南部公園への進入路を封鎖できないこともあって、市道部分の調査は取りやめ、代わりに調査区を同一面積だけ北側へ拡張することとなった。面積狭小ではあったが、用地内に排土置き場を確保できたため、一つの工区として調査した。

表 10　2015（H27）年度（27 次）調査工程

	表面積	延面積	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
発掘	165㎡	198㎡												
基礎整理	—	—												

(4)　2016（平成 28）年度の発掘調査（28 次）

28 次調査地点は、27 次の北隣（24 次調査の西隣区画の北側）にあたる。東西約 24m、南北約 9m の範囲で、調査面積は 440㎡と面積が狭小であり、排土置き場を用地内で確保できるとの見込みから、一つの工区としたが、第 1 検出面が想定深度よりも深かったため、1 面目は東西に 2 分割して調査した。2 面目の包含層が 27 次調査同様、東半分しか存在していなかったため、延面積は 528㎡となった。

表 11　2016（H28）年度（28 次）調査工程

	表面積	延面積	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
発掘	440㎡	528㎡												
基礎整理	—	—												

(5)　作業日誌（抄）

日誌にかかる用語で、竪穴建物跡は「〇住」と略してある。

2013（平成 25）年度

H25. 6. 5　松建と市教委で 23 次調査契約締結
6.11　機材等搬入
7. 9　A 区掘削開始
7.12　トレンチを設定し、A 区には遺物包含層が存在しないことを確認
7.18　市教委森義直調査員による調査指導
8. 2　A 区埋め戻し終了
11.18　B 区機材等搬入
11.20　B 区掘削開始、第 1 検出面で、複数の竪穴建物跡を確認
12. 6　B 区の遺構測量など記録終了
12. 7　B 区埋め戻し終了
12. 9　C 区掘削開始
12.11　C 区第 1 検出面で、B 区とつながる複数の竪穴建物跡を確認
12.12　613 住より多数の台付甕などの古墳時代前期の土器、615 住より古代の鉄製紡錘車が出土
12.17　612 住柱穴 Pit7 より完形の土師器甕が出土

H26. 1. 6　C 区埋め戻し終了

1. 8　H26 年度調査に関する四者協議
1.20　松建に現場引き渡し
3.14　松建との委託契約終了

2014（平成 26）年度

H26. 4. 1　松建と埋文センターで 24 次調査契約締結（以後、松建と埋文センター）
4. 9　機材等搬入
4.11　1 区第 1 検出面まで掘削開始
4.14　市教委と埋文センターで基本土層を確認
4.15　現場開始式
5. 9　1 区で検出開始、中世とみられるピット群を確認
5.28　3 溝から年代測定用の炭化物サンプル採取（6.23 にも採取）
6. 2　1 区南壁より花粉分析用土壌サンプル採取（8.20 にも）、1 区一部埋め戻し終了
6. 3　2 区掘削開始
6.18　市教委直井雅尚埋蔵文化財係長による調査指導
6.23　松本市庄内公民館主催現地学習会の受け入れ
6.27　2 区空中写真撮影（第 1 検出面）
7.14　2 区第 2 検出面まで重機掘削
7.15　1 区で古墳時代中期の竪穴建物跡（619 住）を検出
7.22　2 区埋め戻し開始
8.29　埋め戻し終了、機材等撤収、松建に現場引き渡し
12. 1　基礎整理作業開始
12. 3　H27 年度調査について松建と協議
12. 9　年代測定結果報告
H27. 2.13　委託測量成果納品
3.20　基礎整理作業、松建との委託契約終了

2015（平成 27）年度

H27. 4. 1　27 次調査契約締結
4. 7　松建と現地協議、調査範囲、工程の確認
4.13　機材等搬入
4.14　松建と現地協議、調査区の一部変更、
4.15　現場開始式、掘削開始
5. 8　第 1 検出面調査終了
5.11　第 2 検出面掘削開始、須恵器壺を伴う竪穴状遺構を検出
5.20　現場終了式
5.25　自然流路（流路 3）より年代測定用炭化物サンプル採取
5.26　流路中から古墳時代後期の土師器坏が出土
5. 28　第 2 検出面以下の遺物包含層の有無を深掘りで確認（砂礫層のみ）、調査区埋め戻し終了、機材等撤収
5.29　松建に現場引き渡し
12. 1　基礎整理作業開始
12.24　年代測定結果報告
H28. 2. 3　松本市立博物館主催「発掘された松本 2015」に出土遺物を出品（～ 2.21）
2.17　委託測量成果納品
3.18　基礎整理作業、松建との委託契約終了

2016（平成 28）年度

H28. 3.24　28 次調査契約締結
4. 6　機材等搬入
4. 8　重機による掘削開始
4.13　現場開始式
4.18　調査区西半部で第 1 検出面遺構検出開始
4.27　調査区西半部の深掘りを行い、第 2 検出面が存在しないことを確認
5. 9　調査区西半部の埋め戻し終了、東半部の掘削開始
5.19　溝 2・3 の間に溝跡と同一方向のピット列を確認
6. 3　調査区東半部の調査終了、埋め戻し終了、遺物洗浄等開始
6.17　遺物洗浄等終了、現場終了式
6.30　機材等撤収、松建に現場引き渡し
12. 1　基礎整理作業開始、県松本文化会館 2 階フリースペースにて写真パネル展示（～ 12.26）
H29. 1.10　県松本合同庁舎ロビーにて写真パネル・出土遺物展示（～ 1.20）
2.17　委託測量成果納品
3.22　基礎整理作業、松建との委託契約終了

23 次　集合写真

24 次　集合写真

2　整理作業の工程

発掘等で回収した遺物、作成した図面、写真、日誌等については、現場での発掘が完了した直後に行う基礎整理作業と、本格整理作業で行う作業に大別して進めた。基礎整理作業は、各調査年次それぞれで完結するように進めた。

平成 26・27 年度には、遺構の年代を確定するため放射性炭素年代測定を、平成 26 年度には、遺跡の自然環境を評価するため珪藻・花粉・プラントオパール分析を実施した。

平成 29 年度は、遺物の分類、接合、復元、実測、トレース、写真撮影、遺構図版の作成、図版組み、原稿執筆、報告書の印刷製本を行った。また、松本市および愛知県で資料調査を実施した。

整理日誌（抄）

H29. 4. 1	委託契約締結	9.27	遺物写真撮影委託（～ 10.5）
4. 5	整理作業員開始式	10.24	委託遺物写真撮影成果納品
4.11	市教委から 23 次調査資料借用	11.27	委託遺物図トレース納品
5.16	市教委直井雅尚氏による、出土遺物の整理指導	12. 7	資料調査（愛知県安城市出土資料～ 12.8）
		12.19	報告書印刷・製本業者決定
7.14	資料調査（松本市出土資料）	H30. 3.15	発掘調査報告書刊行
9.22	遺物図トレース委託	3.16	整理作業員終了式
		3.22	松建との委託契約終了

遺物実測作業

土器復元

整理指導

3　普及公開活動

(1)　現地公開

用地狭小のため、一般向け現地説明会は実施できなかったが、(23・24 次) 調査では、以下のとおり庄内地区公民館等による現地学習会等を受け入れた。

表 12　現地公開一覧

年月日	内容
2013（H25）. 9. 18	庄内地区公民館・老人大学主催の現地学習会
2014（H26）. 6. 24	庄内地区公民館主催の現地学習会
2014（H26）. 8. 6	松建インターンシップ事業による現地見学

(2)　展示

所外で、出土品および写真パネルを提供あるいは展示したものは、以下のとおりである。

表 13　展示会一覧

期日	名称	場所等
2016（H28）. 2. 3 ～ 21	速報展「発掘された松本 2015」	松本市立博物館主催、松本市時計博物館
2016（H28）. 12. 1 ～ 26	パネル展	県松本文化会館
2017（H29）. 1. 10 ～ 20	ロビー展	県松本合同庁舎

(3) その他の情報公開

調査の進捗に応じて、埋文センターホームページサイト（http://naganomaibun.or.jp/）にも調査情報を掲載するとともに、発掘報告パンフレット（「発掘だより」）を作成し、配布・掲示を行った。

表 14　埋文センター HP、発掘だより一覧

HP	発掘だより		主な内容
2014（H26）.4.23	2014（H26）.5.26	No.1	24 次調査の開始
2014（H26）.6.2	2014（H26）.7.14	No.2	中・近世の掘立柱建物跡や溝跡など
2014（H26）.10.3			古墳時代中期の竪穴建物跡など
2015（H27）.5.22	2015（H27）.5.27	No.3	第 1 面の調査の終了、第 2 面の調査へ
2016（H28）.4.27	2016（H28）.4.27	No.4	28 次調査の開始
2016（H28）.5.30	2016（H28）.5.20	No.5	溝や柱穴の列を発見
2016（H28）.6.30	2016（H28）.6.30	No.6	溝跡や鎌倉～室町時代の畑の畝跡
2017（H29）.4.26			H29 年度の整理作業の開始、図面の点検、土器の接合
2017（H29）.7.5			土器の復元、図面のトレース

松本市庄内公民館主催　現地見学会

県松本合同庁舎における展示会の様子

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

１　遺跡の位置と範囲（第３図）

出川南遺跡は、長野県松本市の中心市街地南方、双葉町、出川町、芳野、平田東１丁目にまたがる。南松本駅前から国道 19 号南松本交差点に向かう市道を北限にして南へ約 650m、県道平田新橋線を東限に西へ約 750m の範囲に、ほぼ四角形に広がり、遺跡内には JR 篠ノ井線が南北に通っている。面積はおよそ 51.4 万㎡で、北に出川西遺跡、南は平田北遺跡が隣接する（第４図）。

遺跡内ではこれまで 24 地点で発掘調査を行ってきた。今回の調査地点は、南松本駅の南踏切から東へ、出川双葉線が県道平田新橋線にぶつかるまでのおよそ 250m 間で、代表地番は松本市出川町 20、北緯 36.207499 度、東経 137.969293 度に位置する。

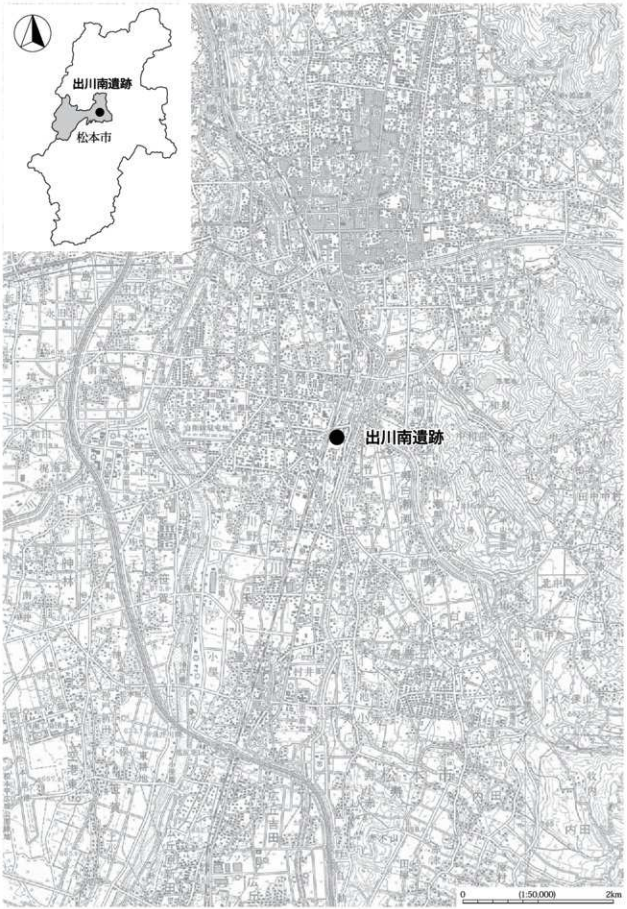
２　遺跡周辺の地形環境（第３・４図）

出川南遺跡が所在する松本市は、長野県のほぼ中央を南北に延びる松本盆地の南部に位置する。盆地の西側には標高 3,000m 級の山々が連なる北アルプスがそびえ、東から南は筑摩山地が巡っている。東西の山脈は現在も隆起しているが、隆起速度の違いによって盆地東縁が相対的に沈降しているため、盆地の西側には北アルプスに源流をもつ梓川等が形成する広大な扇状地が広がり、東寄りに中央アルプス起源の奈良井川が北流する。

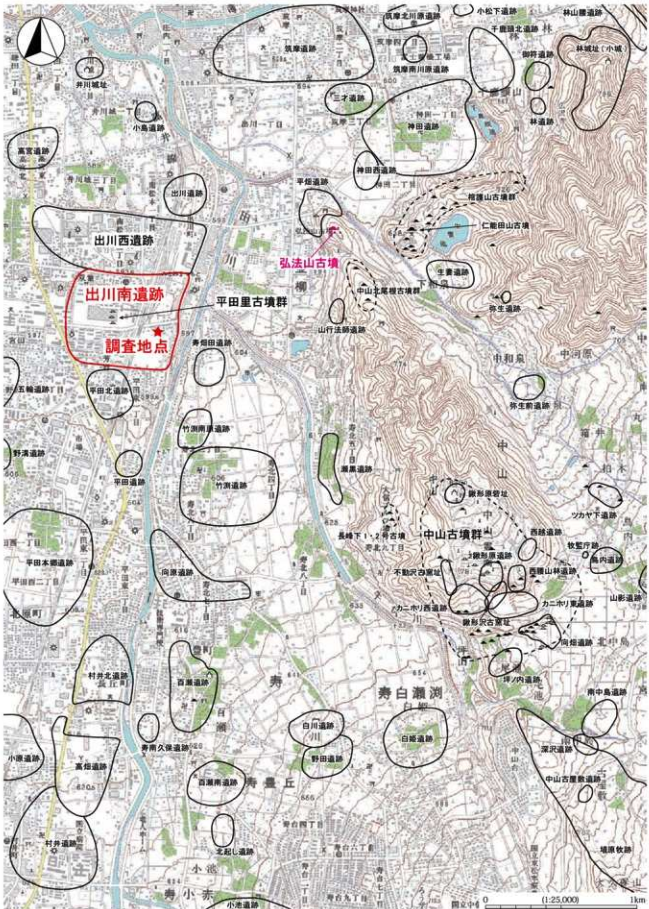
松本盆地南東部では、この奈良井川に筑摩山地から田川、牛伏川、薄川が流れ込み、それぞれ小扇状地を形成している。本遺跡東方を流れる田川は、右岸に小規模な段丘面をとどめており、牛伏川扇状地の扇端部はここに重なる。また、北東方は薄川の扇状地が、和泉川のそれと複合しながら、やはり田川右岸に及んでいる。牛伏川のさらに東側、筑摩山地西縁までの間は、中山の独立丘陵を含み、弘法山古墳から牛伏寺・崖の湯方面に延びる高台が続いている。

本遺跡は、奈良井川と田川に挟まれた沖積低地に位置する。周辺は南から北に向かって緩やかに傾斜しており、調査地点の標高は 595m 内外である。1955（昭和 30）年以前の地形図には、JR 篠ノ井線の西沿いに、田川から派生したと思われる穴田川がみえ、本遺跡および出川西遺跡を貫流している。JR 篠ノ井線の東側では今回の 28 次調査区や出川西遺跡７次調査区、西側では本遺跡２・16・25 次調査区や出川西遺跡 10 次調査区で大規模な砂礫の堆積をとらえている。したがって、穴田川は時代によって動きや広狭はあるものの、おおむね JR 篠ノ井線付近を北流していたのであろう。本遺跡 1･22 次調査で確認された中世以降の自然流路は、この穴田川もしくは田川から派生したものと理解されている。一方、JR 篠ノ井線の西側では、本遺跡４・８・10・12・14・15・18 次調査で、南南西から北北東へ流下する奈良井川水系の自然流路が幾筋も確認されている。これらは、古墳時代中期以前から中世以降まで、増水時には越流し渇水期には伏流するなど、気象の変化が地表の状況を刻々と変化させてきた状況を物語っている。近代まで残っていたと伝わる湧水地や小河川はその名残といえるだろう[1]。

1　「出川」の地名はこの湧水に由来するという。初出は1558(永禄元)年という説もあるが、1585(天正13)年と推定される「草間肥前年貢注文」に「いて川」の地名がみえる。



第３図　遺跡位置図


出川西遺跡
出川南遺跡
調査地点
平田里古墳群
弘法山古墳
中山古墳群
寿白瀬渕
寿豊丘
寿小赤
(1:25,000)
0
1km

第４図　周辺遺跡位置図

第２節　歴史的環境

１　周辺の遺跡（第４図、表15）

松本市域には、733か所の埋蔵文化財包蔵地が登録されている[2]。出川南遺跡周辺地域を、北は薄川、南を塩沢川辺りで区切り、筑摩山地西縁と奈良井川に囲まれた範囲としてみると、100か所余りの埋蔵文化財包蔵地がある[3]。出川南遺跡は田川と奈良井川に挟まれた沖積低地にある。一方、田川の東側には牛伏川と薄川の扇状地が広がり、牛伏川の東は中山丘陵を中心とする東部丘陵地が筑摩山地のふもとまで続いている。本項では、以上の地形区分を念頭におきながら、出川南遺跡周辺の沖積低地を中心に遺跡の分布状況を時代順に概観してみる[4]。

縄文時代以前　田川～奈良井川の沖積低地では本遺跡南方約3kmの高畑遺跡で晩期の土器棺墓が、田川右岸（牛伏川扇状地扇端部）の百瀬遺跡で後期の土坑が検出されているほかみるべきものはない。当時は、東部丘陵地および牛伏川扇状地の扇頂部から扇央部にかけての一帯が遺跡分布の中心である。

弥生時代　遺跡の低地進出が顕著になる。前期はまだ、本遺跡が立地する田川～奈良井川低地に目立った遺跡は見当たらない[5]が、中期になると、田川右岸の低地には竹渕遺跡や百瀬遺跡などが連なり[6]、本遺跡や出川西遺跡からも竪穴建物跡が検出されている。また、薄川扇状地北側の県町遺跡でも集落が形成されている。田川や薄川の氾濫原を生産域とした集落形成が進んだとみてよいだろう。後期はそれぞれの遺跡で集落規模が拡大し、本遺跡には大形の方形周溝墓が築造されている。一方、縄文時代に中心となっていた東部丘陵地および牛伏川扇状地の遺跡分布は希薄である。

古墳時代　前期は弥生時代後期に引き続き、田川や薄川両岸の低地が遺跡分布の中心となる。出川西遺跡34号住居址からは、中山丘陵北端に築造された弘法山古墳とほぼ同時期の土器群が一括出土しており、千鹿頭北遺跡など薄川扇状地一帯の遺跡群とともに、同古墳との密接な関連が指摘できる。また、本遺跡では前期の石貼りの方形遺構も確認されている[7]。中期から後期には、古墳の分布域が東部丘陵地から薄川扇状地へ拡散し、東部丘陵地から牛伏川扇状地での遺跡分布は希薄ながら、薄川扇状地には大規模な集落遺跡が分布する。本遺跡内にも石貼りの方形遺構の北側に平田里古墳群が築造され、出川西遺跡や高宮遺跡には水辺の祭祀跡がみられ、本遺跡周辺の集落が松本盆地南部の核の一つであったと理解できる。

古代　薄川扇状地や田川右岸には弥生時代中期以降古代まで継続する遺跡がみられるが、この時代の遺跡分布の中心は奈良井川以西の広大な沖積低地である。また、弥生時代から古墳時代後期まで集落が希薄だった平田北遺跡から南の沖積低地、東山丘陵地、牛伏川扇状部にも新たな集落ができる。これは、「筑摩郡」や東山道「覚志駅」、「埴原牧」、「牧監庁」の設置など、律令期の新たな体制整備や開発に連動し

2　「平成28年度周知の埋蔵文化財包蔵地数」（文化庁2017）作成のため、県教委が調査した市町村別の埋蔵文化財包蔵地数による。

3　中山古墳群のように古墳を群単位でカウントしているものもある。

4　報告書未刊の発掘調査歴等については、市教委三村竜一氏から御教示いただいた。また、松本市南部の沖積低地における遺跡については、直井雅尚氏が地形区分ごとの変遷を簡明に概観している（No.152・216）。

5　出川西遺跡第17次調査では、縄文晩期末～弥生初頭の土器棺墓が確認されているという（未報告）。

6　百瀬遺跡をはじめ、田川右岸沿いの遺跡は地形区分の上で河岸段丘を覆う牛伏川扇状地扇端にあるが、低地の遺跡としてとらえた方が弥生時代以降の集落の立地要件について理解しやすい。

7　福沢佳典氏は「石積遺構」（No.207）、直井雅尚氏は「石貼りの方形遺構（墳墓の可能性。古墳時代前期）」としている（No.216）。

表 15　周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	地形区分	時代区分※1							摘　　要	参考文献※2
			旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
1	井川城址	低地（田川～奈良井川）		△		△	△	◎	△	中世：建物５、柱穴等 327、堀 1、土塁 1	No.224
2	小島遺跡	低地（田川～奈良井川）									
3	高宮遺跡	低地（田川～奈良井川）			△	○				古墳中期：竪穴 8、土器集中（祭祀場）21。	No.116・136・172・173
4	出川遺跡	低地（田川～奈良井川）				△	△	○	△	古墳：遺物包含層。中世：竪穴 2、掘立、墓 3、火葬墓 3、井戸 3、溝 5。木製羽子板。	No.87
5	出川西遺跡	低地（田川～奈良井川）			◎	◎	◎	△		表 6 参照	No.135・181・216
6	出川南遺跡	低地（田川～奈良井川）			◎	◎	◎	○		表 5 参照	No.53・75・115・139・147・148・151・157・158・161・198・207・212
7	平田里古墳群	低地（田川～奈良井川）				△				古墳中期：古墳 2、不明：古墳 1	No.114
8	平田北遺跡	低地（田川～奈良井川）			△	○	◎	△		古墳中期：竪穴 1。同末期～奈良初：竪穴 15、掘立 5。	No.120・152
9	平田遺跡	低地（田川～奈良井川）					△				No.115・120
10	五輪遺跡	低地（田川～奈良井川）						○		中世：竪穴。	No.171
11	野溝遺跡	低地（田川～奈良井川）				△	△				No.51
12	平田本郷遺跡	低地（田川～奈良井川）				○	◎	△		古墳前期：竪穴 3、掘立 1。古代：竪穴 177、掘立 6。「美濃国」印、瓦塔、鉄鉢。	No.113・119・138・166・195
13	小原遺跡	低地（田川～奈良井川）		△	△		◎	◎		古代：竪穴 139、掘立 11、柱穴列 1、特殊遺構 2、土坑 53。中世：竪穴 15、掘立 11、柱穴列 10、土坑（含火葬墓）93。帯金具、円面硯、坩堝、鉄鐸、鉄鈴、埋納銭。	No.86・107・123
14	小屋遺跡	低地（田川～奈良井川）		△			△				No.51・86
15	村井北遺跡	低地（田川～奈良井川）									
16	高畑遺跡	低地（田川～奈良井川）		△		△	◎	◎		縄文晩期：土器棺墓。古代：竪穴 149、掘立 3。中世（鎌倉）：竪穴 35、掘立 2。「富寿神宝」。	No.51・194、小山 2016
17	村井遺跡	低地（田川～奈良井川）					△				No.51
18	寿畑田遺跡	低地（牛伏川扇状地）									
19	竹渕南原遺跡	低地（牛伏川扇状地）			△	○	◎	○		古墳前期：竪穴 8。古代：竪穴 19、掘立 1。中世：竪穴 4、井戸 1	No.39・144
20	竹渕遺跡	低地（牛伏川扇状地）			◎			△		弥生後期：竪穴 12、掘立 7。	No.39・124
21	向原遺跡	低地（牛伏川扇状地）		△	△	△	○			古代：竪穴 8。円面硯、鉈尾（帯飾り）。	No.133・144・158
22	寿南久保遺跡	低地（牛伏川扇状地）									
23	百瀬遺跡	低地（牛伏川扇状地）		△	◎	○	◎	◎		弥生百瀬式の標式。弥生：環濠 1。中期竪穴 14、中～後期竪穴 14、後期竪穴 1。古墳後期：竪穴 1。平安：竪穴 19。中世：竪穴 7、掘立 2、柱穴列 1、井戸 7。人面付土器、鳳字硯。	No.108・151　藤沢 1951
24	百瀬南遺跡	低地（牛伏川扇状地）		△			◎			古代：竪穴 11、掘立 2。	
25	北起し遺跡	低地（牛伏川扇状地）		△	○		◎	△		弥生：竪穴 1。古代：竪穴 11。	No.191
26	瀬黒遺跡	牛伏川扇状地				△					No.75
27	白川遺跡	牛伏川扇状地		△							No.124・133
28	野田遺跡	牛伏川扇状地		△							No.124・133
29	白姫遺跡	牛伏川扇状地									
30	小池遺跡	牛伏川扇状地		◎			◎	◎	○	縄文：竪穴 49、方形柱穴列 2、屋外埋甕 5。古代：竪穴 192、掘立 11、柱穴列 2、井戸 1。中世：竪穴 11、礎石建 1、掘立 3、柱穴列 1、井戸 1、火葬墓 5。近世：竪穴 5、土坑墓 2。8 世紀末～9 世紀前半の居館あるいは官衙的な建物か。銅製帯金具、「富寿神宝」、火舎。墨書土器は「舎人」「金人」。	No.126、市教委 1991
31	筑摩遺跡	薄川扇状地		△	△	○	○	△	△	古墳中期竪穴 4、後期 2、奈良竪穴 1、平安竪穴 1。	No.183
32	三才遺跡	薄川扇状地					△	○	△	中世竪穴 3	No.97
33	筑摩北川原遺跡	薄川扇状地			△		△	△		旧松本工業高等学校遺跡	No.15、市教委 1981
34	筑摩南川原遺跡	薄川扇状地			△	△	△			旧富士電機工業遺跡	No.97
35	小松下遺跡	薄川扇状地				○	○			古墳後期竪穴 1、平安竪穴 4。	No.203

番号	遺跡名	地形区分	時代区分※１						摘　　要	参考文献※２
			旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
36	林山腰遺跡	薄川扇状地		○			○	◎	○	縄文中期竪穴３、同後期１。平安竪穴２、中近世竪穴２・建物６・礎石 37。	No.61・174
37	林城址（小城）	薄川扇状地						△			No.224
38	御符遺跡	薄川扇状地				△				遺跡南東に隣接して直刀や剣が出土した円墳（御符古墳）あり	No.61・73
39	林遺跡	薄川扇状地									
40	千鹿頭北遺跡	薄川扇状地		△	△	◎	◎	△		古墳前期竪穴７、同後期竪穴 40・掘立６、古代竪穴 17	No.69
41	神田遺跡	薄川扇状地		△	△	◎	◎	◎		古墳前～中期：竪穴９棟、掘立１棟。古代：竪穴 26 棟、掘立５棟。独鈷石を表採。古代：竪穴推定７棟、古代・中世：竪穴 22 棟、中世：区画溝	No.73・183
42	神田西遺跡	薄川扇状地									
43	平畑遺跡	低地（和泉川～田川）		△	○	○	◎			弥生後期：竪穴３、方形周溝墓４。古墳後期：竪穴１、古墳１。古代：竪穴 31	No.115
44	仁能田山（中山 36 号）古墳	東部丘陵地				△	△	△		古墳前期：方墳か前方後方墳。	No.73、原 1971
45	棺護山古墳群	東部丘陵地				△				棺護山１～３号、中山 31 ～ 36 号、未命名４基の計 13 基。古墳中期：棺護山２・３号	No.73
46	生妻遺跡	東部丘陵地		○	△	○	△			縄文：中期竪穴７。古墳：前期竪穴１、中期竪穴１。	No.89
47	弥生遺跡	東部丘陵地									
48	弥生前遺跡	東部丘陵地	△	◎			△		△	縄文：中期竪穴 24、後期柄鏡３。有舌尖頭器	No.88
49	弘法山（中山 48 号）古墳	東部丘陵地（中山丘陵）				△				古墳前期：前方後方墳	No.111　市教委 1974
50	中山北尾根古墳群	東部丘陵地（中山丘陵）				△				１号：円墳、２・３号：方墳か	No.73
51	山行法師遺跡	東部丘陵地（中山丘陵）		△		△					No.75・124
52	長峰下１・２号古墳	東部丘陵地（中山丘陵）				△					No.216
53	中山古墳群	東部丘陵地（中山丘陵）				△	△			古墳：68 基中 23 確認した。いずれも後期古墳。古代：建物１、炭焼窯 44（鍬形原・カニホリ東・西遺跡分を含む）	No.168・175・196
54	鍬形原砦址	東部丘陵地（中山丘陵）						△		空堀	No.168・175
55	西越遺跡	東部丘陵地（中山丘陵）									
56	西越山林遺跡	東部丘陵地（中山丘陵）									
57	鍬形原遺跡	東部丘陵地（中山丘陵）	△	◎	○		△			縄文：中期竪穴 15。弥生：竪穴９。有舌尖頭器	No.168・175
58	カニホリ東遺跡	東部丘陵地（中山丘陵）		◎			△			縄文：前期末～中期初竪穴９、中期後半１。	No.196
59	カニホリ西遺跡	東部丘陵地（中山丘陵）		○			△			縄文：前期末～中期初竪穴３、中期後半３。	No.196
60	不動沢古窯址	東部丘陵地（中山丘陵）					△			古代：須恵器窯１	No.168
61	鍬形沢古窯址	東部丘陵地（中山丘陵）					△			古代：須恵器窯２	No.168
62	向畑遺跡	東部丘陵地		○	△	◎	○	△	△	縄文：中期竪穴９。古墳：前期竪穴 57、中期竪穴２。古墳：中期古墳６、後期古墳１。古代：竪穴４、中世の大規模な墓地	No.60・81・83
63	坪ノ内遺跡	東部丘陵地		◎				△	△	縄文：前期竪穴２、中期竪穴６、後期竪穴 17。	No.80
64	ツカヤ下遺跡	東部丘陵地				○				古墳中期：竪穴３。	No.196
65	牧監庁跡	東部丘陵地					△			推定信濃諸牧牧監庁跡	No.101
66	鳥内遺跡	東部丘陵地									
67	山影遺跡	東部丘陵地		◎		◎	○	△		縄文：中期竪穴 15、後期竪穴３、屋外埋甕２、屋外炉２。古墳：中期竪穴 21。古代：竪穴５。	No.100
68	南中島遺跡	東部丘陵地	△	◎			○			縄文：中期竪穴 30、方形柱穴列２以上。古代：竪穴５。木葉型尖頭器	No.90
69	深沢遺跡	東部丘陵地		○			○				No.60
70	中山古屋敷遺跡	東部丘陵地		△		△		△			No.101
71	墻原牧跡	東部丘陵地					△				No.60・196　千石・牧ノ内・古屋敷製鉄場

※１　時期区分の◎は竪穴・掘立の居住施設が 10 以上。○は居住施設あり。△は居住施設以外の遺構または遺物あり。
※２　参考資料の No. は松本市文化財調査報告の番号。

ており、中山丘陵に鍬形沢や不動坂といった窯が築かれたのもその一環と考えられる。一方、低地の中心的な集落を形成していた本遺跡や出川西遺跡では、古墳時代末期から奈良時代にかけて集落規模がいったん縮小するが、平安時代には南部低地遺跡の伸張に伴って本遺跡南部にも居住域が広がる。

中世　平安後期から中世の遺跡は、東部丘陵地で減少するものの、他の地域ではおおむね古代から継続している。ただ、集落規模は縮小傾向が著しく、本遺跡から出川遺跡にかけては、数軒の竪穴建物跡と墓跡が検出されているに過ぎない。また、高畑遺跡や小原遺跡など古代から継続する遺跡内で居住域が移動しているケースがある。一方、林域址に付随する林山腰遺跡など新たに開発された集落もあり、今後、井川城址や埴原城址周辺、小屋遺跡や村井遺跡などでも中世の集落跡が発見される可能性はある。

近世　近世の遺跡は全体に減少している。一覧表に掲載した遺跡は、中世以前のそれとたまたま複合していたため確認できたものだが、前時代から継続している遺跡は少ない。幕藩体制の強化に伴い、新たな村落が形成されるとともに固定化し、近代に入っても基本的にはそのまま引き継がれていった。

2　歴史的変遷

南北に並ぶ出川・出川西・出川南・平田北遺跡一帯の土地利用にかかる歴史的な変遷を概観してみる。

本遺跡を含む沖積低地は、先史時代を通じて田川・奈良井川系統の氾濫に洗われ、集落の形成に不向きな場所だった。低地に集落が進出したのは、約2,000年前の弥生中期である。出川西遺跡から本遺跡東側にかけて集落が形成され、古墳時代前期まで継続する。この間に、本遺跡西側を可耕地とする開発が進み、弘法山古墳に葬られた「松本平」の盟主を支えていたと考えられる。同前期から中期に築造された石貼りの方形遺構や平田里古墳群の被葬者は、一帯の開発者の子孫一族だったのではなかろうか。古墳時代後期にはこれらの墳墓を中心に、本遺跡から出川西遺跡全域に集落が展開し、ひとつのピークを迎える。

律令期になると、平田北遺跡以南の沖積低地が開発され大規模な集落が形成される。一方、本遺跡一帯の竪穴建物数は前時代に比べて減少し、特に、本遺跡北側から出川西・出川遺跡辺りの集落は衰退していった。中世には、小原遺跡や高畑遺跡など南部沖積低地の集落が継続するのに加えて、「捧庄」の中心地と目される井川城周辺（出川西遺跡より北側の沖積低地）でも開発が進んだ。古代から中世にかけて新興した開発地に南北を挟まれた本遺跡一帯では、田川左岸の自然堤防上に竪穴建物跡や墓跡、井戸跡がみられる程度で、JR篠ノ井線西側の土地利用を示す痕跡は確認できていない。ただ、1651（慶安4）年の『筑摩郡出川町検地帳』によると、「原口」「かふつた」「神めい」「大明神」「ひったり塚」「ほけとう」「のみそ志り」は「畑分」と記されているため、JR篠ノ井線の西側一帯はおそらく中世以来、畑地として利用されてきたのではないか。このころ、自然堤防上の集落に沿って北国脇往還が整備され、一里塚が設けられた[8]。さらに、「出川町」は間宿となり、一時は口留番所も置かれた。1879（大正2）年発行の2万5千分の1地形図によると、北国西街道沿いに「出川」の家並がみえるばかりで、一帯はことごとく桑畑となっている。近代養蚕業の盛行に伴い、畑地が桑園に転換されたのであろう。

東の街道沿いに集落が並び、西に畑地が広がる、のどかな農村景観が一変したのは1940年代である。製糸・養蚕業の没落と太平洋戦争の勃発により、桑園に軍需産業を担う疎開工場が進出し、南松本駅が開業した。今回の調査地点にあたる出川双葉線は、1942年頃、宮田製作所の創設に伴って整備されたらしい。戦後の1959（昭和34）年、県道寺村南松本停車場線に認定された。1960年代に入ると、一部に工場は残るものの、公営団地が立ち並び郊外型の商業施設も進出して、現在の街並みへと変貌した。

8　明治期には北国西街道と呼ばれ、1919（大正8）年に県道長野飯田線、1952年国道19号、1963年県道平田新橋線と変遷する。

第３章　調査の方法と成果

第１節　発掘調査の方法

本調査の測地基準は、工事設計が旧測地系（日本測地系、Tokyo Ⅷ系）で行われているため、市教委と埋文センターでも旧測地系を用いた。なお、市教委と埋文センターとでは、調査方法（遺構名称、調査グリッドの設定、調査区割りなど）に多少の違いがあるので、その点に留意して、以下発掘調査の方法を説明する。

１　市教委の調査（23 次調査）

市教委は、埋文センターの遺跡記号は使用していない。図面や写真には「出川南遺跡 23 次」、遺物袋には「出ガワ南 23」と記載している。

⑴　遺構名称

竪穴建物跡　市教委は、炉やカマド、柱穴の有無とは関わりなく復元した床の長軸が 3m 以上のものを竪穴住居址（「住」）と呼称してきたが、本報告書では、『発掘調査の手引き-集落遺跡発掘編-』（文化庁 2010）に従い、「竪穴建物跡」で統一した。ただし、遺構の実測原図、遺物注記、写真などの表記は、竪穴住居址（あるいは「住」）となっている。竪穴建物跡の番号については、市教委では、出川南遺跡内において第１次調査から連番で付されている。注記等の略称は「○住」、住居に伴う柱穴等の小土坑は「Pit ○」としている。

⑵　遺構番号

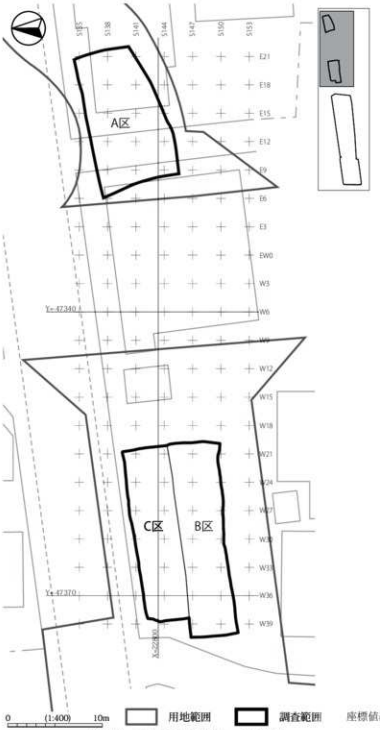
竪穴建物跡とそれ以外の遺構について、それぞれ異なるルールで付した。竪穴建物跡は、遺跡ごと調査次順に連番とするルールがある。一方、それ以外の遺構はルールがないため、発掘作業時は市教委が実施した 23 次と埋文センターが行った 24・27・28 次で遺構ごと別々に番号を付している。

⑶　調査グリッドの設定と呼称

市教委では、今回の調査原因となった出川双葉線改良工事のほかに、小池平田線建設工事に伴う調査を平成 22 年度から進めていた（出川南遺跡 17・19・22・26 次、出川西遺跡 9・11 次）。このため、市教委ではこれらの調査を一体化して進められるよう、平成 22 年度調査（17 次）の際に設定された任意の基準点（X：22,943.405、Y：-47,334.000）を原点とし、トータルステーション（トプコン社 ES シリーズ）を用いて、3 × 3m グリッドの基準釘を打設している。各グリッド北西隅の基準釘の名称が、グリッドの名称となる。

各グリッドは原点からの距離をメートル単位で示し、東西方向（EW）・南北方向（NS）を組み合わせて呼称した（第５図）。なお、市教委ではセンターの大地区（大グリッド）・中地区（中グリッド）に相当する個別のグリッドを統括した大区画を、設定しない。ベンチマーク（標高 595.000m）は 17 次と同じものを使用している。

遺物などを単点で取り上げる場合も、基準点からの相対的な位置（南北へ何 m、東西に何 m）を測量し（第６図）、簡易遣り方測量（ベンチマークをもとに設定したレベルの眼高からの距離を測定する方法）で高さを記録する。



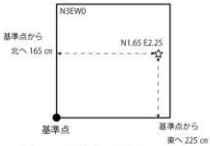
第５図　市教委によるグリッド設定図

⑷　調査上の区割り

小池平田線との交差点より東をＡ区、西をＢ・Ｃ区とした。西工区は、排土処理の都合から南北に分割して南をＢ区、北をＣ区と細分した。

⑸　遺構の調査

調査面は２面設定し、遺構検出した。それぞれ第１面はⅣ層（赤みがかった黒褐色シルト質土）の上面、第２面はⅦ層（暗灰黄色シルト質土）の上面である。



第６図　市教委の単点位置呼称法

複数の遺構が重複している場合、本来は新しい遺構を完掘した後に、古い遺構を調査することが望ましいが、本調査では期間的な制約があり、古い遺構の埋土の新しい遺構の縁にかかる部分だけを残して、古い遺構も新しい遺構と同時に掘り下げた。両者の全景写真を撮影した後に掘り残した箇所の調査を行っている。

竪穴建物跡では硬化面が確認できなかったため、地山を検出するまで掘り下げて柱穴等の施設を確認している。

遺物はセクションポイント（遺構の土層断面図の測量基準点）を結んだ線で竪穴建物跡の中を４分割または２分割し、北東、南東、南西、北西で取り上げたが、出土地点の記録が必要なものは遺構ごとに遺物番号を付けて取り上げた。遺構に属さない遺物は、調査区（グリッド）ごとに一括して取り上げた。

(6)　遺構の記録

遺構の測量は、前記の測量基準釘による簡易遣り方測量を基本とした。使用した方眼紙は、A2サイズ図面用紙に1cm方眼を印刷したものを使用している。この用紙をもとに割付平面図、必要に応じて個別遺構図、断面図を記録した。縮尺は1/20を基本とし、必要に応じて詳細な遺物出土状況等を記録する場合など1/10の縮尺で図化した。

写真は工事現場用コンパクトデジタルカメラ（リコー Caplio500G wide 1/1.8サイズ813万画素）を主として用い、竪穴建物跡や全景写真など重要と判断した撮影対象には、35mmフィルムカメラ（ニコンFM10）を用いてモノクロネガフィルム（富士フィルム社ネオパンアクロス100）とカラーリバーサルフィルム（フジクローム100）にて撮影を行った。写真の現像と焼き付けは専門業者に委託した。デジタル写真データの保存形式は、JPEGのみである。

土層注記は、独自の分類基準『市教委土層説明表』を採用し（表16）、土色は土色帖で補足した。これは、17次調査を実施する過程で、類似した土壌の色調・質・含有物を分類して表したものである。これらは、本格整理作業の段階で以下のように変換したが、細分が不可能な内容については項目内容をそのまま記載している。

上記の表に基づき土層注記は、土色、土質、しまりの有無、混入物と混入の割合の順で、以下のように略されて、原因に記入している。

例）7A ア①ａ③ｂ④ｃ

注記：	暗褐色	シルト質	しまりあり	炭化物粒・塊 10％以下	砂粒 11 ～ 20％	礫 21％以上
記号：	7	A	ア	①ａ	③ｂ	④ｃ

表16　市教委土層説明表

記号	土色名・性格	記号	土色名・性格	記号	混入物	記号	混入物
1	旧耕作土・かく乱	16	黄灰色	①	炭化物粒・塊	⑯	黄灰土粒・塊
2	鉄・マンガン等集積	17	暗黄灰色	②	鉄・マンガン	⑰	暗黄灰土粒・塊
3	暗薬排水遺構（現代）	18	茶褐色	③	砂粒	⑱	茶褐土粒・塊
4	砂礫層（洪水性堆積）	19	灰オリーブ色	④	礫	⑲	灰オリーブ土粒・塊
5	焼土	20	赤褐色	⑤	焼土粒・塊	⑳	赤褐土粒・塊
6	褐色	21	黄橙色	⑥	褐色土粒・塊	㉑	黄橙土粒・塊
7	暗褐色			⑦	暗褐土粒・塊	記号	量
8	明褐色	記号	土性	⑧	明褐土粒・塊	a	10%以下
9	黄褐色	A	シルト質	⑨	黄褐土粒・塊	b	11～20%
10	黒褐色	B	粘質	⑩	黒褐土粒・塊	c	21%以上
11	明黄褐色	C	砂質	⑪	明黄褐土粒・塊	記号	埋土の状況
12	暗黄褐色			⑫	暗黄褐土粒・塊	なし	自然堆積
13	灰色	記号	しまりの有無	⑬	灰土粒・塊	N	自然堆積？
14	灰褐色	ア	あり	⑭	灰褐土粒・塊	A	人為堆積
15	灰黄褐色	イ	なし	⑮	灰黄褐土粒・塊	P	柱痕状堆積

2　埋文センターの調査（24・27・28次調査）

埋文センターの調査は、『遺跡調査の方針と手順』（埋文センター2013、以下『方針と手順』）に基本的には従って実施したが、24次を開始した時点では、報告書作成に至る本格整理をいずれの組織で行うか未定であったため、先行して行われた市教委の調査方法にも配慮した。

(1)　遺跡名称と遺跡記号

遺跡名称と遺跡記号は、以下の通りである。

出川南遺跡（いでがわみなみいせき）

遺跡記号（EIM）

埋文センターでは、記録の便宜を図るためアルファベット3文字による遺跡記号を使用している。1文字目は長野県を10分割した地区記号で、松本市、塩尻市、安曇野市、東筑摩郡を示す「E」、2文字目と3文字目は遺跡名のローマ字表記「**I**DEGAWA　**M**INAMI」から頭文字の2文字を選択した。さらに、前述のように発掘作業と整理作業を行う組織が別になることが想定されていたので、発掘年次が注記などからわかることが望ましいと考え、アルファベットの後に調査次数の数字2ケタを追加した。したがって、埋文センターで調査した分については、平成26年度24次はEIM24、平成27年度27次はEIM27、平成28年度28次はEIM28となる。

(2)　遺構名称・番号

埋文センターでは通常遺構記号を使用しているが、市教委の記録との整合性を図るため、今回の調査では一切用いていない。

竪穴建物跡　床の長軸が3m以上のもの。発掘作業段階では、市教委の慣例に従って「竪穴住居跡」（略称は「住」）とし実測原図もそのように記載しているが、本報告書では「竪穴建物跡」に統一した。

なお、この点も既述したが、竪穴建物跡（住居跡）については出川南遺跡内において1次からすべて連番が使用されており、埋文センターで調査した竪穴建物跡もこれに準じた。また、24次と同時に25・26次が市教委によって行われており、遺構番号が重複しないよう調査開始時に調整を行っている。

竪穴状遺構　一辺2m以上、3m未満の方形または円形遺構を竪穴状遺構と呼称した。竪穴建物跡より規模が小さく土坑よりは規模が大きい。注記記号は「◯竪」である。

土坑・ピット　市教委による17次以後の調査では、直径50cm以上の掘り込みを「土坑」、50cm未満

を「ピット」としているので、本書でもこれに従った。注記記号はそれぞれ「○土」、「P ○」である。

掘立柱建物跡　ピットが方形区画に配置されている遺構。注記記号は「○建」である。

溝跡　付属施設の存在、断面形状や埋土等から人為掘削の可能性が高いと考えられる帯状の落ち込み。市教委では、人為的な掘り込みの可能性が高いものを「溝跡」としているので、本書もこれに従っている。それ以外の自然の営為によって形成されたと考えられる帯状の落ち込みを「流路」としている。

(3) 調査グリッドの設定と呼称

市教委の3×3mグリッドを設定する方法に準じた。17次調査で使用したいくつかの測量点のうち、最近傍にある測量基準点が残存していたので、そこから見通せる箇所のうち国家座標の小数点以下が0で、整数が3で割りきれる座標を任意に選択して基準点とした。測量業者に委託し、グリッド設定、杭打ち、基準点移設を実施した。

24次開始時点では、それ以後の調査主体が市教委と埋文センターのいずれになるか決定していなかったため、以後の調査の中長期的な利便性までは考慮することが難しく、X：22,800、Y：-47,460（市教委のグリッド呼称標記、S：143.405、W：126.000）を北西コーナーとして、24次範囲のみが収まるように、30×30mグリッドの大グリッドを設定した。

グリッドは24次の西からⅠ～Ⅲ区に区分し、それぞれを東西南北に10分割して東西方向を2桁のアラビア数字、南北方向にアルファベットで振り分け、その3文字を組み合わせてグリッドを呼称した（例：Ⅰ E05）。なおベンチマークもK-4を利用し、測量業者に委託して調査区内に移設した。K-4の標高は595.276m、移設したベンチマークは595.000mである。

その後24次の西側で27・28次を行うこととなり、Ⅰ区の西にⅣ区を設定した（第7図）。ただし、27次は面積狭小で調査期間が短かったため、調査区をほぼ中央で南北に分割する任意の基準線を設定して3×3mグリッドを設け、最終的にグリッドを測量し直して、座標値を与えることによって、24次の測量成果と合成した。28次では、調査当初から、国家座標に載っている3×3mグリッドを設定している。なお、ベンチマークは27・28次の西側に隣接する道路上にある街区多角点補助点6A468を使用した。標高は595.474mである。

最終的に、市教委が実施した23次調査成果も本報告書で報告することになったため、市教委が測量した段階では設定していなかった30×30mの大グリッドを、整理段階で便宜上設定した。

(4) 調査区上の区割り

24次では、調査区内を東西に1区と2区に分けている。27・28次では調査面積が狭小であったため、工区分けは行っていない。

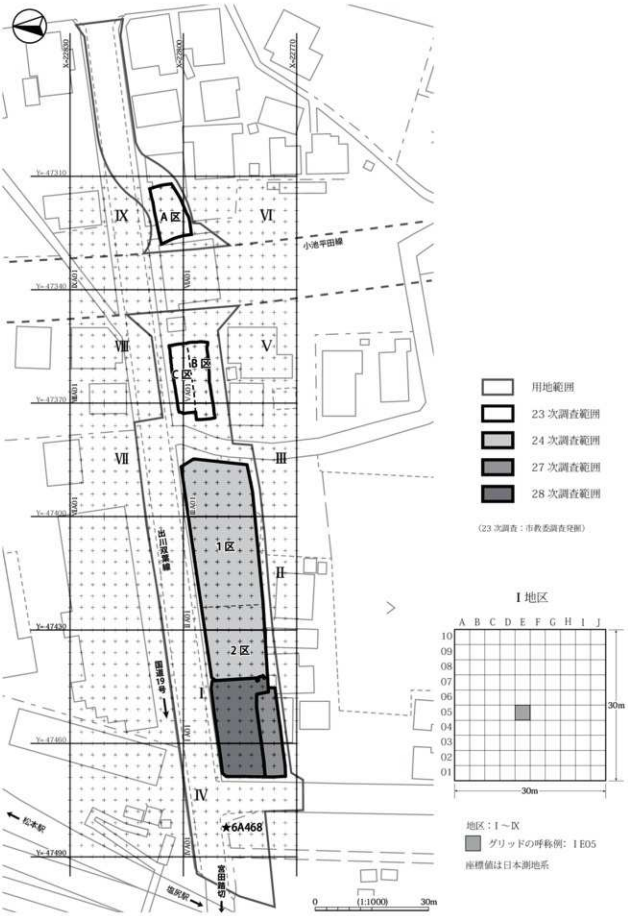
(5) 遺構の調査

遺構検出は以下の2面で行った。第1面はⅣ層（黒褐色シルト質土）の上面、第2面はⅦ層（暗灰黄色シルト質土）の上面である。遺構の掘削や遺物の取り上げ方法については、市教委の調査方法に準じた。

(6) 遺構の記録

遺構の測量は、市教委と同様の測量基準釘による簡易遣り方測量を基本とした。

土層注記は、24次では通常埋文センターで行っているもののほかに、市教委が使用していた土層説明表に準拠して変換したものも作成した。27・28次では、市教委の土層説明表（表16）を使用していない。



第７図　埋文センターによるグリッド設定図

遺構の写真撮影は、記録保存には原則、中判カメラ（マミヤ 67 Ⅱ）を用いてモノクロネガフィルム（ネオパンアクロス 100）とカラーリバーサルフィルム（フジクローム 100F）で撮影し、作業経過等の記録には一眼デジタルカメラ（ペンタックス K30　APS-C サイズ 1628 万画素）も用いている。デジタル写真データは、JPEG と RAW の２形式で保存した。

さらに 24・27 次では、市教委が報告書を作成する場合でも対応できるように、市教委の調査で用いられている 35mm フィルムカメラ（ニコン F3）のモノクロネガフィルム（ネオパンアクロス 100）とカラーリバーサルフィルム（フジクローム 100）による撮影も行った。しかし、28 次では、発掘作業開始前に埋文センターが報告書作成を行うことが決定したため、中判カメラおよび一眼デジタルカメラで撮影を行い、35mm フィルムカメラは使用しなかった。

３　整理等作業の方法

⑴　基礎整理作業

遺物の整理

実施した作業は、水洗、注記、取り上げ遺物台帳作成である。

現場で取り上げた遺物は土器ブラシで水洗後、注記マシンによる注記を行い、取り上げ袋ごとに台帳登録した。土器は 1cm 角程度以下の微少な資料を除き、すべて注記を行った。遺跡名は「出ガワ」の後に調査次数を加えたものとし、出土地点または層位を以下の略号を用いて注記した。

表：表土、検：検出、カク：かく乱、排：排土

金属製品については、取り上げ後にアルミナパウダーを使用したクリーニング、アルコール洗浄を行い、脱酸素剤を封入してパウチで閉じた。その後実測図を作成するため開封したが、残存状態が比較的良好であったことから樹脂含浸は行わず、作業終了後に再び脱酸素剤を封入してパウチで閉じるにとどめた。また、脆弱遺物台帳を作成し、処理方法および処理日を入力した。

図面の整理

現場で作成した図面には、手測図と測量会社に委託したデジタル図面の２種類があるが、１枚ずつ図面番号を付し、図面台帳の作成を行った。手測図に関しては平面・断面図の照合と二次原図の作成、土層注記などの記入漏れの確認作業を行った。

デジタル図面は市教委で実施した 23 次では作成されず、埋文センター調査の 24・27・28 次のみである。埋文センターで調査した地区の図面は、測量会社を通じて遺構線等の整理を行い、平成 28 年度は前年度および前々年度の平面図を合わせて調査区の全体図を作成した。また平成 28 年度は、地図の測地系を確認するため、日本測地系および世界測地系グリッドを重ねた図を作成した。

そのほか、竪穴建物跡など主要遺構については所見カードを作成し、市教委は埋文センターへの調査引き継ぎのため、土層などの所見を作成している。

写真記録の整理

市教委と埋文センターで整理方法が異なるため、市教委の整理方法に準拠した。35mm および６×７フィルムはスリーブ現像の後、アルバムに収納した。デジタル写真データは、市教委で調査したものについては、すべて RIMG で始まる数字４桁で自動記録されるように設定し、さらに撮影内容に応じて追加リネームを行った。リネーム内容は、調査区、調査面、撮影対象、方向および日付を記入した。写真ファイルは調査地区・調査面で大別してフォルダに収納し、さらに遺構ごとに分類してフォルダに収納した。したがって、複数の区にまたがる遺構は、それぞれのフォルダに分散して収納してある。また、全景写真、作業風景など遺構写真には含まれないものは、内容に応じてフォルダを作成して収納した。

埋文センターで調査したものについては、撮影したままのデータをフォルダに収納したほか、日付ごとにフォルダを作成し写真データのコピーをとって市教委と同様のリネームを行って格納した。データはハードディスク２台にそれぞれコピーして保存した。これを、JPEG と RAW それぞれに対して行った。また、現場撮影時に記入した撮影台帳は、整理した上でエクセルに入力した。なお、写真データは以下の通りである。

表 17　デジタル写真ナンバー

次	ナンバー
24 次	24J0001 ～ 24J1690
27 次	IGP3484 ～ IGP3507、EIM7875 ～ EIM8451
28 次	IGP0445 ～ IGP1691

(2)　本格整理作業

遺物の整理

竪穴建物跡など主要な遺構を中心に、その周辺グリッドも含めて土器片の接合作業を行った。報告書掲載遺物の選別基準は、実測可能な器種・器形、口縁または底部の部位、直径が判別できるものとしたが、とくに遺構や包含層の時代を判断する上で必要なものについては、この基準を満たさなくても掲載した。選別した土器については遺物管理台帳を作成した上で、接着・補強、復元を行った。未掲載遺物は判別可能であれば器種分類を行い、器種ごとに重量計測を行った上で遺物台帳に記録して袋に戻した。これは、今回の出土遺物が特定器種に偏重している様相が見て取れたため、遺構ごとの器種様相を明らかにするためである。

接合個体についてはセメダイン C を使用して接着した。また、器壁が薄く焼成が甘いものについては、セメダインハイスーパー５を使用した。空隙補填には石膏を使用し、着色も写真撮影時に反射を抑える程度とし、復元部分が明瞭になるようにした。

鉄製品については、23 次調査基礎整理で行った簡易処理を実測図作成のため開封し、図面作成後に再び密封した。

遺物は埋文センターで実測したが、トレース作業は委託業者が行った。トレースはすべてデジタルトレースとした。遺物の写真撮影は、埋文センター写真室にて担当者監督の下、委託業者が行った。カメラは Canon EOS5D Mark Ⅳを使用し、RAW データを現像して TIFF 形式にしたものを印刷に使用した。

遺構図面の整理

市教委と埋文センターでは測量基準線の設定方法が異なっている（第５図）が、埋文センターで報告書をまとめるため、市教委が調査した遺構図も埋文センターのグリッドに合わせた。また、現場段階で 24 次調査のみが入るように設定されたグリッドを今回報告の道路予定地も含め調査区すべてが入るように東側にⅤ・Ⅵ区を設定した。さらに 23 次調査区は 24・27・28 次調査区よりも北ないし東に位置するため、X：22,800 のラインの北側にグリッドⅦ～Ⅸ区を設定した。全体図および個別遺構図に記入されているグリッドは、埋文センターの呼称法で統一されている（第７図）。

図面類は、修正した第２原図を原図と同じ A2 サイズでスキャニングし、JPEG 形式で取り込み、Adobe PhotoshopCC で補正した後、IllustratorCC でトレース作業を行った。また、委託測量図面は PDF および DXF 形式で納入を受け、Illustrator で読み込んだ後にトレースを行った。

第２節　基本層序と検出面

１　基本層序

市教委では、6・11 次および 17・19 次の成果を参考にし、23 次の基本層序を決定している。埋文センターでは、市教委から伝達された成果および 24 次の壁面精査ならびに遺構調査終了後の深掘りなどによって層序の把握と照合に努めた。

基本層序の層名は、市教委ではアラビア数字、埋文センターではローマ数字を使用していたが、混乱を避けるため整理時点でローマ数字に統一した（表 18）。

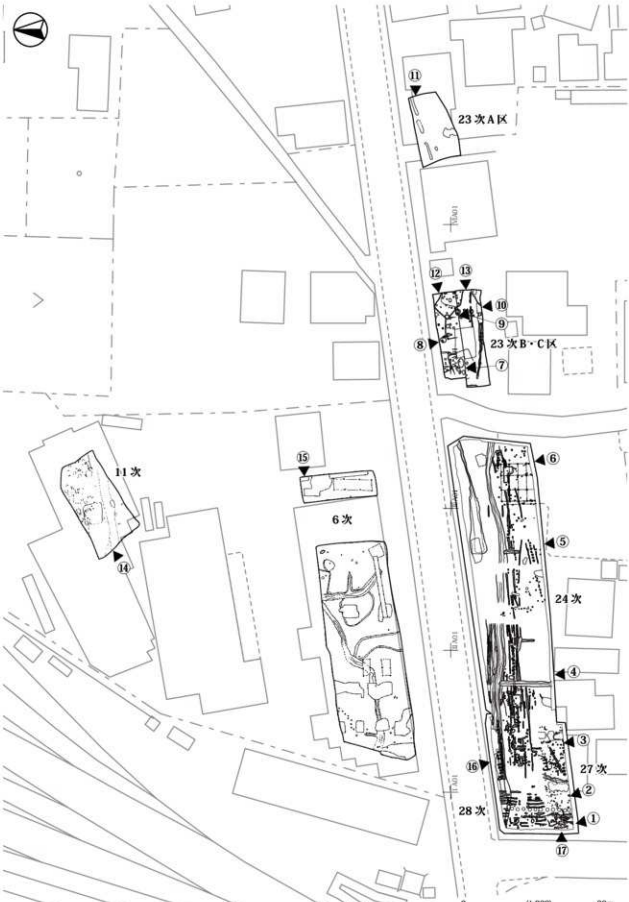
23 次の第１・第２検出面に相当する土層は、24 次でも認められたので、これを基準とした。ただし、23 次あるいは 24 次のみに存在した土層もあるため、土層注記を参考に照合している（第８～ 10 図）。

表 18　基本層序対比表

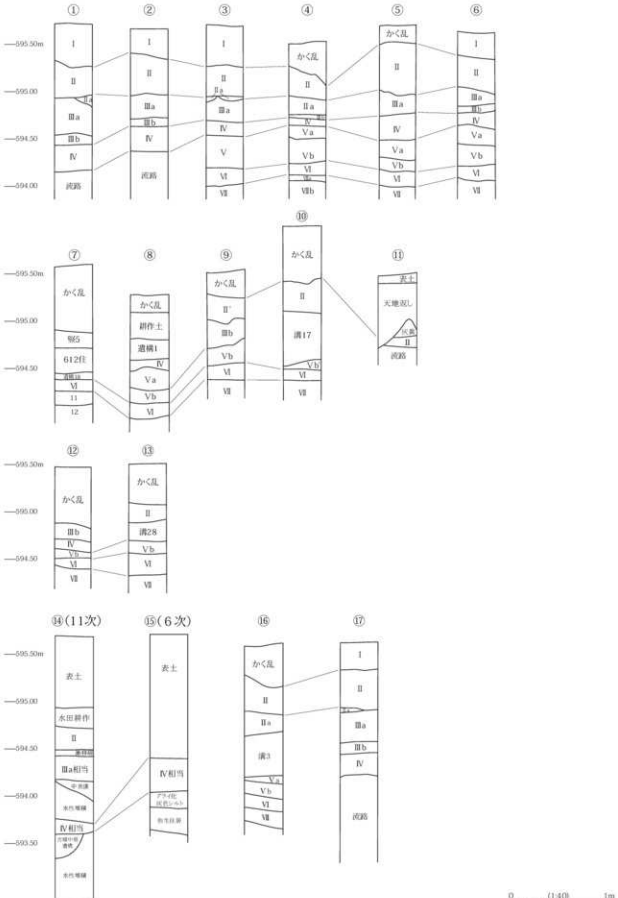
23 次 B 区基本層序		23 次 C 区基本層序		24・27・28 次基本層序		備　考
		1	オリーブ褐色シルト質土			かく乱層
1	黒褐色シルト質土	2	黒褐色シルト質土	Ⅰ	黒褐色砂質土	家屋解体以前の近現代の層
2	灰黄褐色シルト質土	3	黄灰色土シルト質土	Ⅱ	黄褐色砂質土	近世包含層
3	灰黄褐色シルト質土			Ⅱ'		
4	暗灰黄色シルト質土			Ⅲa	暗灰黄色シルト質土（鉄分少）	中世包含層
5	黄灰色シルト質土			Ⅲa'		
6	暗灰黄色シルト質土（鉄分多）	4	暗灰黄色シルト質土（鉄分多）	Ⅲb	黄灰色シルト質土（鉄分多）	古代包含層
7	黒褐色シルト質土	5	黒褐色シルト質土	Ⅳ	黒褐色シルト質土	古墳後期～古代包含層
		6	灰黄褐色シルト質土（砂礫あり）	Ⅴa	暗灰黄褐色砂質土（砂礫あり）	古墳前期～中期包含層
8	黒褐色シルト質土	7	灰黄褐色シルト質土（砂礫なし）	Ⅴb	暗灰黄褐色粘質土（砂礫なし）	
9	黒褐色シルト質土	8	灰黄褐色シルト質土	Ⅵ	灰色シルト質土	弥生～古墳前期包含層
10	暗灰黄色シルト質土	9	黒褐色シルト質土	Ⅶ	暗灰黄色シルト質土	水成層
11	暗灰黄色シルト質土	10	灰黄褐色シルト質土	Ⅷ	礫層	水成層
12	黒褐色砂質土	11	灰黄褐色シルト質土（礫多い）			水成層
13	黄灰色シルト質土	12	黄灰色砂質土			水成層
		13	黄灰色シルト質土			水成層

※二重線は市教委が当初設定した遺構検出面

第８図　基本土層と遺構の関係概念図


⑪
23次AK
B001
⑫
⑬
⑩
⑨
⑧
23次B・CK
⑦
11次
⑭
⑮
6次
⑥
⑤
24次
B003
④
③
⑯
27次
②
28次
①
⑰
0
(1:800)
30m

第９図　基本層序位置図


①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪
⑫
⑬
⑭(11次)
⑮(６次)
⑯
⑰
595.50m
595.00
594.50
594.00
593.50
かく乱
表土
耕作土
遺構1
溝17
溝28
溝3
大地況し
流路
0　(1:40)　1m

第 10 図　基本土層

なお、23次調査区で上記の基本層序とは異なる土層（黒褐～黄灰色シルト質土）が認められた。Ⅱ層土に被覆され、土質や色調等からⅢ層起源の土であるが、中世の遺物を含まず炭化物が混在する。そのため、発掘作業の段階では遺構の可能性があるとして、平面形や人為掘削が想定されうる立ち上がり等の把握に努めたが、いずれも確認できず遺構埋土とは断定できなかった。また包含層とするにも、上述のように層に対応する時期の遺物を含まず、また地点によってバリエーションも認められるため認定できない。これらは、中世の遺構に切られている古墳時代後期から古代の遺構埋土の残りやⅢ層とⅣ層の間の漸移層、または天地返しを伴う耕作等に関連した土層などの可能性がある。そのため、発掘調査段階の土層断面図では、分層できた層に対して「遺構1～18」とした個別層名を付しているが、個別遺構には還元できなかった。基本の土層断面図にも反映していない。

Ⅰ層

表土層。砂礫を含んだしまりのない黒褐色土（10YR3/2）。西側の27・28次ではしまりが強く粘性がない硬化した土で、24次の土層とは少し異っていたが、Ⅰ層として一括した。27・28次では、調査前の建物を解体した痕跡や解体後に敷設した砕石が厚く堆積していたのでかく乱とし、それ以前と判断できたものをⅠ層としている。

Ⅱ層

にぶい黄褐色（10YR4/3）のシルト質または砂質土で、しまりが弱い。土層の変化が激しい出川南遺跡では珍しく広範囲に認められ、中世～近世の堆積土層とみられる。23次の東端で、Ⅱ層の下位で鉄分が多く集積している層（23次基本層序3層）を検出したが、基本土層Ⅱ層の一部と考え、本書ではⅡ'層とした。

27次では、Ⅱ層の下位で南北方向の畝状の遺構を検出したが（写真　27次畝状遺構）、畝と畝の間の落ち込みは多少土壌化しており、特にⅡa層と表記しているが、基本層序対比表には記していない。なお、23次A区ではⅡ層までは確認できたが、それ以下はすべて流路の埋土とみられる砂礫層であった。

23次A区4号流路跡　深掘りトレンチ

27次畝状遺構

Ⅲ層

暗灰黄色（2.5Y5/2）のシルト質土で、24次調査区より西では鉄分が少ないⅢa層と、多く集積するⅢb層の二つに分層される。11次では本層が12世紀の溝を被覆していることから、中世の包含層と考えた。出川南遺跡ではⅡ層と同じく比較的広範囲に認められる。

なお、中世の遺構の多くは、壁面観察では、Ⅲ層の中位から掘り込んでいることが認められるのであるが、遺構埋土と基層であるⅢ層が酷似しているため、Ⅲ層中位で平面形をとらえるのが極めて難しかった。

よって、中世遺構はⅣ層上面まで下げて検出せざるを得なかった。

Ⅳ層

糸状の灰白色ブロックを 20%ほど含む、赤みを帯びた黒褐色～オリーブ褐色（5YR2/2 ～ 2.5Y4/3）のしまり・粘性がやや強いシルト質土。

今回の調査で検出した古墳時代前期の竪穴建物跡の多くは、この層に被覆されている。27 次ではこの層上面で古墳時代後期の長胴甕１個体が破砕されて出土していることから、本層は古墳時代後期～古代に形成されたと考えられる。

色調・しまり・粘性などの土層の特徴がわかりやすく、調査区内に安定的に存在し、上下の層位との峻別も容易であったため、この層を第１検出面としている。

基本土層と土壌サンプル採取位置
（24 次第２検出面調査段階、中段テラスが第１検出面）

Ⅴ層

暗灰黄色（2.5Y4.5/2 ～ 4/2）で、鉄分がやや多く集積し、砂質土のⅤａ層と粘質土のⅤｂ層に分層した。Ⅴａ層は砂礫を含むが、Ⅴｂ層はほとんど含まない。層に包含されている遺物から、弥生時代から古墳時代中期に形成されたものと判断した。

Ⅵ層

黒褐色～灰色（2.5Y3/1.5 ～ 7.5Y4/1）のシルト質土。マンガン 11 ～ 20％程度含む。

Ⅶ層

暗灰黄色（2.5Y4/2）のシルト質土。粘性がやや強く、マンガン 11 ～ 20％程度、斑晶（金雲母か）を 10 ～ 15％程度含む。23次では、遺構覆土と基層の色調が酷似しており遺構平面形の判断が困難となるため、本層上面まで下げて検出を行っている。

Ⅷ層

礫層。径 1 ～ 3cm 程度の円礫主体で、礫にはマンガンが沈着する。礫間には粗砂が混じる。以下重機による掘削可能深度の限度まで、層厚 5 ～ 10cm 未満の薄い黒褐色砂質シルトに径 1cm 未満の小礫が混合する層と、層厚 20cm 以上の礫層が交互に堆積する。

流路

調査区内には人為的に掘削されたものではないと考えられる流路が主に 4 本検出されている。

表 19　流路一覧

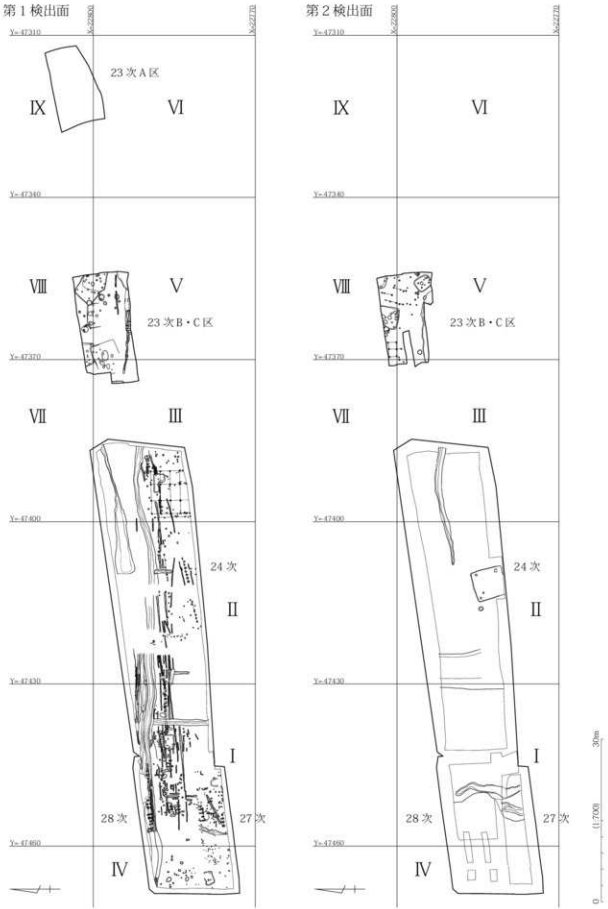
名称	検出層準	調査次・地点	幅（m）	方向	備考
流路 1	Ⅲ b 層上面	24 次	7.0	N0°	Ⅲ a 層とⅢ b 層は酷似しているが、流路 1 はⅢ b 層上面で検出した。よって、Ⅲ a 層とⅢ b 層の形成時期には時間差がある。中世の遺構が、土層断面では、Ⅲ層の中位から掘り込んでいるよう認められることもこのことと対応している。
流路 2	Ⅳ層上面	27・28 次	1.0	N14° E	流路 2 と 3 とはほぼ同一プラン（南北方向）で、ほぼ重なっている。流路 2 はⅢ層、流路 3 はⅣ層に被覆されている。
流路 3	Ⅴ層上面		14.0 以上	N14° E	
流路 4	Ⅱ層下面	23 次 A 区	不明	N20° E	Ⅱ層に被覆されていることから、近世に形成されたとみられる。Ⅲ層以下を切っているが、流路の形成によって除去されているものと考えられる。

2　検出面（第 11 図）

市教委は、17 次の成果をもとにⅣ層上面を第 1 検出面、Ⅶ層上面を第 2 検出面として設定し、前者で古代・中世以後の遺構、後者で古墳時代の遺構の調査を行った。

23 次では、重機で第 1 検出面としたⅣ層上面の想定深度まで掘削し精査したが、遺構の平面プランははっきりしなかった。検出作業を行いつつ面的に下げ部分的にⅤ a 層またはⅤ b 層が残存しているところで、古墳時代前期から中世までの遺構がとらえられた。第 2 検出面では、古墳時代前期の遺構が検出されている。

24・27・28 次では、17 次同様の基本土層が確認されたため、埋文センターでもⅣ層上面を第 1 検出面、Ⅶ層上面を第 2 検出面として設定し、遺構の調査を行った。


第１検出面
第２検出面
Y=47310
Y=47340
Y=47370
Y=47400
Y=47430
Y=47460
Y=47480
X=22800
X=22770
23 次 A 区
23 次 B・C 区
24 次
28 次
27 次
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
Ⅸ
30m
(1:700)
0

第 11 図　遺構全体図

第３節　縄文時代の遺物

１　概要と遺物　(PL5)

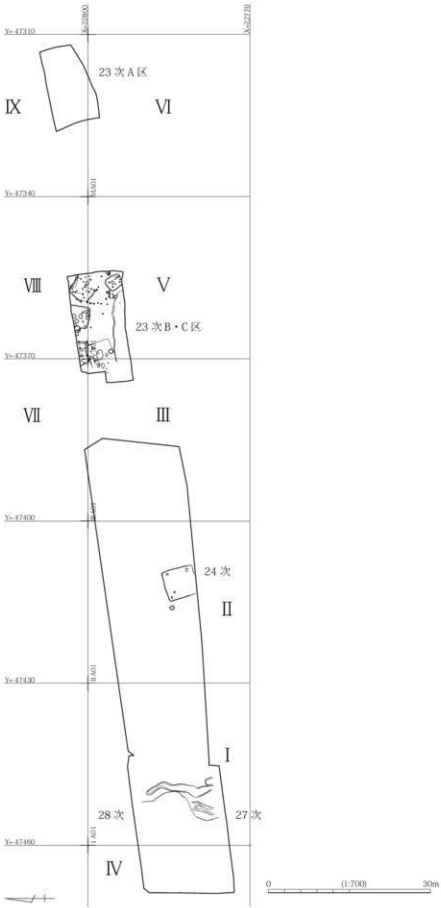
周辺では縄文時代の遺跡が確認されておらず、本調査区においても当該期の遺構を確認していない。しかし、24 次２区の１号流路跡から縄文土器片が１点出土している (1)。小片においても確認できたのはこの１点にとどまる。隆帯が垂下し、半截竹管による半隆起線文を施すことから中期とみられる。器質は硬質だが、全体的に磨滅している。

第４節　弥生・古墳時代の遺構と遺物

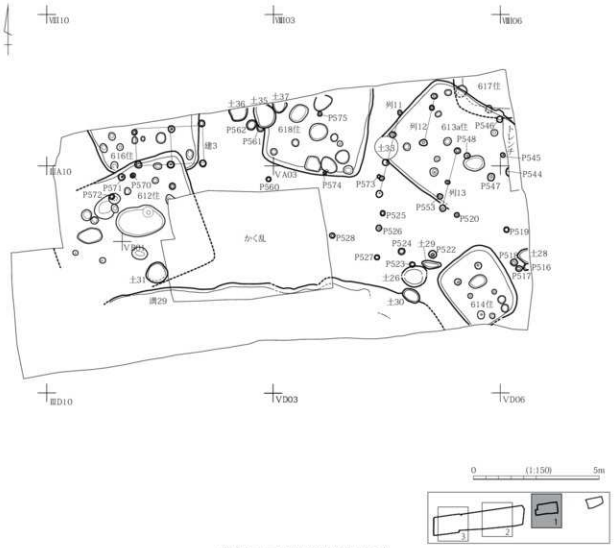
１　概要　(第 12 ～ 15 図)

今回の調査では、弥生時代の遺物は出土したものの、遺構を検出できなかった。

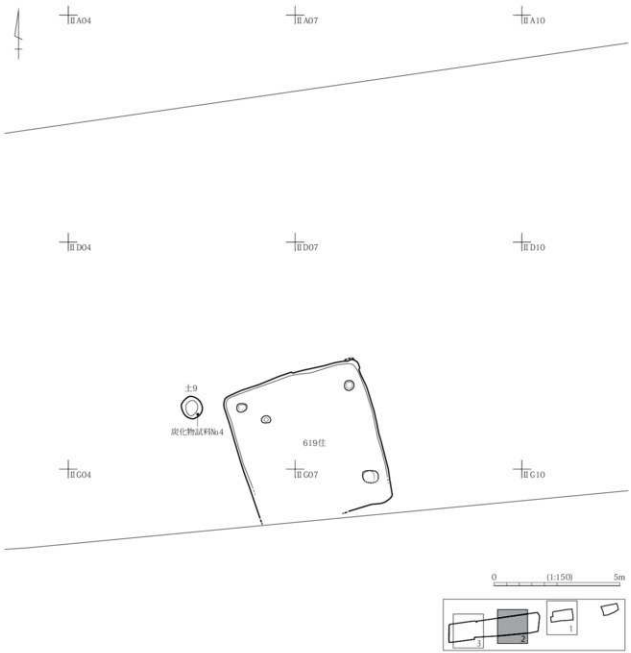
古墳時代の遺構・遺物は、前期に帰属するものが最も多く確認できた。古墳時代前期の遺構は、竪穴建物跡５軒、掘立柱建物跡１棟、ピット列３条がある。古墳時代中期は竪穴建物跡１軒、後期は竪穴状遺構１基がある。そのほか詳細な時期が判別できなかった遺構を含めると、延竪穴建物跡７軒、竪穴状遺構１基、掘立柱建物跡１棟、溝跡３条、土坑 11 基、ピット列３条がある。



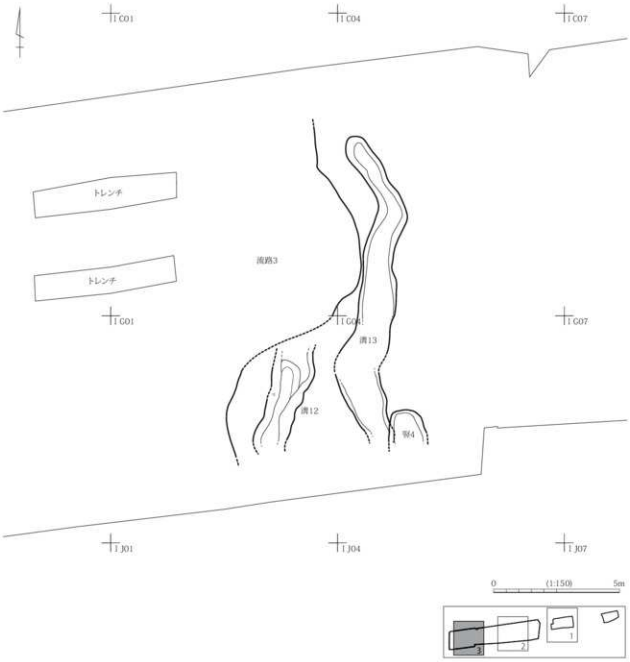
第 12 図　古墳時代遺構全体図



第 13 図　古墳時代遺構配置図(1)



第 14 図　古墳時代遺構配置図(2)



第 15 図　古墳時代遺構配置図(3)

２　遺構

612 号住居跡（竪穴建物跡）（第 16・28 図、PL3）

位置：23 次Ｂ・Ｃ区。Ⅲ Ａ・B10、Ⅴ Ａ・B01、Ⅴ Ａ・B02、Ⅷ J01 グリッド。

調査経過：Ｂ区とＣ区にまたがっており、南北に分割して調査している。Ⅴ層上面付近で、マンガンを多く含む黒褐色土の広がりを検出した。建物跡の西側は遺構埋土の認識が困難で、土層断面観察（土層断面 A–B）では西側の立ち上がりが認められた。また、建物跡南東側にはかく乱が入っていたが、土層断面観察（土層断面 C–D）において南側にも立ち上がりを確認した。

重複関係：平面検出時の土色の違いから 616 号住を切っていると判断した。616 号住より本建物跡の方が新しい。

埋土：黒褐色土を主体とする。

構造：平面長方形か。長軸方向は N68° E、長軸復元長 5.95m、直交軸復元長 4.85m。調査区壁面で確認した深さは 34cm。ピットは 13 基を確認したが、柱穴配置や炉の痕跡ともに確認できない。

建物跡中央の床面から Pit7 とした大型の掘り込みを確認した。Pit7 の北側からは完形の甕（6）が正位の状態で出土し、その口縁部は床面よりやや高い位置にある。Pit7 の埋土は、上方からの掘り込みではないが、建物跡の埋土（2 層）とは異なっており、本建物跡が埋没する前には既に埋められた状態で、甕の口縁部のみが床面から顔を出す形となっていたと考えられる。その用途・機能は明らかでない。

炉・カマド：確認できなかった。

遺物出土状態：埋土中から高坏の脚部（3）、壺または甕の底部（4）が出土している。Pit7 からは正置された甕（6）のほかに、小型鉢（2）・壺（5）が出土した。壺（5）は Pit7 の南側に散乱していた。

時期：出土した遺物から古墳時代前期中葉に位置づけられる。

613a 号住居跡（竪穴建物跡）（第 17 図、PL3）

位置：23 次Ｂ区・Ｃ区。Ⅴ A04・05、Ⅷ I05、Ⅷ J04 ～ 06 グリッド。

調査経過：Ｂ区とＣ区にまたがっており、南北に分割して調査を行った。その後、両者の床面の高さはほぼ同一で、土層断面観察においても重複関係は明確にできなかった。しかし、Ｂ区側とＣ区側とで主軸が大きく異なっていることが分かり、2 遺構が重複しているものと判断し、それぞれを 613a 号住・613b 号住（第 35 図）と呼称した。

調査区壁面で土層断面観察をしたところ 613b 号住はⅢ層に覆われており、Ⅳ層上面から掘り込まれて、古代の遺物が出土していることから、両者は異なる時期の遺構である。

重複関係：上述のように 613b 号住に先行する。また、33 号土坑が 613a 号住の西隅を壊しており、これらの遺構中で本竪穴建物跡が最も古い。

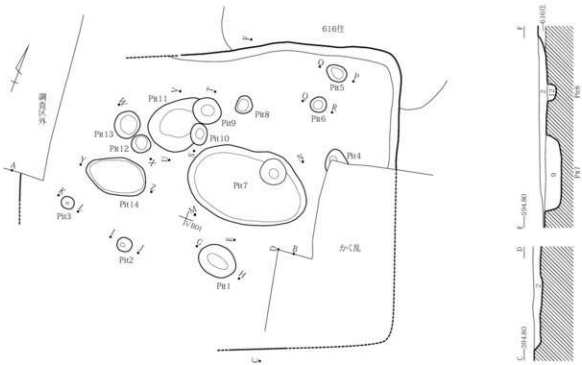
埋土：竪穴と Pit16 を除くピット埋土は、黒褐色土を主体とする。

構造：平面は隅丸長方形、長軸方向は N48° W、長軸長 3.8m 以上、直交軸長 4.15m。検出面からの深さは 30cm。ピットは Pit6・8・15・16 が、その位置から柱穴と想定され、Pit16 の底面は硬化している。Pit12 は、その他のものより大きく貯蔵穴か。

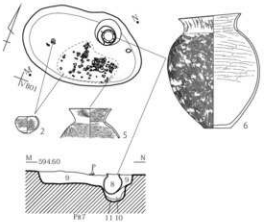
炉・カマド：不明。炉が想定される建物跡中央に Pit13 があるが、その周囲からは焼土・炭化物は検出できなかった。

遺物出土状態：埋土中から古墳時代前期を中心とする土器片が多く出土している。

時期：出土した遺物から古墳時代前期前半に位置づけられる。



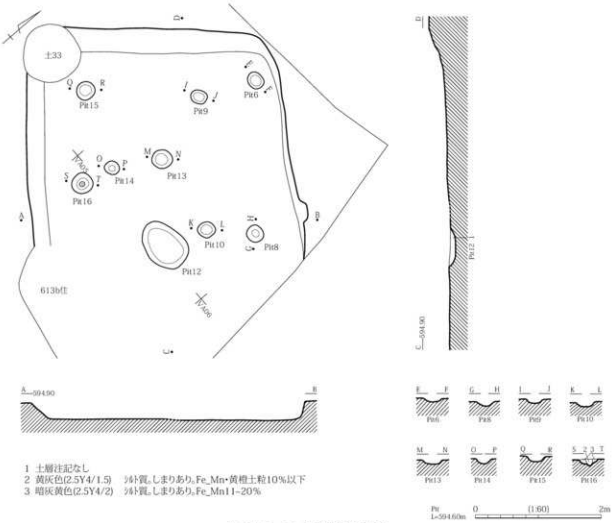
Pit7 遺物出土状態



1 黄灰色(2.5Y 4/1.5)　シルト質。しまりあり。黒褐土粒21%以上。暗褐土粒11~20%
2 黒褐色(2.5Y 3/2.5)　砂質。しまりあり。暗褐土粒11~20%。黄褐土粒10%以下
3 暗黄灰色(2.5Y 4.5/2)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%
4 黒褐色(2.5Y 3/2.5)　砂質。しまりなし。Fe_Mn21%以上。明黄褐土粒10%以下
5 黒褐色(2.5Y 3/2)　砂質。しまりあり。Fe_Mn11~20%
6 黒褐色(2.5Y 3/2.5)　砂質。しまりなし。Fe_Mn21%以上
7 暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%
8 黒褐色(2.5Y 3/2)　砂質。しまりなし。Fe_Mn11~20%
9 黒褐色(2.5Y 3/2)　砂質。しまりなし。Fe_Mn11~20%
10 黒褐色(2.5Y 3/2)　砂質。しまりなし。Fe_Mn10%以下
11 黒褐色(2.5Y 3/2.5)　砂質。しまりなし。Fe_Mn21%以上。黄橙土粒10%以下
12 黒褐色(2.5Y 3/2)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%。黄橙土粒10%以下

0　(1:60)　2m

第16図　612号住居跡遺構図



第 17 図　613a 号住居跡遺構図

614 号住居跡（竪穴建物跡）（第 18 図、PL3）

位置：23 次 B 区。ＶＢ・C05、ＶＢ・C06 グリッド。

調査経過：Ⅶ層上面で、黄灰色土の広がりを確認した。

重複関係：17 号溝の下から検出されており、614 号住は 17 号溝より古い。

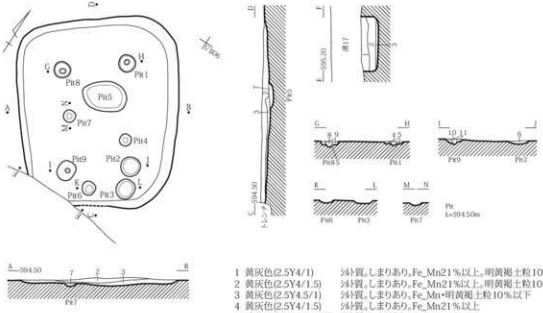
埋土：竪穴埋土は黄灰色土を主体とする。

構造：平面隅丸長方形。長軸方向は N32° W、長軸長 3.40m、直交軸長 2.52m、検出面からの深さ 8cm で、今回調査した竪穴建物跡の中では最も規模が小さい。ピットは 9 基確認した。Pit1・2・8・9 はその配置から主柱穴とみられ、そのうち Pit1･8･9 では柱痕を認めることができた。貯蔵穴は確認できなかった。

炉･カマド：地床炉か。Pit5 は主柱穴の内側にあり、焼土は見られなかったものの、炭化物を確認した。

遺物出土状態：建物跡南西側から土器片が少数出土している。

時期：出土遺物から古墳時代前期に位置づけられる。



1 黄灰色(2.5Y4/1)　炭小質しまりあり。Fe_Mn21%以上。明黄褐土粒10%以下
2 黄灰色(2.5Y4/1.5)　炭小質しまりあり。Fe_Mn21%以上。明黄褐土粒10%以下
3 黄灰色(2.5Y4.5/1)　炭小質しまりあり。Fe_Mn・明黄褐土粒10%以下
4 黄灰色(2.5Y4/1.5)　炭小質しまりあり。Fe_Mn21%以上
5 暗黄灰色(2.5Y4.5/2)　炭小質しまりあり。Fe_Mn11~20%
6 暗灰黄色(2.5Y4/2)　炭小質しまりあり。砂粒21%以上。Fe_Mn11~20%
7 土層注記なし
8 暗灰黄色(2.5Y4/2)　炭小質しまりあり。Fe_Mn21%以上。10mm以下礫10%以下
9 暗黄灰色(2.5Y4.5/2)　炭小質しまりあり。Fe_Mn11~20%。10mm以下礫・黒褐土粒10%以下
10 黄灰色(2.5Y4/1)　炭小質しまりあり。Fe_Mn21%以上。砂粒10%以下
11 黄灰色(2.5Y4/1.5)　炭小質しまりあり。Fe_Mn11~20%

第18図　614号住居跡遺構図

616号住居跡（竪穴建物跡）（第19図、PL3）

位置：23次C区。ⅢA・ⅦJ10、ⅤA・ⅧJ01グリッド。

調査経過：Ⅶ層上面で、暗灰黄色土の広がりを確認した。建物跡の大半は、調査区外へ及ぶ。検出当初は、西壁が不明確であったが、調査区北壁の土層断面観察（土層断面A–B）によって西側の立ち上がりを確認し、その壁面を検出することができた。

重複関係：平面検出時における土色の違いから612号住に切られると判断した。本建物跡の方が古い。

埋土：ほぼ単層で、暗灰黄色土を主体とする。

構造：平面隅丸長方形か。長軸方向はN8°W、長軸長4.32m、直交軸長不明、検出面からの深さ17cm。ピットは8基確認したが、いずれも浅い。床面はほぼ平坦だが、明確な硬化面は確認できなかった。

炉・カマド：不明。

遺物出土状態：遺物は少なく、埋土中より小片が出土したのみである。

時期：612号住に切られることから、古墳時代前期あるいはそれ以前と考えられる。

617号住居跡（竪穴建物跡）（第19図、PL3）

位置：23次C区。ⅧⅠ・J05、ⅧⅠ・J06グリッド。

調査経過：613a号住と重複する位置にあり、613号住調査後に検出面を下げたところ、本建物跡を検出することができた。建物跡の南西隅にあたり大半は調査区外に位置する。

重複関係：613a号住の下で検出されており、617号住→613a号住の順に構築されていると判断した。

埋土：竪穴埋土は、上層には黄灰色土が堆積しているが、下層は黒褐色土を主体とする。一部不整合な土層があり（1・2層）、埋没後に掘り返している可能性がある。

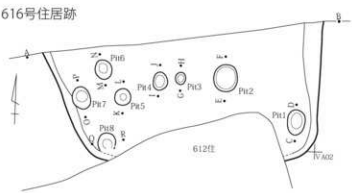
構造：平面隅丸方形か。長軸方向はN0°、長軸残存長1.90m、直交軸残存長1.88m、調査区壁面で確認した深さ27cm。ピットは2基確認した。

炉・カマド：不明。

遺物出土状態：弥生土器片、土師器甕片が出土している。

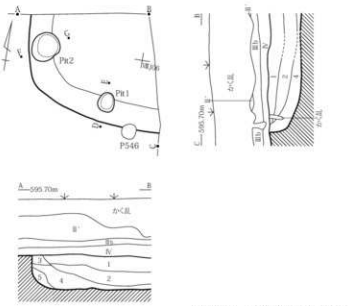
時期：竪穴埋土直上にⅣ層が堆積しており、Ⅴ層を掘り込んで構築していることから古墳時代と考えられる。

616号住居跡



1　暗灰黄色(2.5Y4/2)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%
黄橙土粒・炭化物粒10%以下

617号住居跡



1　黄灰色(2.5Y4/1)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn21%以上
2　黒褐色(2.5Y3/2)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%
3　暗褐色(2.5Y3/2.5)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn21%以上
4　黒褐色(2.5Y3/1)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn21%以上
明黄褐土粒11~20%
5　暗灰黄色(2.5Y4/2)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%
6　暗灰黄色(2.5Y4/2)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn21%以上
7　暗黄灰色(2.5Y4.5/2)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%

0　(1:60)　2m

第19図　616号住居跡・617号住居跡遺構図

618 号住居跡（竪穴建物跡）（第 20 図、PL3）

位置：23 次 C 区。Ⅴ A03・04、Ⅶ J02・03・04 グリッド。

調査経過：Ⅶ層上面で、黒褐色土および黄灰色土の広がりを確認した。遺構は調査区北側へ及んでおり、調査区壁において土層断面観察を行った。

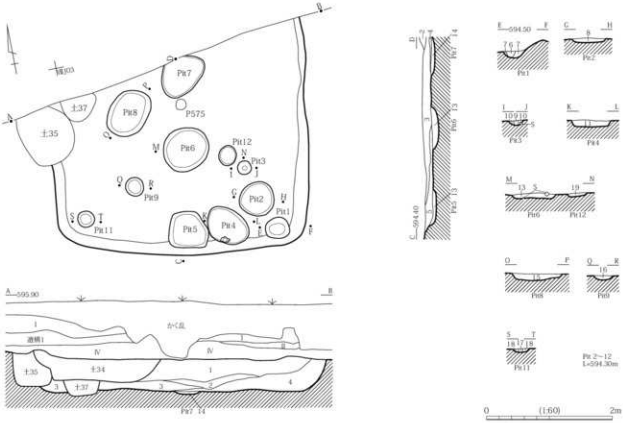
重複関係：34 号、35 号、37 号土坑に切られており、本建物跡はそれらより前に構築されている。

埋土：竪穴埋土上層は黄灰色土が堆積し、それ以下は黒褐色土が主体となる。

構造：平面隅丸長方形か。長軸方向は N10° E、長軸残存長 3.50m、直交軸長 4.25m、検出面からの深さ 20cm。11 基のピットが検出され、Pit1・3・11 は柱痕状の土層が認められたことから柱穴の可能性が高いが、それ以外は掘方の可能性がある。

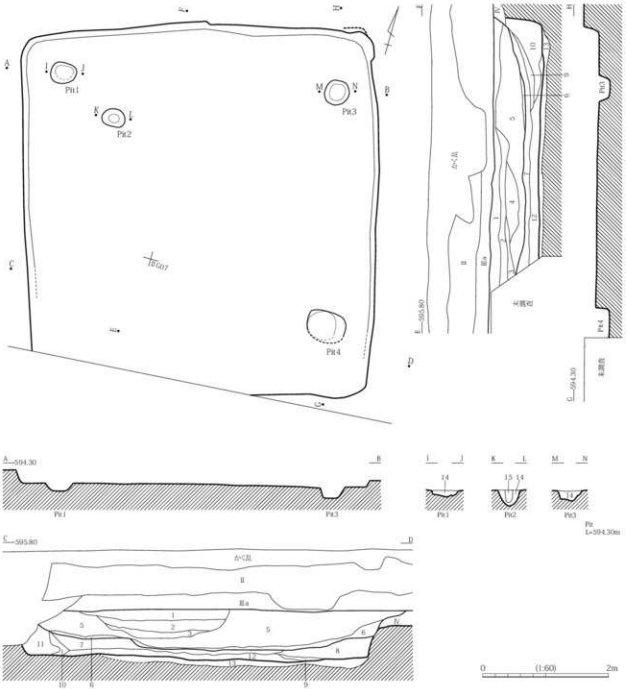
炉・カマド：不明。

遺物出土状態：多くの土器が、遺構中央付近に集中して出土した。しかし、その多くが細片であった。



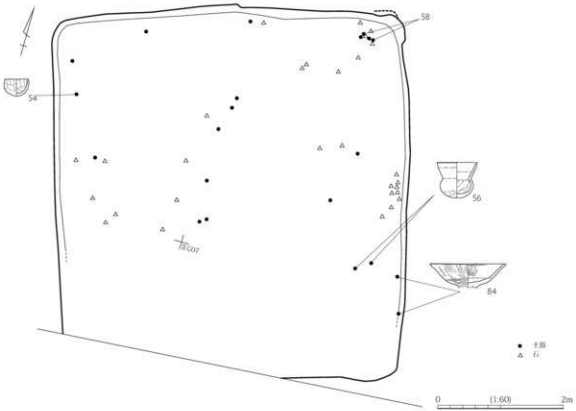
1 黄灰色(2.5Y4.5/1)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn21%以上 10mm以下礫10%以下
2 灰色オリーブ色(5Y5/2)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn21%以上 黒褐土粒10%以下
3 黒褐色(2.5Y3/1.5)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn21%以上
4 黒褐色(10YR5/1)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn21%以上 黄褐土粒・砂粒10%以下
5 黄灰色(2.5Y4/1.5)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20% 黒褐土粒・10mm以下礫10%以下
6 黒褐色(2.5Y3/2)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%
7 暗黄灰色(2.5Y4/1.5)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn10%以下
8 暗黄灰色(2.5Y4/1.5)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn10%以下
9 黒褐色(2.5Y3/2)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%
10 黒褐色(2.5Y3/2)　シルト質。しまりあり Fe_Mn・10mm以下礫10%以下
11 黒褐色(2.5Y3.5/1)　シルト質。しまりあり Fe_Mn・明黄褐土粒・黒褐土粒10%以下
12 黒褐色(2.5Y3/2)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20% 黄灰土粒10%以下
13 黄灰色(2.5Y4/1)　砂質。しまりなし。Fe_Mn・砂粒11~20% 10mm以下礫10%以下。底面礫露出
14 黒褐色(2.5Y3.5/1)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20% 砂粒・黒褐土粒10%以下
15 黄灰色(2.5Y4/1)　砂質。しまりなし。50mm以下礫21%以上 Fe_Mn11~20%。底面礫露出。溶脱
16 灰色(5Y4/1)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn21%以上。溶脱層
17 黄灰色(2.5Y4.5/1)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn21%以上。黒褐土粒10%以下
18 黄灰色(2.5Y4/1)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%
19 黒褐色(2.5Y3/2)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn・10mm以下礫11~20%

第 20 図　618 号住居跡遺構図



1　黒色(7.5YR2/1)　シルト質。しまりあり。Fe20~25%。砂礫・礫(10~20mm亜円礫) 3%。1号流路跡に類似
2　黒色(7.5YR1.7/1)　シルト質。しまりあり。Fe集積20~25%。砂礫・礫(10~20mm亜円礫) 3%
3　暗褐色(7.5YR3/4)　シルト質。しまりあり。砂礫・礫(10~20mm亜円礫)1~3%。Fe集積10%
4　黒褐色(7.5YR3/2)　砂質。しまりなし。川砂(白・黒色粒子砂礫60%。Fe集積10%。1号流路跡に類似
5　砂礫層　砂質。しまりなし。砂粒 10%以下。1~2mm円・亜円礫。4層と同じ砂礫5%
6　黄灰色(2.5Y4/1)　砂質。しまりあり。漸移層。7層主体に5層の礫・砂礫10~40%(上部ほど多い)
7　黄灰色(2.5Y4/1)　粘質。しまりあり。Fe集積15%。斑晶10%。Mn集積5%。Ⅴa層主体にⅣ層主アロック状混
8　褐灰色(5YR4/1)　砂質。しまりなし。砂礫20%。Fe集積15%。斑晶10%。Mn集積5%。7層主体に一部レンズ状に砂礫層混
9　暗灰黄色(2.5Y4/2)　砂質。しまりあり。Fe_Mn集積15%。斑晶10%。砂礫5%。9層よりMn集積(Ⅳ層アロック)少
10　暗灰黄色(2.5Y4/2)　砂質。しまりあり。9層と基本的に同じだがMn集積5%
11　黄灰色(2.5Y4/1)　砂質。しまりあり。Fe集積15%。斑晶10%。砂礫・Mn集積5%。10層が上部の撹乱から影響による滞水で変質したものか
12　褐灰色(10YR4/1)　粘質。しまりあり。Mn集積10%。Fe集積7%。ⅤbまたはⅥⅦ層主体にⅥ層主アロック状混
13　暗灰黄色(2.5Y4/2)　粘質。しまりあり。Fe集積20%。Mn集積10~15%。Ⅶ層主体にⅥ層主アロック状混(12層に比べⅥ層アロック少)
粘性強く、堅い。住居掘方(上部は部分的に堅く床面か)
14　黄灰色(2.5Y4/1)　シルト。細粒砂混。しまりややあり。粘性ややあり。マガン斑多。貼床と同質で見分けにくい。Ⅶ層を掘り込む
15　黒褐色(2.5Y3/1)　シルト。細粒砂多混。しまり弱。粘性ややあり

第 21 図　619 号住居跡遺構図



第 22 図　619 号住居跡遺物出土状態

時期：出土した遺物から古墳時代前期前半に位置づけられる。

619 号住居跡（竪穴建物跡）（第 21 図、PL3）

位置：24 次 1 区。Ⅱ F06・07、Ⅱ G06・07 グリッド。

調査経過：Ⅶ層上面で、黒褐色土の広がりを確認した。民家が近接しており、安全上、建物跡南端部は範囲確認にとどめた。床面直上の埋土 11 層から、炭化物を採取し放射性炭素年代測定を行った結果、4 世紀後半～ 5 世紀半ばという結果が出ている（第 3 章第 7 節）。

重複関係：なし。

埋土：黄灰色土を主体とする竪穴埋土は、おそらく 1 号流路跡とみられる第 1 ～ 6 層によって大きく削平されている。中でも砂礫層（5 層）はⅢ a 層の直下に堆積していることが土層断面観察から分かった。

構造：平面長方形。長軸方向は N17° W、長軸残存長 5.86m、直交軸長 5.63m、深さ 60cm。床面は、地山に類似した暗灰黄色土（12 層）を施して構築している。ピットを 4 基確認したが、そのうち Pit2 では柱痕を確認した。

炉・カマド：不明。

遺物出土状態：遺物はほぼ全体的に散在していたが、一部は北東隅にまとまって出土した状態がみられた。

時期：出土した遺物から古墳時代中期前半に位置づけられ、4 世紀後半～ 5 世紀半ばとされる年代測定結果と矛盾しない。

4 号竪穴状遺構（第 23 図、PL4）

位置：27 次調査区。Ⅰ H04・05 グリッド。

調査経過：当初、かく乱によってそのプランは不明確であったが、須恵器壺（59）が出土したことから再度精査を行ったところ、灰黄褐色土の広がりがみられ、かつ土層断面観察によってⅣ層（古墳時代～古代）を掘り込んでいる立ち上がりを確認することができた。埋土中から採取できた炭化物に対して放射性炭素年代測定を行っている（第 3 章第 7 節）。

重複関係：なし。

埋土：灰黄褐色土を主体とし、その下層からは焼土粒および炭化物をわずかに検出した。

構造：平面形は不整楕円形とみられ、南半分は調査区外にかかる。長軸方位は N15° W、長軸残存長 1.82m、直交軸長 1.54m、深さ 17cm。

遺物出土状態：埋土中から 6 世紀代に位置づけられるほぼ完形の須恵器壺（59）が出土している。

時期：出土遺物は 6 世紀に位置づけられるが、後世に流れ込んだものと判断され、層位からも本遺構はそれ以降のものと考えられる。

3 号掘立柱建物跡（第 24 図、PL4）

位置：23 次 C 区。Ⅴ A01、Ⅷ J01・02 グリッド。

調査経過：Ⅶ層上面で、黄灰色土を埋土とするピットの方形配列を確認した。

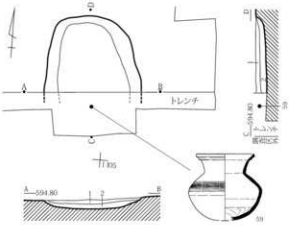
重複関係：なし。

埋土：柱穴掘方埋土は灰色または暗灰黄色土を主体とし、Pit564・565・566・569 には柱痕とみられる黄灰色土を確認した。

構造：Pit563 ～ 566 および 568・569 の 6 基の柱穴によって構成され、Pit565 と 566 を結んだ延長線上に Pit567 がある。現状では東西方向に長軸をもつ建物跡で、N89° E 東西長 2.70m、南北長 1.45m、柱間は東西方向 1.35m を計測する。

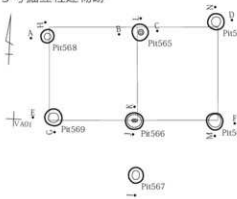
遺物出土状態：Pit565 から土師器片、Pit568 からは土師器甕と思われる破片が各 1 点出土した。

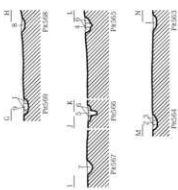
時期：Ⅶ層上面で確認できたことや、埋土の状況から古墳時代前期の可能性が高い。



第 23 図　4 号竪穴状遺構 遺構図

３号掘立柱建物跡





1 暗灰黄色(2.5Y4/2)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%
2 黄灰色(2.5Y4/1)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%。5mm以下礫10%以下
3 黄灰色(2.5Y4.5/1)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%
4 黒褐色(2.5Y3/2)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn10%以下
5 黄灰色(2.5Y4/1)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%
6 灰色(5Y4/1)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn21%以上
7 黄灰色(2.5Y4/1.5)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%。5mm以下礫10%以下
8 黒褐色(2.5Y3/2)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%
9 黄灰色(2.5Y4/1)　シルト質。しまりあり。Fe_Mn10%以下

11・12・13号ピット列

1 暗灰黄色(2.5Y4/2)
シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%
2 黄灰色(2.5Y5/1)
シルト質。しまりあり。Fe_Mn21%以上
3 黄灰色(2.5Y4/1)
シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%
4 灰オリーブ色(5Y4.5/1)
シルト質。しまりあり。Fe_Mn10%以下
5 暗灰黄色(2.5Y4/2)
シルト質。しまりあり。Fe_Mn21%以上
褐色土粒10%以下。
6 黄灰色(2.5Y4/1.5)
シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%
7 黄灰色(2.5Y4.5/1)
シルト質。しまりあり。Fe_Mn10%以下
8 黒褐色(2.5Y3/2)
シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%
9 黒褐色(2.5Y3.5/2)
シルト質。しまりあり。Fe_Mn10%以下
10 黄灰色(2.5Y4.5/1)
シルト質。しまりあり。Fe_Mn21%以上
11 黄灰色(2.5Y4.5/1)
シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%

0　(1:80)　2m

第 24 図　３号掘立柱建物跡、11・12・13 号ピット列遺構図

11・12・13号ピット列（第24図）

位置：23次C区。Ⅴ A04・05、Ⅷ J04・05グリッド。

調査経過：Ⅶ層上面で、黄灰色土主体のピット配列を確認した。検出当初は掘立柱建物跡と考えていたが、南北方向のピットは直線的に並ぶものの、東西方向の配列が不明確であることから、3条のピット列とした。ただしピット列は平行しており、かつ東西に並ぶ配列も一部ではみられるため、これらのピット列は一連のものととらえた。

重複関係：なし。

埋土：ピット埋土は黄灰色土を主体とするが、Pit551・554・557・558では柱痕とみられる暗灰黄色土を確認した。

構造：西側の11号ピット列はPit555・556・557・558・559の5基で構成され、全長は3.30m。中央の12号ピット列はPit551・552・554の3基で構成され、全長は1.90m。東側の13号ピット列はPit549・550・521の3基で構成され、全長は2.37m。なお、ピットの配列方向は、N12～14°E。

遺物出土状態：Pit550・Pit559から土師器片が出土しているが、図示し得るものはない。

時期：Ⅶ層上面で確認され、また古墳時代前期の618号住の長軸方位に近い。

12号溝跡、13号溝跡（第25図）

位置：27・28次区。Ⅰ G03・04、Ⅰ H02・03・04グリッドなど。

調査経過：Ⅶ層中で、暗灰黄色を呈する砂礫混じりのシルト層が南北方向に広がっているのを確認した。2条の溝が確認でき、それぞれ12号溝跡、13号溝跡とした。12号溝跡は、北側（28次調査区）では平面検出および土層断面観察によっても確認できず、3号流路跡に合流もしくは切られたものと推測した。12号溝跡の埋土2層（試料№8）と弥生土器出土地点（試料№9）とでそれぞれ炭化物を採取し、放射性炭素年代測定を行った。

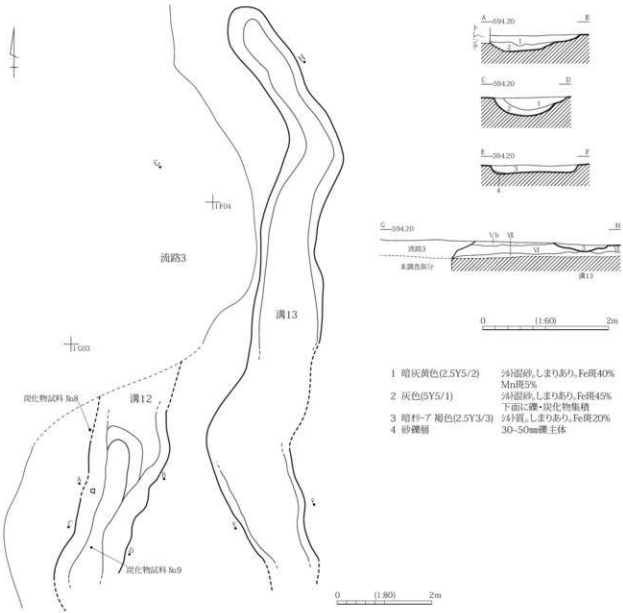
重複関係：12号溝跡は3号流路跡に合流もしくは切られると想定される。

埋土：中砂粒を多く含む暗灰黄色シルトを主体とする。

構造：12号溝跡は最大幅1.70m、検出面からの深さは30cmを計測し、その断面形態は底面が丸いすり鉢状を呈する。13号溝跡は、最大幅1.67m、検出面からの深さは9cmを計測し、断面形態はタライ状を呈する。とくに13号溝跡は、蛇行して走っており、自然流路の可能性もある。

遺物出土状態：12号溝跡から弥生土器小片が出土したが、図示し得るものはなかった。

時期：12号溝はⅥ層の下位、Ⅶ層の上位に位置し、埋土2層採取試料№8で5世紀前半～6世紀半ばの年代値が得られたので、古墳時代中期～後期の可能性がある（第64図）。13号溝は、Ⅵ層の上位、Ⅳ層の下位に位置し、12号溝よりやや新しいと考えられる。



第 25 図　12 号溝跡、13 号溝跡遺構図

29 号溝跡（第 26 図）

位置：23 次 B 区。Ⅲ B10、Ⅴ B01・02・03・04・05 グリッド。

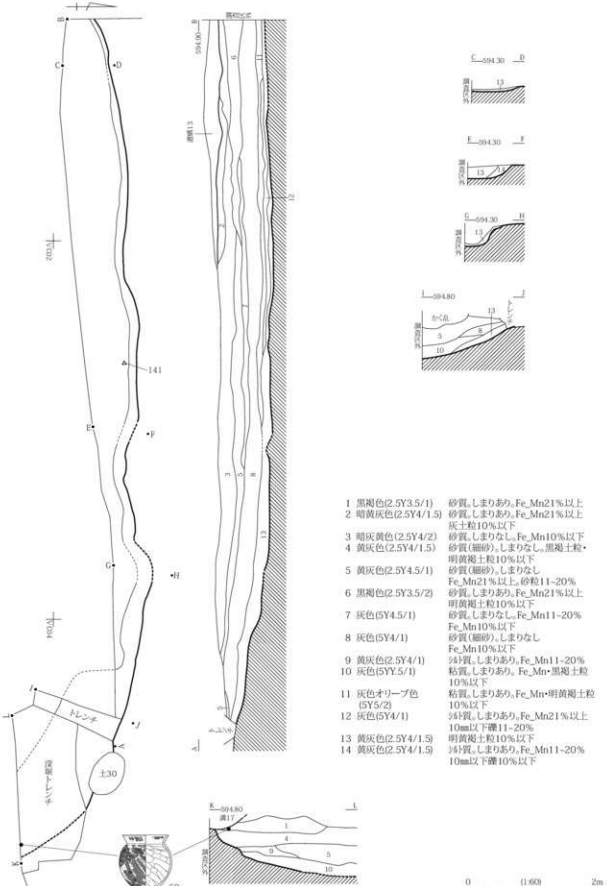
調査経過：Ⅶ層上面において、暗灰黄色砂質土を主体とする溝状のプランが調査区南壁に沿っているのを確認した。発掘段階では、17 次調査（未報告）で方形周溝墓が確認されていることから、その可能性も想定していたが、遺構の大半が調査区外へ及んでいるため本溝跡の性格を確定することはできなかった。

重複関係：30 号土坑および調査区壁面で 17 号溝跡に切られることを確認し、それらより古い。

埋土：埋土の上層は砂質で、中層は細砂粒を多く含む。下層になるとシルト質の埋土が堆積する。

構造：遺構の大半は調査区外へ及んでおり、全形は不明である。確認された規模は、長さ 13.20m、深さ 88cm。東西に走り、東側に至って 614 号住の手前で南方向へ屈曲する。断面形態はタライ状である。

遺物出土状態：溝東端部の埋土上層より土師器甕（60）が出土している。このほか土師器、弥生土器、



1 黒褐色(2.5Y3.5/1)　砂質。しまりあり。Fe_Mn21%以上
2 暗黄灰色(2.5Y4/1.5)　砂質。しまりあり。Fe_Mn21%以上
灰土粒10%以下
3 暗灰黄色(2.5Y4/2)　砂質。しまりなし。Fe_Mn10%以下
4 黄灰色(2.5Y4/1.5)　砂質(細砂)。しまりなし。黒褐土粒・
明黄褐土粒10%以下
5 黄灰色(2.5Y4.5/1)　砂質(細砂)。しまりなし
Fe_Mn21%以上。砂粒11~20%
6 黒褐色(2.5Y3.5/2)　砂質。しまりあり。Fe_Mn21%以上
明黄褐土粒10%以下
7 灰色(5Y4.5/1)　砂質。しまりなし。Fe_Mn11~20%
Fe_Mn10%以下
8 灰色(5Y4/1)　砂質(細砂)。しまりなし
Fe_Mn10%以下
9 黄灰色(2.5Y4/1)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn11~20%
10 灰色(5YY.5/1)　粘質。しまりあり。Fe_Mn・黒褐土粒
10%以下
11 灰色オリーブ色
(5Y5/2)　粘質。しまりあり。Fe_Mn・明黄褐土粒
10%以下
12 灰色(5Y4/1)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn21%以上
10mm以下礫11~20%
13 黄灰色(2.5Y4/1.5)　明黄褐土粒10%以下
14 黄灰色(2.5Y4/1.5)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn11~20%
10mm以下礫10%以下

第 26 図　29 号溝跡遺構図

磨製石斧（141）の小片が出土している。

時期：Ⅶ層上面で確認できたこと、古墳時代前期末～中期に位置づけられる丸底の土師器甕（60）が埋土上層から出土していることから古墳時代中期以前に帰属すると判断した。

31号土坑（第27図）

位置：23次B区。V B01グリッド。

調査経過：V層中で、黄灰色砂質土の円形プランを確認した。

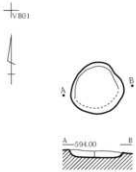
重複関係：なし。

埋土：砂礫混じりの黄灰色砂質土を主体とする。

構造：平面形態は円形を呈し、断面形態はタライ状を呈する。長軸0.86m、短軸0.81m、検出面からの深さ12cm。

遺物出土状態：埋土中より台付甕の台部片（61）が出土している。

時期：埋土が他の遺構とは異なるが、Ⅶ層上面で確認できたことや出土した遺物から古墳時代に帰属すると判断した。



第27図　31号土坑遺構図

3　遺物

出土した遺物は、遺構外に弥生時代後期のものがわずかに出土したが、古墳時代に帰属するものが多くを占める。そのうち古墳時代前期のものは、23次B・C区を中心に24次1区までわたっており、そのなかでも613a号住・618号住から多く出土している。古墳時代中期のものは、24次619号住およびその周辺から出土しており、その分布域は限定されている。古墳時代後期のものは、個体数は多くないが、第23次B・C区から27次地点まで広がっている。

612号住居跡（竪穴建物跡）（第28図、PL5）

出土した土器は多くない。2は無頸の小型品で、底面は突出する平底をなす。5は胎土に長石を多く含み、そのほかのものとは胎土を異にする。外面および口頸部内面は橙色に発色している。6は本建物跡の施設に伴うものである。弥生土器の系統が想定されるもので、口縁端部はやや内湾する。外面はハケメを施した後、口頸部にはナデを行うが、胴部はハケメを残存させる。

613号住居跡（竪穴建物跡）（第28・29図、PL5・6）

出土した土器には甕が多く、その他に小型器台・高坏・壺がみられる。甕には平底の弥生土器の系統をもつもののほかに、台付甕のような弥生土器にはない形態も認められる。7～10は小型器台である。7の器受部はまっすぐ開くもので、端部は面をもつ。8は裾部がやや内湾気味になり、基部外面には横位ミガキがみられ古相の要素をもつ。9の脚部は大きく開かず、細身の形態をなす。

11～13は高坏である。11は有稜高坏（元屋敷系高坏）の可能性がある。12は埦形高坏か。

14～30は台付甕である。14は単口縁で、口縁中位に粘土接合痕が見られる。15～20は受口状口縁を有する。そのうち17は口縁屈曲部にキザミを施すが、その他は無文である。台部と胴部との接合方法をみると（22～27）、台部側面からの粘土積み上げによる胴部成形という点で共通している。しかし、24は台部内面頂部にホゾ状粘土が突出するのに対して、その他は内面を平滑に仕上げている。

31～34は平底甕である。その形態はいずれも弥生土器の系統が想定できるものである。特に31は南信地域に分布する中島式のものとみられる。

35～41は壺で、いずれも小片である。35・36は、輪台状の底部を有する。37・38は口縁端部が肥厚する面をもつもので、37には口縁端面にキザミが施される。39は口縁部がまっすぐ伸びる素口縁で、そ

の焼成および胎土は35に類似し、同一個体の可能性がある。

614号住居跡（竪穴建物跡）（第29図、PL7）

出土した遺物は少量で、土師器甕片、台付甕と思われる小片があり、そのうち甕（42）を図化した。頸部から口縁に向かって長く伸び、口縁部は端部が短く立ち上がることによって受口状を呈する。口縁端面にはキザミを施す。

618号住居跡（竪穴建物跡）（第29図、PL7・8）

出土した土器には甕が多く、その他に壺の小片がみられる。

43～51は甕で、台付甕が多くを占めている。43～46は受口状口縁を有し、そのうち44・45は口縁屈曲部にキザミを施している。47・48・49は単口縁甕である。47・48は口縁中位で粘土付加を行うことによって口縁端部成形しているため、口縁中位がわずかに屈曲する。しかし、その屈曲は水平ではなく不整形であることから屈曲部を成形する意図はないものとみられる。台部と胴部の接合方法をみると（45・47・48・50）、台部側面からの粘土積み上げによる胴部成形という点で共通している。しかし、その台部内面は、平滑に仕上げているもの（45）や、頂部にホゾ状の粘土の突出がわずかにみられるもの（47）のほかに、土器胎土とは異なる砂粒を多く含む粘土を内面頂部に補充しているもの（50）がある。

52の壺は径の大きい底部が突出するもので、弥生土器との関係がうかがえる。53の底部は、輪台を作成しその内側に粘土を補充することによって成形している。底部から胴部への立ち上がり具合は、弥生土器との類似性がみられるものである。

619号住居跡（第30図、PL8）

出土遺物は少なく、高坏・小型坩・鉢がみられ、全形の分かる甕はみられなかった。54はミニチュア土器で、出土したのは1点のみである。55は高坏で、屈折脚高坏と想定される。56は小型坩で、その底部は丸底を呈する。精製土器にみられるようなミガキはない。57は鉢か。底面はヘラ調整による整形を施しており、平滑な丸底はなしていない。内面は黒色処理を施し、一単位が太いミガキを施す。58は台付甕の胴部下端で台部との接合面が残る。胴部外面のハケメの条間は細かく、条痕も浅い。

4号竪穴状遺構（第30図、PL8）

須恵器壺（59）が、埋土中から出土している。口縁部は有段をなし、底部は平滑な丸底を呈する。6世紀に帰属するか。

29号溝跡（第30図、PL8）

甕（60）が溝埋土上層から出土している。底部はやや突出気味だが、丸底を呈する。胴部外面の一部にはヘラケズリが観察され、ケズリによって掻壁（器壁を薄くすること）をはかったののちハケメを施している。古墳時代前期末～中期に帰属する。

31号土坑（第30図、PL8）

台付甕の台部（61）が出土している。台下端部は丸く収めるが、わずかに外方へ突出する。外面には斜位ハケメが残存し、内面はヘラナデにより平滑に仕上げている。古墳時代前期に帰属する。

遺構外（図30・31・32、PL9・10・11）

62～75は弥生土器もしくはその系譜を引くものであり、そのうち62～73は赤彩または櫛描文を有する。赤彩を施すものには、高坏（62・63）や鉢（64・65）がある。鉢のうち64は内面のみに赤彩がなされ、65は内外面ともに赤彩されるが、大部分がはがれ落ちている。66～73は櫛描文を有するもので、66～69は波状文を全面に施す。70は壺で、口縁端部に櫛描波状文を施す。その頸部には櫛描による横線文が施された後に、ヘラ状工具によるスリットが1条引かれる。71は下位に櫛描波状文がみられ、その上位にJ字文状の櫛描文が施される。器壁は薄い。72は櫛描波状文を上半に施した後、その下位に斜位の櫛描文

を横に連続させ、鋸歯状文様にしている。73 は頸部に粗い櫛描波状文を施す。その器面はもろい。74・75 は大型の底部を有し、急角度で立ち上がる胴部の形態から弥生（系）土器の壺と判断される。

76 ～ 90 は土師器の高坏・小型器台であり、76 ～ 83 は古墳時代前期に位置づけられ、84 ～ 90 は古墳時代中期のものが主となる。76 は口縁部小片であるが、口縁端部が内削ぎ状に面取りされており、有稜高坏（元屋敷系高坏）の可能性がある。また 82 も有稜高坏とみられる。78 は脚部が内湾気味で古相の要素をもつ。88・89 は屈折脚系高坏で、84・85・90 も同系統のものである。86 は低脚の高坏である。

91 ～ 117 は土師器の甕であり、古墳時代前期・中期に帰属するものを主とする。91・92 は無文の受口状口縁甕で、いずれも口縁屈曲部からの立ち上がりは短いが、91 は頸部から比較的長く伸びて口縁屈曲部に至る。93 ～ 103 は単口縁甕で、103 の頸部は緩い屈曲をなすが、そのほかはいずれも「く」の字状に屈曲する。93・99 の口縁部は短小である。104 は甕の頸部片で、肩部には条間が粗く、条痕の浅いハケメがみられる。同種のハケメは 613 号住出土の 23 にみられる。103・105 ～ 115 は台部が残存する台付甕もしくはその台部で、そのなかには胴部との接合方法が観察できるものがある。103 は台部が内湾し頸部の屈曲が弱く、古相の要素をもつものである。台部基部が胴部に深く入り込んでおり、幅広な胴部接合面を有する。109・112 の台部内面はナデ調整を施し、その形態は平滑な埦形を呈する。一方、110・111 の台部内面頂部は平坦な面をなしており、台部内面は逆台形を呈する。108・113 は台部内面中央にホゾ状の粘土がみられ、その先端はナデ調整を施している。116・117 は単口縁の小型甕で、116 は丸底、117 は狭小な底部を有する。

118 ～ 128 は壺である。118 は有段口縁を呈するが、119 ～ 123 は素口縁壺と想定される。120 は、ハケメ調整によって頸部屈曲部に粘土を押し寄せることによって微隆帯状の突帯を作出している。125 ～ 127 は、その形態から弥生土器との関係が想定されるものである。

129 ～ 132 は底部片である。129 は輪台状の底部を有する。130 は突出する狭小な底部を有し、胴部は大きく開く。131 の底部中央はわずかに凹む。132 は不整形な丸底で、底部を栓状に粘土で塞いでいる。

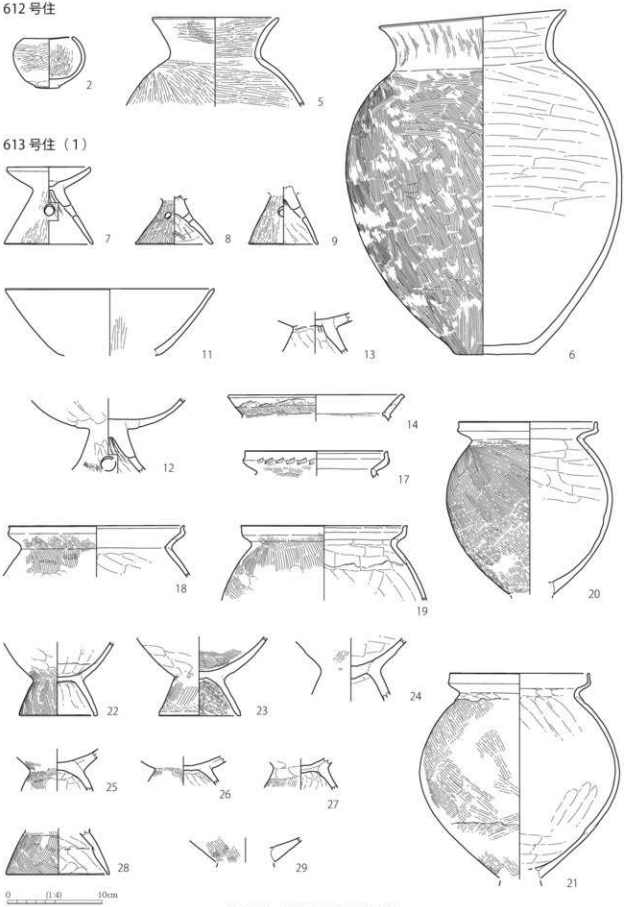
133 ～ 135 は底部に円孔をうがつものである。いずれも底部中央に 1 孔をもつ。古墳時代後期に帰属するか。

136 ～ 140 は古墳時代後期のものである。137 の土師器坏は口縁中位にわずかな屈曲がみられる。138 の土師器甕は、不整な 1 条の粘土帯を頸部から肩部にかけて焼成前に付着させている。外面はヘラ調整で仕上げる。139・140 の須恵器は 6 世紀末に位置づけられる。

141 の磨製石斧は、折損しており刃部のみが残存する。背面にみられる敲打痕は折損による剥離面にまで及んでおり、転用した可能性が指摘される。弥生時代に位置づけられる。

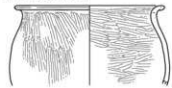
612号住

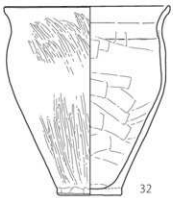
613号住（1）



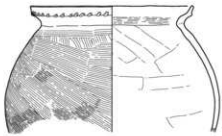
第28図　古墳時代土器実測図(1)

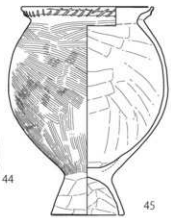
613 号住（2）



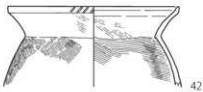


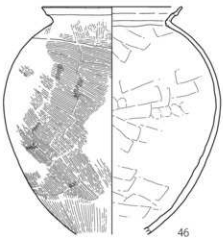
618 号住

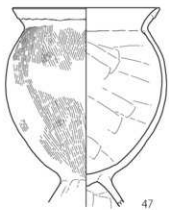


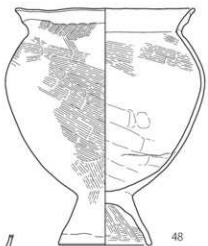


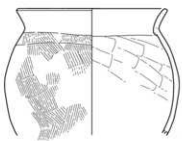
614 号住

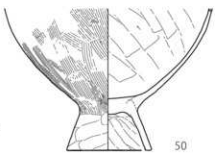


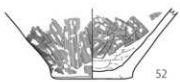






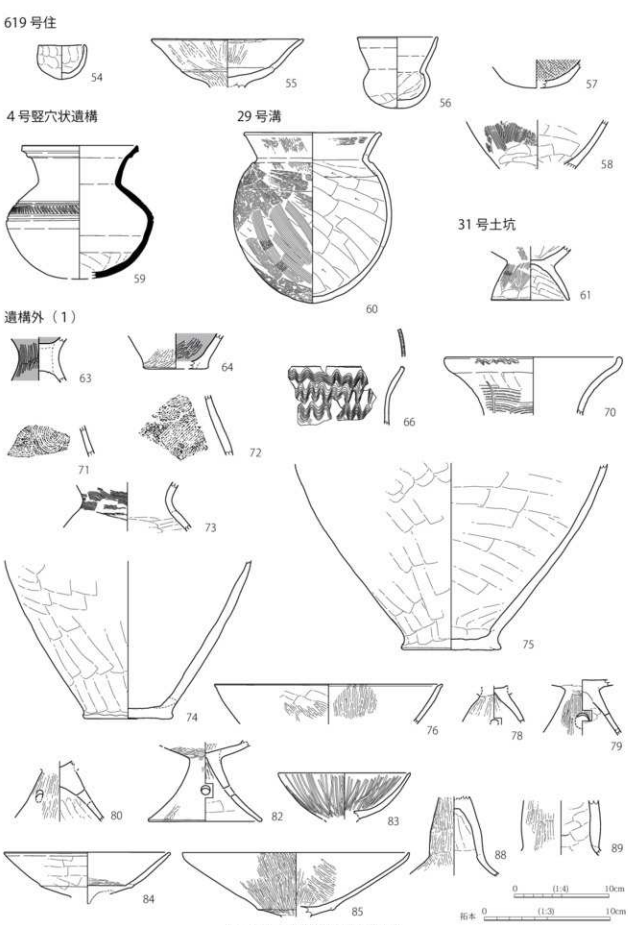






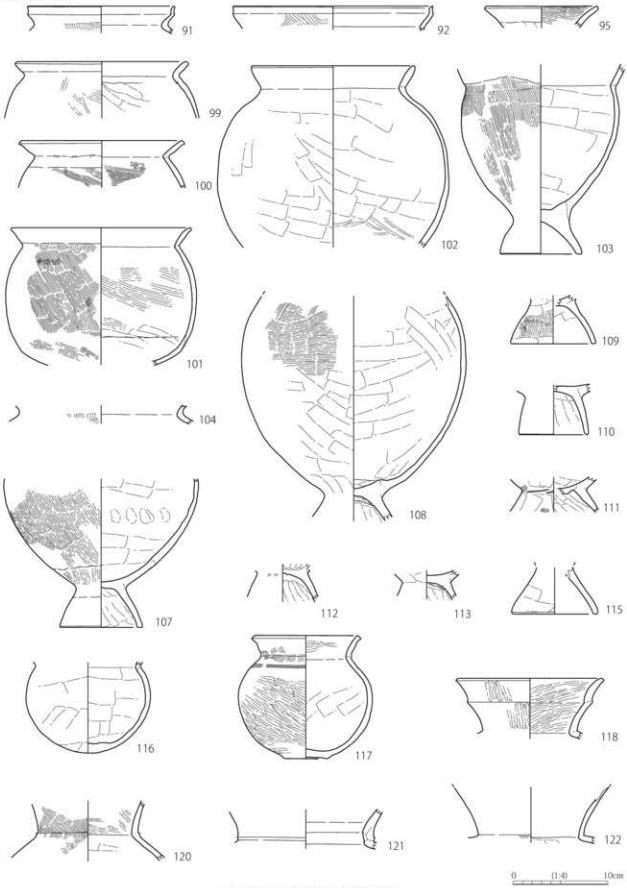
0　(1:4)　10cm

第 29 図　古墳時代土器実測図 (2)



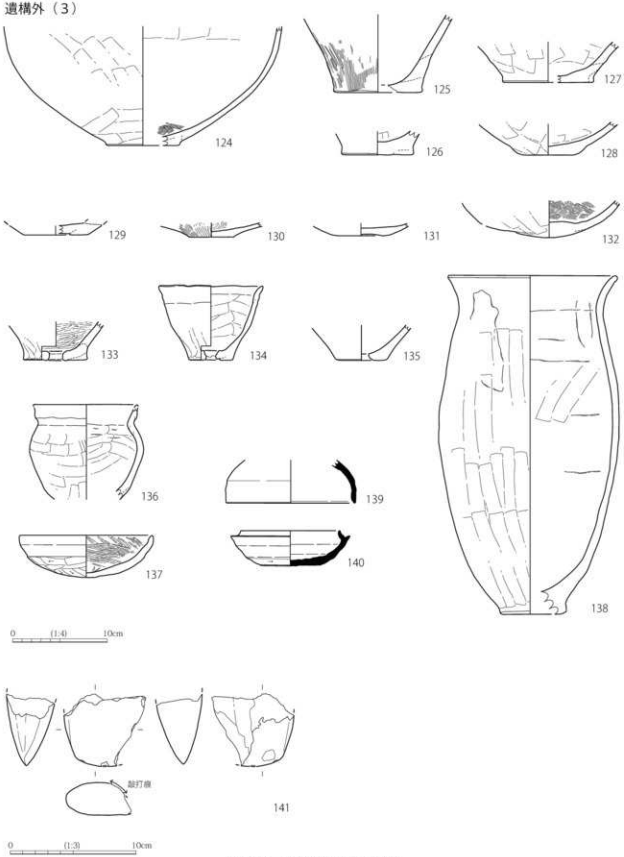
第 30 図　古墳時代土器実測図(3)

遺構外（２）



第 31 図　古墳時代土器実測図(4)

遺構外（３）

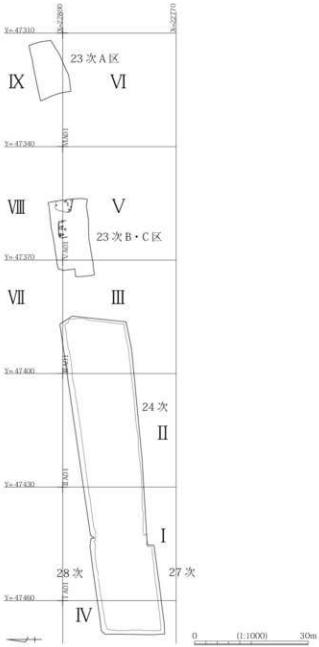


第 32 図　古墳時代土器実測図(5)

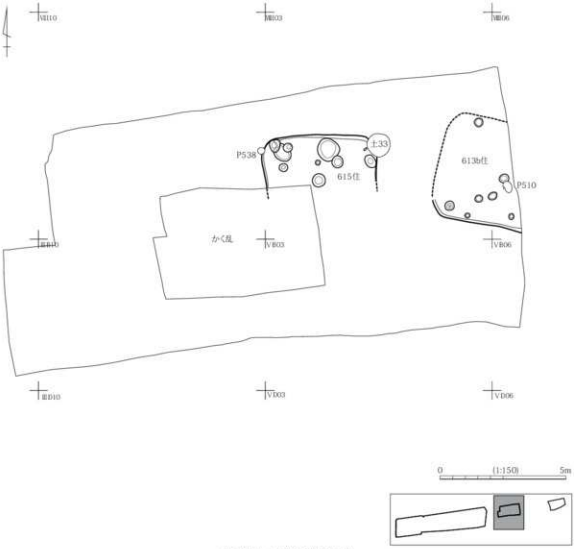
第5節　古代の遺構と遺物

1　概要　（第33・34図）

当該期に帰属する遺構は、竪穴建物跡の613b号住居跡・615号住居跡の2軒であるが、遺物は23次A区を除くすべての調査区から出土している。



第33図　古代遺構全体図



第 34 図　古代遺構配置図

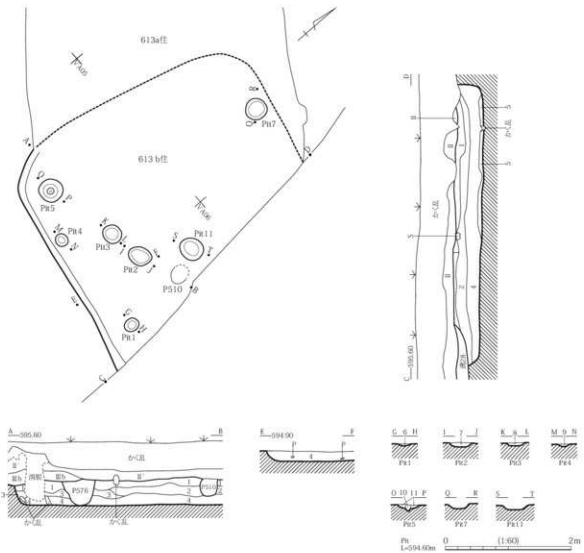
２　遺構

613b 号住居跡（竪穴建物跡）（第 35 図、PL4）

位置：23 次Ｃ区。Ⅴ A05・06、Ⅶ J05・06 グリッド。

調査経過：当初、Ｂ区で検出された部分と合わせて一つの遺構として調査していたが、主軸の異なる２遺構が重複していることがわかった。そのうち北西側の建物跡を 613a 号住居跡、南東側を 613b 号住居跡とした（第３章第４節２）。南壁から南西隅部分までは検出できたものの、613a 号住との重複部分については、土層断面観察でも確認できなかった。

重複関係：遺構調査では明確な重複関係を把握できなかったが、出土遺物等から 613a 号住の方が古いものと判断した。



1　黒褐色(2.5Y3/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn21%以上。黄褐土粒11~20%
2　暗ｵﾘｰﾌﾞ褐色(2.5Y3/3)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn11~20%。炭化物粒・褐色土粒10%以下
3　黒褐色(2.5Y3/2.5)　ｼﾙﾄ質。しまりあり
4　黒褐色(2.5Y3/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn・黄褐土粒11~20%。褐色土粒10%以下
5　黒褐色2.5Y4/1.5)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn10%以下
6　黒褐色(2.5Y3/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn11~20%。明黄褐土粒10%以下
7　黒褐色(2.5Y3/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn・黄褐土粒11~20%
8　暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn21%以上。明黄褐土粒10%以下
9　暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn11~20%
10　暗黄灰色(2.5Y4.5/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn21%以上。明黄褐土粒10%以下
11　暗黄灰色(2.5Y3.5/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn11~20%。明黄褐土粒10%以下

第 35 図　613b 号住居跡遺構図

埋土：竪穴埋土は黒褐色土を主体とする。ピットでは Pit5 で柱痕と思われる土層を確認し、その掘方埋土は暗黄灰色を呈する。

構造：平面形態は確認できた南西隅の形状から、隅丸方形と思われる。長軸方向は N81° W、長軸残存長 3.75m、直交軸復元長 4.15m、調査区壁面で確認した深さは 40cm。ピットは Pit1・2・3・4・5・7・11 が埋土の状況から本建物跡に帰属するものと判断した。Pit5 は柱穴と考えられるが、他の柱穴配置は明確にできなかった。

カマド：調査区内では確認できず、それが想定されるような焼土・炭等もみられなかった。

遺物出土状態：遺物はいずれも埋土から出土しており、本建物跡部分からのものは少ない。土師器甕の小片がみられたが、図示し得るものはなかった。

時期：竪穴埋土直上にはⅢb 層が堆積しており、Ⅳ層上面から掘り込まれていることや、出土遺物から古代と考えられる。

615 号住居跡（竪穴建物跡）（第 36・37 図）

位置：23 次 C 区。Ⅴ A02・03・04、Ⅷ J02・03・04 グリッド。

調査経過：Va 層上面で、黄灰色土の広がりがみられた。竪穴の深さは浅く、南半は確認できなかった。

重複関係：33 号土坑、P538 に切られ、615 号住が最も古い。

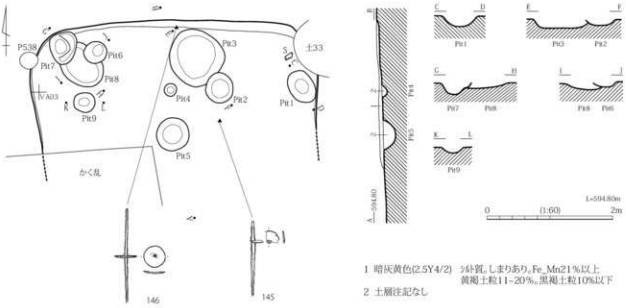
埋土：暗灰黄色土を主体とする単層である。

構造：長軸方位は N86° E、長軸長 4.54m、直交軸残存長 3.08m、検出面からの深さ 11cm。ピットは 9 基確認した。床面は貼床や硬化面が認められず不明確であり、他のピットに切られる Pit3・5・8 は不整形でかつ他のピットに切られているので、掘方の可能性がある。

カマド：確認できなかった。またそれに伴う焼土・炭等も検出できなかった。ただし、建物北東隅からは被熱した礫が複数出土している。

遺物出土状態：建物北側から土師器（142・143）、灰釉陶器（144）、鉄製紡錘車が 2 点（145・146）が出土している。145 は建物中央、146 は北壁中央付近の床面から検出された。

時期：出土遺物から平安時代後期と位置づけられる。



第 36 図　615 号住居跡遺構図

3　遺物

615号住居跡（竪穴建物跡）（第37図、PL12）

土器は、土師器・灰釉陶器が小片ではあるが出土している。142の土師器皿はロクロ成形で、底部は回転糸切りで切り離される。柱状の突出する高台を有し、口縁端部が立ち上がる。胎土は精製されておらず赤褐色粒を多く含み、器面はもろい。143は土師器埦で内面黒色処理を施し、放射状のミガキを行う。高台の断面は、外側が直立し内側が内傾する逆三角形を呈する。坏部底面は切り離し後、ナデ調整で仕上げる。144は灰釉陶器の埦で、釉は漬け掛けしている。その口縁端部はやや外反する。出土した土器は11世紀後半に位置づけられる。

鉄製品は、鉄製紡錘車が2点（145・146）出土しており、いずれも紡輪、紡茎とも鉄製であり、有機物の付着は認められなかった。145は紡輪の4分の1のみ残存し、紡茎も上側の大半が欠損する。紡茎の断面は方形で、その太さは紡輪の直下および直上で8mmであるが、上端付近は3mmとなっており紡輪から遠いほど細くなる。また、紡茎下半は1回90°にねじられている。146は紡茎の下端が欠損するものの、ほぼ完存する。上端に鈎はない。紡輪断面は扁平ではなく内湾する「レンズ形」で、平安時代後期として矛盾しない（東村2011）。凹面側が上と判断される。紡茎の断面は方形である。紡輪のほぼ中央に紡茎がはめ込まれている。紡茎の太さはほぼ均一である。

土坑・ピット（第37図、PL12）

147は、10号土坑から出土した須恵器壺の底部片である。高台断面は方形を呈する。器面は灰色を呈するが、その断面は赤色を帯びている。古代に帰属する。なお、10号土坑は中世以降に帰属する。

148はP513から出土した須恵器であり、壺か。底部と体部との境には明瞭な稜をなし、体部は内湾気味に立ち上がる。古代に帰属する。

遺構外（第37図、PL12）

遺構外からも小片の土師器・須恵器・灰釉陶器がみられ、鉄製品も出土している。

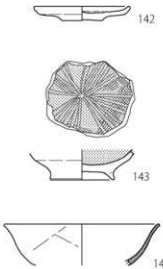
149～151は土師器である。149・150は坏で、平底の底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。151はロクロ成形の埦で、内面黒色処理を施す。その高台断面は三日月形を呈する。

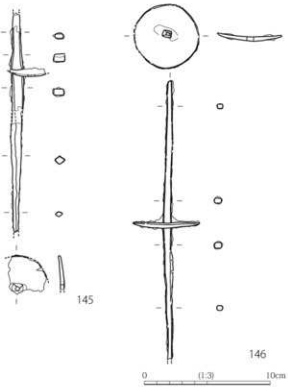
152～154は須恵器である。152は坏で、底は回転糸切りで切り離す。赤色を帯びて酸化炎焼成気味である。153は埦で、高台断面は方形を呈するが畳付がやや外方へ張り出している。器表面は灰色を呈するが、断面内側は赤色を帯びる。154は壺類の底部か。回転糸切りで切り離す。底部周囲は打ち欠いているが、わずかに線状痕はみられるものの転用した痕跡は確認できなかった。

155・156は灰釉陶器である。155は埦で、釉は漬け掛けである。断面逆三角形を呈する高台から内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反するが、若干器形にゆがみがみられる。口唇部には発泡する黒色の付着物がみられる。156は壺の口縁部で、口径は推定である。頸部から口縁部に向かって強く外反し、口縁部は屈曲したのち上方へまっすぐ立ち上がる。

157は不明鉄製品である。断面は台形を呈し、裏面は平滑な面をなす。鋒はサビ膨れしているものの、本来の形状は薄く平らであったと見られる。鑿などの工具の可能性がある。木柄などの有機物は付着していない。157はその出土位置の高さから古代に帰属する可能性が高いものと判断したが、古墳時代遺構である612号住・616号住周辺から出土しており、古墳時代に帰属する可能性もある。

615 号住

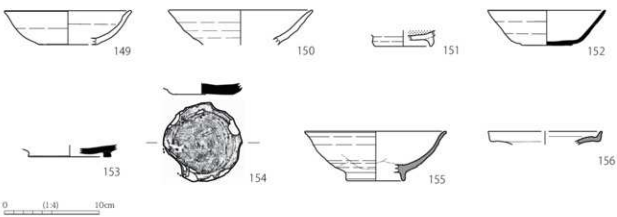


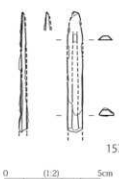


10 号土坑

P513

遺構外



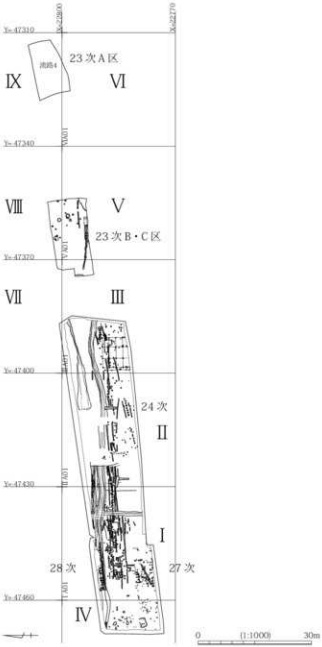


第 37 図　古代土器・鉄製品実測図

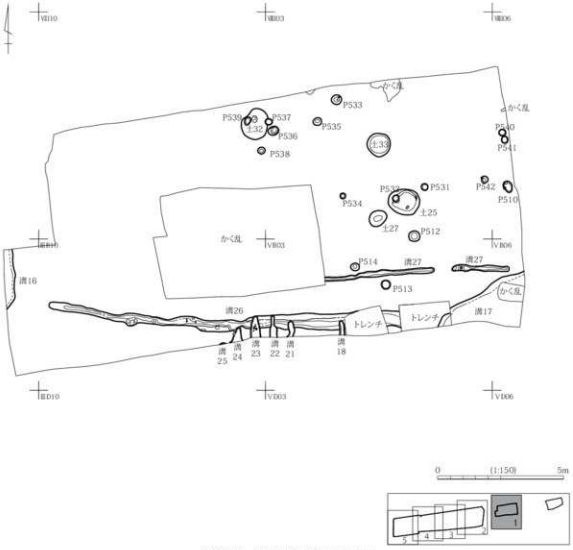
第６節　中世以降の遺構と遺物

１　概要（第 38 ～ 43 図）

主として 24・27・28 次調査において、Ⅳ層上面で検出したおおむね中近世と考えられる遺構を扱う。竪穴が付属する掘立柱建物跡１棟、竪穴状遺構２基、溝跡 13 条、ピット列 10 条が検出されている。なお、溝跡やピット列には相互に関連するものがある。その他、土坑およびピットを検出したが、時期および性格の判明できたものは少なく、遺物が出土したもののみ個別に掲載した。

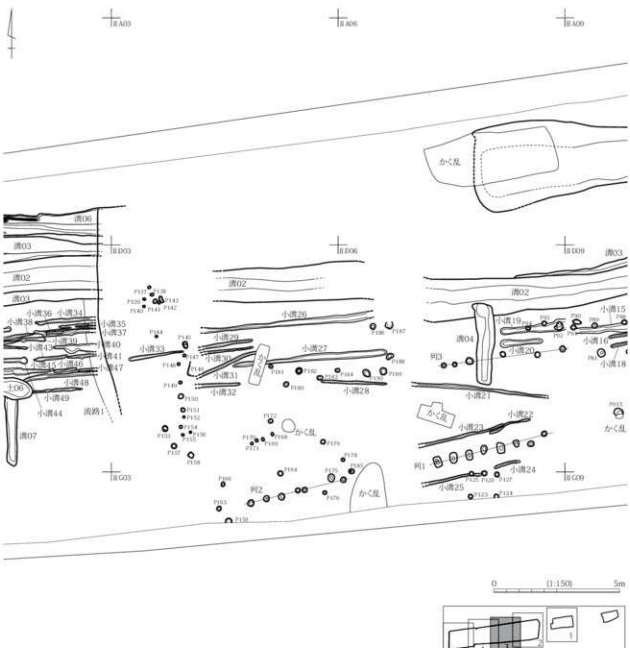


第 38 図　中世以降遺構全体図

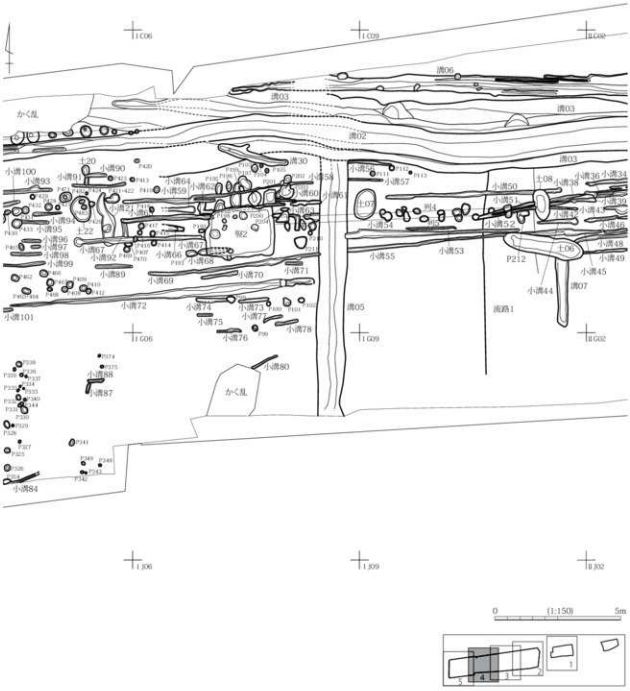


第 39 図　中世以降遺構配置図(1)

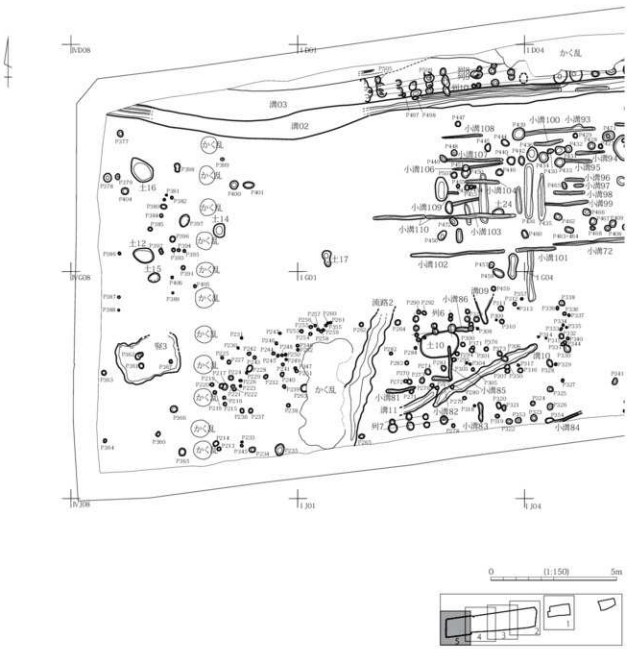
第 40 図　中世以降遺構配置図(2)



第 41 図　中世以降遺構配置図(3)



第 42 図　中世以降遺構配置図(4)

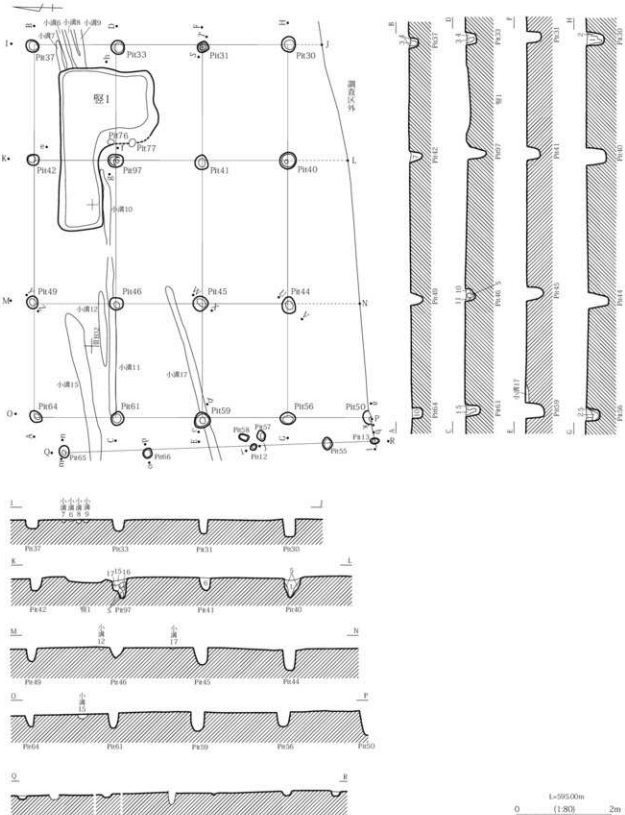


第 43 図　中世以降遺構配置図(5)

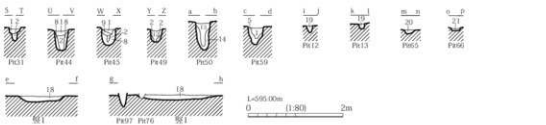
２　遺構

１号竪穴付掘立柱建物跡（第44・45図、PL4）

位置：24次１区。ⅢD・E・F01～04、ⅢG01グリッド。



第44図　１号竪穴付掘立柱建物跡遺構図(1)



1 暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質しまりあり。赤褐土粒21%以上。Fe_Mn11-20%。黄褐土粒10%以下
　　Ⅲa層を主体にⅡ層土5-7%・Ⅳ層土 20%ﾌﾞﾛｯｸ状に混
2 暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。赤褐土粒21%以上。Fe_Mn11-20%。黄褐土粒10%以下。1層よりしまりやや弱く柔らかい
3 暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn21%以上。Ⅲb層と同じ
4 暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn・赤褐土粒21%以上。Ⅲb層を主体にⅣ層土20%ﾌﾞﾛｯｸ状に混
5 暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn21%以上。黄褐土粒10%以下。1層よりFe多い(20-25%)
6 黒褐色(5YR2/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。暗黄灰土粒21%以上。Fe_Mn11-20%。Ⅳ層にⅢ層土20%ﾌﾞﾛｯｸ状に混
7 暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn11-20%。黄褐土粒10%以下。Ⅲa層主体にⅡ層土ﾌﾞﾛｯｸ状に5-7%混
8 暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn21%以上。黄褐土粒10%以下。1・2層よりFe多い(20-25%)
9 暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。赤褐土粒21%以上。Fe_Mn11-20%。黄褐土粒10%以下。1層よりⅣ層土多い(30%)
10 暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn21%以上。黄褐土粒10%以下。Ⅲb層主体にⅡ層土ﾌﾞﾛｯｸ状に10%混
11 暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn21%以上。黄褐土粒・赤褐土粒10%以下。10層土にⅣ層土20%ﾌﾞﾛｯｸ状に混
12 暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。赤褐土粒21%以上。Fe_Mn・黄褐土粒10%以下。Ⅲa層にⅡ層土5-7%・Ⅳ層土20%ﾌﾞﾛｯｸ状に混
13 暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn11-20%。Ⅲa層と同じ
14 暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn11-20%。赤褐土粒10%以下。Ⅲa層を主体にⅣ層土10%ﾌﾞﾛｯｸ状に混
15 暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn・黄褐土粒11-20%。赤褐土粒10%以下。Ⅲa層を主体にⅡ層土20%・Ⅳ層土10%ﾌﾞﾛｯｸ状に混
16 暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりなし。Fe_Mn・黄褐土粒11-20%。赤褐土粒10%以下
17 暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn・赤褐土粒11-20%。Ⅲa層主体にⅣ層土15-20%(φ-2cm)ﾌﾞﾛｯｸ状に混
18 暗灰黄色(2.5Y5/2)　ｼﾙﾄ質。粘性あり。しまりあり。Fe斑やや多い。砂少量混
19 にぶい黄褐色(10YR4/3)　砂質。しまりなし。暗黄灰土粒11-20%。Fe_Mn・砂粒10%以下
20 暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn21%以上。黄褐土粒10%以下。Ⅲb層にⅡ層土ﾌﾞﾛｯｸ状に10%混
21 暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe_Mn11-20%。黄褐土粒10%以下。Ⅲa層主体にⅡ層土ﾌﾞﾛｯｸ状に5-7%混

第 45 図　１号竪穴付掘立柱建物跡遺構図(2)

調査経過：Ⅳ層上面で暗灰黄色土の掘立柱建物跡を確認した。またその北東側から竪穴を検出した（調査時１号竪穴状遺構と呼称）。竪穴は建物を構成する柱穴を避けるようにＬ字形をなすことから、１号掘立柱建物跡に付属する施設と判断した。

重複関係：小溝群を切っており、それらより後に構築している。

埋土：全体的にⅢａ層に由来する暗灰黄色土を主体とする。

構造：東西３間、南北４間以上の総柱建物跡である。南側は調査区外にあたり、その全形は不明である。南面した建物とすれば、主軸はＮ1°Ｅでほぼ真北を向く。桁行残存長 7.06m、梁行長 7.84m、桁行平均柱間は約 1.8m、梁行平均柱間は約 2.6m である。また、建物西側に Pit65・66・57・55・13 が南北方向に建物と平行して並んでおり、西側下屋の可能性がある。

竪穴は北東隅に位置する。東西長 3.40m、南北長 1.96m、検出面からの深さ 11cm。断面形態はタライ状で、東西壁面の立ち上がりは緩やかである。

遺物出土状態：竪穴の埋土中から灰釉陶器の高台が出土しているが、混入とみられる。

時期：埋土がⅢａ層に由来し、さらに Pit50 はⅢａ層から掘り込まれていることから、中世の可能性が高い。

２号竪穴状遺構（第46図）

位置：24次２区。Ⅰ E06・07、Ⅰ F07グリッド。

調査経過：Ⅳ層上面で暗灰黄色の砂質シルトの広がりを検出した。

重複関係：62・65・68号小溝を切っている。重複関係が確認できたものはこの３条のみで、他の小溝群や４・５号ピット列との重複関係は確認できなかった。

埋土：Ⅲａ層に由来する暗灰黄色砂質シルトを主体とする。

構造：平面形態は、不整隅丸長方形を呈する。底面はわずかに起伏しており、全体的に南西側が最も高く、東北隅へ向かって緩やかに傾斜している。壁面の立ち上がりは緩やかである。主軸はN86°Eで、長軸長2.78m、短軸長1.95m、検出面からの深さ11cmである。ピットは竪穴内で８基検出した（Pit1～8）。そのうちPit2は柱を据えたような掘方である。Pit7・8と合わせて建物の柱穴の可能性もあるが、配列が不明なことから竪穴状遺構とした。

遺物出土状態：埋土中から古代の須恵器壺２点・甕１点、器種不明の土師器片３点出土しているが、いずれも混入とみられる。

時期：埋土の状況および検出面から中世の可能性がある。

３号竪穴状遺構（第46図）

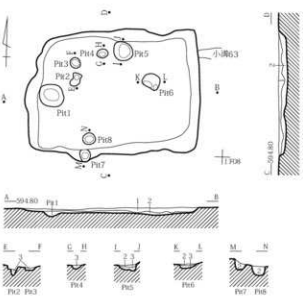
位置：27次調査区。Ⅳ G08・09、Ⅳ H08・09グリッド。

調査経過：Ⅳ層上面において、黄褐色および黄灰色砂質シルトの広がりを確認した。当初、明確な遺構としてとらえることができなかったが、Ⅲ層土を除去したところ、方形のプランが検出できた。

重複関係：P361、P362、P367は底面で検出されているが、切り合い関係不明。

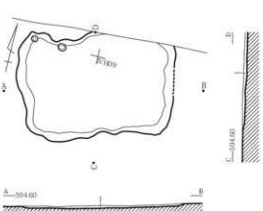
埋土：単層で細砂を多く含む黄褐色砂質シルトを主体とする。

２号竪穴状遺構



1　黄褐色(2.5Y5/4)　シルト～極細砂。しまり強い。Fe斑20%
2　暗灰黄色(2.5Y5/2)　シルト～極細砂。しまりやや強い。Mn斑10%
　　粗砂～2mm細礫2%
　　2区第1面の検出面地山と同等の砂質シルト
3　黄灰色(2.5Y5/1)　シルト～極細砂。しまり強い。Mn斑5%以上。Fe斑5%
　　砂～2mm細礫上面に残る

３号竪穴状遺構



1　黄褐色(2.5Y5/3)　細砂混じり砂質シルト。しまり強い
　　Fe斑35%。雲母20%

0　(1:60)　2m

第46図　２号竪穴状遺構、３号竪穴状遺構　遺構図

構造：平面形態は、不整隅丸長方形を呈する。床面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。長軸はN76°Eで、長軸長2.41m、短軸長1.68m、検出面からの深さ5cmである。北西に直径20cm程度のピットが2基伴う。

遺物出土状態：出土した遺物はない。

時期：埋土の状況および検出面から中世の可能性がある。

２号溝跡（第47図、PL4）

位置：24次１区。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ-C・Dグリッド。

調査経過：Ⅳ層上面において黄褐色土の帯状プランを検出した。おおむね３号溝跡内を走っているが、３号溝跡の埋土とは大きく異なっているため明確に検出することができた。

重複関係：３号溝跡を切っている。2・3・5・6号溝跡は重複している。5号溝跡→３号溝跡→６号溝跡→２号溝跡の順に掘削されており、２号溝跡が最も新しい。

埋土：Ⅱ層に由来するオリーブ褐色土を主体とする。

構造：調査区北側を東西方向に走り、その両端は調査区外へと延びる。断面形態はすり鉢状を呈しており、底面は丸い。わずかに蛇行する箇所はあるが、おおむねの方位はN88°Eである。最大幅1.60m、深さ32cm。３号溝跡を掘り直した溝と判断した。

遺物出土状態：古代の土師器小片が出土しているが、混入と判断した。

時期：埋土がⅡ層土（近世遺物包含層）に由来しており、近世に位置づける。

３号溝跡（第47図、PL4）

位置：24次・28次区。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ-C・Dグリッド。

調査経過：西側にあたる24次１区ではⅣ層上面でとらえることができず、Ⅶ層上面で暗灰黄色土の帯状プランを検出し、調査を行った。その後、東側の24次２区、28次調査区においては、Ⅳ層上面で３号溝跡をとらえることができ、２号溝跡と重複していることが分かった。また３号溝跡底面からは8･9･10号ピット列を検出した。底面付近の埋土第３層から出土した炭化物に対して放射性炭素年代測定を行ったところ、13世紀後半～14世紀後半という年代を得た（第３章第７節）。

重複関係：５号溝跡→３号溝跡→６号溝跡→２号溝跡の順に掘削されている。なお8・9・10号ピット列は３号溝跡掘削以前に構築されている（土層断面A-B）。

埋土：Ⅲａ層に由来する暗灰黄色土を主体とする。

構造：24次・28次の調査区北側を、東西方向に走り、その両端は調査区外へと延びる。調査区東端では１号竪穴付掘立柱建物跡を避けるように北側へ湾曲している。断面形態は、有段で先端Ｖ字状を呈する。方位はN88°Eで、最大幅2.80m、深さ62～84cmである。

遺物出土状態：埋土中から古墳時代前期の土師器甕片、須恵器の高台片が出土しているが、いずれも混入とみられる。

時期：埋土はⅢａ層（中世遺物包含層）を主体としており、かつ放射線炭素年代測定の結果からも中世に位置づけられる。

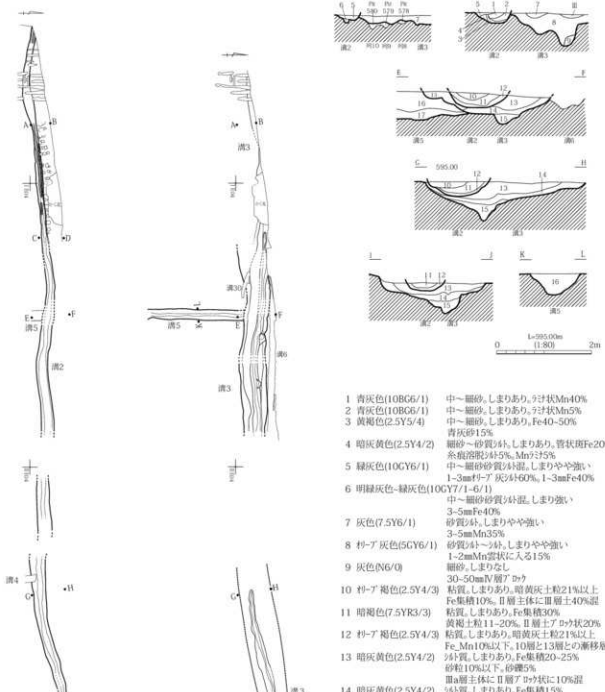
５号溝跡（第47図）

位置：24次２区。ⅠD・E・F・G・H-08グリッド。

調査経過：３号溝跡から直交方向に南へ延びる溝状の暗灰黄色土を確認した。検出時点で２号溝跡に切られていることが、３号溝跡との関係は、土層断面観察（土層断面E-F）によって、３号溝跡に切られていることが分かった。

重複関係：２号、３号溝跡と重複している。５号溝跡→３号溝跡→６号溝跡→２号溝跡の順に構築され

２号溝跡　　３号溝跡、５号溝跡



1 青灰色(10BG6/1)　中～細砂。しまりあり。ﾗｲﾄ状Mn40%
2 青灰色(10BG6/1)　中～細砂。しまりあり。ﾗｲﾄ状Mn5%
3 黄褐色(2.5Y5/4)　中～細砂。しまりあり。Fe40～50%
青灰砂15%
4 暗灰黄色(2.5Y4/2)　細砂～砂質ｼﾙﾄ。しまりあり。管状斑Fe20%
糸状溶脱ｼﾙﾄ5%。Mnｼﾐ5%
5 緑灰色(10GY6/1)　中～細砂砂質ｼﾙﾄ混。しまりやや強い
1～3mmﾎﾘｰﾌﾞ灰ｼﾙﾄ60%。1～3mmFe40%
6 明緑灰色-緑灰色(10GY7/1-6/1)
中～細砂砂質ｼﾙﾄ混。しまり強い
3～5mmFe40%
7 灰色(7.5Y6/1)　砂質ｼﾙﾄ。しまりやや強い
3～5mmMn35%
8 ﾎﾘｰﾌﾞ灰色(5GY6/1)　砂質ｼﾙﾄ～ｼﾙﾄ。しまりやや強い
1～2mmMn雲状に入る15%
9 灰色(N6/0)　細砂。しまりなし
30～50mmⅣ層ﾌﾞﾛｯｸ
10 ﾎﾘｰﾌﾞ褐色(2.5Y4/3)　粘質。しまりあり。暗黄灰土粒21%以上
Fe集積10%。Ⅱ層主体にⅢ層土40%混
11 暗褐色(7.5YR3/3)　粘質。しまりあり。Fe集積30%
黄褐土粒11～20%。Ⅱ層土ブロック状20%
12 ﾎﾘｰﾌﾞ褐色(2.5Y4/3)　粘質。しまりあり。暗黄灰土粒21%以上
Fe_Mn10%以下。10層と13層との漸移層
13 暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe集積20～25%
砂粒10%以下。砂礫5%
Ⅲa層主体にⅡ層ブロック状に10%混
14 暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe集積15%
砂粒10%以下。砂礫1%
15 灰色ﾎﾘｰﾌﾞ色(5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。Fe集積15%
斑晶3%。砂礫1%
16 暗灰黄色(2.5Y4/2)　ｼﾙﾄ質。しまりあり。砂粒11～20%。砂礫10%
Fe_Mn・黄褐土粒・赤褐土粒10%以下
層土10%・Ⅳ層土5%ブロック状に混
17 黒褐色(2.5Y3/2)　粘質。しまりあり。砂礫15～20%
Fe_Mn11～20%。黄褐土粒・赤褐土粒10%
以下。Ⅱ層土5%・Ⅳ層土3%・切層土3%それ
ぞれブロック状に混

第 47 図　２号溝跡、３号溝跡、５号溝跡遺構図

ており、５号溝跡は最も古い。

埋土：Ⅲａ層に由来する暗灰黄色土を主体とした単層である。

構造：２号、３号溝跡に直交し南北に走る。断面形態はＶ字形を呈する。方位はN0°で、最大幅1.15m、深さ43cmを計測する。北端は３号溝跡内に収まり、北側へは貫通しないようである。南側は調査区外に伸びている。

遺物出土状態：遺物は出土していない。

時期：埋土がⅢａ層土（中世遺物包含層）に由来しており、中世に位置づけられる。

６号溝跡（第48図、PL4）

位置：24次２区。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ-C・Dグリッド。

調査経過：Ⅳ層上面で、暗灰黄色土を主体とする溝状プランを確認した。平面検出時には３号溝跡との重複関係は認識できなかった。

重複関係：土層断面によって把握したが、２号溝跡との関係は覆土の状況から判断した。５号溝跡→３号溝跡→６号溝跡→２号溝跡の順に構築されている。

埋土：Ⅲａ層に由来する暗灰黄色土を主体とする。

構造：３号溝跡の北側を東西にまっすぐ走る。断面形態はタライ状を呈するが、底面は凹凸をなす。主軸方位はN90°で、最大幅1.08m、深さ32cmである。

遺物出土状態：遺物は出土していない。

時期：埋土がⅢａ層土（中世遺物包含層）に由来しており、中世に位置づけられる。

10・11号溝跡（第48図）

位置：27次調査区。ⅠH-02～04、ⅠG-04グリッド。

調査経過：Ⅳ層上面で、鉄・マンガンを多く含む砂質土の溝状プランを確認した。当初２条の溝として調査を行ったが、走行方向が他の溝と大きく異なりこの２条のみが同じ方向に走ること、そして埋土が酷似していることから同一の溝であると判断した。11号溝跡の西端部は確認できなかった。

重複関係：７号ピット列、P275・280・306・350に切られており、それらより先行して掘削される。

埋土：鉄・マンガンを多く含んだ黄灰色砂質土を主体とする。

構造：多くの溝が南北、東西に走っているのに対して、本溝は北東-南西方向に走っており、その方位はN60～62°Eである。断面形態は浅い皿状を呈する。10号溝跡は最大幅43cm、11号溝跡は最大幅35cmで、両溝を合わせた幅は75cmである。検出面からの深さは４～9cm。

遺物出土状態：遺物は出土していない。

時期：Ⅳ層上面において確認されたことから中世の可能性がある。

16号溝跡（第49図）

位置：23次C区。ⅢB09グリッド。

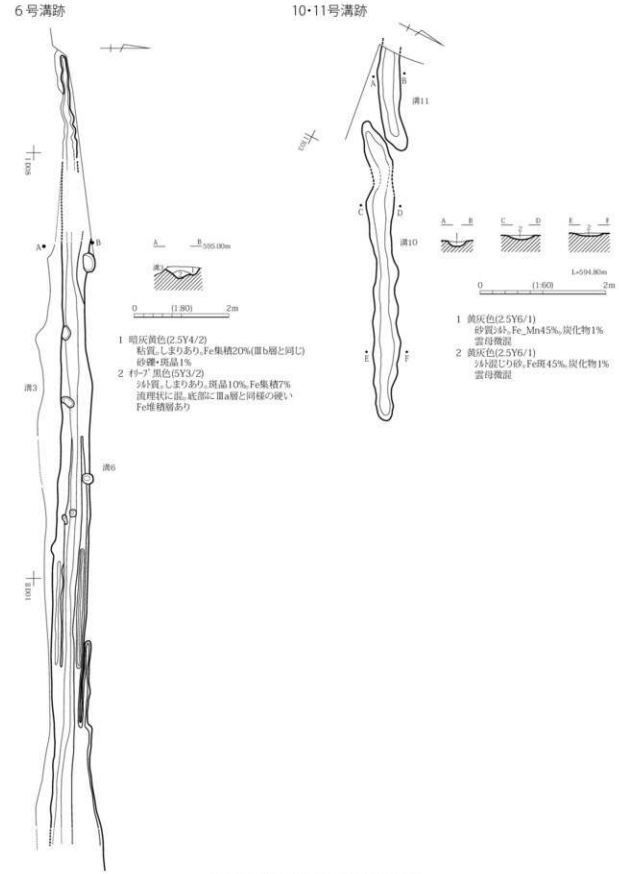
調査経過：Ⅳ層上面において、暗黄灰色シルトの広がりが確認された。調査区北西隅にあり、遺構の大半は調査区外へ及ぶ。

重複関係：５号竪穴状遺構に切られていることが土層断面観察によって分かった。

埋土：暗灰黄色シルトを主体とする。

構造：調査区北西隅で一部が確認されたのみであるが、おおむね南北方向に走る。深さは112cm。断面形態は有段であるが、その上段の立ち上がりと埋土１層の下面は連続しており、掘り直しの可能性がある。

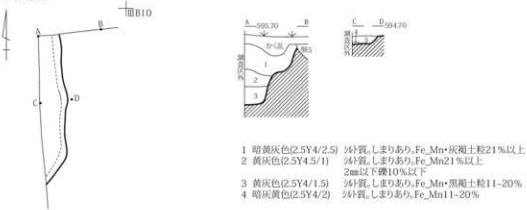
遺物出土状態：埋土中から内面黒色処理を施した土師器が出土しているが、図示し得るものはない。



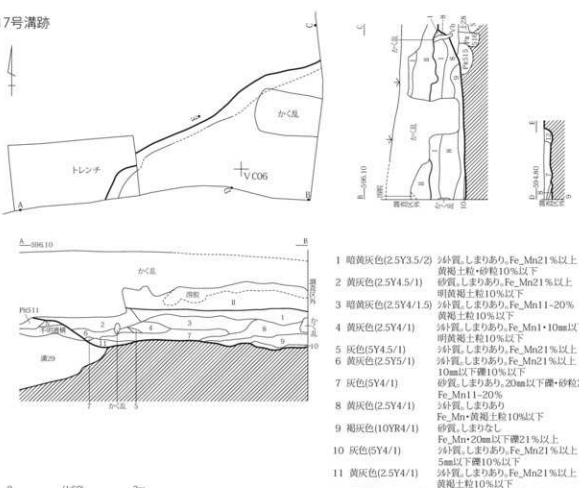
第48図　6号溝跡、10・11号溝跡遺構図

時期：Ⅳ層上面において確認されたことから中世と見られる。

16号溝跡



17号溝跡



1 暗黄灰色(2.5Y3.5/2) シルト質。しまりあり。Fe_Mn21%以上
黄褐土粒・砂粒10%以下
2 黄灰色(2.5Y4.5/1) 砂質。しまりあり。Fe_Mn21%以上
明黄褐土粒10%以下
3 暗黄灰色(2.5Y4/1.5) シルト質。しまりあり。Fe_Mn11~20%
黄褐土粒10%以下
4 黄灰色(2.5Y4/1) シルト質。しまりあり。Fe_Mn1・10mm以下礫・
明黄褐土粒10%以下
5 灰色(5Y4.5/1) シルト質。しまりあり。Fe_Mn21%以上
6 黄灰色(2.5Y5/1) シルト質。しまりあり。Fe_Mn21%以上
10mm以下礫10%以下
7 灰色(5Y4/1) 砂質。しまりあり。20mm以下礫・砂粒21%以上
Fe_Mn11~20%
8 黄灰色(2.5Y4/1) シルト質。しまりあり
Fe_Mn・黄褐土粒10%以下
9 褐灰色(10YR4/1) 砂質。しまりなし
Fe_Mn・20mm以下礫21%以上
10 灰色(5Y4/1) シルト質。しまりあり。Fe_Mn21%以上
5mm以下礫10%以下
11 黄灰色(2.5Y4/1) シルト質。しまりあり。Fe_Mn21%以上
黄褐土粒10%以下
12 黒褐色(2.5Y3/2.5) シルト質。しまりあり。砂粒・Fe_Mn21%以上

第49図　16号溝跡、17号溝跡遺構図

17号溝跡（第49図）

位置：23次B区。Ⅴ B05・06、Ⅴ C05・06グリッド

調査経過：Ⅳ層上面において暗黄灰色土の広がりを確認した。調査区南東隅において検出されたため遺構の大半は調査区外へ及ぶ。

重複関係：614号住、29号溝跡を切っており、本溝が最も新しい。

埋土：暗灰黄色および黄灰色シルトを主体とし、礫をわずかに含む。

構造：遺構の大半は調査区外へ及ぶがおおむね北東−南西方向へ走る。断面形態は、底面に起伏がみられ壁面は緩やかに立ち上がる。深さは65cmを計測する。

遺物出土状態：埋土中から土師器小片が出土しているが、図示し得るものはなかった。

時期：埋土直上にはⅡ層が堆積し、かつ埋土はⅢ層土に由来しているものがみられることから中世の可能性が高い。

18・19・20・21・22・23・24・25号溝跡（第50図）

位置：23次B区。Ⅴ C02・03・04グリッド。

調査経過：南北方向に伸びる黄灰色の溝状のプランが6条、東西に6条並んでいることを確認した。さらに調査区壁の土層断面観察において2箇所の落ち込みが確認され、一連のものとして調査を行った。

重複関係：いずれの溝も26号溝跡を切っている。

埋土：黄灰色シルトを主体とする。

構造：平行して南北に走り、方位はN0°である。その深さは10～30cm、幅40～60cmである。断面形態はすり鉢状もしくはタライ状を呈する。土層断面で確認したところ、各溝は約10cm間隔で並んでいることが分かった。

遺物出土状態：24号溝跡の埋土中から土師器・須恵器の小片が出土しているが、混入とみられる。

時期：中世の可能性がある。

26号溝跡（第50図）

位置：23次B区。Ⅲ B・C10、Ⅴ C01～04、Ⅴ B04グリッド。

調査経過：Ⅳ層上面において、黄灰色土の溝状プランを確認した。

重複関係：18～25号溝跡に切られており、本溝が最も古い。

埋土：黄灰色シルトを主体とし、一部底面に砂質土が認められる。

構造：ほぼ東西に走り、その方位はN80° Wである。幅60cm、検出面からの深さは17cmである。断面はすり鉢状を呈し、その底面は西に向かって深くなる。なお壁面の立ち上がりが西に行くほど浅くなるのは、検出面の高さが下がったためである。西端部は検出できたものの、東端部はかく乱部分で不明確となっており、南側へ屈曲している可能性がある。

遺物出土状態：埋土中から土師器・須恵器の小片が出土しているが、混入と見られる。

時期：中世の可能性がある。

27号溝跡（第50図）

位置：23次B区。Ⅴ B03～06グリッド。

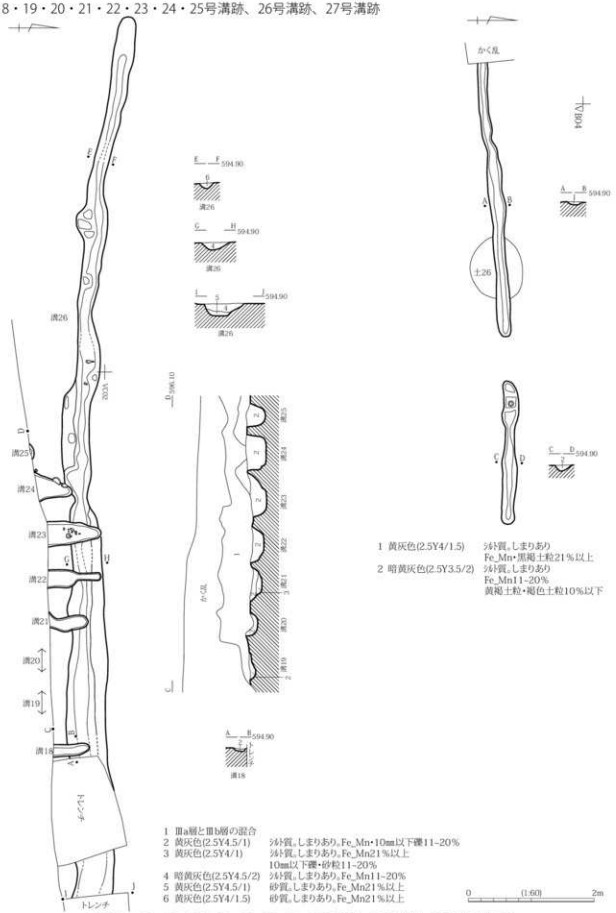
調査経過：Ⅳ層上面で、暗黄灰色の溝状プランを確認した。

重複関係：26号土坑を切っており、26号土坑埋没後に掘削している。

埋土：ほぼ単層で、暗黄灰色シルトを主体とする。

構造：東西にまっすぐ走り、方位はN86° Eである。確認された長さは7.33m、幅13～20cm、検出面からの深さ4～9cmである。

18・19・20・21・22・23・24・25号溝跡、26号溝跡、27号溝跡



第 50 図　18・19・20・21・22・23・24・25 号溝跡、26 号溝跡、27 号溝跡遺構図

遺物出土状態：遺物は出土していない。

時期：中世の可能性がある。

1・2号ピット列（第51図）

位置：24次1区・2区。Ⅱ F07・08、Ⅱ G04～06グリッド。

調査経過：Ⅳ層上面で、北東-南西方向に走る黄灰色土主体のピット列を2条検出した。さらに1号ピット列を挟むように南北両側それぞれにピット列に平行する小溝（22・23・24・25号小溝）が掘削されている。2号ピット列は、1号ピット列の南西延長線上に位置する。2号ピット列には小溝は伴っていなかったが、同一の方位であることから一連の遺構として扱った。

重複関係：25号小溝はP125に切られている。

埋土：各ピットは暗灰黄色シルトを主体としているが、単層で柱痕は確認できなかった。小溝は単層で暗灰黄色砂質土を主体とする。

構造：1号ピット列はPit128・129・130・131・132・133・134・135の8基のピットからなる。ピットの平面形態は、いずれも隅丸長方形で、断面形態はタライ状を呈する。ピットの長軸は30～40cm、短軸は20～30cm、深さは10～20cmである。2号ピット列はPit160・161・162・173・174・177の6基からなる。ピットの平面形態は不整円形で、断面形態は円筒状を呈する。ピットの長軸は20～30cm、短軸は20～25cm、深さは20cm前後で、全体的に1号ピット列より深く掘り込まれている。南北に平行する小溝は、主軸方位N75° Eで、幅12～13cm、検出面からの深さ4cmである。22・23号小溝が1号ピット列の北側を、24・25号小溝が南側を走り、その溝間は1.7mである。2号ピット列には小溝が伴わないが、ピットの形態が1号ピット列とは異なっており、小溝を伴っていない可能性がある。区画施設と考えられるが、主軸方位を同じくする建物跡等の遺構は周囲から確認されていない。

遺物出土状態：遺物は出土していない。

時期：小溝の埋土がⅢa層に由来していることから中世とした。

3号ピット列（第51図）

位置：24次1区。Ⅱ E07・08グリッド。

調査経過：Ⅳ層上面において、北東-南西方向に並ぶピット列を確認した。北側にもピットを数基確認したが、それらとの関係性は確認できず、1条のピット列として把握した。

重複関係：4号溝跡と重複しており、埋土の状況から4号溝より古いものと判断した。

埋土：単層で、暗灰黄色の砂質土を主体とする。

構造：北東-南西方向に並び、その主軸方位はN82° Eである。東からPit82～87の6基のピットからなる。ピットの平面形態はほぼ円形で、断面形態はすり鉢状を呈する。ピットの直径は20～30cm、深さは6～10cmである。各ピット間は64～94cmで、等間隔ではない。2号溝跡と走行方向が類似していることから関係性が想定される。

遺物出土状態：遺物は出土していない。

時期：詳細な時期は不明であるが、Ⅳ層上面において確認できたことから中世以降と判断される。2号溝との関連が想定されることから近世以降か。

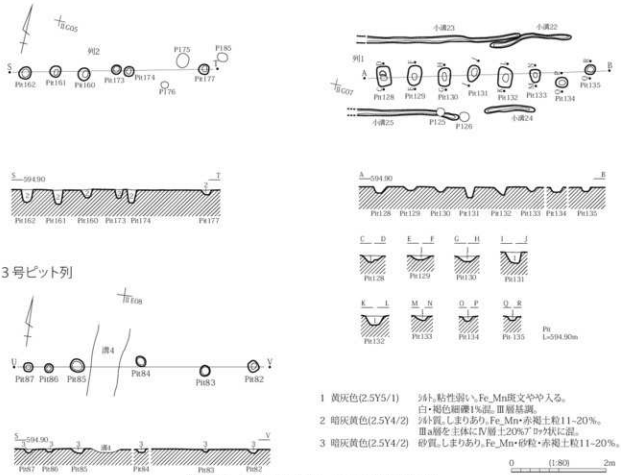
4・5号ピット列（第52図、PL4）

位置：24次2区・28次区。Ⅰ E07～10、Ⅱ E01グリッド。

調査経過：複数の暗黄灰色土主体の細い溝状プランとピットを確認した。検出当初、複数の小溝が密集しているものとみていたが、小溝とピット列が複合していたことがわかった。

重複関係：5号溝跡に切られる。4号ピット列と5号ピット列はピットの重複関係から、5号ピット列

1・2号ピット列



第51図　1・2号ピット列、3号ピット列遺構図

→4号ピット列の順に構築されていると考えられる。

埋土：黄灰色土を主体とし、砂礫を含む。

構造：4号ピット列は西から Pit205・208・110・122・119・117・107・109・115 で構成される。5号ピット列は西から Pit206・207・209・110・120・118・116・106・577・114 で構成される。4・5号ピット列には重複関係がみられ、5号ピット列→4号ピット列の順に構築している。またピット列の南北には小溝が並行して走るが、複数条あることからもピット列と小溝は一連のものとして作り替えられたと想定される。小溝は、幅 12 ～ 13cm、検出面からの深さ 4cm の小規模なものであるが、ピット列の東側では検出できなかった。同様の状況は1・2号ピット列においてもみられる。

遺物出土状態：遺物は出土していない。

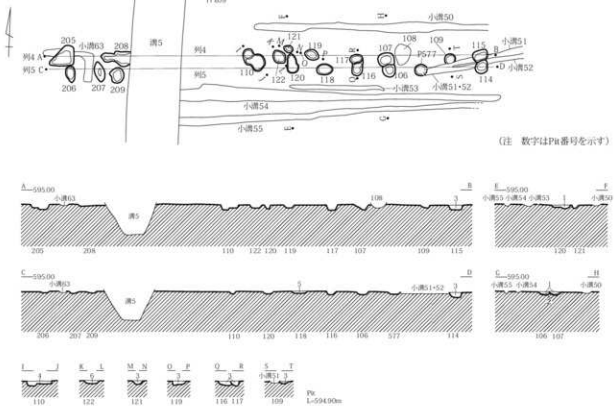
時期：重複関係から2号竪穴状遺構や5号溝跡よりも古い遺構であるが、埋土がⅢ層に由来するものであることから、中世に位置づけられる。

6号ピット列（第52図、PL4）

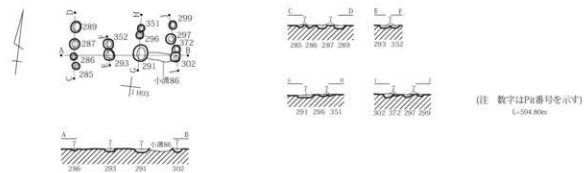
位置：27次調査区。Ⅰ G02・03 グリッド。

調査経過：Ⅳ層上面にあたる第1検出面で、灰色砂質シルトのピットの配列を確認した。13基のピットで構成され、全体として方形を呈する。当初、その南側で多くのピットを検出しており、それらを含めた建物跡が復元される可能性があるため、掘立柱建物跡として調査した。しかし、明確な配列が認め

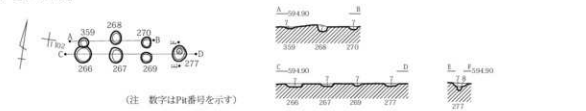
４・５号ピット列



６号ピット列



７号ピット列



1 黒褐色(2.5Y3/2)　砂質,しまりなし,砂礫40%,砂粒21%以上,Fe_Mn11~20%,Fe集積15%.
2 黒褐色(5YR2/2)　ｼﾙﾄ質,しまりあり,Fe_Mn・暗黄灰土粒11~20%,Ⅳ層土を主体に1層土15~20%ﾌﾞﾛｯｸ状に混.
3 黄灰色(5Y5/1)　砂質,しまりあり,Fe集積・砂礫20%,Fe_Mn・砂粒11~20%.
4 黄灰色(2.5Y4/1)　砂質,しまりあり,Fe集積・砂礫20%,Fe_Mn・砂粒11~20%.
5 黄灰色(2.5Y5/1)　砂質,しまりあり,砂礫25~30%,砂粒21%以上,Fe集積20%.
6 黄灰色(2.5Y4/1)　砂質,しまりあり,Fe集積・砂礫20%.
7 灰色(7.5Y6/1)　砂質(ｼﾙﾄ分ｹﾞﾗｲ気味のｼﾙﾄ),しまりあり,Fe斑(2.5Y5/3)25%,中砂5~10%.
8 灰色(5Y6/1)　砂質(ｼﾙﾄ,しまり強い,Mn斑45%,雲母3%,地山ﾌﾞﾛｯｸのFe・Mn層に近いｶﾞﾗｲ土混.

0　(1:80)　2m

第52図　４・５号ピット列、６号ピット列、７号ピット列遺構図

られないことからピット列とした。

重複関係：10 号土坑、86 号小溝を切っており、それらより後に構築されている。

埋土：灰色砂質シルトを主体とする。

構造：他のピット列と同様に方位は東西と推定される。南北に３～４列並んでいるが、一列に並ぶものは南の Pit286・293・291・302 の４基で、主軸方位は N85° W である。ほかに北側の列は西から Pit289・351・296・299 の４基、中央の列は Pit287・352・297 の３基からなると思われる。ピットは直径 20cm の円形または楕円形、検出面からの深さ 5cm 前後、断面形状がすり鉢状の小規模なもので構成されている。

遺物出土状態：遺物は出土していない。

時期：検出面から中世以降と判断される。

７号ピット列（第 52 図）

位置：27 次区。IH・I02 グリッド。

調査経過：Ⅳ層上面において、灰色土の小円形プランが複数みられた。これらのうち、等間隔に直線的に並ぶものを７号ピット列とした。

重複関係：11 号溝跡を切っており、それより新しい。

埋土：ほぼ単層で、灰色砂質シルトを主体とする。

構造：南北に２列並び、北側の列は西から Pit359・268・270 の３基、南側の列は Pit266・267・269・277 の４基で構成される。その主軸方位は N82° E である。ピットの平面形態は楕円形で、断面形態は皿状または円筒状を呈する。その直径は 20 ～ 25cm、深さは 5cm を計測する。南北各列のピットは、64 ～ 72cm の間隔で並んでいる。

遺物出土状態：遺物は出土していない。

時期：11 号溝跡よりも新しいが、中世の可能性がある。

８・９・10 号ピット列（第 53 図、PL4）

位置：28 次区。Ⅰ D02 ～ 06 グリッド。

調査経過：３号溝跡の調査において、その底面で灰色またはオリーブ色のピット列が２・３号溝跡に平行して並んでいるのを確認した。

重複関係：ピット埋土直上に３号溝跡埋土が被覆しており、ピット埋土中に３号溝跡埋土は混入していない。そのため本遺構は３号溝跡より古いか、同時期のものである可能性がある。

構造：東西に並んでおり、南北に並ぶおおむね３条のピット列がみられる。南側より８号ピット列・９号ピット列・10 号ピット列とした。８号ピット列の方位は N80° E。９号ピット列の方位は N81° E。10 号ピット列の方位は N84° E。ピットの規模は径 30 ～ 60cm、検出面からの深さ 10 ～ 15cm である。その平面形態は楕円形、断面形態は円筒状を呈するものが多いが、一部柱の掘方を有し有段のものがある。

埋土：ほぼ単層で、やや溶脱した灰色～灰オリーブ色砂層を主体とする。

遺物出土状態：遺物は出土していない。

時期：３号溝跡よりも古いか、もしくは同時期のものであり、中世に位置づけられる。

10 号土坑（第 54 図）

位置：27 次区。Ⅰ G02・03、Ⅰ H02・03 グリッド。

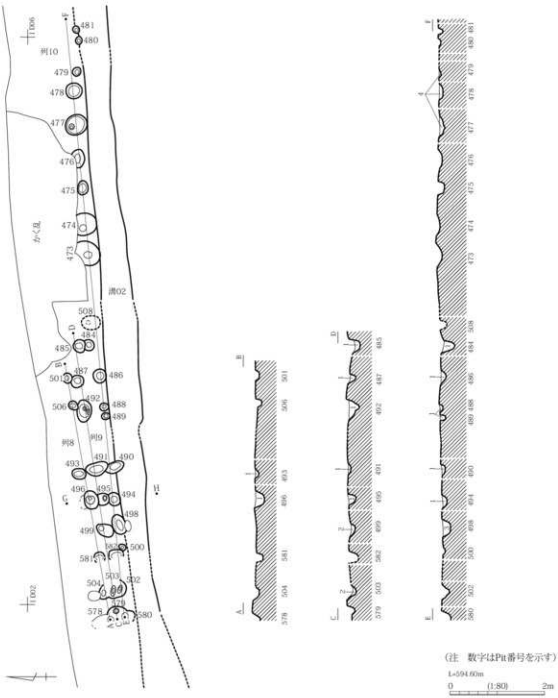
調査経過：Ⅳ層上面において、やや鉄分を多く含んだ黄褐色の長楕円形プランを確認された。

重複関係：６号ピット列、85 号小溝、P368 に切られ、本土坑が最も古い。

埋土：単層で、黄褐色砂質シルトを主体とする。

構造：平面形態は隅丸長方形を呈し、断面形態は皿状を呈し底面は水平である。長軸長 1.54m、短軸長

8・9・10号ピット列



第53図　8・9・10号ピット列遺構図

1.0m、検出面からの深さは3cmである。

遺物出土状態：埋土中から須恵器壺片（第37図147）、不明土師器片が出土しているが、混入とみられる。

時期：中世か。

25号土坑（第54図）

位置：23次B区・C区。Ⅴ A04・05グリッド。

調査経過：黄灰色土の楕円形プランが確認された。

重複関係：P532に切られ、それより古い。

埋土：黄灰色・暗灰黄色シルトを主体とする。埋土直上にはⅢ a 層が堆積していた。

構造：平面形態は円形に近い不整円形で、断面形態はタライ状で底面から湾曲しながら立ち上がる。また北側中段にはテラス状の段が認められた。長軸1.25m、短軸1.0m、深さ30cmを計測する。

遺物出土状態：埋土中から土師器甕の小片が出土したが図化していない。

時期：埋土直上にⅢ a 層が堆積していることから、中世に位置づけられる。

33号土坑（第54図）

位置：23次C区。Ⅷ J04グリッド。

調査経過：Ⅳ層上面の615号住の北東隅で黄灰色土の広がりを確認した。615号住の北東隅からは被熱した礫が出土しているが、本土坑内に焼土等がなかったこともあり、関連しない遺構として調査した。

重複関係：613a号住・615号住を切っており、本土坑が最も新しい。

埋土：単層で、黄灰色シルトを主体とする。

構造：平面形態は円形、断面形態はタライ状を呈する。長軸長0.94m、短軸長0.93m、検出面からの深さ22cm。

遺物出土状態：埋土中から、古墳前期の壺の破片が出土したが、混入とみられる。

時期：遺構の重複関係および埋土の状況から中世とみられる。

P513（土坑）（第54図）

位置：23次B区。Ⅴ B04グリッド。

調査経過：Ⅳ層上面において、鉄・マンガンがやや多く集積する暗灰黄色の円形プランを確認した。

重複関係：なし。

埋土：単層で、暗灰黄色シルトを主体とする。

構造：平面形態は円形で、断面形態はタライ状を呈する。直径0.36m、検出面からの深さ10cm。

遺物出土状態：埋土中から須恵器壺（148）が出土しているが、混入とみられる。

時期：Ⅳ層上面において確認されたことから中世とみられる。

P533（土坑）（第54図）

位置：23次C区。Ⅷ J03グリッド。

調査経過：Ⅳ層上面で、鉄・マンガンがやや多く集積する暗灰黄色の円形プランを確認した。

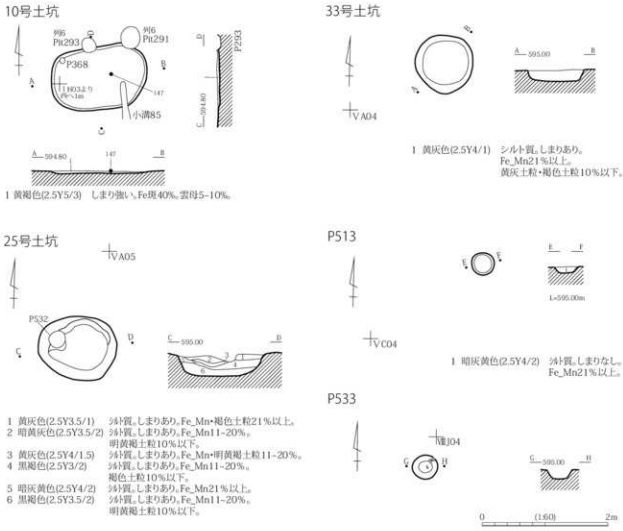
重複関係：なし。

埋土：単層で、暗灰黄色シルトを主体とする。

構造：平面形態は円形で、断面形態はタライ状を呈する。長軸長0.41m、短軸長0.39m、検出面からの深さ12cm。

遺物出土状態：埋土中から山茶碗（158）が出土している。

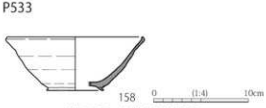
時期：中世。



第 54 図　10 号土坑、25 号土坑、33 号土坑、P513、P533 遺構図

3　遺物（第 55 図、PL12）

中世・近世の遺構からは、混入と思われる古墳・古代の遺物が出土しており、当該期の遺物は少ない。そのなかで P533 から山茶碗（158）が出土している。体部は直線的に立ち上がり、高台は小さく、畳付には籾殻圧痕が認められる。胎土に砂粒が含まれないことから、東濃産とみられる。13 世紀中頃に位置づけられる。



第 55 図　中世土器実測図

第７節　自然科学分析

24･27 次では、放射性炭素年代測定を行った。また、23 次 B･C 区から西へ向かうほど遺構密度が減少し、検出遺構の年代にも違いがみられた。その要因として考えられる古環境を探る目的で珪藻・花粉・プラントオパールの各分析を実施した。

分析内容の詳細は、添付 DVD に報告書を掲載した。

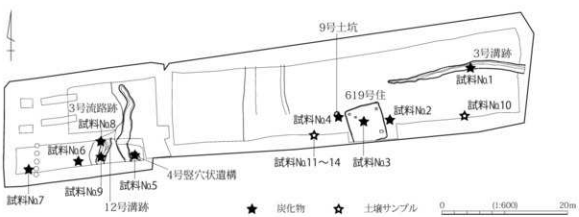
１　放射性炭素年代測定

(1)　試料採取地点（第 56 図）

遺構内５点、流路２点、遺構外２点の計９点の、いずれも炭化物を対象とした。

試料№１・４を採取した３号溝跡および９号土坑は遺物を伴わないが、試料№１は埋土下位から出土していることから遺構の使用年代に近い時期と想定され、遺構年代を推定することを目的として年代測定を行った。試料№４は遺構の南東の一画で集中出土した炭化物であり、流れ込みによるものではなく、遺構使用段階の底面に伴うものと判断して採取した。

試料№２・３・５・６･９は、土器と共伴しており、実年代の判定材料とすることを目的とした。試料№６・９は遺物・炭化物ともに流れ込みの可能性が想定されたので、それぞれ対比試料№７・８を採取した。



第 56 図　炭化物・土壌サンプル採取地点

(2)　分析結果と所見（表 20、第 57 図）

３号溝跡　試料№１の年代は、暦年較正年代（２σ、以下同じ）で 13 世紀後半～ 14 世紀前半（68%）、14 世紀中～後半（27%）という二つの結果が出た。３号溝跡は、鎌倉～室町時代という広い年代幅でとらえれば、おおむね被覆層から推定した遺構年代と矛盾がない。

９号土坑　619 号住の東のグリッドⅥ層土中で採取した試料２は、１世紀後半～３世紀前半という値を示している。試料２は古墳時代前期～中期の土器がまとまって出土している地点で採取したことから矛盾があり、Ⅵ層の年代を確定できない。そのⅥ層を掘り込んでいる９号土坑は、Ⅵ層と同一時期またはそれより新しいとみられるが、試料№４も１世紀後半～３世紀前半という結果が出ている。しかし、１～３世紀という時期は暦年較正を行う際の問題が指摘されている時期であり（中村ほか 2012 など）、分析担当者からも次のような報告をうけている。「１～３世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線 IntCal に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある（中略）。その日本版較正曲線を用いてこれらの試料の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新し

表 20　放射性炭素年代測定結果

次	試料No.	採取地点	遺構の時期	相対年代の根拠	δ 13C 補正 Libby Age (yrBP)	暦年較正年代 (yrBP±1σ)	暦年較正年代(cal) 1σ	暦年較正年代(cal) 2σ	測定番号
24	1	3 号溝跡 埋土 3 層	中世	Ⅲ a 層 被覆	680 ± 20	684±24	1,278calAD–1,299calAD (54.2%) 1,370calAD–1,380calAD (14.0%)	1,271calAD–1,310calAD (68.1%) 1,360calAD–1,388calAD (27.3%)	IAAA-141393
24	2	Ⅱ F08 Ⅵ 層	不明 (古墳中期か)	出土土器 (古墳前～中期)	1,880 ± 20	1,875±23	79calAD–140calAD (60.0%) 160calAD–165calAD (2.4%) 197calAD–208calAD (5.8%)	75calAD–215calAD (95.4%)	IAAA-141394
24	3	619 号住 埋土 11 層	古墳中期	出土土器 (古墳中期)	1,640 ± 20	1,643±24	384calAD–425calAD (68.2%)	340calAD–431calAD (87.6%) 492calAD–530calAD (7.8%)	IAAA-141395
24	4	9 号土坑 埋土	不明 (古墳中期か)	Ⅵ層を 掘り込む	1,880 ± 20	1,878±24	76calAD–140calAD (63.3%) 197calAD–207calAD (4.9%)	72calAD–216calAD (95.4%)	IAAA-141396
27	5	4 号竪穴状 遺構	古墳後期	出土土器 (須恵器壺 59)	1,565 ± 20	1,567±21	430–492calAD (57.9%) 513–517calAD (3.5%) 529–537calAD (6.8%)	424–544calAD (95.4%)	PLD-30177
27	6	3 号流路跡 (IH02)	～古墳後期	出土土器 (土師器坏 137)	1,455 ± 20	1,454±19	596–638calAD (68.2%)	570–645calAD (95.4%)	PLD-30178
27	7	3 号流路跡 (IV I09)	～古墳後期	同上	1,560 ± 20	1,561±18	431–492calAD (59.5%) 530–540calAD (8.7%)	426–545calAD (95.4%)	PLD-30179
27	8	12 号溝跡	弥生～ 古墳前期	Ⅵ層 被覆	1,610 ± 30	1,609±31	401–433calAD (28.1%) 459–463calAD (4.4%) 489–533calAD (35.7%)	391–539calAD (95.4%)	PLD-30180
27	9	12 号溝跡	弥生～ 古墳前期	出土土器 (弥生栗林)	2,220 ± 20	2,220±19	360–351calBC (6.4%) 301–271calBC (22.7%) 263–210calBC (39.0%)	370–341calBC (13.4%) 326–204calBC (82.0%)	PLD-30181

※試料形態はすべて炭化物

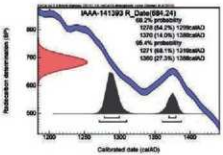
くなる可能性がある。」(抜粋) したがって、本報告では分析結果の数値を採用することには慎重にならざるを得ない。

619 号住居跡　試料№3 の年代は 4 世紀中～ 5 世紀前半と、619 号住居跡出土土器群と同じ古墳時代中期を示しており、おおむね想定した結果が出ている。

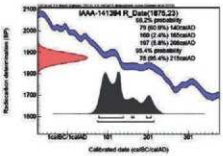
3 号流路跡　試料№6 は 6 世紀後半～ 7 世紀半ばと、共伴する完形の土師器坏 (第 32 図 137) と矛盾しない年代を示している。また、試料№6 よりも流路中央に近いと想定される地点から採取した試料№7 は、5 世紀前半～ 6 世紀半ばと試料№6 よりわずかに古い年代を示している。以上から、3 号流路跡はおおむね古墳時代後期までは機能していたと考えられる。

4 号竪穴状遺構　試料№5 の年代は 5 世紀前半～ 6 世紀半ばという、共伴する須恵器壺 (第 30 図 59) と矛盾しない結果が出た。しかし 4 号竪穴状遺構は基本土層のⅣ層を掘り込んでおり、Ⅳ層は 3 号流路跡を被覆している。3 号流路跡は上述したように 7 世紀半ばまで流れていたとみられることから、それを被覆するⅣ層の形成は、3 号流路跡の流れが停止した 7 世紀後半以後と判断できる。また、試料№5 を採取した土層のレベルは、試料№6 よりも高い位置にある。以上から、4 号竪穴状遺構から出土した須恵器と試料№6 は、いずれも混入によるものと考えられる。

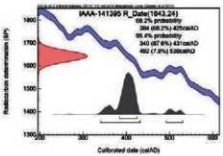
12 号溝跡　12 号溝跡からは、土器を伴わない試料№8 と、栗林式期とみられる弥生土器直下より試料№9 を採取した。試料№8 は 4 世紀末～ 6 世紀前半という結果が出ているが、試料№9 は紀元前 4 世紀前半～紀元前 3 世紀末という結果が出ている。土器と試料の年代差も大きく、また土器自体も破断面が激しく摩滅し小片である。以上から、土器片も試料№9 も流れ込みの可能性が高い。また試料№8 と 9 の示す値の差が大きく、いずれが遺構年代を示しているか判断することはできない。



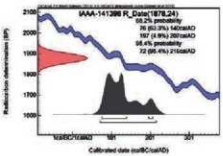
試料No.1



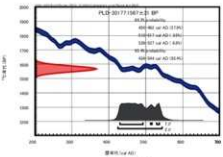
試料No.2



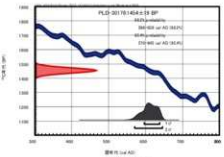
試料No.3



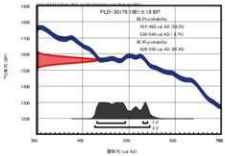
試料No.4



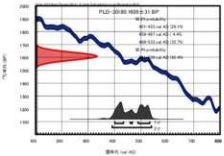
試料No.5



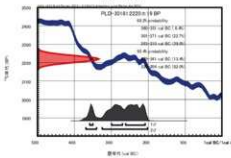
試料No.6



試料No.7



試料No.8



試料No.9

第 57 図　放射性炭素年代測定　暦年較正グラフ

２　珪藻・花粉・プラントオパール分析

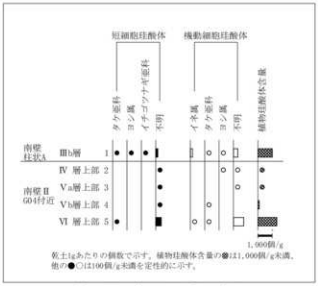
⑴　試料採取地点（第 56 図）

24 次１区南壁の東側Ⅲｂ層（試料№ 10）、24 次調査区中央部の南壁Ⅳ層（試料№ 11）、Ⅴａ層（試料№ 12）、Ⅴｂ層（試料№ 13）、Ⅵ層（試料№ 14）から採取した土壌５点を対象とした。

⑵　分析結果と所見（第 58、59 図）

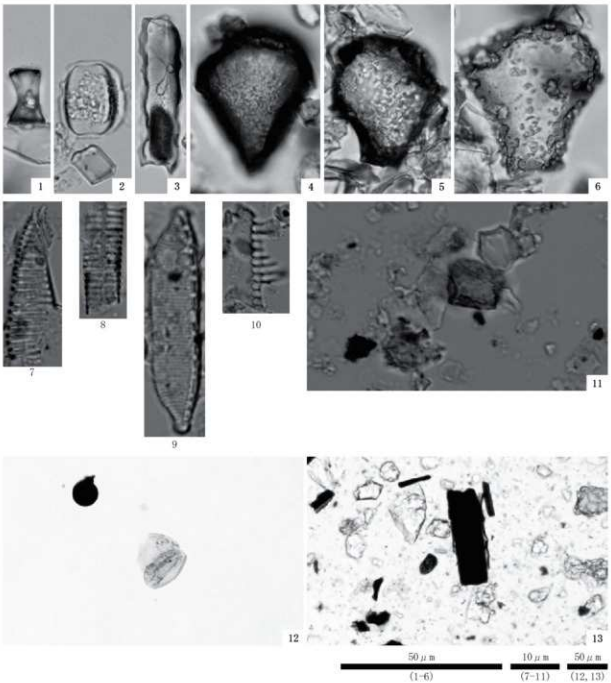
珪藻分析では、珪藻化石自体が少なく、わずかに認められた化石も多くは半壊状態であることから、化石が分解するような陸域の好気性環境であったという結果が得られた。このことは、戦前に測図された地図によると調査地点は一面の桑畑であり（第２章第１節）、現在でも地下水位が低い立地であることから肯ける。

花粉化石やプラントオパールも遺存状態が悪く、わずかに認められたものも溶解していた。木本類は、Ⅲｂ層ではマツ、Ⅳ層上面で河畔林を形成するクマシデ－アサダ属が認められた。草本類では、栽培植物のイネ属が認められたものの含量は非常に低い。このため、稲作に伴うものではなく、藻などの利用に伴う結果の可能性が指摘されている。また、河川の氾濫を多く受けたこともあって土壌に取り込まれなかったことも要因として考えられると報告されている。



第 58 図　プラントオパール含量

以上から、調査地周辺は弥生時代から現代に至るまで好気性環境下にあって、ときおり受ける河川（田川、奈良井川）氾濫の影響を受けつつも、水はけのよい、水田稲作には適さない環境であったと結論づけられる。



1. タケ亜科短細胞珪酸体（南壁Ⅱ G04付近　Ⅵ層上部；5）
2. ヨシ属短細胞珪酸体（南壁柱状A　Ⅲb層；1）
3. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（南壁柱状A　Ⅲb層；1）
4. イネ属機動細胞珪酸体（南壁柱状A　Ⅲb層；1）
5. イネ属機動細胞珪酸体（南壁Ⅱ G04付近　Ⅵ層上部；5）
6. タケ亜科機動細胞珪酸体（南壁柱状A　Ⅲb層；1）
7. ***Cymbella*** **spp.**（南壁柱状A　Ⅲb層；1）
8. ***Fragilaria*** **spp.**（南壁柱状A　Ⅲb層；1）
9. ***Hantzschia amphioxys*** **(Ehr.) Grunow**（南壁Ⅱ G04付近　Ⅳ層上部；2）
10. ***Pinnularia*** **spp.**（南壁柱状A　Ⅲb層；1）
11. 珪藻分析プレパラート内の状況（南壁柱状A　Ⅲb層；1）
12. 花粉分析プレパラート内の状況（南壁柱状A　Ⅲb層；1）
13. 花粉分析プレパラート内の状況（南壁Ⅱ G04付近　Ⅴb層上部；4）

第 59 図　プラントオパール、珪藻化石、花粉分析プレパラート内の状況

第４章　総　括

第１節　出川南遺跡を巡る古墳出現期の土器

１　分析の目的

本調査において、古墳時代の幕開けの時期とされる３世紀後半～４世紀の竪穴建物跡を確認した。そこからは在来の弥生土器とは異なる形態の「外来土器」と呼ばれるいわゆる土師器が出土している。東日本において外来土器と呼ばれる土師器は、主に東海西部地域（伊勢湾沿岸の地域）や畿内地域（大和盆地や河内平野を中心とした地域）、北陸地域で作られたもの、もしくはその形態を模倣したもので、古墳出現期に広範囲にわたっている。すなわち外来土器とは、それぞれの地域において弥生土器からの系譜がみられない外部から到来（模倣も含む）した土器の総称で、さらにその起源となる地域名を冠して「東海系土器」「畿内系土器」「北陸系土器」と呼称している。

外来土器が広がる現象は、古墳の広がりとほぼ同時期に起こることから、古墳時代の幕開けと大きく関係しているとみられている。特に古墳（前方後円墳・前方後方墳）の起源とされている畿内地域や東海西部地域の土器が各地に広がっている。そこで、そうした外来土器の起源がどこに求められるのか、ということはその当時の人・物・墓制、さらには政治体制がどこからやって来たのかという評価にも将来的につながってくるのである。

出川南遺跡で出土した外来土器が、どこの地域に起源をもつものであるのかという分析は、今回の調査で出土した資料を評価する上で欠かすことのできない事項であり、以下その所見を述べていく。

２　出川南遺跡出土の土器

⑴　時期

出川南遺跡においては613号住居跡と618号住居跡から当該期の土器が出土している（第28・29図）。

613号住居跡からは甕21点、壺７点、高坏３点、器台４点が出土している。甕が圧倒的に多く、その甕には受口状口縁台付甕（17・18・19・20・21）・単口縁甕（14）のほかに、南信の中島式のもの（31）がある。また32・33・34の平底甕は、底部からやや外反気味に立ち上がっており、底部から内湾気味に立ち上がるいわゆる土師器の甕とは異なり、この一帯の弥生土器の形態に近いものと判断できる。

618号住居跡からは甕９点、壺１点、器台１点が出土している。この竪穴建物跡も甕が最も多く、その甕には受口状口縁台付甕（44・45・46）と単口縁甕（47・48・49）がある。

まず、この出川南遺跡出土の土器がどの時期のものであるかみてみる。この時期（３世紀後半～４世紀）の土器は、畿内地域の土器型式である庄内式と布留式とに大きく分けられ、各地域の編年は最終的にはその庄内式・布留式のどの時期に該当するかということにおおむね収束する。庄内式の後に布留式が登場するのであるが、布留式の時期を「古墳時代前期」とし、その前段階として庄内式の時期を「古墳時代早期」「古墳時代初期」もしくは「弥生時代終末期」などと呼ぶことがある[1]。布留式の特徴として、「小型精製三種」と呼ばれる小型坩（小型丸底土器、小型丸底壺などともいう）・鉢・小型器台の３つがそろっていることが挙げられてきた。そのなかでも特に小型坩は各地で認められ、その出現は、布留式に併行する時期とみることができる。

613号住居跡と618号住居跡の出土土器をみると、小型坩が認められないことから、庄内式の時期のものであり、松本盆地南部における宇賀神誠司氏の編年では、およそⅠ期に収まる（宇賀神1993）。さらに

613号住居跡では在来弥生土器の様相をもつものがあるのに対して、618号住居跡ではそのような要素は少ない。唯一、618号住居跡の壺（52）は、大型の底部を有し、胴部が比較的急角度で立ち上がることから在来弥生土器の形態と類似するものである。しかし、外面調整は弥生土器とは異なりハケメ調整を残しており、土師器との関連が強い。618号住居跡は、このように土師器の影響が顕著にみられる在来弥生土器の系譜をもつものを有していることから、Ⅰ期の新段階に位置付けられる。そして、613号住居跡は、618号住居跡より在来弥生土器の系譜をもつものを多く有しており、それより先行する時期とみられるが、櫛描文を施すものが認められないことなどから Ⅰ期中段階に位置づけられる[2]。

つまり、本調査において出土した土器は、各地で大型前方後円墳が築造される布留式の時期よりも前のものであり、東日本でも最古級の墳墓である弘法山古墳との関係性が十分に考えられる。

(2) 周辺遺跡における土器の様相

出川南遺跡で確認された2軒の竪穴建物跡出土土器の特徴として、受口状口縁台付甕が多く出土していることが挙げられる。このような特徴が、周辺の遺跡においても認められるものかみてみる。

第60図に挙げたものはいずれも小型坩を伴わないものであり、出川南遺跡613号住居跡・618号住居跡とおおむね同時期の資料である。出川西遺跡10次34号住居跡では単口縁台付甕（1～4）を主体としている。向畑遺跡Ⅰ-36号住居跡では、受口状口縁台付甕（12・13）のほかに単口縁甕（14）と弥生土器の甕（19）がみられる。また向畑遺跡Ⅰ-37号住居跡では、単口縁台付甕（31）と単口縁平底甕（32）のほかにS字状口縁台付甕（30）と弥生土器の甕（35）がみられる。向畑遺跡Ⅲ-66号住居跡では受口状口縁台付甕（43～45）が多く、その他に叩き甕（47）と弥生土器の甕（48）が認められる。

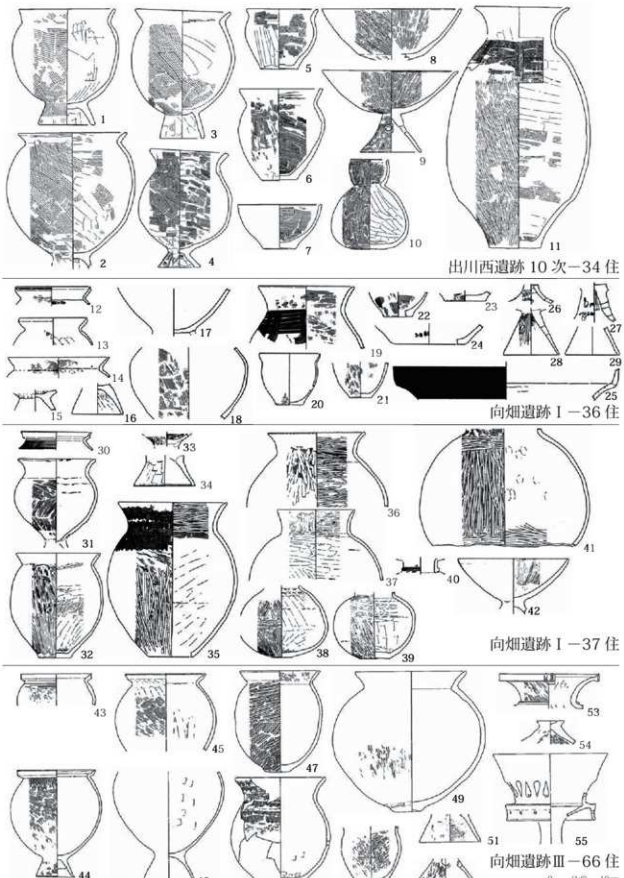
このように周辺の遺跡においても甕は、受口状口縁台付甕が多く、それに単口縁甕も伴うというあり方がみられる。ただし、そのなかで出川西遺跡10次34号住居跡の単口縁台付甕を主体としているあり方は、その他のものとは異なっている。また向畑遺跡では、Ⅲ-66号住居跡以外にも出川南遺跡では認められなかった叩き甕が多く出土している。このように出川南遺跡一帯の遺跡群は、受口状口縁台付甕と単口縁台付甕が多いといえるものの、集落単位でその土器様相に差異があると指摘できる。

3　出川南遺跡の受口状口縁台付甕と単口縁台付甕について

前項でみたように出川南遺跡やその周辺遺跡の外来土器には、受口状口縁台付甕と単口縁台付甕が共通して認められている。そのため両者の系譜をたどることによって、出川南遺跡とその周辺遺跡における外来土器の系譜の大筋がわかってくると判断される。そこで受口状口縁台付甕と単口縁台付甕の系譜についてみていきたい。

1　時代・時期の各呼称についてその一つ一つを述べることはしないが、古墳時代の始まりを奈良県箸墓古墳の築造などどこに求めるか、そしてその年代はいつか、ということに対して必ずしも研究者間で一致しているわけではない。平たくいえば、布留式の段階を古墳時代とみることはおおむね共通しているが、それ以前の庄内式の時期をどのように評価するかによって「古墳時代早期」「古墳時代初期」「弥生時代終末期」といった呼称が作成されるのである。ここでは、出川南遺跡の資料は弥生時代から古墳時代への過渡期と関わる資料であると理解していただければよい。また新たな用語の作成はより定義を曖昧にすることから、庄内式に併行する時期も「古墳時代前期」としている場合がある。本報告書中においても特に断りのない限り、「古墳時代前期」としている。

2　宇賀神氏による編年は、在来弥生土器の型式学的変遷を一つの基軸としている。そして外来土器については、他地域の編年すなわちその外来土器の起源とされる地域の編年を援用して位置付けているものもある。資料が増加している現状においては、外来土器もこの出川南遺跡一帯の出土土器の変遷の中でとらえる必要はある。いずれにせよ宇賀神氏の編年において本資料はⅠ期に位置付けられる。



第 60 図　出川南遺跡周辺における出土土器の様相

(1) 受口状口縁台付甕

受口状口縁台付甕とは、口縁部に屈曲部をもち立ち上がる形態の台付甕のことである。本地域における弥生土器は平底甕であることから、台付甕はこの時期に新たに登場した外来土器といえる。

しかし、そもそも受口状口縁台付甕と関連する「受口状口縁甕」は、以前は近江地域（琵琶湖周辺の地域、旧国の近江を中心とした範囲）に系譜をもつ土器とされたり、東海西部地域を起源とするＳ字状口縁台付甕（口縁部がＳの字状になる甕で、受口状口縁甕と同様、口縁部に屈曲部を有する）を包括したり、研究者によって指し示すものが違っていると指摘されてきた（比田井 2000 など）。さらに近年では胎土分析によって、伊勢地域の受口状口縁甕の産地同定も行われているが（穂積 2005）、それはあくまでも製作場所がどこかという問題である。各形態がどの地域のものを起源としているのかといったことや、その地域にどのような形態のものが多いか、といったことはいまだ体系的な整理がなされていない[3]。そのなかでも伊勢地域では以前から受口状口縁甕が認められており、特に近江地域のものとの関係性については整理が必要である。つまり、受口状口縁甕は近江から東海西部地域にかけて起源が求められている。ここでは、まず出川南遺跡出土の受口状口縁台付甕を分類した後、その形態がどの地域に多いかをみることによって系譜の大筋について把握していきたいと思う。

出川南遺跡出土の受口状口縁甕は、口縁部から頚部にかけての形態から大きく４つに分けることができる（第 61 図）。

受口状口縁台付甕

Ａ類：頚部は屈折気味に強く屈曲したのち、口縁屈曲部に向かって大きく開く。口縁屈曲部からは直立もしくはやや内傾気味に立ち上がる。口縁端部は丸く収めるものと内削ぎ状に面取りを施すものがある。口縁屈曲部には施文されず無文である。613 号住居跡の 20・21 にみられる。

Ｂ類：頚部は丸く短く屈曲し口縁屈曲部へ至る。口縁部は屈曲部から外反気味に短く立ち上がる。口縁端部は厚く、丸く収める。さらに口縁屈曲部にキザミなどの加飾を施すものと無文のものがある。613 号住居跡の 17・19、618 号住居跡の 44・45、遺構外の 91 にみられる。

Ｃ類：頚部が丸く短く屈曲し口縁屈曲部へ至る点はＢ類に類似する。ただし口縁部は外反して大きく開き、また口縁端部は薄く仕上げる。618 号住居跡の 46 にみられる。

Ｄ類：頚部は「く」の字に屈曲し、口縁屈曲部に向かって長く伸びる。口縁屈曲部からの立ち上がりは短く、直立するか外反する。さらに口縁屈曲部にキザミなどの加飾を施すものと無文のものがある。613 号住居跡の 18、614 号住居跡の 42、遺構外の 92 にみられる。

このように一口に「受口状口縁台付甕」といってもその口縁部形態の細部は様々であり、一つの系譜に収まらないものと考えられる。以下、一部は比田井克仁氏の成果（比田井 2000）を参考にしながら、出川南遺跡出土の受口状口縁台付甕がどの地域のものと類似しているか指摘していく。

Ａ類は、口縁部が大きく開くという特徴がみられる。その口縁部形態だけをみると、近江系甕と呼ばれる近江湖南地域（琵琶湖の南部、遺跡は野洲川流域に広がる）にある受口状口縁平底甕の口縁部が想起される。ただしいうまでもなく、出川南遺跡のものは台付甕であり、口縁部以外は異なる形態のものである。このＡ類は東海西部地域のなかでも尾張以東にはみることができず、おそらくこの近江湖南地域から伊勢地域のなかでとらえることができるのではないかと想定される。

3 「受口状口縁甕」はその口縁部形態のみによって呼称されたものであるために、広く用いられる傾向がある。さらに「受口状口縁甕」の典型である近江系平底甕も各地に広がっており、その各地に広がったものをそれぞれの地で模倣されたと考える向きもあり、その系譜の追究はより複雑になっている。

第61図　出川南遺跡出土の受口状口縁甕分類図

B類は、頚部から口縁屈曲部までが長くないという特徴がみられる。比田井氏のA類におよそ該当する。このような形態のものは伊勢地域に起源が求められ、西三河地域（旧国三河の西部、遺跡は矢作川・鹿乗川流域に集中する）へと広がるが、尾張地域では受け入れないとしている（比田井2000）。

C類は、比田井氏のC類に類似し、そのなかで口縁屈曲部に施文を施さないものは西三河地域に起源が求められるとしている。

D類は、比田井氏のB類との関連性が高い。伊勢地域に起源が求められるとしているが、受口状口縁台付甕が多い西三河地域にも多く認めることができる。

このようにみてくると、出川南遺跡の受口状口縁台付甕は、西三河地域に起源をもつもしくは西三河地域で多く認められるもの（B・C・D類）と、西三河地域ではほとんど認められないもの（A類）とがあり、大きく2つに分けられる。

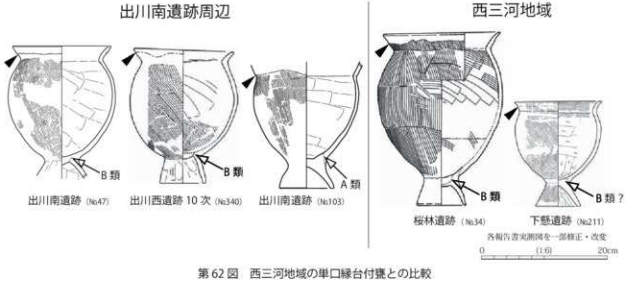
(2) 単口縁台付甕

単口縁甕とは、口縁部がまっすぐもしくはわずかに外反しながら立ち上がる形態の甕で、台付甕と平底甕とがある。先述したように当地における在来弥生土器は平底甕であることから、台付甕は外来土器としてみることができる。しかし、平底甕には613号住居跡のところでも触れたが、この一帯の弥生土器の系譜を引くものもある。そこで外来土器である単口縁台付甕（「く字状口縁台付甕」とも呼ばれる）についてみていく。

出川南遺跡出土の単口縁台付甕をみると、製作技法に特徴的なものが認められる（第62図）。その代表例として618号住居跡の47を取り上げる。この単口縁台付甕をみると、口縁中位に直線的でない不整な粘土接合痕がみられる。同様の接合痕は、613号住居跡の14、618号住居跡の48、遺構外の103にもみられ、出川西遺跡10次34号住のNo.340などでもみることができる。なかでも特に出川西遺跡10次34号住のNo.340は、口縁中位の接合痕を境に上下で色調が大きく異なっている。この色調の違いは、成形の途中で乾燥を挟むなどの一度作業を止めた可能性が想定される。通常の単口縁甕には、口縁中位に接合痕はみられず、口縁部を作る粘土紐は頚部付近に接合痕をもち、かつ一度作業を止めたような痕跡もみられないのである。

ではそのような単口縁台付甕の系譜をどこに求めることができるのかみていきたい。東海西部地域のなかでも西三河地域は単口縁台付甕（く字状口縁台付甕）が多い地域である。その西三河地域のなかにおいて桜林遺跡（愛知県安城市）のNo.34や下懸遺跡（同市）のNo.211をみると、まず口縁部中位に同様の接合痕を認めることができる。

さらに口縁部の調整をみると、口縁部にもハケメを残している。東海西部地域をはじめこの時期のハケ



第62図　西三河地域の単口縁台付甕との比較

メ調整を行う多くの甕は、頚部屈曲部を始点として胴部に向かってハケメを施し、頚部屈曲部より上すなわち口縁部はナデ調整で仕上げている。つまり頚部屈曲部を意識し、その上（口縁部）と下（頚部以下）とで調整方法を変えているのである。しかし、先の二つの甕をみると、頚部屈曲部はさほど意識されておらず、それどころか口縁部を始点としてその終点が頚部下にまで及ぶハケメもみられる。さらにいえば、口縁中位の接合痕を境にその上はナデ調整で仕上げており、調整方法がその接合痕の上と下とで異なっている。そのような視点で再度、出川南遺跡出土の単口縁台付甕をみると、613号住居跡の14、618号住居跡の48、遺構外の103においても同様に口縁中位の接合痕より上にナデ調整を施し、それより下をハケメ調整で仕上げている。このように技法の細部においても西三河地域のものと類似点が認められる[4]。

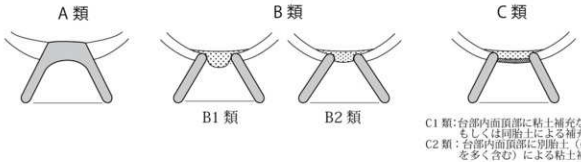
その他、本遺跡出土の台付甕は台部の製作技法にも西三河地域の台付甕との類似点をみることができる。出川南遺跡出土台付甕における台部の製作技法は、大きく以下の3つに分類される（第63図）。

台部製作技法

A類：内面塊形の台部を作り、その側面から胴部を製作するもの。台部内面は平滑に仕上げられる。胴部との接合面は幅広にするという特徴がみられる。

B類：帯状の粘土を円錐形に巻くことによって成形するもの。円錐先端部分が胴部底もしくは台部内面頂部にあたるが、そこは粘土補充によって塞がれる。特に胴部底側から粘土補充を行っており、台部内面側へホゾ状の粘土が大きく突出するものをB1類とする。一方、ナデ調整を加えるなどしてホ

4　618号住居跡の47は口縁部にハケメ調整を施しておらず、頚部以下にハケメ調整を施している。詳しくみると、口縁部にナデ調整を行った後に、胴部のハケメ調整を行っている。ところが口縁中位に接合痕を残す甕以外の東海地域をはじめ多くの甕は、胴部のハケメの方を先に施し、その後に口縁部にナデ調整を行っているのが通常である（口縁部のナデ調整は、実際には頚部屈曲部にまで及ぶため胴部ハケメ調整との切り合いを観察することができる。すなわち頚部屈曲部において胴部のハケメが口縁部のナデによって消されていることが確認され、胴部ハケメ→口縁部ナデの順に調整していることがわかる）。つまり通常のハケメ調整を行う甕とは調整方法が異なっているといえる。また出川南遺跡の受口状口縁台付甕のなかにも613号住居跡の18・19のように口縁部から頚部以下にかけてハケメ調整が及ぶものがある。これは在来的な製作技法のなかで受口状口縁台付甕を作った結果と考えられるが、その在来的製作技法の起源として先の口縁部中位に接合痕を有する単口縁甕の製作技法が想定される。ただしその製作技法を総合的に論じることは議論が多岐にわたるため、ここでは西三河地域の一部の土器製作技法を取り入れながらも、その技法をどの器種に用いるかという技法の使われ方が西三河地域とは異なる。つまり、そこに出川南遺跡の独自性がみられるという点を指摘するにとどめておく。



第63図　台付甕の台部製作技法

ソ状粘土を平滑に仕上げ突出させないものをB2類とする。

C類：台部は粘土紐積み上げで成形する。そのため台部内面頂部は、広めの平坦面をもち、A類やB類とは形態が異なる。胴部底は粘土補充によって塞ぐが、台部内面側は平滑に仕上げる。その仕上げ方によってさらに2つに分けられる。まず、台部の内面頂部には粘土を補充しないか、本体と同じ胎土による補充を行うものをC1類とする。一方、台部の内面頂部に砂粒を多く含む本体とは異なる粘土を補充するものをC2類とする。C2類はS字状口縁台付甕に特徴的な製作技法として広く知られている。

このような台部製作技法と甕の組み合わせについてみていくと、受口状口縁台付甕には、B2類・C類がみられる。そして単口縁台付甕については、A類とB1類が現状では確認することができる。特に先の接合痕を有する単口縁台付甕である618号住居跡の47や出川西遺跡のNo.340ではB1類の台部を有しており、ホゾ状の粘土が大きく突出している（第62図）。

一方、西三河地域の桜林遺跡のNo.34は、台部製作技法B1類であり、下懸遺跡のNo.211の台部製作技法はB2類とみられる（第62図）。B類のようなホゾをもつものは、弥生時代後期の箱清水式の高坏にもみることができるため、弥生土器の技法の系譜をもつものととらえられかねない。しかし、このように西三河地域の甕にも認められており、台部製作技法B類は西三河地域を経由して入ってきた技法と考えらえる[5]。またそもそも弥生土器の高坏は坏部底に脚部を接着させており、台部側面に胴部との接着面をもつ台付甕の製作方法とは異なっているのである。

このように出川南遺跡の単口縁台付甕は、西三河地域のものと多くの共通点を見出すことができる。ただし西三河地域における単口縁台付甕のバリエーションは非常に豊富で、またそれぞれの消長も検討していかなくてはならないが、その中でなぜこの形態のものを選択したのかは今後の課題となる。

4　まとめ

出川南遺跡出土土器について分析を行った結果、以下のことがわかった。

①出川南遺跡で出土した土器は、現状において編年の再構築は必要であるが、宇賀神編年のⅠ期に位置付けられ、おおむね庄内式と併行する時期のものであり、東日本でも最古級の古墳である弘法山古墳との関連が十分想定される。

②出川南遺跡およびその周辺では、甕に受口状口縁台付甕と単口縁台付甕を多く用いるという特徴がみら

5　東海地域の台付甕の製作技法をまとめたものはいくつかあるが（赤塚1990、村木2006など）、それらをみると台部製作技法のA～C類すべてが東海地域において認められる。つまりいずれの製作技法も東海地域にその系譜をもつとみられるのである。

れるが、単口縁台付甕が主体となったり（出川西遺跡）、叩き甕を多く有したり（向畑遺跡）というように、集落または遺構によって差異が認められる。

③出川南遺跡で出土した土器は、大きくは西三河地域との関係性が指摘できる。さらに単口縁台付甕の分析では、製作技法といった土器の細部についても西三河地域のものと共通していることが分かった。

④西三河地域と類似するものはあるが、例えば西三河地域にあるバリエーション豊富な単口縁台付甕（く字状口縁台付甕）のうち取り入れているのは一部の形態のものであり、すべての形態のものを導入しているわけではない。

②に関して、西三河地域との交流は、出川南遺跡周辺の遺跡でもみることができる。例えば向畑遺跡では叩き甕が多く出土している。叩き甕の起源は畿内地域に求められるが、西三河地域でも多く出土しており、西三河地域の土器群の特徴として挙げられる。そのことから向畑遺跡の叩き甕は、西三河地域との関連が想定されているのである[6]。しかし、出川南遺跡では同じ西三河地域の影響が指摘できるにもかかわらず、叩き甕は認められていない。その相違については、単なる時期差というよりも結びついた西三河地域における集団（叩き甕が集中する安城市本神遺跡など）の違いと考えられるが、議論が多岐にわたるためこれ以上述べることは止めておく。

④に関しても、大きくは西三河地域との関係がみられるのであるが、受口状口縁台付甕A類のように西三河地域に系譜が求められないものも出土している。特に受口状口縁台付甕A類が出土した613号住居跡には南信の中島式のものもあり、多地域にわたる交流がみてとれる。つまり西三河地域との大きな関係性は否定しないが、同地域における器種組成（どのような形態の甕・壺・高坏などの土器を一つのセットとして持っていたかということ）をそのまま持って来ているわけではない。そこには出川南遺跡の人々による取捨選択が行われたと考えられるのである[7]。そのなかでも特に先述した単口縁台付甕を選択した理由について、今後注目される。

この出川南遺跡出土土器の分析において最も重要なことは、東海西部地域においてもS字状口縁台付甕に象徴される伊勢・尾張地域ではなく、西三河地域との関係性が強く認められたことである。S字状口縁台付甕が象徴する東海地域の影響は、研究史においても長年指摘され続け、それが東日本各地の社会像を形作っていたといってもよい（高橋 1985、赤塚 1992 など）。赤塚次郎氏は、伊勢・尾張地域に起源をもつS字状口縁台付甕や前方後方墳が東日本の古墳出現期に一気に広がる現象を「東海系のトレース」と呼び、東日本の古墳時代の幕開けに際して伊勢・尾張地域の集団が大きく関わったとしている（赤塚 1992）。ところが今回の分析では、出川南遺跡周辺においては伊勢・尾張地域を象徴するS字状口縁台付甕を積極的には受け入れず、S字状口縁台付甕の少ない西三河地域を起源とする土器が多く認められた点が注目される。つまり、出川南遺跡周辺における古墳時代の幕開けには西三河地域の集団が大きく関係していたのである。

今後は、外来土器の背景にある交流の具体像を把握していく必要がある。しかし、そこで西三河地域との交流のみを強調しただけでは交流の具体像を浮き彫りにすることはできない。例えば北島大輔氏は、様々

6　出川南遺跡周辺の土器が西三河地域と関係性があることは、すでに北島大輔氏によって触れられている（北島 2014）。それは無文の受口状口縁台付甕、ヒサゴ壺、叩き甕が西三河地域でも多いことなどから想定されているのであるが、その具体的検討については本稿で述べたとおりである。

7　西三河地域では、その系譜こそ在来のものではないものの多くの加飾壺を受容しており、また線刻土器は西三河地域における特徴として挙げることができるが、出川南遺跡一帯にはそのような組成はみられない。さらに、西三河地域と本地域との土器は法量の違い、弥生土器から土師器への転換のあり方などから西三河地域のあり方をそのままトレースしたものではないといえる。

な系譜の外来土器が集中して出土する遺跡（「多地域型土器交流拠点」）に注目し、そこに交流の実態を見ようとしている（北島 2014）。これは外来土器を特定地域からの一方的な動きとしてとらえるというこれまでの見方とは異なり、各地域との相互の交流関係を把握しようとしたものである。出川南遺跡の器種組成をみても西三河地域とは異なっており、西三河地域だけからの一方的な流入では理解できない。

そのような交流の実態を把握するには、まず台付甕以外の器種も系譜を明らかにし、重層的な系譜の実態を把握していく必要がある。そして次にそれぞれの系譜からなる土器が各遺構においてどのような器種組成を構成しているかを把握し、遺構や集落の性格や機能とどう関係しているかをみていかなくてはならない。例えば弘法山古墳から出土した土器には加飾された壺や開脚高坏、手焙形土器が出土しており、集落の器種組成とは異なっている。また出川西遺跡では単口縁台付甕が多いのに対して、向畑遺跡では叩き甕が多いなど集落によっても器種組成は異なっている。つまり器種組成の違いは、古墳と集落という性格の違い、集落機能の違いなどに起因すると考えられる。

さらにそのような器種組成のあり方から交流の具体像をとらえるためには、土器以外の資料による補強が必要である。例えば西三河地域と出川南遺跡のある松本盆地をつなぐルートには後世、「塩の道」とも呼ばれる三州街道が通っており、馬を使って塩や魚介類、陶磁器、木材などの物資が運搬されていた。古墳時代における外来土器の背景にも生活に欠かせない物資の流通が想定され、鉄器など様々な資料の関係を把握することによって交流の実像を具体的に示すことができると考えられる。

第２節　出川南遺跡の居住域の変遷

１　はじめに

古墳時代の松本盆地を代表する集落遺跡の一つと考えられている出川南遺跡は、以前より弥生時代、古墳時代後期、奈良・平安時代では居住域の範囲が移動すること（市教委 2011）、松本市内の他の地域とは異なり古墳時代後期に竪穴建物数のピークを迎えていることが知られていた（片山 2017）。また現在の出川南遺跡周辺では都市化が進んだ結果目立たないが、JR 篠ノ井線に並行して田川の支流である穴田川が流れている（第２章第１節）。今回の調査によって、田川と穴田川に挟まれた一帯に弥生時代～古墳時代中期の集落が位置していたことが明らかとなった。ここでは、弥生時代から平安時代に継続する出川南遺跡の居住域変遷の様相と周辺の遺跡群の動態を穴田川やその水系である３号流路跡とからめて検討してみたい。

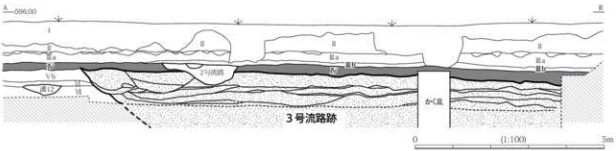
２　出川南遺跡の居住域の様相

出川南遺跡と出川西遺跡を合わせた南松本遺跡群全体の様相については、出川西遺跡 10 次調査報告書（市教委 2015）でおおまかな概要が示されている。ここでは、出川南遺跡を中心に今回の調査成果を含めて整理する（第 65 図）。

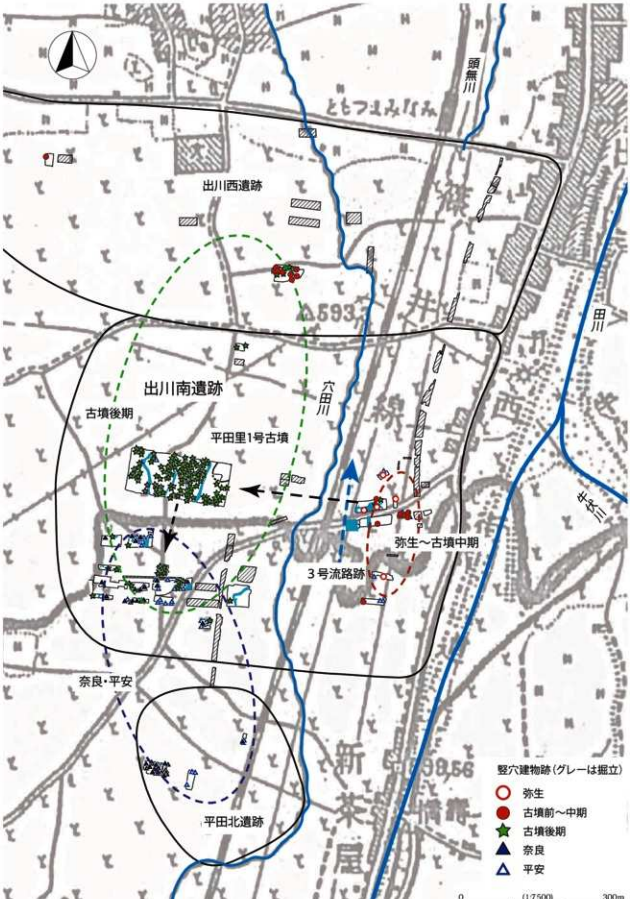
弥生～古墳中期　弥生時代は穴田川の東側の６次地点などで居住域が見つかっている（市教委 2011）。これまで弘法山古墳と同時期の集落の位置がはっきりせず、弥生集落の近傍にあったことは推定されていたが、今回の調査によって古墳時代前期の居住域が確認された。古墳時代中期になると、穴田川の西側に祭祀遺構の可能性がある土器集中（９次地点）、水鳥形埴輪を伴う平田里１号古墳（TK216 窯式須恵器出土）が知られていたが、今回の調査によって竪穴建物跡（619 号住居跡、中期初頭）が穴田川の東側で発見された。この結果、弥生時代から古墳時代中期までは、集落域は穴田川と田川に挟まれた南北に細長い範囲に営まれ、穴田川の西側とは遺跡様相が異なる可能性が判明した。

また、今回の 27・28 次地点の西端で確認された３号流路跡は、穴田川に平行しており、その水系の可能性が高い。基本土層との新旧関係（第３章第２節）や、流路中の炭化物の放射性炭素年代測定結果（426 ～ 545 年２σ、第３章第７節）により、古墳時代中～後期にはまだ流れていたと推定される。流路方向は N14° E と推定され、規模は東の立ち上がりを確認したのみだが少なくとも幅 12m、深さ 1m 以上（重機掘削による深度確認をおこなったが、さらに 1m は砂礫層が続いており、延 2m 以上の深さがあることが推定される）あり、その規模や埋土から人工的な溝ではなく、自然の河川とみられる（第 64 図）。

古墳後期　穴田川の西側（４次地点）で 100 軒以上の竪穴建物跡が発見されている（市教委 1994a）。穴田川の東側では当該期の竪穴建物跡はわずかしかなく、集落の中心は穴田川の西側に移動しているとみら



第 64 図　３号流路跡土層断面図（27 次調査区南壁）



第 65 図　出川南遺跡の時期別遺構分布図（背景は昭和 6 年修正測図、昭和 22 年発行 1/25,000）

れる。

3号流路跡の東側の立ち上がりから古墳時代後期の須恵器坏（第32図140）、土師器坏（同137）の完形品が出土しており、土師器と共伴した炭化物の放射性炭素年代測定でもこの年代を裏づける値（570～645年2σ、第3章第7節）が得られたことから、この時期には埋まりかけていたと思われる。

奈良・平安　古墳時代後期の集落の中心であった出川南遺跡の北西側（4次地点）では、古代の竪穴建物跡の検出例は大幅に減少し、遺跡の西南側に居住域の中心が移動していることが想定されている（市教委2011）。

3号流路跡を被覆したⅣ層上面からは古墳時代後期（7世紀後半か）とみられる土師器長胴甕（第32図138）が出土している。長胴甕は同一地点で一括して出土しており（PL2　27次長胴甕出土状態）、遺構に伴わないものの流れ込みの可能性は低く、比較的廃棄段階の位置を保っていると考えられる。このことから、3号流路跡は古代の直前には埋没していたとみられる。

以上のことから、出川南遺跡内の居住域は、弥生時代から古墳時代中期には遺跡の東側（穴田川東側）、古墳時代後期には西北側（穴田川西側中流）、奈良・平安時代には西南側（穴田川西側の南）へと遷り変わったと想定される。居住域が小河川をめぐって移り変わっていることから、居住域の変遷は、小河川や流路の消長と関連していると思われる。

3　出川南遺跡周辺の遺跡の様相

松本市域の遺跡は各河川に沿って展開している。出川南遺跡は塩尻から松本へ北流し、松本市中心市街地の西で奈良井川に合流する田川の流域に位置している。ここでは出川南遺跡を中心とした、現在の松本市高宮から同村井町北までの、田川下流域に範囲を限定して遺跡の様相を概観する（第66図）。

弥生中期　出川西遺跡11次・出川南遺跡26次地点のほか、百瀬遺跡で集落跡が見つかっている。松本盆地では、鎖川流域で中期後半の栗林式に先立つ境窪式期に弥生文化が伝来したとみられている。田川流域も弥生文化が到達したのもほぼ同時期とみられる（原2014）。

弥生後期　百瀬遺跡、竹渕遺跡、竹渕南原遺跡などで箱清水式期の集落跡のほか、出川南遺跡17次地点で方形周溝墓が確認されている。

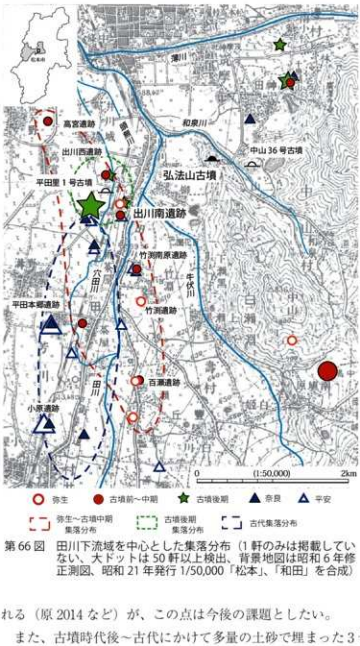
古墳前期　穴田川西側の出川西遺跡10次（市教委2015）、穴田川東側の竹渕南原遺跡で集落跡が調査されている。墳墓は弘法山古墳と中山36号古墳の2基の古墳のほかに、出川南遺跡15次地点で石貼遺構が見つかっている。

古墳中期　穴田川西側では高宮遺跡（市教委1994bなど）、出川南遺跡9次（市教委2000c）、いずれも水辺祭祀に関連すると思われる土器集中が見つかっている。高宮遺跡では竪穴建物跡も見つかっており、穴田川西側では祭祀遺構、古墳と集落が確認されている。

古墳後期　出川南遺跡（4次）で、大規模な集落が形成されるが、そのほかの遺跡では当該期の竪穴建物跡がわずかしか見つかっておらず、出川南遺跡に集約されたかのようである。

奈良・平安　8世紀前半になると、平田本郷、小原遺跡などこれまで集落が営まれなかった田川西岸のより上流（南側）の地域で大規模な集落跡が見つかっている。

以上のことから、穴田川の西側では、弥生時代～古墳時代中期は墳墓・祭祀遺構を中心に遺跡が展開し、古墳時代後期になるとやや上流側で大規模な集落が形成される。穴田川の東側では、弥生時代～古墳時代中期にかけて集落遺跡が点在する様子がみられるが、古墳時代後期になると遺跡の規模はかなり縮小する。さらに奈良・平安時代には、平田から村井方面にかけて集落分布の中心が遷り変わっていることが分かる。



第 66 図　田川下流域を中心とした集落分布（1 軒のみは掲載していない、大ドットは 50 軒以上検出、背景地図は昭和 6 年修正測図、昭和 21 年発行 1/50,000「松本」、「和田」を合成）

4　まとめ

今回の調査は、これまで考えられていたことから大きく逸脱することはなく、おおむね追認する結果となった。出川南遺跡を含む田川流域では、弥生時代から古墳時代中期（カマド導入期以前）は穴田川の西側で祭祀遺構や墳墓が築かれ、田川と穴田川の間に集落が点在している。その後、古墳時代後期には穴田川の西側の開けた場所に集落域が移動する。古墳時代の末期には出川南遺跡の規模は縮小し、居住域は遺跡の南西に移動しているが、田川流域全体でも平田から村井にかけた中流域に集落遺跡が出現することが指摘されている（原 2014）。以上から出川南遺跡の居住域の変遷と田川下流域の遺跡の様相は関連している。

こうした居住域の消長や移動は、古代社会の生産活動を強く規定する水利（用水）の体系と関連しているとされ、そうした視点に立った論考は少なくない（都出 1989、若狭 2007）。その背景には、洪水などの自然災害が引き金となった可能性も指摘されている（市川 2002、寺内 2002）。弘法山古墳の築造や律令体制の整備等、政治的要因によることも想定される（原 2014 など）が、この点は今後の課題としたい。

また、古墳時代後～古代にかけて多量の土砂で埋まった 3 号流路跡も確認され、出土した遺物の分析から古代には完全に土砂で埋没していたことが推測される。流路がいつ頃形成されたか不明であるが、古墳時代中～後期には流れていたとみられること、3 号流路跡の周辺では竪穴建物跡等が発見されていないことから、3 号流路跡が集落の境界であった可能性がある。3 号流路跡の西端が確認されずに穴田川の方向へ広がっていること、さらに穴田川西岸の 4 次地点では穴田川に向かって北東へ傾斜していること（市教委 1994a）、出川西遺跡 7 次地点では調査区東半のみ遺構が検出され西半は自然流路であったことも合わせると（市教委 2015）、穴田川は現在よりもかなり幅が広く、3 号流路跡は穴田川の一部の可能性もある。今後調査が予定されている本遺跡におけるＪＲ篠ノ井線の周辺は、古墳時代以前には河川であったことも想定され、本事業で引き続き継続される調査に対する課題としたい。

第3節　おわりに

これまでの調査　出川南遺跡は1986年に1次調査が行なわれて以来、過去22次にわたって調査が進められてきた。穴田川の東側からは弥生時代、西側から古墳時代後期以降の集落が発見されてきた。特に4次地点では、100軒を超える古墳時代後期の竪穴建物跡と掘立柱建物跡が調査されており（市教委1994a）、出川南遺跡が古墳時代後期には田川流域で中心的な集落であったことが分かっている（原2014）。このほかに弥生時代後期の方形周溝墓（17次、市教委2015）、古墳時代前期の石貼遺構（市教委2011）、中期の須恵器と水鳥形埴輪を伴う平田里1号古墳（市教委1994a）なども見つかっており、今回の調査報告以前にも出川南遺跡は弥生から中世にかけた集落と墳墓が包含される複合遺跡であることが分かっていた。その一方で、以下の①集落と②土器研究にかかる課題も明らかになってきた。

従前の課題①　古墳時代前期～中期にかけた集落の所在地が不明であった。遺跡の東1.4kmに東日本最古級の前方後方墳である弘法山古墳が所在することから、同時期の集落の存在は想定されてはいたものの、正確な位置は不明なままであった。穴田川の東側で古墳時代前期の竪穴建物跡が散発的に見つかっており、弥生集落も同じ地域で発見されていたこと、出川西遺跡の調査成果などから南松本遺跡群の北から東にかけて所在することは推定されていた（市教委2015）。9次地点では遺物集中は見つかっているが明らかな掘り込みが確認されなかったことなどから、古墳時代前期の遺構は検出困難な特徴をもつことも指摘されている（市教委2000c、2014）。古墳時代中期も、4次地点で平田里古墳群が確認されたが近隣では集落が見つからなかった。

従前の課題②　古墳時代前期の土器については、古墳時代前期に入ると在地の弥生土器からの系譜を引く土器のほかに、在地の系譜がみられない外部から到来された土器が多く出土している。とくに東海地方、中でも西三河との関連が指摘されてきた（北島2014）。

成果①　古墳時代前期の集落が発見され、穴田川右岸にあると想定されていた従来の推定を裏付けることができた。また619号住居跡の1軒のみだが、古墳時代中期の竪穴建物跡が発見された。その結果、弥生時代～古墳時代中期と、それ以後では、穴田川を境に集落位置が移動していることが確認できた。

成果②　土器については、西三河との関連性があらためて指摘できたが、西三河地域の器種組成全体を導入しているわけではなく、他地域との交流がうかがえる。

今後の課題　①一遺跡の内部で集落が変遷する要因について、立地条件や水利など古地形の特徴や、弘法山古墳の成立や律令体制の影響など、政治・経済的な要因とも関連づけて明らかにしてゆく必要がある。②集落と古墳では出土する土器が異なる傾向がある。遺跡の性格によって異なる土器様相も考慮して、西三河以外の系譜の存在も検討する必要がある。

最後に今回の調査は、松本市が受託、発掘調査を実施したものを、埋文センターが引き継いで整理・報告書作成まで行うという体制で進められた。使用機材、遺構呼称、グリッド設定方法等の基本事項が市教委と埋文センターで異なることも多く、相互の調整を行った。異なる調査組織との連携をいかに進めてゆくか、という点についても、今回の調査が試金石となり、今後、同様なケースが発生した場合の一つのモデルとなれば幸いである。

主要参考文献

愛知県埋蔵文化財センター　2009 『下懸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 144 集

愛知県埋蔵文化財センター　2012 『惣作遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 172 集

青木一男　1993 「土器様相の変化の素描」『長野県考古学会誌』69・70　長野県考古学会

青木一男　1998 「第Ⅳ章第 2 節古墳時代前期の土器の理解」「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 5-長野市内その 3-松原遺跡弥生・総論 6 弥生時代後期・古墳時代前期」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 36

赤塚次郎　1990 「Ⅴ　考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 10 集

赤塚次郎　1992 「東海系のトレース-3・4 世紀の伊勢湾沿岸地域-」『古代文化』44-6　古代学協会

安城市教育委員会　1998 『桜林遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 3 集

安城市教育委員会　1999 『中挟間遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 6 集

安城市教育委員会・土生田純之（編）　2017 『三河国，ここにはじまる！』雄山閣

市川隆之　2002 「善光寺平南部の条里遺構」『国立歴史民俗博物館研究紀要』96

出川史跡研究会　1999 『泉わく里　出川史』

宇賀神誠司　1987 「古墳時代の土器について」『松本市赤木山遺跡群Ⅱ』松本市文化財調査報告 No.47

宇賀神誠司　1993 「4 世紀を中心とした土器編年表」『長野県考古学会誌』69・70　長野県考古学会（青木 1993 所収）

岡野秀典　2013 「山梨県出土の紡錘車再考-集成作業を通じて-」『紡織の考古学-紡ぐ・織る・縫う-資料集』山梨県考古学会

片山祐介　2017 「古代松本の人口動態」『長野県考古学会誌』153　長野県考古学会

川崎みどり　2013 「鹿乗川流域遺跡群における外来系土器」『変貌する弥生社会』考古学フォーラム

川崎みどり・鈴木とよ江・浅岡　優・西島庸介　2013 「鹿乗川流域遺跡群の土器編年」『変貌する弥生社会』考古学フォーラム

北島大輔　2014 「総論　土器交流拠点から読み解く古墳出現期社会」『特別展　大交流時代-鹿乗川流域遺跡群と古墳出現前夜の土器交流-』安城市歴史博物館

郷土資料編纂会　1976 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌　別篇　地名』

窪田雅之　2013 「近代松本地図集成」書肆 秋櫻舎

小平和夫　1990 「第 3 章第 5 節古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 4-松本市内その 1-』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 4

小松克己　1981 「村井宿付近」『歴史の道調査報告書Ⅵ　善光寺道（北国脇往還）』長野県教育委員会

小松芳郎責任編集　2007 『松本市 100 年地図帖』しなのき書房

小山奈津実　2016 「事例報告①　高畑遺跡第 6 次発掘調査」『発掘された松本 2015』松本市教育委員会

信濃史料刊行会　1961 『信濃史料　第 16 巻』

高橋一夫　1985 「前方後方墳の性格」『土曜考古』10　土曜考古学会

竹原　学　1994 「第 3 節遺物　1. 土器」『出川南遺跡Ⅳ　平田里古墳群』松本市文化財調査報告書 No.115

都出比呂志　1989 『日本農耕社会の成立過程』岩波書店

寺内隆夫　2002 「九世紀後半の洪水災害と復興への道のり-屋代遺跡群・更埴条里遺跡の発掘調査から」『信濃』54-8 信濃史学会

直井雅尚　1999 「長野県における古墳時代中期の土器様相-屈折脚高坏の出現から消滅までの予察-(3)中信地域の様相」『東国土器研究』5　東国土器研究会

直井雅尚　2014 「2・3 世紀，中・南信の集落と墳墓（松本盆地南部を中信として）」『ふたかみ邪馬台国シンポジウム 14 資料集』　香芝市二上山博物館友の会「ふたかみ史遊会」

長野県埋蔵文化財センター　1988 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 2-塩尻市内その 1-」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 2

中村俊夫・増田公明・三宅芙沙・永冶健太朗・吉永貴裕　2012 「^{14}C 年代から暦年代への較正に関連する諸問題」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』ＸＸⅢ

新納　泉　2009 「展望　箸墓古墳の炭素 14 年代考」『考古学研究』56-2　考古学研究会

原　明芳　2014 「古代筑摩郡の田川流域開発」「年報長野県地理」No.33　長野県地理学会

原　嘉藤・小松　虔　1972　「長野県松本市中山第36号古墳（仁能田山古墳）調査報告」『信濃』24－4　信濃史学会
東村純子　2011　『考古学からみた古代日本の紡織　改訂版』六一書房
曳地隆元　2010　「中世における馬屋状遺構について」『信濃』62－11　信濃史学会
比田井克仁　2000　「受け口状口縁甕考」『西相模考古』9　西相模考古学会
廣田和穂　1999a　「長野県における古墳時代中期の土器様相−屈折脚高坏の出現から消滅までの予察−(3)北信地域の様相」『東国土器研究』5　東国土器研究会
廣田和穂　1999b　「第5章第1節2弥生時代後期～古墳時代前期」「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12−長野市内その10−榎田遺跡本文編Ⅱ」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書37
藤沢宗平　1951　「長野県東筑摩郡寿村百瀬弥生式遺跡調査概報」『信濃』3－8　信濃史学会
文化庁文化財部記念物課　2017　「平成28年度周知の埋蔵文化財包蔵地数」『埋蔵文化財関係統計資料−平成28年度−』,
穂積裕昌　2005　「東海系土器に占める伊勢系土器の位相−受口甕胎土分析からの提起−」『研究紀要』14　三重県埋蔵文化財センター
松本市教育委員会　1978　『弘法山古墳』
松本市教育委員会　1981　「長野県立松本工業高等学校遺跡」
松本市教育委員会　1987a　『松本市赤木山遺跡群Ⅱ』松本市文化財調査報告No.47
松本市教育委員会　1988　「松本市向畑遺跡Ⅰ」松本市文化財調査報告No.60
松本市教育委員会　1989a　「松本市千鹿頭北遺跡」松本市文化財調査報告No.69
松本市教育委員会　1989c　「松本市向畑遺跡Ⅱ」松本市文化財調査報告No.81
松本市教育委員会　1990　「松本市向畑遺跡Ⅲ」松本市文化財調査報告No.83
松本市教育委員会　1991　「小池遺跡−平安時代集落址の発掘調査−」
松本市教育委員会　1993a　「松本市二反田・岡田町遺跡」松本市文化財調査報告No.99
松本市教育委員会　1993b　「松本市山影遺跡」松本市文化財調査報告No.100
松本市教育委員会　1994b　「松本市高宮遺跡」松本市文化財調査報告No.116
松本市教育委員会　2000a　「竹渕南原遺跡Ⅱ」松本市文化財調査報告No.144
松本市教育委員会　2015　「出川西遺跡−第10次発掘調査報告書−」松本市文化財調査報告No.216
松本市　1995a　「松本市史　第二巻歴史編Ⅱ　近世」
松本市　1995b　「松本市史　第二巻歴史編Ⅲ　近代」
村木　誠　2006　「伊勢湾地方における台付甕の作り方−弥生時代後期を中心に−」『日本考古学』21　日本考古学会
矢彦富三　1965　「第二章運輸と交通　第一節道路」『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』郷土資料編纂会
若狭　徹　2007　「古墳時代の水利社会研究」学生社
【出川南遺跡　既刊報告書】
松本市教育委員会　1987b　「松本市出川南遺跡」松本市文化財調査報告No.53
松本市教育委員会　1989b　「松本市出川南Ⅱ遺跡」松本市文化財調査報告No.75
松本市教育委員会　1994a　「松本市出川南遺跡Ⅳ・平田里古墳群」松本市文化財調査報告No.115
松本市教育委員会　1999　「出川南遺跡Ⅴ」松本市文化財調査報告No.139
松本市教育委員会　2000b　「出川南遺跡Ⅵ」松本市文化財調査報告No.147
松本市教育委員会　2000c　「出川南遺跡Ⅸ」松本市文化財調査報告No.148
松本市教育委員会　2000d　「出川南遺跡Ⅷ」松本市文化財調査報告No.157
松本市教育委員会　2002a　「出川南遺跡Ⅻ」松本市文化財調査報告No.158
松本市教育委員会　2002b　「出川南遺跡Ⅺ」松本市文化財調査報告No.161
松本市教育委員会　2009　「出川南遺跡−第14次発掘調査報告書−」松本市文化財調査報告No.198
松本市教育委員会　2011　「出川南遺跡−第15次発掘調査報告書−」松本市文化財調査報告No.207
松本市教育委員会　2014　「出川南遺跡−第21次発掘調査報告書−」松本市文化財調査報告No.212

表 21　竪穴建物跡一覧

遺構名	次	面	位置	時期	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	長軸方位	ピット	埋土の堆積	重複関係
612 住	23	1	Ⅲ A・B10 Ⅴ A・B01・02 Ⅶ J01	古墳前期	不整形	<595>	<485>	34	N68° E	14	複層（3 層）	616 住を切る 竪 5 に切られる
613a 住	23	1	Ⅴ A04・05 Ⅶ I05 Ⅶ J04〜06	古墳前期	＜隅丸長方形＞	(380)	415	40	N48° W	9	複層（2 層）	613b 住に切られる 土 33 に切られる
613b 住	23	1	Ⅴ A05・06 Ⅶ J05・06	奈良平安	＜隅丸長方形＞	(375)	<415>	40	N81° W	7	複層（5 層）	P510・540〜542・576 に切られる 613a 住を切る
614 住	23	2	Ⅴ B・C05・06	古墳前期	隅丸長方形	340	252	8	N32° W	9	複層（2 層）	
615 住	23	1	Ⅴ A02〜04 Ⅶ J02〜04	平安	隅丸長方形	454	(308)	11	N86° E	9	単層	土 33、P538 に切られる
616 住	23	1	Ⅲ A・Ⅶ J10 Ⅴ A・Ⅶ J01	古墳前期	不明	432	—	17	N8° W	8	単層	612 住に切られる
617 住	23	2	Ⅶ I・J05・06	古墳前期	不明	(190)	(188)	27	N0°	2	複層（5 層）	P546 に切られる
618 住	23	2	Ⅴ A03・04 Ⅶ J02〜04	古墳前期	＜隅丸長方形＞	(350)	425	20	N10° E	11	複層（5 層）	土 35・37、P575 に切られる
619 住	24	2	Ⅱ E06・07 Ⅱ F06〜08 Ⅱ G06〜08	古墳中期	隅丸長方形	586	563	16	N17° W	4	複層（12 層）	

表 22　竪穴状遺構一覧

遺構名	次	面	位置	時期	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	埋土の堆積	重複関係
竪 2	24	1	Ⅰ E06・07 Ⅰ F07	中世	隅丸長方形	278	195	11	複層（2 層）	小溝 67・65・68 を切る 小溝 63 に切られる
竪 3	27	1	Ⅳ G08・09 Ⅳ H08・09	中世	隅丸長方形	240	168	5	単層	
竪 4	27	2	Ⅰ H04・05	古墳後期	（楕円形）	(182)	154	17	複層（2 層）	
竪 5	23	1	Ⅲ B10	近世	不明	338	—	70	単層	612 住、溝 16 を切る 旧竪 1

※ 23 次調査現場段階で付けられた遺構名は整理段階で付け直されたため、備考に旧名を掲載した

表 23　掘立柱建物跡一覧

遺構名	次	面	位置	時期	ピット No.	柱配置	ピット数	長軸長(m)	短軸長(m)	長軸方位	重複関係	備考
建 1	24	1	Ⅲ D・E・F01〜04、Ⅲ G01	中世	30・31・33・37・40〜42・44〜46・49・50・56・59・61・64・97	3×4 間以上	17	7.84	7.06	N89° E	小溝群を切る	竪穴付
建 2												列 6 に変更
建 3	23	2	Ⅴ A01 Ⅶ J01・02	古墳前期	563〜P569 (旧 P54〜P60)	2×1 間以上	7	(2.63)	2.55、2.70	N1° W		旧建 1

※ 23 次調査現場段階で付けられた遺構名は整理段階で付け直されたため、備考に旧名を掲載した

表 24　溝跡一覧

遺構名	次	面	位置	時期	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	流路の方向	重複関係	備考
溝 1	24	1	Ⅱ B〜07〜10 Ⅲ B〜01〜04 Ⅲ A04・05	近代	24.4	26〜336	22〜78	N80° E		近現代の瀬香茶碗出土
溝 2	24・28	1	Ⅳ D〜08〜10、Ⅰ D〜01〜10、Ⅲ D〜01・04・05、Ⅱ C〜10、Ⅲ C〜01〜05	近世	73.2	53〜160	16〜32	N88° E	溝 4・5、小溝 1 に切られる	28 調査で溝 14 としたが、溝 2 と同一
溝 3	24・28	1・2	Ⅳ D〜10、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ D〜01〜10、Ⅰ C〜07〜10、Ⅱ C〜01・02・10、Ⅲ C〜01〜05	中世	72.0	44〜280	62〜84	N87.5° E	溝 5 を切る 溝 6 に切られる	28 調査で溝 15 としたが、溝 3 と同一
溝 4	24	2	Ⅱ D・E〜07・08	不明	3.10	58〜75	8	N0°	溝 2 を切る	24 次 P136 は溝 4 の南端
溝 5	24	1	Ⅰ D・E・F・G・H〜08	中世	11.10	80〜115	43	N0°	溝 2・3、小溝 54・55・56・57、P208 を切る 小溝 61・69 に切られる	
溝 6	24	1	Ⅰ C0〜7〜10 Ⅱ C〜01・02	中世	16.60	12〜108	32	N90°	溝 3 に切られる	
溝 7	24	1	Ⅱ F〜01	不明	2.60	37〜51	16	N0°	土 6 に切られる	
溝 8										流路 2 に変更
溝 9	27	1	Ⅰ G〜03	不明	0.94	20〜60	4	N10° W		
溝 10	27	2	Ⅰ H〜02〜04 Ⅰ G〜04	中世	4.76	26〜43	4〜7	N62° E		
溝 11	27	2	Ⅰ H〜02	中世	1.60	35	6〜9	N60° E		
溝 12	27	2	Ⅰ G〜03 Ⅰ H〜02・03	古墳以前	(3.55)	115〜170	23〜35	N16° E		
溝 13	27・28	2	Ⅰ・D・E・F・G・H〜04	古墳以前	(2.40)	105〜167	9	N18° W		
溝 14										流路 4 に変更 旧溝 1
溝 15										流路 4 に変更 旧溝 2

遺構名	次	面	位置	時期	長さ (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	流路の方向	重複関係	備考
溝 16	23	1	Ⅲ B09	中世	(2.37)	(45)	112	N0°		B 区北壁にかかる B3（Ⅱ）層相当深度から掘り込み 旧溝 3
溝 17	23	1	Ⅴ B05・06 Ⅴ C05・06	中世	(3.30)	70～212	65	—	614 住を切る	B 区東・南壁にかかる B2（Ⅲ）層に被覆 旧溝 4
溝 18	23	1	Ⅴ C03・04	中世	(0.57)	20	5	N0°	溝 26 を切る	旧溝 5
溝 19	23	1	Ⅴ C03	中世	—	43	10	—		B 区南壁で確認 旧溝 6
溝 20	23	1	Ⅴ C03	中世	—	40	13	—		B 区南壁で確認 旧溝 7
溝 21	23	1	Ⅴ C03	中世	(0.60)	55	18	N0°	溝 26 を切る	B 区南壁にかかる 旧溝 8
溝 22	23	1	Ⅴ C03	中世	(0.83)	58	21	N0°	溝 26 を切る	B 区南壁にかかる 旧溝 9
溝 23	23	1	Ⅴ C02	中世	(0.84)	70	26	N0°	溝 26 を切る	B 区南壁にかかる 旧溝 10
溝 24	23	1	Ⅴ C02	中世	(0.55)	58	32	N6° E	溝 26 を切る	B 区南壁にかかる 旧溝 11
溝 25	23	1	Ⅴ C02	中世	(0.07)	37	30	—		B 区南壁にかかる 旧溝 12
溝 26	23	1	Ⅲ B・C10 Ⅴ C01～04、 Ⅴ B04	中世	(13.95)	18～60	7～17	N80° W	溝 18・21 ～ 24 に切られる	旧溝 13
溝 27	23	1	Ⅴ B03～06	中世	(7.33)	13～23	4～9	N86° E		旧溝 14
溝 28	23	1	Ⅴ B06	不明	—	167	24	—	613 住を切る	B 区東壁で確認 B2（Ⅲ）層に被覆 旧溝 15
溝 29	23	2	Ⅲ B10 Ⅴ B01～05	古墳前期	13.20	—	88	—	溝 17、土 30 に切られる	B 区南壁にかかる 被覆層不明、B7（Ⅳ）層か 旧溝 16
溝 30	24	1	Ⅰ D～07・08	不明	2.86	42	13～26	N76° W	溝 3 と切り合う	

※ 23 次調査現場設階で付けられた遺構名は整理設階で付け直されたため、備考に旧名を掲載した

表 25　ピット列一覧

遺構名	次	面	位置	時期	ピット No.	長軸 (cm)	柱間寸法 (cm)	方位	重複関係	備考
列 1	24	1	Ⅱ F07・08	中世	128～135	437	63～67	N75° E		小溝 22～25 埋土より
列 2	24	1	Ⅱ G04～06	中世	160～162・173・174・177	380	63～66	N76° E		
列 3	24	1	Ⅱ E07・08	近世	82～87	478	45～60	N82° E	溝 4 に切られる	
列 4	24	1	Ⅰ E07～10	中世	107・109・110・115・117・119・122・205・208	892	64～94	N88° E	溝 5 に切られる 小溝 51・52・63 を切る	
列 5	24	1	Ⅰ E08～10 Ⅱ E01	中世	106・110・114・116・118・120・206・207・209・577	880	63～76	N88° E	溝 5 に切られる 小溝 51・52・63 を切る	
列 6	27	1	Ⅰ G02・03	中世	285～287・289・291・293・296・297・299・302・351・352・372	225	63～70	N85° W	土 10、小溝 86 を切る	
列 7	27	1	Ⅰ H・I02	中世	266～270・277・359	205	64～72	N82° E		
列 8	28	1	Ⅰ D02・03	中世	493・496・501・504・506・578・581	520	60	N80° E	列 9 を切る	28 次溝 2-3 間
列 9	28	1	Ⅰ D02・03	中世	485・487・491・492・495・499・503・579・582	575	60～75	N81° E	列 10 を切る	28 次溝 2-3 間
列 10	28	1	Ⅰ D02～06	中世	473～481・484・486・488～490・494・498・500・502・508・580	1185	40～85	N84° E	溝 2 を切る	28 次溝 2-3 間
列 11	23	2	Ⅴ A04、Ⅷ J04	古墳前期	555・556・557・558・559	330	92～125	N14° E		旧建 4
列 12	23	2	Ⅷ J04・05	古墳前期	551・552・554	190	47、142	N12° E		旧建 4
列 13	23	2	Ⅴ A05、Ⅷ J05	古墳前期	549・550・521	237	106、132	N14° E		旧建 4

※ 23 次調査現場設階で付けられた遺構名は整理設階で付け直されたため、備考に旧名を掲載した

表 26　土坑一覧

遺構名	次	面	位置	時期	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形状	断面形状	重複関係	備考
土 1											欠番、かく乱
土 2	24	1	Ⅲ D04	近世	68	55	24	不整隅丸方形	不整形		
土 3	24	1	Ⅲ D04・05	近世	62	56	14	不整隅丸方形	皿状	土 4 を切る	
土 4	24	1	Ⅲ D04・05	近世	(62)	60	3	楕円形	皿状	土 3 に切られる	
土 5											欠番
土 6	24	1	Ⅰ E10 Ⅱ E・F01	中世	320	83	46	長楕円形	タライ状	溝 7、小溝 45・48・49・55 を切る	
土 7	24	1	Ⅰ E08・09	中世	122	81	14	楕円形	皿状		

遺構名	次	面	位置	時期	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	平面形状	断面形状	重複関係	備考
±8	24	1	Ⅱ E01	中世	121	63	29	楕円形	すり鉢状	小溝 38・39・42・50・51・52を切る	
±9	24	2	Ⅱ F05	古墳	90	84	10	楕円形	皿状		
±10	27	1	Ⅰ G02・03 Ⅰ H02・03	不明	154	101	3	隅丸長方形	皿状	小溝85、P291・293・368に切られる	
±11	27	2	<Ⅰ H05>	古墳後期	—	—	22	—	(タライ状)		南壁で検出
±12	28	1	Ⅳ F08・09	不明	83	60	12	楕円形	タライ状		
±13											欠番　戦状遺構
±14	28	1	Ⅳ F09	不明	53	43	12	不整楕円形	すり鉢状		
±15	28	1	Ⅳ G09	不明	46	36	8	楕円形	皿状		
±16	28	1	Ⅳ E08	不明	106	74	20	不整楕円形	不整形		
±17	28	1	Ⅰ F01	不明	64	35	17	不整形	不整形		
±18	28										欠番　戦状遺構
±19	28										欠番　戦状遺構
±20	28	1	Ⅰ D・E05	不明	78	28	11	不整楕円形	不整形		
±21	28										欠番　戦状遺構
±22	28	1	Ⅰ E05	不明	100	77	8	不整楕円形	不整形		
±23	28										欠番　戦状遺構
±24	28	1	Ⅰ F03	不明	44	(18)	7	楕円形	すり鉢状		
±25	23	1	Ⅴ A04・05	中世	125	(49)	30	(楕円形)	タライ状	P532に切られる	B区北壁にかかる 旧土1 B4(Ⅲa)層が被覆
±26	23	1	Ⅴ B04	古墳前期	100	84	15	楕円形	皿状	溝27に切られる	旧土2
±27	23	1	Ⅴ A04	不明	74	60	12	楕円形	皿状	615住を切る?	旧土3
±28	23	2	Ⅴ B06	古墳	60	(40)	30	<楕円形>	タライ状		B区東壁にかかる B7(Ⅳ)層が被覆 旧土4
±29	23	2	Ⅴ B04・05	古墳	76	33	8	不整形	タライ状		
±30	23	2	Ⅴ B04	古墳前期	72	48	7	楕円形	皿状	溝29に切られる	旧土6
±31	23	2	Ⅴ B01	古墳前期	86	81	12	円形	タライ状		台付甕出土 旧土7
±32	23	1	Ⅶ J02・03	不明	122	106	28	不整形	すり鉢状	P537・539に切られる	旧土8
±33	23	1	Ⅶ J04	中世	94	93	22	円形	タライ状	613a住・615住を切る	西、台付甕出土 旧土9
±34	23	1	Ⅶ J03	古墳	200	—	17	—	タライ状		C区北壁で確認 C5(Ⅳ)層が被覆 旧土10
±35	23	2	Ⅶ J02・03	古墳	(90)	84	52	不整円形	円筒状	618住を切る 土34に切られる	C区北壁で確認 C5(Ⅳ)層が被覆 旧土11
±36	23	2	Ⅶ J02	古墳	(48)	48	64	<不整円形>	円筒状		C区北壁で確認 C5(Ⅳ)層が被覆 旧土12
±37	23	2	Ⅶ J03	古墳	(40)	58	17	<楕円形>	タライ状	618住を切る 土34に切られる	C区北壁で確認 C5(Ⅳ)層が被覆 618住P10から掘棚 旧土13
±38	23	1	Ⅴ A03・04	近世	(90)	—	25	—	タライ状		B区北壁で検出、現場段階では±615住の可能性ありとしていた B3(Ⅲ)層が被覆

※23次調査現場段階で付けられた遺構名は整理段階で付け直されたため、備考に旧名を掲載した

表27　小溝一覧

遺構名	次	面	位置	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	流路の方向	重複関係	備考
小溝1	24	1	Ⅲ C04 Ⅲ D03・04	3.43	22~30	8	N77° E	溝2を切る	
小溝2	24	1	Ⅲ D04	0.58	14	3	N75° E		
小溝3	24	1	Ⅲ D03・04	1.35	10~20	18	N78° E		
小溝4	24	1	Ⅲ D03・04	2.08	9~19	9	N81° E	溝5と切り合う	
小溝5	24	1	Ⅲ D04	0.36	15	11	N13° W	溝4と切り合う	
小溝6	24	1	Ⅲ D03・04	(4.72)	10~23	4	N74° E	竪1、P38に切られる	
小溝7	24	1	Ⅲ D03・04	0.83	9~11	6	N81° E	竪1と切り合う	
小溝8	24	1	Ⅲ D03・04	1.97	13	11	N73° E	竪1と切り合う 小溝9を切る	
小溝9	24	1	Ⅲ D03・04	1.53	15	5	N80° E	竪1と切り合う 小溝8に切られる	
小溝10	24	1	Ⅲ E02・03	1.60	6~16	4	N85° E		
小溝11	24	1	Ⅲ E01・02	3.38	14	8	N89° E	P46・61に切られる	
小溝12	24	1	Ⅲ E01・02	1.60	15	—	N87° E		
小溝13	24	1	Ⅱ C10、Ⅲ C01	2.40	13~22	—	N88° E		
小溝14	24	1	Ⅱ D10、Ⅲ D01	2.40	15~23	9	N89° E		
小溝15	24	1	Ⅱ E09・10、Ⅲ E01、J00・02	(9.20)	15~40	5~9	N85° E	小溝16と切り合う P88・89に切られる	
小溝16	24	1	Ⅱ E09・10	3.05	9~15	6	N83° E	小溝15と切り合う	
小溝17	24	1	Ⅱ E・F10 Ⅲ E01・02	6.48	10~18	8	N75° E	P59に切られる	
小溝18	24	1	Ⅱ E09	0.80	16	3	N78° E		
小溝19	24	1	Ⅱ E08	(2.60)	22~48	7	N85° E	P92~94に切られる	
小溝20	24	1	Ⅱ E08	1.68	17~30	3	N86° E		

付表

遺構名	次	面	位置	長さ (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	流路の方向	重複関係	備考
小溝 21	24	1	Ⅱ E07・08 Ⅱ F08	2.50	10～17	2	N84° W		
小溝 22	24	1	Ⅱ F08	1.73	7～12	2	N72° E		列 1 に伴う
小溝 23	24	1	Ⅱ E・F08	3.25	9～14	4	N75° E		列 1 に伴う
小溝 24	24	1	Ⅱ F08	1.06	13	2	N75° E		列 1 に伴う
小溝 25	24	1	Ⅱ G07	2.10	12	1	N80° E	P125 に切られる	列 1 に伴う
小溝 26	24	1	Ⅱ E04 ～ 06 Ⅱ D05・06	(6.38)	13～32	18	N84° E		
小溝 27	24	1	Ⅱ E04 ～ 06	6.14	13～28	8	N86° E		
小溝 28	24	1	Ⅱ E05・06	2.62	14	3	N88° E		
小溝 29	24	1	Ⅱ E04	(1.90)	15	5	N82° E		
小溝 30	24	1	Ⅱ E04	(1.82)	10	2	N83° E		
小溝 31	24	1	Ⅱ E04	(2.35)	14	4	N65° E		
小溝 32	24	1	Ⅱ E04	(1.55)	13	3	N87° E		
小溝 33	24	1	Ⅱ E03	2.21	8～15	6	N82° E		
小溝 34	24	1	Ⅱ D・E02	(2.15)	15	5	N85° E		
小溝 35	24	1	Ⅱ E02	(1.24)	13	7	N86° E	小溝 36・38 と切り合う	
小溝 36	24	1	Ⅱ E02	(1.78)	8	2	N85° E	小溝 35・38 と切り合う	
小溝 37	24	1	Ⅱ E02	(1.75)	15～22	6	N84° E	小溝 38 に切られる	
小溝 38	24	1	Ⅱ E01・02	1.92	6～24	9	N78° E	土 8 に切られる 小溝 35・36・37 を切る	
小溝 39	24	1	Ⅱ E01・02	1.87	6～17	5	N85° E	土 8 に切られる	
小溝 40	24	1	Ⅱ E02	(1.50)	13～36	8	N90°		
小溝 41	24	1	Ⅱ E02	(0.95)	15～18	3	N85° E		
小溝 42	24	1	Ⅱ E01	1.14	10	6	N87° W	土 8 に切られる	
小溝 43	24	1	Ⅱ E01・02	1.36	13～17	5	N83° E		
小溝 44	24	1	Ⅱ E01	1.62	10～28	5	N90°		
小溝 45	24	1	Ⅱ E01・02	3.43	15～28	10	N90°	土 6 に切られる	
小溝 46	24	1	Ⅱ E02	0.94	14	6	N84° E		
小溝 47	24	1	Ⅱ E02	(0.54)	11	1	N87° E		
小溝 48	24	1	Ⅱ E01・02	(2.68)	14～19	8	N86° E	土 6 に切られる	
小溝 49	24	1	Ⅱ E01・02	2.01	8～13	4	N86° E	土 6 に切られる	
小溝 50	24	1	Ⅰ E09・10 Ⅱ E01	7.02	12～24	6	N88° E	土 8 に切られる	
小溝 51	24	1	Ⅰ E10, Ⅱ E01	2.54	15	7	N77° E	列 4・5、土 8 に切られる 小溝 52 と切り合う	溝の長さは小溝 52 と一部重複する
小溝 52	24	1	Ⅰ E10, Ⅱ E01	2.54	14	9	N79° E	列 4・5、土 8 に切られる 小溝 51 と切り合う	溝の長さは小溝 51 と一部重複する
小溝 53	24	1	Ⅰ E09・10	2.02	10	5	N89° E		
小溝 54	24	1	Ⅰ E08～10 Ⅱ E01	(6.94)	11～36	6	N88° E	溝 5 に切られる	
小溝 55	24	1	Ⅰ E08～10	(6.36)	8～18	5	N85° E	溝 5、土 6 に切られる	
小溝 56	24	1	Ⅰ D08・09	(1.73)	8～15	1～8	N87° W	溝 5 に切られる	
小溝 57	24	1	Ⅰ D08・09	(1.42)	18	2	N89° W	溝 5 に切られる	
小溝 58	24	1	Ⅰ E06～08	(5.77)	7～12	3	N82° E	P195・197 ～ 199 を切る P202・203 に切られる	
小溝 59	24・28	1	Ⅰ E05～07	3.67	12	6	N90°	小溝 62 を切る	
小溝 60	24	1	Ⅰ E07・08	0.83	10	3	N89° W		
小溝 61	24	1	Ⅰ E08	1.24	20	6	N86° E		
小溝 62	24	1	Ⅰ E06～08	長 3.35 短 0.34	17 30	5 5	N0° N85° E	P198 を切る 竪 2、小溝 59 に切られる	直角に曲がる
小溝 63	24	1	Ⅰ E07・08	長 0.97 短 0.55	15 17	5 3	N87° W N1° E	竪 2 を切る 列 4・5、P205 に切られる	直角に曲がる
小溝 64	24	1	Ⅰ E06	(1.06)	13～27	6	N90°		
小溝 65	24・28	1	Ⅰ E05～07	3.67	15～45	7	N90°	竪 2 を切る	
小溝 66	24	1	Ⅰ E06	(0.61)	15～24	12	N78° W		
小溝 67	24・28	1	Ⅰ E05・06	5.18	15～17	3	N85° W	竪 2、P407 に切られる	
小溝 68	24	1	Ⅰ E06・07	1.32	18～25	7	N84° E	竪 2 に切られる	
小溝 69	24	1	Ⅰ F06～08 Ⅰ E08	6.92	12～28	5	N83° E		
小溝 70	24	1	Ⅰ F06・07	1.49	11～16	2	N83° E		
小溝 71	24	1	Ⅰ F08	0.68	13	2	N90°		
小溝 72	24・28	1	Ⅰ F04～08	12.12	20～45	12	N85° E		小溝 73 から変更
小溝 73	24・28	1	Ⅰ F07	7.40	10～26	3～7	N85° E		小溝 74 から変更
小溝 74	24	1	Ⅰ F06・07	1.21	19	3	N90°	P99 に切られる	小溝 75 から変更
小溝 75	24	1	Ⅰ F06・07	0.63	12	3	N90°		小溝 76 から変更
小溝 76	24	1	Ⅰ F07	1.02	10～16	3	N90°		小溝 77 から変更
小溝 77	24	1	Ⅰ F07	0.80	8～12	2	N75° E		小溝 78 から変更
小溝 78	24	1	Ⅰ F07・08	0.93	23	2	N81° E		小溝 79 から変更
小溝 79									欠番
小溝 80	24	1	Ⅰ G07	1.13	10	3	N64° E		
小溝 81	27	1	Ⅰ H02	1.00	10～16	6	N80° E	P271 に切られる	
小溝 82	27	1	Ⅰ H02・03	(0.76)	14～17	2	N90°	小溝 85 に切られる	
小溝 83	27	1	Ⅰ H03	0.77	14～20	4	N7° W		
小溝 84	27	1	Ⅰ H04	(0.96)	10	7	N67° E		
小溝 85	27	1	Ⅰ H02・03	1.36	10	2	N4° W	土 10、溝 82 を切る	
小溝 86	27	1	Ⅰ G03	(0.50)	16～18	4	N90°		
小溝 87	27	1	Ⅰ G05	0.43	12	2	N17° E	小溝 88 に切られる	
小溝 88	27	1	Ⅰ G05	0.67	13～15	2	N87° E	小溝 87 を切る	
小溝 89	28	1	Ⅰ F05	1.50	16	4	N90°		
小溝 90	28	1	Ⅰ D05	0.88	18	2	N87° E	土 20 を切る	
小溝 91	28	1	Ⅰ E05	2.15	12	4	N87° E		
小溝 92	28	1	Ⅰ E05	(0.62)	18	3	N9° W	小溝 65・67 に切られる	

遺構名	次	面	位置	長さ (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	流路の方向	重複関係	備考
小溝 93	28	1	Ⅰ E04	(2.81)	14～26	6	N85° E	P439 に切られる	
小溝 94	28	1	Ⅰ E04	1.16	8～16	2	N86° E		
小溝 95	28	1	Ⅰ E04	(1.14)	14	4	N87° W	P433 に切られる	
小溝 96	28	1	Ⅰ E04	0.76	12	5	N90°		
小溝 97	28	1	Ⅰ E04	0.39	14	3	N90°		
小溝 98	28	1	Ⅰ E04	1.24	10～14	3	N90°		
小溝 99	28	1	Ⅰ F04	1.75	15	5	N86° E	畝に切られる	
小溝 100	28	1	Ⅰ E04	1.16	12～17	5	N83° E		
小溝 101	28	1	Ⅰ F03・04	1.58	16	5	N90°		
小溝 102	28	1	Ⅰ E02・03	1.72	10～15	7	N88° E		
小溝 103	28	1	Ⅰ F03	1.12	10～15	4	N78° E	畝に切られる	
小溝 104	28	1	Ⅰ E03	1.34	12～16	6	N90°	畝を切る	
小溝 105									欠番
小溝 106	28	1	Ⅰ E03	2.00	10	5	N82° E	P450・451 に切られる	
小溝 107	28	1	Ⅰ E02・03	(2.24)	10	6	N90°	P449 に切られる	
小溝 108	28	1	Ⅰ E02・03	1.60	8	4	N86° E		
小溝 109	28	1	Ⅰ E02・03	<0.58>	8	1	N90°		
小溝 110	28	1	Ⅰ F02	5.65	10～20	4	N88° E	P472 に切られる 土 24、畝を切る	

表 28　ピット一覧

遺構名	次	面	位置	時期	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形状	断面形状	備考
P1	24	1	Ⅲ E04	近世	17	15	10	円形	不整形	
P2	24	1	Ⅲ E04	近世	11	11	10	不整円形	すり鉢状	
P3	24	1	Ⅲ E04	近世	11	6	6	楕円形	不整形	
P4	24	1	Ⅲ F03	近世	15	14	12	不整円形	不整形	
P5	24	1	Ⅲ F03	近世	14	13	15	不整円形	円筒状	
P6	24	1	Ⅲ F03	近世	15	13	12	不整円形	すり鉢状	
P7	24	1	Ⅲ F03	近世	19	18	15	不整円形	すり鉢状	
P8	24	1	Ⅲ E03	近世	16	15	18	楕円形	タライ状	
P9	24	1	Ⅲ E03	近世	18	10	10	楕円形	不整形	
P10	24	1	Ⅲ E01	近世	17	15	11	不整円形	不整形	
P11	24	1	Ⅲ F01	近世	15	10	9	不整楕円形	すり鉢状	
P12	24	1	Ⅲ F01	近世	15	12	13	不整楕円形	すり鉢状	
P13	24	1	Ⅲ F01	近世	20	12	11	楕円形	タライ状	
P14	24	1	Ⅱ F10	近世	22	19	18	不整楕円形	不整形	
P15	24	1	Ⅱ F09	近世	37	29	11	不整楕円形	タライ状	
P16	24	1	Ⅲ E03	近世	12	10	10	楕円形	すり鉢状	
P17	24	1	Ⅲ D03	近世	19	16	19	楕円形	円筒状	
P18	24	1	Ⅲ F05	不明	26	20	8	楕円形	皿状	
P19	24	1	Ⅲ F04・05	不明	36	27	9	楕円形	皿状	
P20	24	1	Ⅲ F04・05	不明	34	30	13	楕円形	皿状	
P21	24	1	Ⅲ F04	不明	24	20	8	楕円形	皿状	
P22	24	1	Ⅲ F04	不明	24	21	8	不整円形	皿状	
P23	24	1	Ⅲ E04	不明	24	23	9	不整円形	すり鉢状	
P24	24	1	Ⅲ E04	不明	22	16	10	不整円形	すり鉢状	
P25	24	1	Ⅲ E05	不明	32	30	22	不整円形	タライ状	
P26	24	1	Ⅲ D05	不明	20	15	14	楕円形	円筒状	
P27	24	1	Ⅲ D05	不明	38	31	11	不整円形	タライ状	
P28	24	1	Ⅲ D05	不明	18	14	4	楕円形	不整形	
P29	24	1	Ⅲ F04	不明	21	20	7	円形	タライ状	
P32	24	1	Ⅲ E04	不明	25	23	7	円形	タライ状	
P34	24	1	Ⅲ E03	不明	28	24	21	不整円形	タライ状	
P35	24	1	Ⅲ E03	不明	16	15	21	不整円形	円筒形	
P36	24	1	Ⅲ D04	不明	30	30	17	円形	不整形	
P38	24	1	Ⅲ D04	不明	38	24	6	不整形	皿状	
P39	24	1	Ⅲ F03	不明	25	18	34	楕円形	円筒状	
P43	24	1	Ⅲ D03	不明	30	28	28	円形	円筒状	
P47	24	1	Ⅲ D02	不明	23	22	3	円形	皿状	
P48	24	1	Ⅲ D02	不明	25	23	6	円形	タライ状	
P51	24	1	Ⅲ F01	不明	25	10	8	楕円形	タライ状	
P52	24	1	Ⅲ F01	不明	29	18	12	不整長方形	タライ状	
P53	24	1	Ⅲ F01	不明	41	15	12	不整楕円形	タライ状	
P54	24	1	Ⅲ F01	不明	13	8	29	楕円形	円筒状	
P55	24	1	Ⅲ F01	不明	27	20	11	楕円形	タライ状	
P57	24	1	Ⅲ F01	不明	23	18	6	不整楕円形	タライ状	
P58	24	1	Ⅲ F01	不明	20	12	11	不整楕円形	タライ状	
P60	24	1	Ⅲ E01	不明	23	22	16	不整円形	すり鉢状	
P62	24	1	Ⅲ E01	不明	24	22	4	不整円形	タライ状	
P63	24	1	Ⅲ E01	不明	30	28	26	楕円形	タライ状	
P65	24	1	Ⅲ D01	不明	26	20	7	楕円形	すり鉢状	
P66	24	1	Ⅲ E01	不明	23	20	4	不整円形	皿状	
P67	24	1	Ⅱ E10	不明	28	22	7	不整円形	タライ状	
P68	24	1	Ⅱ E10	不明	32	29	39	不整円形	円筒状	
P69	24	1	Ⅱ E10	不明	25	20	19	不整楕円形	すり鉢状	
P70	24	1	Ⅱ E10	近世	21	15	6	楕円形	すり鉢状	
P71	24	1	Ⅲ D03・04	近世	20	18	12	円形	すり鉢状	
P72	24	1	Ⅲ D04	近世	16	15	11	円形	円筒状	
P73	24	1	Ⅲ D03	近世	20	13	3	楕円形	すり鉢状	
P74	24	1	Ⅲ D03	近世	15	15	9	円形	すり鉢状	
P75	24	1	Ⅲ D・E03	近世	15	12	9	楕円形	すり鉢状	
P76	24	1	Ⅲ E03	近世	15	12	9	不整楕円形	すり鉢状	
P77	24	1	Ⅲ E03	近世	18	13	<20>	楕円形	不整形	
P78	24	1	Ⅲ F01	近世	8	8	4	円形	すり鉢状	

付表

遺構名	次	面	位置	時期	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	平面形状	断面形状	備考
P79	24	1	Ⅱ F10	近世	8	5	5	楕円形	すり鉢状	
P80	24	1	Ⅱ E09	不明	24	18	4	楕円形	皿状	
P81	24	1	Ⅱ E09	不明	31	30	20	不整円形	すり鉢状	
P88	24	1	Ⅱ E09	不明	23	18	6	楕円形	タライ状	
P89	24	1	Ⅱ E09	不明	23	20	8	不整楕円形	不整形	
P90	24	1	Ⅱ E09	不明	35	18	10	楕円形	皿状	
P91	24	1	Ⅱ E09	不明	22	19	7	楕円形	皿状	
P92	24	1	Ⅱ E08	不明	34	33	11	不整形	不整形	
P93	24	1	Ⅱ E08	不明	19	17	18	円形	すり鉢状	
P94	24	1	Ⅱ E08	不明	18	14	6	楕円形	不整形	
P95	24	1	Ⅲ D01	不明	25	23	7	長方形	タライ状	
P96	24	1	Ⅲ E01	不明	32	27	8	不整円形	不整形	
P98	24	1	Ⅰ F07	不明	24	20	14	不整円形	皿状	
P99	24	1	Ⅰ F07	不明	34	27	6	不整形	皿状	小溝74を切る
P100	24	1	Ⅰ F07	不明	19	15	4	円形	皿状	
P101	24	1	Ⅰ F08	不明	36	30	11	不整形	すり鉢状	
P102	24	1	Ⅰ F08	不明	25	19	6	楕円形	タライ状	
P103	24	1	Ⅰ D07	不明	32	24	7	不整楕円形	タライ状	
P104	24	1	Ⅰ D07	不明	17	13	8	楕円形	不整形	
P105	24	1	Ⅰ D07	不明	16	9	5	楕円形	すり鉢状	
P108	24	1	Ⅰ E10	不明	45	34	7	不整形	タライ状	
P111	24	1	Ⅰ D09	不明	16	18	7	円形	皿状	
P112	24	1	Ⅰ D09	不明	20	20	8	円形	すり鉢状	
P113	24	1	Ⅰ D09	不明	10	9	6	円形	すり鉢状	
P121	24	1	Ⅰ E09	不明	20	15	6	楕円形	すり鉢状	
P123	24	1	Ⅱ G07	不明	20	18	28	円形	円筒状	
P124	24	1	Ⅱ G08	不明	29	(10)	21	(円形)	円筒状	
P125	24	1	Ⅱ G07	不明	18	18	22	円形	円筒状	
P126	24	1	Ⅱ G07	不明	20	20	22	円形	円筒状	
P127	24	1	Ⅱ G08	不明	19	17	25	楕円形	円筒状	
P137	24	1	Ⅱ D03	不明	12	10	13	楕円形	円筒状	
P138	24	1	Ⅱ D03	不明	14	11	12	楕円形	円筒状	
P139	24	1	Ⅱ D03	不明	12	10	4	楕円形	タライ状	
P140	24	1	Ⅱ D03	不明	10	9	3	楕円形	タライ状	
P141	24	1	Ⅱ D03	不明	19	16	16	不整楕円形	タライ状	
P142	24	1	Ⅱ D03	不明	12	10	3	不整楕円形	タライ状	
P143	24	1	Ⅱ D03	不明	28	14	12	不整楕円形	タライ状	
P144	24	1	Ⅱ E03	不明	10	8	3	楕円形	タライ状	
P145	24	1	Ⅱ E03	不明	28	18	13	不整楕円形	すり鉢状	
P146	24	1	Ⅱ E04	不明			4		皿状	大半が調査区外
P147	24	1	Ⅱ E03	不明	11	11	16	円形	円筒状	
P148	24	1	Ⅱ E03	不明	12	11	21	円形	円筒状	
P149	24	1	Ⅱ E03	不明	13	11	6	不整円形	タライ状	
P150	24	1	Ⅱ E・F03	不明	22	19	4	不整円形	タライ状	
P151	24	1	Ⅱ F03	不明	18	16	5	不整円形	タライ状	
P152	24	1	Ⅱ F03	不明	9	9	12	不整円形	円筒状	
P153	24	1	Ⅱ F03	不明	24	21	6	楕円形	不整形	
P154	24	1	Ⅱ F03	不明	12	12	4	不整楕円形	タライ状	
P155	24	1	Ⅱ F03	不明	11	9	15	楕円形	円筒状	
P156	24	1	Ⅱ F04	不明	9	8	11	楕円形	円筒状	
P157	24	1	Ⅱ F03	不明	21	21	29	円形	円筒状	
P158	24	1	Ⅱ F04	不明	22	19	22	不整方形	円筒状	
P159	24	1	Ⅱ G04	不明	26	(18)	10	(円形)	タライ状	
P163	24	1	Ⅱ G04	不明	18	16	18	円形	すり鉢状	
P164	24	1	Ⅱ F・G05	不明	21	20	15	円形	タライ状	
P165										欠番
P166	24	1	Ⅱ G04	不明	18	14	17	不整円形	円筒状	
P167										欠番
P168	24	1	Ⅱ F05	不明	13	10	22	楕円形	円筒状	
P169	24	1	Ⅱ F04・05	不明	14	11	15	楕円形	円筒状	
P170	24	1	Ⅱ F04	不明	13	10	16	円形	円筒状	
P171	24	1	Ⅱ F04	不明	10	10	10	円形	すり鉢状	
P172	24	1	Ⅱ F05	不明	17	15	16	楕円形	すり鉢状	
P175	24	1	Ⅱ G05	不明	30	25	23	楕円形	すり鉢状	
P176	24	1	Ⅱ G05	不明	15	13	12	円形	すり鉢状	
P178	24	1	Ⅱ F06	不明	14	14	11	円形	すり鉢状	
P179	24	1	Ⅱ F05	不明	18	17	19	円形	円筒状	
P180	24	1	Ⅱ E05	不明	22	20	10	円形	すり鉢状	
P181	24	1	Ⅱ E05	不明	16	14	4	円形	すり鉢状	
P182	24	1	Ⅱ E05	不明	26	25	14	円形	すり鉢状	
P183	24	1	Ⅱ E05	不明	23	16	7	楕円形	すり鉢状	
P184	24	1	Ⅱ E05・06	不明	18	14	13	楕円形	すり鉢状	
P185	24	1	Ⅱ F・G06	不明	22	20	16	円形	不整形	
P186	24	1	Ⅱ E06	不明	23	21	9	円形	すり鉢状	
P187	24	1	Ⅱ E06	不明	<30>	(15)	4		すり鉢状	
P188	24	1	Ⅱ E06	不明	30	19	8	不整形	すり鉢状	
P189	24	1	Ⅱ E06	不明	29	25	7	不整円形	タライ状	
P190	24	1	Ⅱ E06	不明	33	25	8	楕円形	タライ状	
P191	24	1	Ⅰ D06	不明	20	15	9	楕円形	すり鉢状	
P192	24	1	Ⅰ D06	不明	18	15	9	楕円形	すり鉢状	
P193	24	1	Ⅱ E06	不明	23	13	4	楕円形	円筒状	
P194	24	1	Ⅰ E06	不明	44	24	5	楕円形	すり鉢状	
P195	24	1	Ⅰ E07	不明	(42)	25	5	楕円形	皿状	小溝58に切られる
P196	24	1	Ⅰ E07	不明	40	22	4	不整楕円形	皿状	
P197	24	1	Ⅰ D・E07	不明	64	33	7	楕円形	不整形	
P198	24	1	Ⅰ E07	不明	(44)	39	7	不整形	皿状	竪2・小溝62に切られる

遺構名	次	面	位置	時期	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	平面形状	断面形状	備考
P199	24	1	Ⅰ E07	不明	(94)	42	4	不整形	皿状	壁2・小溝58・63に切られる P197とは新旧不明
P200	24	1	Ⅰ E07	不明	58	50	9	不整円形	すり鉢状	小溝62に切られる
P201	24	1	Ⅰ E07	不明	(55)	45	8	不整方形	タライ状	小溝60を切る 小溝62に切られる
P202	24	1	Ⅰ D・E08	不明	31	30	9	不整円形	すり鉢状	小溝58を切る
P203	24	1	Ⅰ E07・08	不明	60	54	10	不整形	皿状	小溝58を切る
P204	24	1	Ⅰ E07・08	不明	33	13	3	不整隅丸長方形	皿状	
P210	24	1	Ⅰ E08	不明	15	15	2	円形	皿状	
P211	24	1	Ⅰ E08	不明	50	50	3	不整円形	皿状	
P212	24	1 1	Ⅱ E01 Ⅱ E01	不明 不明	49 48	27 25	5 12	不整形 不整円形	皿状 すり鉢状	南北に長い方をA 東西に長い方をB
P213	27	1	Ⅳ I09	不明	16	15	3	楕円形	皿状	
P214	27	1	Ⅳ I09	不明	23	18	4	不整円形	皿状	
P215	27	1	Ⅳ H10	不明	14	13	3	円形	皿状	
P216	27	1	Ⅳ H10	不明	12	12	5	(楕円形)	すり鉢状	
P217	27	1	Ⅳ H10	不明	26	24	3	楕円形	皿状	P218と切り合う
P218	27	1	Ⅳ H09・10	不明	20	14	2	不整円形	皿状	P217と切り合う
P219	27	1	Ⅳ H09	不明	14	13	4	不整円形	皿状	
P220	27	1	Ⅳ H09	不明	16	14	3	<楕円形>	皿状	
P221	27	1	Ⅳ H10	不明	16	<13>	5	<楕円形>	皿状	
P222	27	1	Ⅳ H10	不明	17	<13>	3	不整円形	皿状	
P223	27	1	Ⅳ H10	不明	9	9	9	不整円形	円筒状	
P224	27	1	Ⅳ H10	不明	20	17	3	不整円形	皿状	
P225	27	1	Ⅳ H09・10	不明	11	10	7	不整円形	すり鉢状	
P226	27	1	Ⅳ H10	不明	12	8	4	不整楕円形	皿状	
P227	27	1	Ⅳ H10	不明	16	14	10	楕円形	すり鉢状	
P228	27	1	Ⅳ H10	不明	28	20	2	楕円形	皿状	
P229	27	1	Ⅳ H10	不明	10	8	6	楕円形	すり鉢状	
P230	27	1	Ⅳ G・H10	不明	9	8	10	楕円形	円筒状	
P231	27	1	Ⅳ G10	不明	9	8	6	不整円形	すり鉢状	
P232	27	1	Ⅳ H10	不明	19	14	4	楕円形	皿状	
P233	27	1	Ⅳ I10	不明	12	10	5	楕円形	すり鉢状	
P234	27	1	Ⅳ I10	不明	26	20	4	不整楕円形	皿状	
P235	27	1	Ⅳ I10	不明	48	34	6	不整楕円形	不整形	
P236	27	1	Ⅳ H10	不明	19	15	4	不整楕円形	皿状	
P237	27	1	Ⅳ H10	不明	20	16	4	不整楕円形	皿状	
P238	27	1	Ⅳ H10	不明	14	14	8	円形	すり鉢状	
P239	27	1	Ⅳ H10	不明	14	12	3	楕円形	皿状	
P240	27	1	Ⅳ H10	不明	19	13	3	不整楕円形	皿状	
P241	27	1	Ⅳ H10	不明	12	10	3	円形	皿状	
P242	27	1	Ⅳ H10	不明	15	12	2	不整楕円形	皿状	
P243	27	1	Ⅳ H10	不明	13	12	2	円形	皿状	
P244	27	1	Ⅳ H10	不明	13	11	4	楕円形	すり鉢状	
P245	27	1	Ⅳ H10	不明	11	10	3	不整円形	皿状	
P246	27	1	Ⅳ G10	不明	12	10	4	楕円形	皿状	
P247	27	1	Ⅳ G10	不明	10	10	2	不整円形	皿状	
P248	27	1	Ⅳ H10	不明	10	8	3	不整円形	皿状	
P249	27	1	Ⅳ H10	不明	8	8	4	円形	すり鉢状	
P250	27	1	Ⅳ H10	不明	10	9	2	不整形	皿状	
P251	27	1	Ⅳ H10・Ⅰ H01	不明	13	12	2	円形	皿状	
P252	27	1	Ⅳ H10・Ⅰ H01	不明	10	10	2	円形	皿状	
P253	27	1	Ⅰ G01	不明	14	12	5	円形	すり鉢状	
P254	27	1	Ⅰ G01	不明	13	12	3	円形	皿状	
P255	27	1	Ⅰ G01	不明	13	10	4	隅丸長方形	皿状	
P256	27	1	Ⅰ G01	不明	10	9	4	円形	すり鉢状	
P257	27	1	Ⅰ G01	不明	10	10	3	円形	皿状	
P258	27	1	Ⅰ G01	不明	12	11	4	不整円形	皿状	
P259	27	1	Ⅰ G01	不明	10	8	2	楕円形	皿状	
P260	27	1	Ⅰ G01	不明	10	8	4	隅丸長方形	皿状	
P261	27	1	Ⅰ G01	不明	8	8	9	円形	すり鉢状	
P262	27	1	Ⅰ G01	不明	16	16	2	円形	皿状	
P263	27	1	Ⅰ H01	不明	30	(26)	4	(楕円形)	皿状	
P264	27	1	Ⅰ G02	不明	22	21	27	不整円形	すり鉢状	
P265	27	1	Ⅰ I01	不明	24	18	3	楕円形	皿状	
P271	27	1	Ⅰ H02	不明	18	15	4	楕円形	皿状	小溝81を切る
P272	27	1	Ⅰ H02	不明	15	13	3	楕円形	皿状	P370を切る
P273	27	1	Ⅰ H02	不明	24	19	3	楕円形	皿状	
P274	27	1	Ⅰ H02	不明	26	24	8	不整円形	皿状	
P275	27	1	Ⅰ H02	不明	16	15	3	円形	皿状	
P276	27	1	Ⅰ H02	不明	14	14	4	円形	皿状	
P278	27	1	Ⅰ I03	不明	16	14	5	不整円形	すり鉢状	
P279	27	1	Ⅰ H03	不明	15	13	3	楕円形	皿状	
P280	27	1	Ⅰ H03	不明	16	14	3	楕円形	皿状	
P281	27	1	Ⅰ H02	不明	22	20	4	不整円形	皿状	
P282	27	1	Ⅰ H02	不明	12	10	3	不整円形	皿状	
P283	27	1	Ⅰ H02	不明	16	14	3	不整円形	皿状	
P284	27	1	Ⅰ G・H02	不明	10	10	4	不整円形	皿状	
P288										欠番
P290	27	1	Ⅰ G02	不明	17	15	8	楕円形	すり鉢状	
P292	27	1	Ⅰ G02	不明	18	15	9	楕円形	すり鉢状	
P294	27	1	Ⅰ H03	不明	17	16	6	不整円形	すり鉢状	
P295	27	1	Ⅰ H03	不明	16	14	5	不整円形	皿状	
P298	27	1	Ⅰ G03	不明	21	21	5	円形	皿状	
P300	27	1	Ⅰ G03	不明	18	18	4	円形	皿状	
P301	27	1	Ⅰ H03	不明	18	15	3	楕円形	皿状	P371と切り合う
P303	27	1	Ⅰ H03	不明	8	8	5	円形	すり鉢状	

付表

遺構名	次	面	位置	時期	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	平面形状	断面形状	備考
P304	27	1	Ⅰ H03	不明	9	8	4	不整円形	すり鉢状	
P305	27	1	Ⅰ H03	不明	13	12	5	不整円形	皿状	
P306	27	1	Ⅰ H03	不明	27	21	6	楕円形	皿状	
P307	27	1	Ⅰ H03	不明	19	17	7	不整円形	すり鉢状	
P308	27	1	Ⅰ G03	不明	10	8	7	円形	すり鉢状	
P309	27	1	Ⅰ G03	不明	7	6	6	円形	すり鉢状	
P310	27	1	Ⅰ G03	不明	19	18	7	円形	すり鉢状	
P311	27	1	Ⅰ G03	不明	20	20	7	円形	すり鉢状	
P312	27	1	Ⅰ G03	不明	14	13	5	円形	すり鉢状	
P313	27	1	Ⅰ G03	不明	6	6	5	円形	すり鉢状	
P314	27	1	Ⅰ G04	不明	8	7	4	円形	皿状	
P315	27	1	Ⅰ G04	不明	6	6	5	円形	すり鉢状	
P316	27	1	Ⅰ H03	不明	20	18	8	不整円形	すり鉢状	
P317	27	1	Ⅰ H03	不明	10	8	3	楕円形	皿状	
P318	27	1	Ⅰ H03	不明	10	8	3	楕円形	皿状	
P319	27	1	Ⅰ H03	不明	17	15	7	不整円形	すり鉢状	
P320	27	1	Ⅰ H03	不明	27	18	11	楕円形	すり鉢状	
P321	27	1	Ⅰ H03	不明	25	16	8	楕円形	すり鉢状	
P322	27	1	Ⅰ H・I03	不明	25	21	8	楕円形	すり鉢状	
P323	27	1	Ⅰ H04	不明	26	25	10	円形	すり鉢状	
P324	27	1	Ⅰ H04	不明	18	18	7	円形	すり鉢状	
P325	27	1	Ⅰ H04	不明	20	23	15	不整円形	すり鉢状	
P326	27	1	Ⅰ H04	不明	25	22	14	楕円形	すり鉢状	
P327	27	1	Ⅰ H04	不明	12	10	4	楕円形	すり鉢状	
P328	27	1	Ⅰ H04	不明	32	22	14	楕円形	すり鉢状	
P329	27	1	Ⅰ H04	不明	11	11	7	円形	すり鉢状	
P330	27	1	Ⅰ G・H04	不明	33	26	15	不整楕円形	すり鉢状	
P331	27	1	Ⅰ G04	不明	(14)	13	14	(楕円形)	すり鉢状	P344 に切られる
P332	27	1	Ⅰ G04	不明	22	18	10	楕円形	すり鉢状	
P333	27	1	Ⅰ G04	不明	14	8	4	楕円形	皿状	
P334	27	1	Ⅰ G04	不明	10	9	4	円形	皿状	
P335	27	1	Ⅰ G04	不明	8	7	4	円形	すり鉢状	
P336	27	1	Ⅰ G04	不明	14	13	4	円形	皿状	
P337	27	1	Ⅰ G04	不明	11	9	4	円形	皿状	
P338	27	1	Ⅰ G04	不明	25	22	8	不整円形	皿状	
P339	27	1	Ⅰ G04	不明	14	10	6	楕円形	皿状	
P340	27	1	Ⅰ G04	不明	13	12	9	円形	すり鉢状	
P341	27	1	Ⅰ H05	不明	27	19	10	不整楕円形	すり鉢状	
P342	27	1	Ⅰ H05	不明	13	12	2	楕円形	皿状	
P343	27	1	Ⅰ H05	不明	10	8	7	楕円形	すり鉢状	
P344	27	1	Ⅰ G04	不明	16	12	10	不整円形	すり鉢状	P331 を切る
P345	27	1	Ⅳ I10	不明	9	8	4	不整円形	すり鉢状	
P346	27	1	Ⅳ G10・Ⅰ G01	不明	11	11	4	円形	すり鉢状	
P347	27	1	Ⅳ H10	不明	10	10	3	円形	皿状	
P348	27	1	Ⅰ H05	不明	12	10	3	楕円形	皿状	
P349	27	1	Ⅰ H05	不明	16	13	2	楕円形	皿状	
P350	27	1	Ⅰ H03	不明	21	18	7	不整円形	すり鉢状	
P353	27	1	Ⅰ H03	不明	23	20	9	楕円形	すり鉢状	
P354	27	1	Ⅰ H04	不明	35	(20)	8	楕円形	すり鉢状	
P355	27	1	Ⅰ G01	不明	10	9	6	円形	すり鉢状	
P356										欠番
P357	27	1	Ⅰ G03	不明	10	10	5	円形	すり鉢状	
P358										欠番　畝状遺構
P360	27	1	Ⅳ I09	不明	19	14	8	隅丸長方形	タライ状	
P361	27	1	Ⅳ H08	不明	22	19	3	不整円形	皿状	
P362	27	1	Ⅳ H08	不明	36	24	4	不整形	皿状	
P363	27	1	Ⅳ H08	不明	20	18	3	円形	皿状	
P364	27	1	Ⅳ I08	不明	15	12	4	楕円形	皿状	畝の下
P365	27	1	Ⅳ I09	不明	30	26	5	不整円形	皿状	
P366	27	1	Ⅳ H09	不明	30	26	3	不整円形	皿状	
P367	27	1	Ⅳ H09	不明	14	12	3	楕円形	皿状	
P368	27	1	Ⅰ G02	不明	10	9	6	楕円形	すり鉢状	土 10 を切る
P369										欠番
P370	27	1	Ⅰ H02	不明	22	18	2	不整円形	皿状	P272 に切られる
P371	27	1	Ⅰ H03	不明	14	12	3	楕円形	皿状	P301 と切り合う
P373	27	1	Ⅰ H03	不明	22	18	6	楕円形	すり鉢状	
P374	27	1	Ⅰ G05	不明	12	10	4	楕円形	皿状	
P375	27	1	Ⅰ G05	不明	14	11	4	楕円形	皿状	
P376	27	1下	Ⅰ H03	不明	18	16	4	円形	皿状	
P377	28	1	Ⅳ E08	不明	26	22	12	円形	タライ状	
P378	28	1	Ⅳ E08	不明	32	30	8	円形	皿状	
P379	28	1	Ⅳ E08	不明	22	18	28	楕円形	円筒状	
P380	28	1	Ⅳ F09	不明	24	18	10	楕円形	タライ状	
P381	28	1	Ⅳ E・F09	不明	8	6	10	円形	タライ状	
P382	28	1	Ⅳ F09	不明	10	10	10	円形	タライ状	
P383										欠番
P384	28	1	Ⅳ F09	不明	14	12	12	円形	タライ状	
P385	28	1	Ⅳ F09	不明	16	14	10	円形	タライ状	
P386	28	1	Ⅳ F08	不明	12	10	16	円形	円筒状	
P387	28	1	Ⅳ G08	不明	10	10	16	円形	円筒状	
P388	28	1	Ⅳ G08	不明	8	8	12	円形	円筒状	
P389	28	1	Ⅳ G09	不明	8	6	14	円形	円筒状	
P390										欠番
P391	28	1	Ⅳ F09	不明	16	14	14	円形	タライ状	
P392	28	1	Ⅳ F09	不明	22	14	10	不整形	不整形	
P393	28	1	Ⅳ F09	不明	14	14	12	円形	タライ状	
P394	28	1	Ⅳ F09	不明	12	10	12	円形	円筒状	

遺構名	次	面	位置	時期	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	平面形状	断面形状	備考
P395	28	1	Ⅳ F09	不明	12	10	14	円形	円筒状	
P396	28	1	Ⅳ F09	不明	24	20	8	円形	タライ状	
P397	28	1	Ⅳ F09	不明	50	36	12	楕円形	すり鉢状	
P398	28	1	Ⅳ E09	不明	34	22	6	不整形	不整形	
P399	28	1	Ⅳ E09・10	不明	12	12	12	円形	タライ状	
P400	28	1	Ⅳ E10	不明	32	32	18	円形	すり鉢状	
P401	28	1	Ⅳ E10	不明	42	26	10	楕円形	皿状	
P402										欠番
P403										欠番
P404	28	1	Ⅳ E08	不明	28	26	8	円形	タライ状	
P405	28	1	Ⅳ G09	不明	14	10	8	円形	タライ状	
P406	28	1	Ⅳ G09	不明	12	8	12	円形	円筒状	
P407	28	1	Ⅰ E06	不明	24	16	8	楕円形	すり鉢状	
P408	28	1	Ⅰ F05	不明	24	20	4	楕円形	皿状	
P409	28	1	Ⅰ F05	不明	30	26	6	楕円形	皿状	
P410	28	1	Ⅰ F05	不明	30	24	6	楕円形	すり鉢状	
P411										欠番
P412	28	1	Ⅰ F05	不明	22	20	6	楕円形	すり鉢状	
P413	28	1	Ⅰ D05・06	不明	18	16	4	楕円形	皿状	
P414	28	1	Ⅰ E06	不明	24	20	6	楕円形	皿状	
P415	28	1	Ⅰ E06	不明	24	20	8	楕円形	すり鉢状	
P416	28	1	Ⅰ E06	不明	20	18	16	円形	円筒状	
P417	28	1	Ⅰ E06	不明	24	22	6	楕円形	すり鉢状	
P418	28	1	Ⅰ E06	不明	20	16	8	楕円形	すり鉢状	
P419	28	1	Ⅰ E06	不明	26	24	8	円形	皿状	
P420	28	1	Ⅰ D06	不明	20	14	12	楕円形	すり鉢状	
P421	28	1	Ⅰ E05	不明	32	20	12	楕円形	すり鉢状	
P422	28	1	Ⅰ E05	不明	36	(24)	12	不整円形	すり鉢状	
P423	28	1	Ⅰ D05	不明	20	18	2	円形	皿状	
P424	28	1	Ⅰ E05	不明	12	10	6	楕円形	すり鉢状	
P425										欠番
P426	28	1	Ⅰ E05	不明	24	20	4	不整円形	皿状	
P427	28	1	Ⅰ E04・05	不明	18	16	4	楕円形	皿状	
P428	28	1	Ⅰ E04	不明	28	26	12	円形	不整形	
P429	28	1	Ⅰ E04	不明	20	16	10	楕円形	すり鉢状	
P430	28	1	Ⅰ E04	不明	24	18	6	不整円形	皿状	
P431	28	1	Ⅰ E04	不明	40	34	12	不整円形	すり鉢状	
P432	28	1	Ⅰ E04	不明	28	26	16	楕円形	すり鉢状	
P433	28	1	Ⅰ E04	不明	40	36	6	楕円形	不整形	
P434	28	1	Ⅰ E04	不明	42	36	10	楕円形	すり鉢状	
P435										欠番
P436	28	1	Ⅰ E04	不明	56	42	10	楕円形	不整形	
P437										欠番
P438										欠番
P439	28	1	Ⅰ E03	不明	48	46	3	円形	不整形	
P440	28	1	Ⅰ E03	不明	32	32	6	円形	皿状	
P441										欠番
P442	28	1	Ⅰ E03	不明	36	24	10	楕円形	すり鉢状	
P443										欠番
P444	28	1	Ⅰ E03	不明	34	24	4	楕円形	皿状	
P445	28	1	Ⅰ E03	不明	30	22	2	楕円形	皿状	
P446	28	1	Ⅰ E03	不明	28	26	6	楕円形	すり鉢状	
P447	28	1	Ⅰ E03	不明	20	20	8	円形	すり鉢状	
P448	28	1	Ⅰ E03	不明	24	22	10	円形	タライ状	
P449	28	1	Ⅰ E02	不明	32	22	6	楕円形	皿状	
P450	28	1	Ⅰ E03	不明	40	32	10	楕円形	タライ状	小溝 106 を切る
P451	28	1	Ⅰ E03	不明	26	(14)	18	不整円形	すり鉢状	小溝 106 を切る
P452	28	1	Ⅰ E03	不明	22	16	6	楕円形	すり鉢状	
P453	28	1	Ⅰ E03	不明	16	16	8	円形	すり鉢状	
P454	28	1	Ⅰ E03	不明	12	10	4	円形	皿状	
P455	28	1	Ⅰ E03	不明	14	12	6	円形	皿状	
P456	28	1	Ⅰ F02	不明	40	28	14	楕円形	タライ状	
P457	28	1	Ⅰ F03	不明	24	18	16	楕円形	不整形	
P458	28	1	Ⅰ F・G03	不明	48	28	4	楕円形	皿状	
P459	28	1	Ⅰ G03	不明	16	16	2	円形	皿状	
P460	28	1	Ⅰ F03・04	不明	36	24	12	楕円形	タライ状	
P461										欠番
P462	28	1	Ⅰ F04	不明	30	24	24	楕円形	すり鉢状	
P463	28	1	Ⅰ F04	不明	<36>	24	19	楕円形	すり鉢状	P464 との切り合い不明
P464	28	1	Ⅰ F04	不明	<24>	<22>	10	(楕円形)	すり鉢状	P463 との切り合い不明
P465	28	1	Ⅰ E04	不明	28	18	4	楕円形	皿状	
P466	28	1	Ⅰ F04	不明	30	26	26	楕円形	すり鉢状	
P467	28	1	Ⅰ F04	不明	30	28	6	楕円形	すり鉢状	
P468	28	1	Ⅰ F04	不明	20	14	8	楕円形	すり鉢状	
P469	28	1	Ⅰ E05	不明	24	22	4	円形	皿状	
P470	28	1	Ⅰ E05	不明	30	14	8	楕円形	すり鉢状	
P471	28	1	Ⅰ E05	不明	48	36	25	楕円形	不整形	
P472	28	1	Ⅰ F03	不明	35	23	12	楕円形	不整形	
P482	28	1	Ⅰ E05	不明	24	14	8	不整楕円形	すり鉢状	
P483	28	1	Ⅰ E05	不明	20	18	6	楕円形	すり鉢状	
P497	28	1	Ⅰ D02	不明	24	12	4	楕円形	すり鉢状	ピット列 10 を切る
P505	28	1	Ⅰ D02	不明	26	19	8	楕円形	すり鉢状	
P507	28	1	Ⅰ G03	不明	24	24	6	円形	不整形	
P509	28	1	Ⅰ D02	不明	30		(6)	楕円形	不整形	
P510	23	1	Ⅴ A06	不明	(20)	26	28	< 楕円形 >	円筒状	旧 P1 南壁で検出
P511	23	1	Ⅴ C05		53		16		タライ状	旧 P2

遺構名	次	面	位置	時期	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	平面形状	断面形状	備考
P512	23	1	Ⅴ A04・05	不明	24	21	15	円形	すり鉢状	旧 P3
P513	23	1	Ⅴ B04	中世	36	36	10	円形	タライ状	旧 P4
P514	23	1	Ⅴ B04	不明	34	30	9	円形	すり鉢状	旧 P5
P515	23	2	Ⅴ B06	古墳	19		24		すり鉢状	東壁で検出 旧 P6
P516	23	2	Ⅴ B06	古墳	26	11	33	楕円形	円筒状	± 26・30 に切られる 旧 P7
P517	23	2	Ⅴ B06	古墳	26	22	4	楕円形		旧 P8
P518	23	2	Ⅴ B06	古墳	28	26	4	楕円形		旧 P9
P519	23	2	Ⅴ A06	古墳	22	21	4	円形	円筒状	旧 P10
P520	23	2	Ⅴ A05	古墳	22	19	12	円形		旧 P11
P522	23	2	Ⅴ B05	古墳	31	29	15	円形	円筒状	旧 P13
P523	23	2	Ⅴ B04	古墳	22	20	21	円形	円筒状	旧 P14
P524	23	2	Ⅴ B04	古墳	27	24	3	円形		旧 P15
P525	23	2	Ⅴ A04	古墳	20	18	13	円形		旧 P16
P526	23	2	Ⅴ A04	古墳	25	22	21	円形		旧 P17
P527	23	2	Ⅴ B04	古墳	20	18	15	円形		旧 P18
P528	23	2	Ⅴ A03	古墳	22	20	20	円形		旧 P19
P529	23	1	Ⅴ B01	不明	28		30		円筒状	B 区 1 面北壁で検出 旧 P20
P530	23	1	Ⅲ B10	不明	44		28		すり鉢状	B 区 1 面北壁で検出 旧 P21
P531	23	1	Ⅴ A05	不明	28	26	9	円形		旧 P22
P532	23	1	Ⅴ A04	不明	28	26	8	円形		旧 P23
P533	23	1	Ⅷ J03	中世	41	39	12	円形	タライ状	旧 P24
P534	23	1	Ⅴ A04	不明	13	12	9	円形		旧 P25
P535	23	1	Ⅷ J03	不明	34	32	12	円形		旧 P26
P536	23	1	Ⅷ J03	不明	43	36	21	不整円形		旧 P27
P537	23	1	Ⅷ J03	不明	29	25	10	円形		± 32 を切る 旧 P28
P538	23	1	Ⅷ J02	不明	31	28	10	円形		旧 P29
P539	23	1	Ⅷ J02	不明	33	24	9	不整形		± 32 を切る 旧 P30
P540	23	1	Ⅷ J06	不明	28	27	4	円形		旧 P31
P541	23	1	Ⅷ J06	不明	28	25	10	円形		旧 P32
P542	23	1	Ⅴ A05	不明	27	27	22	不整円形		旧 P33
P543	23	1	Ⅶ J10	不明	24		34		円筒状	616 住の埋土で検出 旧 P34
P544	23	2	Ⅴ A06	古墳	33	(20)	14		タライ状	旧 P35
P545	23	2	Ⅷ J06	古墳	18	28	9	円形	すり鉢状	旧 P36
P546	23	2	Ⅷ J05・06	古墳	24	24	6	不整円形	すり鉢状	617 住を切る 旧 P37
P547	23	2	Ⅴ A05	古墳	29	28	1	円形	タライ状	旧 P38
P548	23	2	Ⅷ J05	古墳	25	22	6	円形	すり鉢状	旧 P39
P553	23	2	Ⅴ A05	古墳	22	20	6	円形	すり鉢状	層 4 から変更 旧 P44
P560	23	2	Ⅴ A02	古墳	19	19	5	円形	皿状	旧 P51
P561	23	2	Ⅷ J02	古墳	(25)	26	7	＜円形＞		± 35 に切られる 旧 P52
P562	23	2	Ⅷ J02	古墳	41	36	8	円形	タライ状	旧 P53
P570	23	2	Ⅴ A01	古墳	20	18	10			旧 P61
P571	23	2	Ⅲ A10・Ⅴ A01	古墳	18	16	10			旧 P62
P572	23	2	Ⅲ A10	古墳	21	21	6			旧 P63
P573	23	2	Ⅴ A04	古墳	14	12	7			P558 と切り合う 旧 P64
P574	23	2	Ⅴ A03	古墳	14	13	3			旧 P65
P575	23	2	Ⅷ J03	古墳	17	16	8			618 住を切る 旧 P66
P576	23	1	Ⅴ A05		52		40			613 住の北壁で検出 旧 P67

※ 23 次調査現場段階で付けられた遺構名は整理段階で付け直されたため、備考に旧名を掲載した

表 29　土器観察表

図版	写真	遺物番号	次	出土遺構	種類	器種	部位	法量					時期	調整	色調	胎土	焼成	備考
								口径(cm)	胴部径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)						
	PL5	1	24	遺構外	縄文	深鉢	胴部	—	—	—	(3.3)	25.4	縄文中期	隆帯。半載竹管による半隆起線文	外・内：7.5YR4/3 褐	白・灰・黒色粒多量。赤褐色粒中量。石英微量。1cm 縁	○	出土位置：1 号流路跡
第 28 図	PL5	2	23	612 住	土師	小形鉢	口縁～底部	5.3	7.5	2.4	5.4	89.1（石膏含）	古墳前期	外・内：ミガキ	外：10YR6/3 にぶい黄褐 内：10YR5/2 灰黄褐	石英多量。灰～黒色粒中量。白・赤褐色粒少量	○	底部、狭小な平底
	PL5	3	23	612 住	土師	器台	脚部	—	—	—	(4.4)	43.7	古墳前期	外：ミガキ 内：ナデ	外・内：10YR6/4 にぶい黄橙	白・灰色粒多量。雲母中量。石英・1～2mm 礫少量	○	脚部 2 孔残存。3 孔か
	PL5	4	23	612 住	土師	壺	底部	—	—	<6.0>	(2.1)	18.3	古墳前期	外・内：ナデ	外：10YR3/1 黒褐 内：5YR5/6 明赤褐	赤褐色粒少量。白色粒・ガラス質鉱物微量	○	
第 28 図	PL5	5	23	612 住	土師	壺	口縁～胴部	<13.2>	—	—	(9.4)	257.0	古墳前期	外：ハケメ→ミガキ 内：ミガキ	外：5YR6/8 橙 内：10YR4/2 灰黄褐	白色粒・長石多量。石英中量。雲母微量。2～4mm 礫	○	外面および口縁部内面、橙色に発色。平底片あり
第 28 図	PL5	6	23	612 住	土師	甕	口縁～底部	19.6	29.1	8.0	35.7	3,040.0	古墳前期	外：ハケメ→口縁部ナデ 内：工具ナデ	外：10YR5/2 灰黄褐 内：10YR6/4 にぶい黄褐	黄白色粒多量。白色粒・石英中量。ガラス質鉱物少量。2～3mm 礫	○	胴部内面下位、帯状にコゲ付着
第 28 図	PL5	7	23	613 住	土師	器台	口縁～脚部	<8.6>	—	<9.1>	8.2	117.3	古墳前期	外：ミガキ 内：坏部ミガキか。脚部ナデか	外：5YR6/8 橙 内：5YR6/6 橙	石英多量。白・黄白・赤褐色粒少量。2～4mm 礫	○	脚部 3 孔
第 28 図	PL5	8	23	613 住	土師	器台	脚部	—	—	8.0	(5.1)	85.5	古墳前期	外：ミガキ（基部横位ミガキ） 内：工具ナデ	外：5YR4/6 赤褐 内：5YR4/8 赤褐	黄白色粒・雲母・ガラス質鉱物微量	○	脚部 3 孔
第 28 図	PL5	9	23	613 住	土師	器台	脚部	—	—	<7.2>	(6.1)	62.6	古墳前期	外：ミガキ 内：ナデ	外・内：5YR6/6 橙	白・黄白・赤褐色粒・ガラス質鉱物少量。石英微量。3mm 礫	○	脚部 3 孔
	PL5	10	23	613 住	土師	器台	脚部	—	—	<7.6>	(2.9)	7.2	古墳前期	外：ミガキ 内：ナデ	外：7.5YR5/4 にぶい褐 内：5YR5/6 明赤褐	白色粒少量。灰色粒・雲母微量。3mm 礫	○	脚部 1 孔を確認
第 28 図	PL5	11	23	613 住	土師	高坏	口縁部	<24.4>	—	—	(2.7)	55.4	古墳前期	外・内：ミガキか	外・内：5YR5/8 明赤褐	白・黄灰色粒多量。赤褐色粒・石英少量。2～3mm 礫	○	有稜高坏か。口縁端部やや内削ぎ状
第 28 図	PL5	12	23	613 住	土師	高坏	坏～脚部	—	—	—	(7.8)	196.5	古墳前期	外：坏部工具ナデ→ミガキか 脚部ハケメ→ミガキ。 内：坏部ミガキ。脚部シボリ痕	外：7.5YR5/4 にぶい褐 内：7.5YR6/6 橙	白・黄白・赤褐色粒・石英・ガラス質鉱物少量。2～5mm 礫	○	脚部 2 孔残存。3 孔か
第 28 図	PL5	13	23	613 住	土師	高坏	脚部	—	—	—	(4.4)	87.2	古墳前期	外・内：ナデ	外：5YR5/8 明赤褐 内：5YR6/6 橙	白・黄白・赤褐色粒・石英・ガラス質鉱物少量。2～5mm 礫	○	
第 28 図	PL5	14	23	613 住	土師	甕	口縁部	<18.2>	—	—	(2.8)	30.3	古墳前期	外：ハケメ→ナデ 内：ナデ	外：7.5YR5/3 にぶい褐 内：10YR5/3 にぶい黄褐	黄白色粒・石英・ガラス質鉱物・3mm 以上礫微量	○	口縁中位に接合痕
	PL5	15	23	613 住	土師	甕	口縁部	<10.2>	—	—	(6.0)	49.2	古墳前期	外：ハケメ→口縁部ナデ 内：ナデ	外：7.5YR5/4 にぶい褐 内：7.5YR6/6 橙	白・灰色粒多量。赤褐色粒中量。雲母微量。2mm～1cm 礫	△	単口縁。被熱赤化。器面脆弱
	PL5	16	23	613 住	土師	甕	口縁部	—	—	—	(4.0)	24.4	古墳前期	外：ハケメ→口縁部ナデ 内：ナデ	外：10YR5/2 灰黄褐 内：10YR6/4 にぶい黄褐	赤褐色粒多量。黄白色粒小。ガラス質鉱物微量。1mm 礫	○	受口状口縁
第 28 図	PL5	17	23	613 住	土師	甕	口縁部	<14.8>	—	—	(2.6)	18.4	古墳前期	外：ハケメ→口縁部ナデ。ヘサミ。 内：口唇部面取り。ナデ。	外・内：7.5YR6/6 橙	石英少量。白・灰・黒色粒・ガラス質鉱物微量	○	受口状口縁
第 28 図	PL5	18	23	613 住	土師	甕	口縁部	<18.4>	—	—	(5.4)	46.1	古墳前期	外：ハケメ→口縁部ナデ 内：ナデ	外：10YR7/3 にぶい黄橙 内：10YR5/4 にぶい黄褐	白・灰色粒少量。白黄色粒・石英・雲母微量	○	受口状口縁
第 28 図	PL5	19	23	613 住	土師	甕	口縁～胴部	<17.3>	—	—	(7.9)	69.5	古墳前期	外：口縁部ナデ、胴部ハケメ 内：口縁部ナデ、胴部工具ナデ	外・内：7.5YR5/3 にぶい褐	石英多量。黄白・赤褐色粒中量。白色粒少量。2～3mm 礫	○	受口状口縁

図版	写真	遺物番号	次	出土遺構	種類	器種	部位	法量 口径(cm)	胴部径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)	時期	調整	色調	胎土	焼成	備考
第 28 図	PL5	20	23	613 住	土師	台付甕	口縁～胴部	14.7	<17.5>	—	(18.3)	543.0	古墳前期	外：口頸部ナデ、胴部ハケメ 内：口縁部ナデ、胴部工具ナデ	外：10YR5/2 灰黄褐 内：10YR7/4 にぶい黄橙	白・黄白色粒多量、赤褐色粒中量、石英少量、2～7mm 礫	○	受口状口縁
第 28 図	PL5	21	23	613 住	土師	台付甕	口縁～胴部	<14.6>	<21.2>	—	(21.7)	283.1	古墳前期	外：口頸部ナデ、胴部ハケメ 内：口縁部ナデ、胴部ナデ	外：10YR5/3 にぶい黄褐 内：10YR6/4 にぶい黄橙	白・黄白・赤褐色粒多量、石英・ガラス質鉱物少量	○	受口状口縁。胴部下半に接合痕
第 28 図	PL6	22	23	613 住	土師	台付甕	胴～台部	—	—	<8.1>	(7.8)	104.6	古墳前期	外：ハケメ→胴部ナデ 内：コビナデ	外：7.5YR6/6 橙 内：7.5YR5/4 にぶい褐	石英多量、赤褐色粒中量、白・黄白色粒少量、2～4mm 礫	○	台内面頂部、同胎土による粘土補充
第 28 図	PL6	23	23	613 住	土師	台付甕	胴～台部	—	—	8.6	(8.4)	252.5	古墳前期	外：胴部ナデ、台部ハケメ 内：胴部ハケメ、台部工具ナデ	外：10YR5/2 灰黄褐 内：10YR7/4 にぶい黄橙	白・黄白色粒多量、赤褐色粒・石英少量、4mm 礫	○	台内面頂部、ホゾ状にわずかに突出
第 28 図	PL6	24	23	613 住	土師	台付甕	胴～台部	—	—	—	(6.1)	131.4	古墳前期	外：胴部工具ナデ、台部ナデ 内：ナデ	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：7.5YR7/6 橙	白・灰・赤褐色粒少量、石英・3mm 以上礫微量	○	台内面頂部、ホゾ状に突出 台内面は黒変（2.5Y2/1 黒）
第 28 図	PL6	25	23	613 住	土師	台付甕	胴～台部	—	—	—	(4.2)	66.7	古墳前期	外：ハケメ 内：胴部ナデ、台部工具ナデ	外・内：7.5YR7/6 橙	白・灰色粒少量、黒・赤褐色粒・石英・3mm 以上礫微量	○	
第 28 図	PL6	26	23	613 住	土師	台付甕	胴～台部	—	—	—	(3.1)	73.9	古墳前期	外：ハケメ 内：胴部ナデ、台部コビナデ	外：7.5YR7/4 にぶい橙 内：7.5YR6/6 橙	白・灰色粒・石英少量、3mm 礫微量	○	
第 28 図	PL6	27	23	613 住	土師	台付甕	胴～台部	—	—	—	(3.3)	51.8	古墳前期	外：ハケメ→一部ナデ 内：胴部工具ナデ、台部ナデ	外：7.5YR6/8 橙 内：7.5YR5/8 明褐	黒・赤褐色粒・石英・3mm 以上礫微量	○	
第 28 図	PL6	28	23	613 住	土師	台付甕	台部	—	—	<10.8>	(4.9)	131.3	古墳前期	外：ハケメ 内：コビナデ	外・内：7.5YR6/6 橙	白・灰色粒・2～3mm 礫少量、石英・ガラス質鉱物・4mm 以上礫微量	○	端部内面、折り返し状にわずかに突出
第 28 図	PL6	29	23	613 住	土師	台付甕	胴部下端	—	—	—	(2.6)	22.0	古墳前期	外：ハケメ 内：ナデ	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：7.5YR6/6 橙	白・灰・黄白色粒・石英・3mm 以上礫微量	○	台部との接合面を有する
	PL6	30	23	613 住	土師	台付甕	台部	—	—	7.2	(1.3)	50.9	古墳前期	外・内：ナデ	外・内：10YR5/3 にぶい黄褐	灰・赤褐色粒多量、白色粒・雲母・石英微量	○	内面頂部、広めの平坦面をなす
第 29 図	PL6	31	23	613 住	弥生	甕	口縁～胴部	<15.5>	<17.0>	—	(8.4)	68.2	古墳前期	外：ミガキ、口縁部ナデ 内：ミガキ	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：10YR6/2 灰黄褐	石英中量、白・黄白・赤褐色粒・ガラス質鉱物少量	○	南信地域の中島式
第 29 図	PL6	32	23	613 住	土師	甕	口縁～底部	17.4	15.8	6.4	20.0	655.0	古墳前期	外：ミガキ 内：工具ナデ	外：10YR8/3 浅黄橙～5YR6/6 橙 内：10YR7/4 にぶい黄橙～10YR7/6 橙	白・灰・黄褐色粒少量、黄白色粒・ガラス質鉱物微量、7mm 長石 1 ケ所	○	弥生系か 同一片 3 片 58.0g
第 29 図	PL6	33	23	613 住	土師	甕	底部	—	—	<6.0>	(2.8)	45.3	古墳前期	外：ナデ 内：工具ナデ	外：10YR7/4 にぶい黄橙 内：7.5YR4/4 褐	白・灰色粒多量、石英微量、礫多量	○	弥生系か
第 29 図	PL6	34	23	613 住	土師	甕	胴～底部	—	—	7.1	(5.0)	137.5	古墳前期	外：ナデ 内：工具ナデ	外：7.5YR6/6 橙 内：7.5YR5/4 にぶい褐	白・黄白・赤褐色粒・石英多量、ガラス質鉱物少量、2～3mm 礫	○	弥生系か
第 29 図	PL6	35	23	613 住	土師	壺	底部	—	—	5.0	(2.0)	65.0	古墳前期	外・内：ナデか	外：5YR5/6 明赤褐 内：7.5YR6/6 橙	白・灰・赤褐色粒色少量、雲母微量、2～3mm 礫	×	輪台状底部。器面脆弱
第 29 図	PL6	36	23	613 住	土師	壺	底部	—	—	<6.0>	(1.6)	39.0	古墳前期	外・内：ナデ	外：10YR7/4 にぶい黄橙 内：10YR6/3 にぶい黄橙	赤褐色粒多量、白・灰色粒少量、雲母微量	○	輪台状底部
第 29 図	PL6	37	23	613 住	土師	壺	口縁部	<14.6>	—	—	(4.2)	44.9	古墳前期	外：頸部ハケメ、口唇部ナデ→キザミ。 内：ナデ	外：7.5YR7/6 橙 内：7.5YR6/6 橙	白・灰色粒・石英・2mm 礫少量、赤褐色粒・3mm 礫微量	○	口縁帯をもつ
第 29 図	PL6	38	23	613 住	土師	壺	口縁～頸部	<15.6>	—	—	(5.1)	50.3	古墳前期	外：口縁端部ナデ、口頸部ハケメ。 内：ナデ	外：10YR3/1 黒褐 内：10YR6/3 にぶい黄褐	白・灰色粒少量、石英・2mm 礫微量	○	頸部ハケメによる稜隆起突帯
第 29 図	PL6	39	23	613 住	土師	壺	口縁部	<14.0>	—	—	(6.3)	73.5	古墳前期	外：ハケメ→ナデか 内：ナデ	外：7.5YR6/6 橙 内：7.5YR4/1 褐灰	白・赤褐色粒多量、雲母微量、2～3mm 礫	×	被熱赤化、器面脆弱

図版	写真	遺物番号	次	出土遺構	種類	器種	部位	法量 口径(cm)	法量 胴部径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	法量 重量(g)	時期	調整	色調	胎土	焼成	備考
	PL6	40	23	613 住	土師	壺	底部	—	—	7.4	(1.3)	89.2	古墳前期	外：ナデ 内：未調整	外・内：10YR5/3 にぶい黄褐	白・灰・黒色粒・雲母多量、赤褐色粒少量、2～5mm 礫	○	底面に種実状圧痕
	PL6	41	23	613 住	土師	壺	底部	—	—	<7.0>	(3.8)	93.1	古墳前期	外・内：ナデ	外：10YR4/2 灰黄褐 内：10YR6/4 にぶい黄褐	白・灰色粒多量、黄灰色粒少量、雲母微量、2～5mm 礫	○	
第 29 図	PL7	42	23	614 住	土師	甕	口縁～胴部	<18.0>	—	—	(8.5)	58.7	古墳前期	外：ハケメ→口縁部ナデ、刺突 内：ハケメ→口縁部ナデ	外：10YR7/3 にぶい黄橙 内：10YR6/3 にぶい黄橙	白・黄白・赤褐色粒・石英中量、ガラス質鉱物少量	○	胴部内面、粗いハケメ
	PL7	43	23	618 住	土師	甕	口縁部	—	—	—	(1.5)	6.4	古墳前期	外・内：ナデ	外・内：10YR5/6 黄褐	白色粒中量、黒色粒・雲母微量、1mm 以下礫	○	受口状口縁
第 29 図	PL7	44	23	618 住	土師	甕	口縁～胴部	17.0	<22.0>	—	(13.3)	620.0	古墳前期	外：口縁部ナデ、キザミ。胴部ハケメ 内：口縁部ナデ、砲部ハケメ。胴部工具ナデ	外：7.5YR6/3 にぶい褐 内：7.5YR6/4 にぶい橙	赤褐色粒・石英多量、白・黄白色粒・ガラス質鉱物中量、4～5mm 礫	○	受口状口縁
第 29 図	PL7	45	23	618 住	土師	台付甕	口縁～台部	<13.7>	<16.8>	7.5	22.0	253.3	古墳前期	外：口縁部ナデ、キザミ。胴部ハケメ。台部ハケメ→ナデ 内：口縁部ナデ。胴・台部工具ナデ	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：7.5YR6/3 にぶい褐	赤褐色粒・石英多量、白・黄白色粒中量、2～5mm 礫	○	受口状口縁
第 29 図	PL7	46	23	618 住	土師	台付甕	口縁～胴部	<14.6>	(23.0)	—	(24.0)	510.0	古墳前期	外：口縁部ナデ。胴部ハケメ→肩ナデ 内：口縁部ナデ。胴部工具ナデ、ユビオサエ	外：7.5YR7/4 にぶい橙 内：7.5YR7/6 橙	赤褐色粒・礫多量、石英少量・ガラス質鉱物微量	○	受口状口縁
第 29 図	PL7	47	23	618 住	土師	台付甕	口縁～台部	<15.3>	<16.9>	—	(21.0)	544.6	古墳前期	外：口縁部ナデ。胴部ハケメ。台部工具ナデ 内：口縁部ナデ。胴・台部工具ナデ	外：5YR5/4 にぶい赤褐 内：7.5YR4/1 褐灰	白・黄白色粒・石英多量、赤褐少量、2～5mm 礫	○	単口縁。口縁中位に接合痕
第 29 図	PL8	48	23	618 住	土師	台付甕	口縁～台部	<18.7>	<21.0>	<9.7>	25.0	465.0	古墳前期	外：口縁部ナデ。胴部ハケメ。台部ナデ 内：口縁部ナデ。胴部ハケメ。工具ナデ。台部ハケメ	外・内：7.5YR6/4 に ぶい橙	黄白・赤褐色粒多量、石英・ガラス質鉱物中量、白 少 量、2～5mm 礫	○	単口縁。口縁中位に接合痕を有しわずかに屈曲
第 29 図	PL8	49	23	618 住	土師	甕	口縁～胴部	<15.4>	<18.4>	—	(13.3)	124.5	古墳前期	外：口縁部ナデ。胴部ハケメ→肩部ナデ 内：口縁部ナデ。胴部工具ナデ	外：7.5YR5/8 明褐 内：7.5YR4/6 褐	石英少量、灰・白色粒・雲母・3mm 礫微量	○	単口縁
第 29 図	PL7	50	23	618 住	土師	台付甕	胴～台部	—	—	8.8	(15.0)	354.3	古墳前期	外：胴部ハケメ。台部ナデ 内：胴部工具ナデ。台部ナデ	外：7.5YR3/2 黒褐 内：7.5YR6/4 にぶい橙	赤褐色粒・石英多量、白・黄白色粒・ガラス質鉱物中量、2～5mm 礫	○	台内面頂部、砂粒を多く含む粘土を補充
	PL8	51	23	618 住	土師	器台	脚部	—	—	<3.5>	(3.3)	10.1	古墳前期	外：ミガキ 内：ナデ	外・内：7.5YR4/3 褐	黒・赤褐色粒多量、雲母少量、白色粒微量	○	脚部、やや内湾する
第 29 図	PL8	52	23	618 住	土師	壺	胴～底部	—	—	8.5	(7.4)	400.6	古墳前期	外：ハケメ 内：ハケメ、工具ナデ。	外：10YR6/6 明黄褐 内：7.5YR7/4 にぶい橙	白・黄白色粒・石英多量・赤褐中量、ガラス質鉱物少量、雲母微量、5mm 礫	○	
第 29 図	PL8	53	23	618 住	土師	甕か	底部	—	—	<7.0>	(3.0)	54.3	古墳前期	外：工具ナデ 内：ナデ	外：2.5Y6/3 にぶい黄 内：2.5Y6/2 灰黄	白色粒中量、灰色粒少量、雲母微量、3～5mm 礫	○	
第 30 図	PL8	54	24	619 住	土師	ミニチュア	口縁～底部	4.3	—	—	3.6	41.3 (石膏含)	古墳中期	手捏ね。未調整	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：10YR6/2 灰黄褐	石英中量、白色粒・ガラス質鉱物少量、黄白色粒微量	○	口縁部未整形
第 30 図	PL8	55	24	619 住	土師	高坏	坏部	<16.0>	—	—	(5.1)	165.5	古墳中期	外：ミガキ 内：ミガキ	外：2.5YR4/8 赤褐 内：5YR5/8 明赤褐	赤褐色粒・赤褐色礫 2mm 以上少量、白・灰色粒・雲母微量	○	
第 30 図	PL8	56	24	619 住	土師	小型壺	口縁～底部	8.3	7.0	—	7.5	115.0	古墳中期	外：口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。底部工具ナデ→ナデ 内：口縁部ヨコナ。胴部ナデ	外：5YR6/4 にぶい橙 内：7.5YR5/3 にぶい褐	白・赤褐色粒・石英・ガラス質鉱物少量	○	

図版	写真	遺物番号	次	出土遺構	種類	器種	部位	法量 口径(cm)	胴部径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)	時期	調整	色調	胎土	焼成	備考
第30図	PL8	57	24	619 住	土師	鉢	胴～底部	—	—	<7.0>	(3.0)	58.5	古墳中期	外：胴部ナデ、底部ケズリ 内：ミガキ、黒色処理	外：5YR4/3 にぶい赤褐 内：5YR3/1 黒褐	黄白・黒色粒・ガラス質鉱物微量	○	同一片 1 片 79g
第30図	PL8	58	24	619 住	土師	台付甕	胴部	—	—	—	—	57.5	古墳前期	外：ハケメ 内：工具ナデ	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：7.5YR4/2 灰褐	白・灰色粒微量、雲母少量	○	ハケメ、条痕浅い、台部接合面あり
第30図	PL8	59	27	竪 4	須恵	壺	口縁～底部	12.2	15.5	—	(14.1)	543.5	古墳後期	口タロ成形 外：胴部、二重沈線間に列点文	外：5Y7/1 灰白 内：5Y6/1 灰	白色粒少量	○	口縁有段
第30図	PL8	60	23	溝 29	土師	甕	口縁～底部	<14.0>	<16.6>	—	18.0	725.0	古墳前期	外：胴部ケズリ→ハケメ→口縁部ナデ 内：口縁部ハケメ→ナデ、胴部ケズリ	外：5YR5/6 明赤褐 内：5YR5/8 明赤褐	白・灰色粒・石英少量、黒色粒・雲母・3mm 以上礫微量	○	やや尖底気味の丸底 同一片 5 片 7.0g
第30図	PL8	61	23	土 31	土師	台付甕	胴～台部	—	—	8.1	(5.7)	128.6	古墳前期	外：胴部ハケメ、台部ハケメ、一部ナデ 内：工具ナデ	外：5YR5/6 明赤褐 内：5YR6/6 橙	白・灰・黄白色粒少量、石英・3 ～ 5mm 礫微量	○	
	PL9	62	23	遺構外	弥生	高坏	口縁部	—	—	—	(2.8)	12.0	弥生後期	外・内：ミガキ、赤彩	外・内：7.5R3/6 暗赤	白・灰色粒多量、石英少量、雲母微量	○	出土位置：P542
第30図	PL9	63	23	遺構外	弥生	高坏	脚部	—	—	—	(4.5)	55.3	弥生後期	外：ミガキ、赤彩 内：坏部ミガキ、赤彩、脚部ナデ	外：10R5/6 赤 内：10R5/6 赤	白黄・白・灰色粒、ガラス質鉱物、礫少量	○	出土位置：613 号住居跡
第30図	PL9	64	24	遺構外	弥生	鉢	胴～底部	—	—	<6.2>	(3.8)	69.8	弥生後期	外：ミガキ 内：ミガキ、赤彩	外：10YR6/3 にぶい黄橙 内：赤 彩 部 10YR5/6 赤、胎土 10YR6/3 にぶい黄橙	白・黄白色粒・石英多量、赤褐色粒中量、角閃石・輝石微量	○	出土位置：Ⅲ D03 グリッド
	PL9	65	24	遺構外	弥生	鉢	胴～底部	—	—	<6.6>	(3.2)	31.9	弥生後期	外：ミガキ、赤彩 内：ナデ、赤彩	外：5Y2/1 黒褐 内：2.5Y6/3 にぶい黄	白・黄白色粒多量、灰・赤褐色粒中量、黒色粒微量	○	出土位置：Ⅲ B・C02 グリッド 外面赤彩はほぼ剥落
第30図	PL9	66	24	遺構外	弥生	壺	口縁部	11.0	—	—	—	43.0	弥生後期	外：櫛描波状文、口唇部キザミ 内：工具ナデ	外・内：10YR4/2 灰黄褐	石英中量、雲母・白・黄白・灰～黒色粒・ガラス質鉱物少量	○	出土位置：Ⅲ E・F03 グリッド
	PL9	67	24	遺構外	弥生	壺	口縁～頸部	<22.0>	—	—	(7.6)	98.2	弥生後期	外：櫛描波状文。口唇部キザミ 内：磨滅	外：7.5YR6/6 橙 内：10YR7/4 にぶい黄橙	白・黒色粒多量、赤褐色粒中量、2 ～ 3mm 礫	×	出土位置：Ⅲ D01 グリッド
	PL9	68	24	遺構外	弥生	壺	口縁部	—	—	—	(4.4)	15.4	弥生後期	外：櫛描波状文 内：工具ナデ	外：10YR4/2 灰黄褐 内：10YR5/3 にぶい黄褐	白・黄・灰・石英・雲母微量、2 ～ 3mm 礫	○	出土位置：1 区第 2 検出面
	PL9	69	24	遺構外	弥生	壺	口縁～頸部	—	—	—	(7.6)	44.8	弥生後期	外：櫛描波状文。口唇部キザミ 内：ナデ	外・内：10YR5/3 にぶい黄褐	白・黄・灰・赤褐・黒色粒多量、雲母中量、1 ～ 2mm 礫	△	出土位置：Ⅲ D01 グリッド
第30図	PL9	70	24	遺構外	弥生	壺	口縁部	<18.8>	—	—	(6.2)	47.4	弥生後期	外：口縁部、櫛描波状文、頸部、櫛描横線文→ 1 条縦位沈線 内：ナデ	外：5YR6/6 橙 内：7.5YR6/8 橙	灰色粒・石英少量、黒・赤褐・雲母微量	○	出土位置：Ⅲ D09 グリッド 口縁端部内溝
第30図	PL9	71	24	遺構外	弥生	壺	胴部	—	—	—	(2.3)	8.5	弥生後期	外：櫛描による波状文・リ字文状 内：ハケメ→ナデ	外：10YR4/2 灰黄褐 内：7.5YR5/4 にぶい褐	白色粒少量、黒色粒・石英微量	○	出土位置：Ⅲ D10 グリッド
第30図	PL9	72	24	遺構外	弥生	壺	胴部	—	—	—	—	17.6	弥生後期	外：櫛描波状文→斜位櫛描文 内：ナデ	外：7.5YR4/6 褐 内：7.5YR5/6 明褐	白・灰色粒少量、赤褐色粒微量、2 ～ 3mm 礫	○	出土位置：Ⅲ D01 グリッド 斜位の櫛描文を連続させて鋸歯状文様にする
第30図	PL9	73	24	遺構外	土師	壺	頸部	—	—	—	(5.7)	49.6	古墳前期か	外：不整な櫛描波状文 内：ナデ	外：5YR7/8 橙 内：5YR4/1 褐灰	白・灰色粒多量、赤褐色粒少量、石英微量	○	出土位置：Ⅲ C02 グリッド
第30図	PL9	74	24	遺構外	弥生	壺	胴部～底部	—	—	<9.0>	(16.7)	719.0	古墳前期	外：工具ナデ 内：磨滅不明	外：7.5YR6/6 浅黄橙 内：5YR6/8 橙	赤褐色粒多量、黄白色粒・3 ～ 5mm 礫微量	○	出土位置：Ⅲ D09 グリッド 内面、斑状に剥離。同一片 4 片 200.3g
第30図	PL9	75	24	遺構外	弥生	壺	胴～底部	—	—	<9.4>	(4.3)	97.7	古墳前期	外・内：工具ナデ	外・内：10YR7/3 にぶい黄橙	白・黄白・赤褐色粒中量、石英・雲母少量	○	出土位置：Ⅲ E08 グリッド
第30図	PL9	76	24	遺構外	土師	高坏	口縁部	—	—	—	(6.4)	61.6	古墳前期	外：工具ナデ→ミガキ 内：ミガキ	外：5YR5/3 にぶい黄褐 内：5YR5/6 明赤褐	白・黄白色粒中量、石英・ガラス質鉱物少量、赤褐色粒微量	○	出土位置：Ⅲ F02 グリッド 口縁端部内削ぎ状
	PL9	77	24	遺構外	土師	高坏 脚台	脚部	—	—	—	(3.4)	33.3	古墳前期	外：磨滅 内：シボリ痕	外：10YR5/4 にぶい黄褐 内：5YR5/6 明赤褐	白・黄・灰色粒多量、黒色粒微量	△	出土位置：Ⅲ F01 グリッド 脚部やや内湾気味になるか

図版	写真	遺物番号	次	出土遺構	種類	器種	部位	法量 口径(cm)	脚部径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)	時期	調整	色調	胎土	焼成	備考
第30図	PL9	78	24	遺構外	土師	高坏	脚部	—	—	—	(3.8)	52.8	古墳前期	外：ミガキ 内：シボリ痕	外：5YR6/8 橙 内：5YR5/8 明赤褐	白・灰色粒少量、赤褐色粒・3～5mm 礫微量	○	出土位置：Ⅲ B・C07・08 グリッド、脚部2孔残存、3孔か
第30図	PL9	79	24	遺構外	土師	高坏	脚部	—	—	—	(6.4)	61.6	古墳前期	外：ミガキ 内：坏部ミガキ、脚部ナデ。	外：5YR5/3 にぶい黄褐 内：5YR5/6 明赤褐	白・黄白色粒中量、石英・ガラス質鉱物少量、赤褐色粒微量	○	出土位置：Ⅲ E03 グリッド。脚部2孔残存、3孔か
第30図	PL9	80	24	遺構外	土師	高坏	脚部	—	—	—	(6.3)	78.5	古墳前期	外：ミガキ 内：ナデ	外・内：2.5YR5/8 明赤褐	白・灰・赤褐色粒・石英微量、3mm 礫	○	出土位置：表採 脚部3孔
	PL9	81	23	遺構外	土師	高坏 器台	脚部	—	—	—	(3.5)	12.7	古墳前期	外：ミガキか 内：ナデか	外・内：10YR6/4 にぶい黄橙	雲母多量、白・黒色粒少量	○	出土位置：8 区第 1 検出面 脚部1孔残存
第30図	PL9	82	24	遺構外	土師	高坏	坏～脚部	—	—	<11.8>	(8.4)	98.3	古墳前期	外：ミガキ 内：坏部ミガキ、脚部工具ナデ	外：5YR6/6 橙 内：7.5YR6/6 橙	白・黄白色粒中量、赤褐色粒少量、黒色粒・ガラス質鉱物微量、2～7mm 礫	○	出土位置：Ⅲ D01 グリッド 脚部3孔
第30図	PL9	83	24	遺構外	土師	高坏	坏部	13.8	—	—	(4.9)	135.6	古墳前期	外・内：ミガキ	外：5YR6/6 橙 内：2.5Y4/1 黄灰	白・黄白・赤褐色粒・石英・ガラス質鉱物少量	○	出土位置：Ⅲ D01・05、Ⅲ F02・04 グリッド 内面黒斑
第30図	PL9	84	24	遺構外	土師	高坏	坏部	<17.4>	—	—	(5.4)	132.6	古墳中期	外：工具ナデ→ヨコミガキか 内：工具ナデ→ヨコミガキ	外・内：2.5YR6/6 橙	黄白色粒中量、白・赤褐色粒・石英・ガラス質鉱物少量	○	出土位置：Ⅱ F08 グリッド 脚部脚系高坏
第30図	PL9	85	24	遺構外	土師	高坏	坏部	<23.8>	—	—	(6.8)	100.6	古墳中期	外・内：ミガキ	外：5YR5/8 明赤褐 内：5YR6/6 橙	赤褐色粒中量、白・黄白色粒・石英・ガラス質鉱物少量、2～4mm 礫	○	出土位置：Ⅲ E03 グリッド
	PL9	86	24	遺構外	土師	高坏	脚部	—	—	—	(6.0)	79.7	古墳中期	外：ミガキか 内：ナデ	外：5YR5/6 明赤褐 内：2.5YR4/6 赤褐	白・黄白・黒・赤褐色粒中量、雲母微量、1～2mm 礫	○	出土位置：1 号流路跡 内面に輪積痕残す
	PL9	87	24	遺構外	土師	高坏	脚部	—	—	—	(2.2)	43.4	古墳	外・内：磨滅	外・内：5YR5/6 明赤褐	白・黄・灰色粒多量、赤褐色粒中量、1～2mm 礫	△	出土位置：Ⅲ B05 グリッド
第30図	PL9	88	24	遺構外	土師	高坏	脚部	—	—	—	(8.4)	182.8	古墳中期	外：脚部ミガキ、裾ヨコナデ→ミガキ 内：ボウ状ユビナデ	外：5YR6/6 橙 ～ 5YR5/6 明赤褐 内：5YR6/6 橙	黄白・赤褐・黒色粒・雲母微量	○	出土位置：東壁 脚部脚系高坏
第30図	PL9	89	24	遺構外	土師	高坏	脚部	—	—	—	(5.8)	49.9	古墳中期	外：ミガキ 内：ナデ	外：7.5YR5/8 明褐 内：5YR6/6 橙	黄白・黒色粒・雲母微量	○	出土位置：Ⅱ D04 グリッド 脚部脚系高坏
	PL9	90	24	遺構外	土師	高坏	脚部	—	—	—	(4.2)	17.5	古墳中期	外：ミガキ 内：ナデ	外：7.5YR5/6 明褐 内：7.5YR5/4 にぶい褐	黒・赤褐色粒中量、白色粒微量、ガラス質鉱物微量	○	出土位置：2 区第 1 検出面 脚部脚系高坏
第31図	PL9	91	24	遺構外	土師	甕	口縁部	15.2	—	—	(2.8)	12.5	古墳前期	外：口縁部ナデ→頸部ハケメ 内：ナデ	外：7.5YR7/6 橙 内：7.5YR6/6 橙	黄白色粒・雲母微量	○	出土位置：Ⅲ D02 グリッド 受口状口縁
第31図	PL9	92	24	遺構外	土師	甕	口縁部	<11.2>	—	—	(2.5)	14.2	古墳前期	外：ハケメ→口唇部ナデ 内：ナデ	外：7.5YR4/2 灰褐 内：7.5YR6/6 橙	白・灰・赤褐色粒・石英微量	○	出土位置：Ⅲ F03 グリッド 受口状口縁
	PL9	93	24	遺構外	土師	甕	口縁部	<13.6>	—	—	(2.0)	10.2	古墳前期	外・内：ナデ	外：10YR5/3 にぶい黄褐 内：10YR3/1 黒褐	白・灰・赤褐色粒・雲母・石英微量、1～2mm 礫	○	出土位置：Ⅱ D09 グリッド 頸部「く」の字に屈曲。No.99と同一個体か
	PL9	94	24	遺構外	土師	甕	口縁部	<25.0>	—	—	(4.3)	38.5	古墳	外：ナデ 内：ナデ	外・内：7.5YR6/6 橙	赤褐色粒多量、白・灰・黒色粒中量、雲母微量	○	出土位置：1 号流路跡
第31図	PL9	95	24	遺構外	土師	甕か	口縁部	<11.6>	—	—	(2.3)	27.9	古墳前期	外：ナデ 内：ハケメ	外：10YR4/2 灰黄褐 内：10YR5/2 灰黄褐	白・黄白色粒・石英中量、ガラス質鉱物少量、赤褐色粒微量	○	出土位置：Ⅱ E05・Ⅱ F06 グリッド ハケメ条痕浅い
	PL9	96	24	遺構外	土師	甕	口縁部	<12.0>	—	—	(4.9)	52.6	古墳	外・内：ナデ	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：10YR5/2 灰黄褐	黒・赤褐色粒多量、ガラス質鉱物中量、白色粒微量、2mm 礫	○	出土位置：Ⅱ D09 グリッド
	PL9	97	24	遺構外	土師	甕	口縁部	<15.0>	—	—	(3.8)	27.4	古墳前期	外：ハケメ→ナデ 内：ナデ	外：5YR3/4 暗赤褐 内：5YR4/6 赤褐	雲母中量、白・黒色粒少量、石英微量、2～3mm 礫	○	出土位置：1 区第 2 検出面

図版	写真	遺物番号	次	出土遺構	種類	器種	部位	法量 口径(cm)	胴部径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)	時期	調整	色調	胎土	焼成	備考
	PL9	98	24	遺構外	土師	甕	口縁部	<15.0>	—	—	(3.7)	30.2	古墳	外・内：ナデ	外：10YR3/2 黒褐 内：10YR5/3 にぶい黄褐	黒・赤褐色粒多量、雲母少量、白色粒微量、1～2mm 硬	○	出土位置：Ⅱ F10 グリッド
第31図	PL9	99	24	遺構外	土師	甕	口縁～胴部	—	—	—	(6.0)	30.7	古墳前期	外：口縁部ナデ、胴部ハケメ 内：口縁部ナデ、胴部ユビナデ	外：7.5YR5/4 にぶい褐 内：10YR5/3 にぶい黄褐	白・黒色粒・雲母・石英少量、1～2mm 硬	○	出土位置：Ⅱ D10 グリッド No.93 と同一個体か
第31図	PL9	100	24	遺構外	土師	甕	口縁～肩部	<16.8>	—	—	(5.0)	37.3	古墳前期	外：ハケメ→口縁～胴部ナデ 内：口縁部ナデ、肩部ハケメ	外：10YR7/4 にぶい黄橙 内：10YR5/2 灰黄褐	赤褐色粒・石英中量、白・黄白色粒・ガラス質鉱物少量	○	出土位置：Ⅲ C03 グリッド 口縁端部、面取り
第31図	PL10	101	24	遺構外	土師	甕	口縁～胴部	<18.8>	<20.2>	—	(14.3)	89.0	古墳前期	外：ハケメ→口縁部ナデ 内：口縁部ナデ、胴部工具ナデ、ハケメ	外：10YR5/3 にぶい黄褐 内：10YR7/3 にぶい黄橙	石英多量、黄白色粒中量、白・赤褐色粒少量	○	出土位置：Ⅱ D10 グリッド 胴部下半、屈曲、口縁、粘土付加による成形のため肥厚 同一片 14 片 179.6g
第31図	PL10	102	24	遺構外	土師	甕	口縁～胴部	<9.2>	(21.4)	—	(19.2)	201.8	古墳前期	外：口縁部ナデ、胴部工具ナデ 内：口縁部ナデ、胴部工具ナデ	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：7.5YR7/3 にぶい橙	白・灰・赤褐色粒少量、石英・雲母微量	○	出土位置：3 号溝跡 胴下半、工具痕。同一片 4 片 47.2g
第31図	PL10	103	24	遺構外	土師	台付甕	口縁～台部	—	16.7	8.4	(20.0)	454.2	古墳前期	外：口縁部～胴部ハケメ→口縁部ナデ、胴部下半～台部ナデ 内：口縁部ナデ、胴部工具ナデ、台部ナデ	外：7.5YR5/6 明褐 内：2.5YR5/4 にぶい橙	白・灰・赤褐・黒色粒・石英微量、3～5mm 硬	×	出土位置：Ⅱ D10 グリッド 口縁部やや肥厚、台部、やや内湾、内面剥落。同一片 16 片 123.5g
第31図	PL10	104	24	遺構外	土師	台付甕	頸部	—	—	—	(2.0)	7.1	古墳前期	外：口縁部ナデ、頸部ハケメ 内：ナデ	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：7.5YR7/6 橙	黄白色粒多量、赤褐色粒・雲母微量	○	出土位置：Ⅱ D04 グリッド 頸部 C 字状に屈曲、ハケメ、条痕浅い
	PL10	105	23	遺構外	土師	台付甕	台部	—	—	—	(3.0)	24.9	古墳前期	外・内：ナデ	外・内：10YR5/4 にぶい黄褐	黒・灰色粒中量、白・赤褐色粒少量、石英・雲母微量	○	出土位置：8 区第 1 検出面 台部側面に胴部接合痕
	PL10	106	24	遺構外	土師	台付甕	台部	—	—	—	(3.3)	12.1	古墳前期	外：ハケメ 内：ナデ	外：10YR5/3 にぶい黄褐 内：10YR4/1 褐灰	白・灰色粒多量、赤褐色粒・雲母少量、2mm 硬	○	出土位置：Ⅱ F08 グリッド
第31図	PL10	107	24	遺構外	土師	台付甕	脚～台部	—	<20.5>	<8.5>	(15.7)	390.0	古墳前期	外：脚部ハケメ、台部ナデ 内：脚部工具ナデ	外：7.5YR5/3 にぶい褐 内：7.5YR3/1 黒褐	黄白・灰～黒褐色粒・石英中量、白・赤褐色粒・ガラス質鉱物少量、2～3mm 硬	○	出土位置：Ⅱ D10 グリッド ハケメの条痕浅い 台内面頂部、わずかにホゾ状の痕跡
第31図	PL10	108	24	遺構外	土師	台付甕	脚～台部	—	<23.2>	—	(23.8)	865.0	古墳前期	外：脚部ハケメ→下半工具ナデ、台部ナデ 内：工具ナデ	外：10YR4/2 灰黄褐 内：7.5YR6/4 にぶい橙	石英多量、白・黄白色粒中量、赤褐色粒少量	○	出土位置：Ⅱ D10 台内面頂部、ホゾ状の痕跡あり
第31図	PL10	109	24	遺構外	土師	台付甕	台部	—	—	<8.7>	(5.1)	76.5	古墳前期	外：ハケメ→一部ナデ 内：ナデ	外：5YR6/8 橙 ～ 7.5YR6/8 橙 内：5YR6/8 橙	赤褐色粒少量、黄白色粒・石英・2～3mm 硬・4～5mm 硬微量	○	出土位置：Ⅱ D07 台部側面に胴部接合痕を有さない、やや内湾しており古相の要素をもつ
第31図	PL10	110	24	遺構外	土師	台付甕	台部	—	—	<7.2>	(5.3)	50.1	古墳前期	外：ナデか（磨滅） 内：ナデ	外：7.5YR5/4 にぶい褐 内：7.5YR4/4 褐	白・灰色粒多量、赤褐色粒・石英微量、3～5mm 硬	○	出土位置：Ⅲ C03 グリッド 台内面頂部、平坦面をなす
第31図	PL10	111	24	遺構外	土師	台付甕	台部	—	—	—	(3.7)	67.3	古墳前期	外：ハケメ→ナデ 内：工具ナデ	外：10YR5/4 にぶい黄褐 内：2.5Y4/1 黄灰	白・黄白色粒多量、赤褐色粒・石英少量	○	出土位置：Ⅱ C02 グリッド 台内面頂部、ホゾ状に突出
第31図	PL10	112	28	遺構外	土師	台付甕	台部	—	—	—	(4.0)	56.2	古墳前期	外：ハケメ→ナデ 内：脚・底部、成形時ユビオサエ、台部ユビナデ	外：5YR6/8 橙 内：5YR5/8 明赤褐	黄白色粒少量、白・灰色粒微量、3mm 硬	○	出土位置：完合無上面 台部側面に胴部接合痕、胴部底は剥離面か
第31図	PL10	113	24	遺構外	土師	台付甕	台部	—	—	—	(3.1)	66.2	古墳前期	外・内：ナデ	外：7.5YR7/6 橙 内：7.5YR6/6 橙	白・灰色粒・石英多量、赤褐色粒微量、2～3mm 硬	○	出土位置：Ⅱ B・C09・10 グリッド 台内面頂部、ホゾをナデおさえた痕跡
	PL10	114	24	遺構外	土師	台付甕	台部	—	—	<9.4>	(3.8)	18.6	古墳前期	外：ナデか 内：ナデ	外：2.5Y6/3 にぶい黄 内：10YR6/4 にぶい黄褐	白・灰・黒色粒少量、石英・雲母微量、2～3mm 硬	○	出土位置：619 号住居跡

図版	写真	遺物番号	次	出土遺構	種類	器種	部位	法量 口径(cm)	法量 胴部径(cm)	法量 底径(cm)	法量 器高(cm)	法量 重量(g)	時期	調整	色調	胎土	焼成	備考
第31図	PL10	115	24	遺構外	土師	台付甕	台部	—	—	<8.8>	(4.9)	38.0	古墳前期	外・内：ナデ	外：10YR7/4 にぶい黄橙 内：7.5YR7/4 にぶい橙	白・黄白粒白多量、赤褐色粒・石英中量、黒色粒微量	○	出土位置：Ⅲ C02 グリッド
第31図	PL10	116	24	遺構外	土師	甕	頸～底部	—	—	<13.0>	—	(9.5)	192.8	古墳前期	外・内：工具ナデ	石英多量、白・灰色粒中量、赤褐色粒少量	○	出土位置：Ⅱ F05 グリッド 底部丸底
第31図	PL10	117	24	遺構外	土師	甕	口縁～底部	<10.7>	14.1	<4.4>	13.0	378.0	古墳前～中期	外：ハケメ→口縁部ナデ、胴部ミガキ、肩部ヘラ状工具による2条の沈線 内：口縁部ミガキ、胴部工具ナデ	外・内：7.5YR5/4 に ぶい褐	黄白色粒多量、石英・ガラス質鉱物中量、白・赤褐色粒少量、雲母微量、3mm 礫	○	出土位置：Ⅱ D10 グリッド 口縁端部、面取り。底部、中央凹む
第31図	PL11	118	28	遺構外	土師	壺	口頸部	<15.0>	—	—	(6.4)	106.2	古墳中期	外：タテミガキ 内：ヨコミガキ	外：2.5YR5/8 明赤褐 内：5YR6/6 橙	白・灰色粒少量、石英・雲母微量、3～4mm 礫	○	出土位置：拡張区 有段口縁
	PL11	119	23	遺構外	土師	壺	口頸部	—	—	—	(4.5)	40.1	古墳前期	外：ナデか 内：工具ナデ	外：10YR6/6 明黄褐 内：5YR4/6 赤褐	白・灰色粒少量、ガラス質鉱物微量、1～3mm 礫	○	出土位置：土 33 器面脆弱
第31図	PL11	120	24	遺構外	土師	壺	口頸～胴部	—	—	—	(6.4)	40.3	古墳前期	外：ハケメ 内：口頸部ハケメ、胴部工具ナデ	外：5YR7/8 橙 内：7.5YR6/6 橙	黄白色粒、赤褐色粒中量、白色粒・石英少量、2～4mm 礫	×	出土位置：Ⅲ E01 グリッド 頸部にハケメによる微隆起状突帯
第31図	PL11	121	24	遺構外	土師	壺	口頸部	—	—	—	(4.2)	29.8	古墳前期	外：磨滅 内：工具ナデ→ミガキ	外：7.5YR6/6 橙 内：7.5YR6/4 にぶい橙	白・灰・赤褐色粒・石英微量、3mm 礫	○	出土位置：Ⅲ F01 グリッド 頸部に微隆起状突帯
第31図	PL11	122	24	遺構外	土師	壺	口頸～肩部	—	—	—	(5.9)	32.2	古墳前期	外：口頸部ナデか、肩部ハケメ 内：口頸部ナデか、肩部工具ナデ	外・内：5YR6/6 橙	黄白色粒少量、赤褐色粒・石英・ガラス質鉱物微量	○	出土位置：Ⅱ D05 グリッド
	PL11	123	24	遺構外	土師	壺	口頸部	—	—	—	(4.8)	43.9	古墳前期	外：ハケメ、頸屈曲部ナデ 内：ハケメ→ナデ	外：5YR5/8 明赤褐 内：5YR4/8 赤褐	白色粒中量、灰・赤褐色粒少量、ガラス質鉱物微量	○	出土位置：Ⅱ F04 グリッド
第32図	PL11	124	28	遺構外	土師	壺	胴～底部	—	(30.4)	<7.4>	(12.6)	209.6	古墳前期	外：工具ナデ 内：工具ナデ、ハケメ。	外：10YR6/3 にぶい黄褐 内：10YR8/3 浅黄橙	赤褐色粒少量、白・灰色粒・石英微量	○	出土位置：拡張区
第32図	PL11	125	24	遺構外	土師	壺	胴～底部	—	—	<8.6>	(8.2)	110.4	古墳前期	外：ハケメ→ナデ 内：ナデ	外：7.5YR5/4 にぶい橙 内：10YR5/3 にぶい黄褐	白・黄白・赤褐色粒・石英中量、2～3mm 礫	○	出土位置：Ⅱ F08 グリッド 弥生系か
第32図	PL11	126	24	遺構外	土師	壺	底部	—	—	<7.2>	(2.5)	38.0	古墳前期	外：ナデ 内：工具ナデ	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：7.5YR7/4 にぶい橙	白・黄白色粒多量、赤褐色粒少量、石英微量、2～5mm 礫	○	出土位置：Ⅱ E09 グリッド
第32図	PL11	127	24	遺構外	土師	壺	胴～底部	—	—	<9.4>	(4.3)	97.7	古墳	外・内：ナデ	外：10YR7/3 にぶい黄橙	白・黄白・赤褐色粒中量、石英・雲母少量	○	出土位置：Ⅱ E08 グリッド
第32図	PL11	128	24	遺構外	土師	壺	底部	—	—	<5.2>	(3.3)	109.6	古墳	外・内：工具ナデ	外：7.5YR7/6 橙 内：7.5YR7/4 にぶい橙	黄白色粒・石英少量、黒・赤褐色粒・雲母・2～5mm 礫微量	○	出土位置：東壁 底と胴部の境、稜をなさない
第32図	PL11	129	23	遺構外	土師	壺	底部	—	—	<6.8>	(1.3)	35.5	古墳前期	外：ナデ 内：ナデ	外・内：2.5YR5/8 明赤褐	白・灰色粒少量、黒色粒・2mm 礫微量	○	出土位置：C 区第 2 検出面 底部輪台状
第32図	PL11	130	24	遺構外	土師	壺	底部	—	—	<2.8>	(1.5)	53.1	古墳	外：ハケメ 内：ハケメ→ナデ	外：7.5YR5/4 にぶい褐 内：7.5YR7/4 にぶい橙	石英少量、白・灰色粒・雲母・2～3mm 礫微量	○	出土位置：Ⅱ D10 グリッド
第32図	PL11	131	24	遺構外	土師	鉢か	底部	—	—	<5.4>	(1.3)	89.6	古墳	外・内：ナデ	外：2.5YR5/6 明赤褐 内：5YR5/6 明赤褐	白色粒多量、黒・赤褐色粒少量、雲母微量、1～2mm 礫	○	出土位置：Ⅲ E03 グリッド 底中央やや凹む。外面一部スス付着
第32図	PL11	132	24	遺構外	土師	壺	底部	—	—	8.0	(3.9)	261.6	古墳	外：工具ナデ 内：ハケメ	外：10YR6/3 にぶい黄橙 内：10YR6/1 褐灰	白・黄白色粒・石英中量、赤褐色粒少量	○	出土位置：Ⅱ E08 グリッド 丸底
第32図	PL11	133	23	遺構外	土師	甕	胴～底部	—	—	6.8	(4.1)	109.6	古墳後期	外：ナデか 内：ミガキ	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：7.5YR6/4 にぶい橙	石英多量、白・赤褐色粒少量、2～5mm 礫	○	出土位置：613 住 底部中央に 1 孔
第32図	PL11	134	23	遺構外	土師	有孔鉢	口縁～底部	<10.8>	—	<4.4>	7.9	98.2	古墳後期	外・内：口縁部ナデ 胴部工具ナデ	外：5YR5/6 明赤褐 内：5YR6/8 橙	赤褐色粒中量、白・黄白色粒・ガラス質鉱物少量、石英微量	○	出土位置：614 住 底部中央に 1 孔
第32図	PL11	135	24	遺構外	土師	甕	胴～底部	—	—	<5.4>	(3.7)	57.5	古墳後期	外・内：ナデか	外・内：7.5YR7/4 に ぶい橙	白・黄白色粒多量、石英中量、赤褐色粒少量、2～5mm 礫	○	出土位置：Ⅱ E07 グリッド 底部中央 1 孔

図版	写真	遺物番号	次	出土遺構	種類	器種	部位	法量 口径(cm)	胴部径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)	時期	調整	色調	胎土	焼成	備考
第32図	PL11	136	23	遺構外	土師	鉢	口縁～胴部	—	<12.0>	—	(9.7)	84.9	古墳後期	外：口縁部ナデ，胴部工具ナデ 内：ナデ	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：7.5YR6/4 にぶい橙	石英多量、白・赤褐色粒少量、2～5mm 礫	○	
第32図	PL11	137	27	遺構外	土師	坏	口縁～底部	14.4	—	—	4.4	272.7	古墳後期	外：口縁部ナデ，胴・底部ヘラケズリ 内：ミガキ	外：7.5YR7/4 にぶい橙 内：10YR5/2 灰黄褐	白・灰・黄白色粒・ガラス質鉱物・礫微量	○	出土位置：3号流路跡 完存
第32図	PL11	138	27	遺構外	土師	長胴甕	口縁～底部	17.5	19.1	6.2	35.7	2,164.0	古墳後期	外：口縁部ナデ，胴部工具調整 内：口縁部ナデ，胴部工具ナデ	外・内：5YR5/8 明赤褐	灰・黒色粒少量、黄灰色粒・石英微量、3～5mm 礫	○	出土位置：Ⅳ層土中 胴部上位、不整形な粘土付加
第32図	PL11	139	24	遺構外	須恵	坏蓋	端～胴部	<13.6>	—	—	(4.6)	28.4	古墳後期	ロクロ成形 外：頂部回転ヘラケズリ	外・内：N6/0 灰	黄白色粒微量	○	出土位置：Ⅲ F01 グリッド 器胎内面、暗赤褐色を帯びる
第32図	PL11	140	27	遺構外	須恵	坏	口縁～底部	<10.4>	<12.6>	5.7	3.7	121.0	古墳後期	ロクロ成形 底部回転ヘラ切り	外：N7/0 灰白 内：5GY7/1 明オリーブ灰	黄白色粒・礫微量	○	出土位置：3号流路跡
第37図	PL12	142	23	615 住	土師	皿	口縁～底部	<9.8>	—	<4.2>	1.5	42.0	平安	ロクロ成形 底部回転糸切り	外・内：5YR6/6 橙	赤褐色粒多量、白・灰色粒・石英・ガラス質鉱物微量	○	
第37図	PL12	143	23	615 住	土師	埦	胴～底部	—	—	<6.6>	(3.2)	97.1	平安	ロクロ成形。底部回転糸切り 内：坏部暗文状ミガキ、黒色処理	外：7.5YR6/8 橙 内：10YR3/1 黒褐	白・黄白・赤褐色粒多量、ガラス質鉱物微量	○	
第37図	PL12	144	23	615 住	灰釉	埦	口縁～胴部	<16.0>	—	—	(4.4)	28.6	平安	ロクロ成形	外：2.5Y8/1 灰白 内：5Y7/1 灰白	白色粒少量、石英微量	○	釉、漬け掛け
第37図	PL12	147	27	10 土坑	須恵	香	底部	—	—	<9.4>	(2.0)	42.6	古代	ロクロ成形 底部回転ヘラ切り	外：5B3/1 暗青灰 内：5PB5/1 青灰	黄白色粒微量、5mm 以上礫	×	器胎内は暗赤色を呈する
第37図	PL12	148	23	P513	須恵	香	胴～底部	—	—	—	(5.5)	33.8	古代	ロクロ成形	外・内：N7/0 灰白	白色粒少量、黒色粒微量、1mm 礫	○	下端に強い被
第37図	PL12	149	23	遺構外	土師	坏	口縁～底部	<13.1>	—	<6.1>	(3.6)	45.8	平安	ロクロ成形。底部回転糸切り 外：口縁部ヨコナデ	外：7.5YR6/6 橙 内：10YR7/4 にぶい黄橙	黄白・赤褐色粒少量、白・灰色粒・ガラス質微量	○	出土位置：613 住
第37図	PL12	150	23	遺構外	土師	坏	口縁～胴部	<15.0>	—	—	(3.7)	38.5	平安	ロクロ成形 外：口縁部強めのナデ	外：10YR7/3 にぶい黄橙～5YR7/4 にぶい橙 内：7.5YR7/4 にぶい橙	白・灰・赤褐色粒少量、ガラス質鉱物微量	○	出土位置：B 区第 1 検出面
第37図	PL12	151	24	遺構外	土師	埦	底部	—	—	<3.3>	(1.5)	17.8	平安	ロクロ成形。底部回転糸切り 内：黒色処理	外：10YR5/4 にぶい黄橙 内：10Y2/1 黒	白色粒中量、雲母微量	○	出土位置：Ⅲ E05 グリッド 高台断面、三日月形
第37図	PL12	152	28	遺構外	須恵	坏	口縁～底部	<12.2>	—	<5.2>	(3.7)	19.8	平安	ロクロ成形 底部回転糸切り	外：5Y2/1 黒褐 内：5Y3/1 黒褐	白・灰色粒少量	○	出土位置：溝 2 酸化焼気味
第37図	PL12	153	24	遺構外	須恵	坏	底部	—	—	<8.7>	(1.3)	30.9	古代	ロクロ成形 底部回転ヘラ切りか	外：5B6/0 青灰 内：N0 灰白	黄白色粒微量	○	出土位置：溝 2・3 器胎内は赤色を帯びる
第37図	PL12	154	24	遺構外	須恵	壺類か	底部	—	—	<6.3>	(1.1)	82.9	古代	ロクロ成形 底部回転糸切り	外・内：5Y8/1 灰白	白色粒微量	○	出土位置：溝 2 底部周囲打ち欠き
第37図	PL12	155	23	遺構外	灰釉	埦	口縁～高台部	<14.3>	—	<6.0>	5.2	77.3	平安	ロクロ成形 外：胴部下端、回転ヘラケズリ	外・内：5Y7/2 灰白	黄白・黒色粒少量	○	出土位置：618 住 釉、漬け掛け。口縁は正円を描かず、歪みあり。口唇部、炭化物付着
第37図	PL12	156	24	遺構外	灰釉	広口壺	口縁	—	—	—	(1.2)	16.0	平安	ロクロ成形	外：2.5Y7/2 灰黄 内：10YR7/2 にぶい黄橙	精製	○	出土位置：溝 2 内面に釉
第55図	PL12	158	23	P533	陶器	山茶碗	口縁～底部	<14.4>	—	<6.0>	5.6	31.8	13 世紀	ロクロ成形	外・内：7.5Y8/1 灰白	精製、白・黄白・黒色粒微量	○	畿付に模倣痕

※「法量」：（ ）は復元値、［ ］は残存値を示す。
※「胎土」：鉱物名が判明できないものについては色で記載した。
※「焼成」：○良、△やや不良、×不良

表 30　石器・鉄製品観察表

図版	写真	遺物番号	次	出土遺構	種類	遺物名称	部位	法量				時期	備考
								長さ・径（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）		
第 32 図	PL11	141	23	遺構外	石	磨製石斧	刃部	57.0	65.0	26.0	142.3	弥生	出土位置：溝 29 折損面に槌打痕が及ぶ
第 37 図	PL12	145	23	615 住	鉄	紡錘車	棒茎	173.0	9.0	3.0 ～ 8.0	22.8	平安	紡茎上半と紡輪の 3/4 が欠損
							紡輪	<52.0>	—	3.0			
第 37 図	PL12	146	23	615 住	鉄	紡錘車	棒茎	(221.0)	5.0	4.0	36.8	平安	ほぼ完存
							紡輪	51.0	—	3.5			
第 37 図	PL12	157	23	遺構外	鉄	突き錐か		64.0	8.0	3.0	4.9	不明	出土位置：612・616 住 断面台形、先端部平ら

※「法量」：〈　〉は復元値、（　）は残存値を示す。

PL1　遺構１

23 次Ａ区　完掘全景（南西から）

23 次Ｂ区１面　完掘全景（西から）

23 次Ｂ区２面　完掘全景（東から）

23 次Ｃ区１面　完掘全景（東から）

23 次Ｃ区２面　完掘全景（東から）

24 次１区１面　完掘全景（西から）

24 次２区１面　完掘全景（東から）

24 次２区２面　完掘全景（北から）

24次1区ガレージ前（1号ピット列）　完掘全景（西から）

24次1区1面　民家前（2号ピット列ほか）　完掘全景（西から）

27次1面　完掘全景（西から）

27次2面　完掘全景（西から）

27次　長胴甕出土状態（南から）

28次西1面　完掘全景（南から）

28次東1面　完掘全景（東から）

28次2面　完掘全景（西から）

612 号住居跡 完掘（西から）

612 号住居跡 Pit7 土層断面（北西から）

613a 号住居跡 完掘（南東から）

614 号住居跡 完掘（南東から）

616 号住居跡 完掘（南から）

617 号住居跡 完掘（南から）

618 号住居跡 遺物出土状況（南から）

619 号住居跡 完掘（北から）

4号竪穴状遺構 完掘（北から）

3号掘立柱建物跡 完掘（南から）

613b号住居跡 全景（南東から）

615号住居跡 完掘（南から）

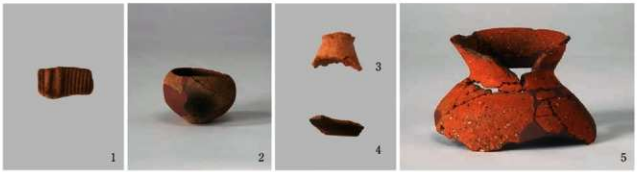
1号竪穴付掘立柱建物跡 完掘（北から）

6号ピット列・ピット群 完掘（北から）

2・3号溝跡、8・9・10号ピット列 完掘（東から）

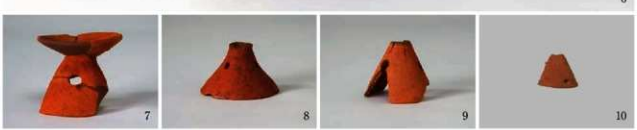
3・6号溝跡、4・5号ピット列 完掘（東から）

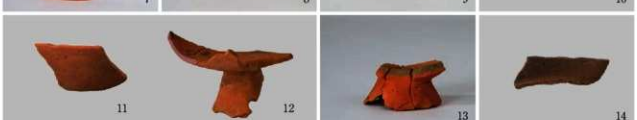
PL5　土器1



遺構外
1

612号住
2
3
4
5
6





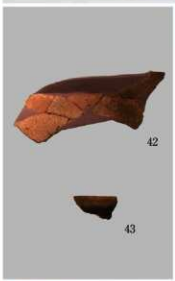
613号住（1）
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21

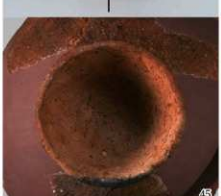
613号住（2）
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41

PL7　土器 3

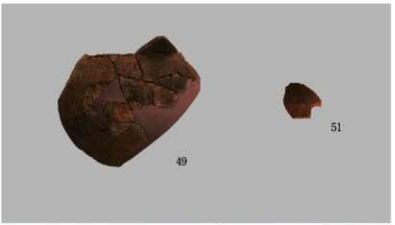
614 号住
42

618 号住（1）
集合写真
43
44
45
46
47
50





618号住（2）
48
49
51
52
53

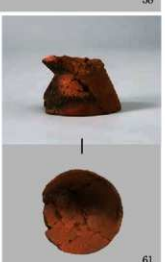


619号住
集合写真
54
55
56
57
58

4号竪穴
59

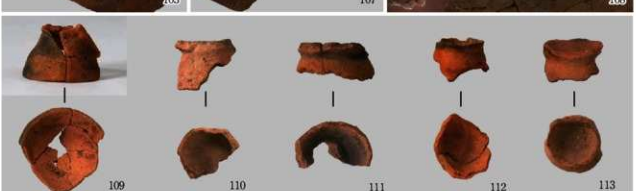
29号溝
60

31号土坑
61



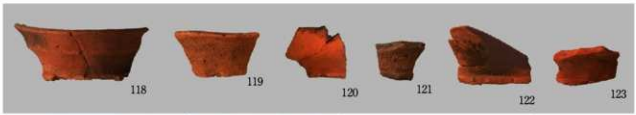
遺構外（1）
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

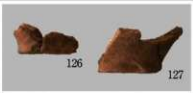
遺構外（2）
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117

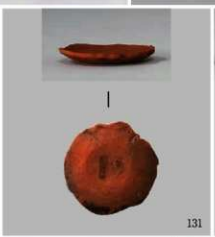


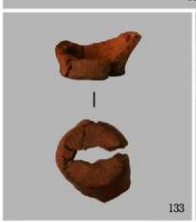
PL11　土器7・石器

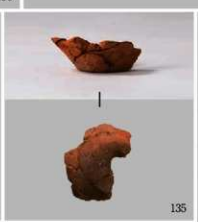
遺構外（3）
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141



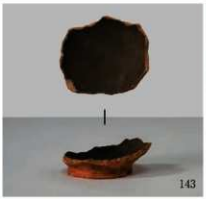


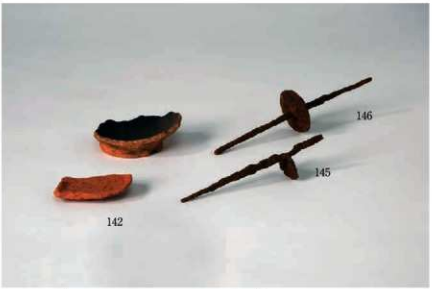






615号住
集合写真
142
143
144
145
146





10号土坑
147

P513
148

遺構外（4）
149
150
151
152
153
154
155
156
157

P533
158

報告書抄録

ふりがな	いでがわみなみいせき
書　名	出川南遺跡
副 書 名	防災・安全交付金（街路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	117
著 作 者 名	片山祐介、石丸敦史、川崎　保、平林　彰
編 集 機 関	（一財）長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒388 - 8007　長野県長野市篠ノ井布施高田963 - 4　℡.026 - 293 - 5926
発行年月日	2018年3月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
出川南遺跡（いでがわみなみ）	長野県松本市（ながのけんまつもとし） 出川町（いでがわまち）20ほか	20202	177	36°12′26″	137°58′08″	20130709 ～20140106 20140411 ～0829 20150415 ～0529 20160408 ～0603	2,362	防災・安全交付金（街路）事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
出川南遺跡	集落	弥生・古墳	竪穴建物跡7軒 竪穴状遺構1基 掘立柱建物跡1棟 溝跡3条 土坑11基 ピット列3条 ピット28基	弥生土器、土師器、須恵器、石器	古墳時代前期から中期の竪穴建物跡を中心とする集落が発見された。
		奈良・平安	竪穴建物跡2軒	土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品	
		中・近世	竪穴付掘立柱建物跡1棟 竪穴状遺構3基 溝跡13条 土坑20基 ピット列10条 ピット405基 小溝跡108条	山茶碗	
要　約	出川南遺跡は松本盆地の南部、田川下流の西岸に位置しており、これまで22次にわたる調査が行われてきた。遺跡の東約1.4kmには東日本最古級の前方後方墳とされる弘法山古墳が所在するが、これまで本遺跡から当該期の集落は発見されていなかった。今回の調査によって、古墳時代前期から中期にかけた集落は、田川とその西を北流する支流の穴田川との間に挟まれた一帯に展開していたことが明らかとなった。また、出土した土器の分析結果から西三河地域との関連性が強く認められた。				

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書117

松本市　出川南遺跡

防災・安全交付金（街路）事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発　行　平　成30（2018）　年　3　月15日
発行者　長　野　県　松　本　建　設　事　務　所
長　野　県　埋　蔵　文　化　財　セ　ン　タ　ー
〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4
TEL　026-293-5926　FAX　026-293-8157
印　刷　第　一　企　画　株　式　会　社
〒380-0803 長野県長野市三輪一丁目16－17
TEL　026-256-6360　FAX　026-256-6385